

LEARNING LIFE

ラーニングライフ

第4回学生の学修に関する実態調査報告書

TOKUSHIMA UNIVERSITY

平成29年3月

徳島大学



ま え が き

ラーニングライフ第4回学生の学修に関する実態調査報告書—をお届けします。本学では長い間、「学生生活に関する実態調査」をほぼ2年毎に行い、キャンパスライフとして学生の生活全般にわたる状況を報告してきました。これに加えて、「学生の学習に関する実態調査」が9年前から開始され、今年度4回目を実施し、その結果が纏まりましたので報告します。

※「学修」とは、授業およびその事前の準備、事後の展開などの主体的な学びを意味することから、今回の調査から「学習」の表記を「学修」に改めました。

本報告書には、①将来の希望 ②大学教育 ③学修状況 ④教養教育 ⑤専門教育 ⑥免許・資格 ⑦卒業研究・ゼミ ⑧英語学修・教育 ⑨海外留学 ⑩eラーニング ⑪授業評価アンケート ⑫大学に関する評価について、全部で87問の質問により調査されたアンケート結果をまとめています。次にその結果の分析から得られた各学部の現状と課題並びに提言を報告しています。学部のみならず、学科やコース等のオリエンテーション時にこのデータをご活用いただけると幸いです。

社会から求められる人材が高度化・多様化する中、大学は教育内容の充実や学生が徹底して学ぶことのできる教育環境を整備するための改革に取り組み、学生の能力を最大限に伸ばし、社会の期待に応える必要があります。本学は教育の質保証（学修成果の可視化、教育課程の体系化、厳格な成績評価など）を最優先にして、組織としての教育機能強化を進めていきたいと考えています。その際、ステークホルダーの声（学生、社会のニーズ）を聴きながら教育改革を進めることが重要であると考えております。今回のアンケート結果からは、授業時間外学修の長さ等、自学自習が十分でないこと及び学生もそれを自覚していること等が見て取れます。今後、組織としての教育機能強化を進める上で、今回の実態調査に示されている学生の声を十分に点検・評価し、教育改革につなげ、学生の学修成果が少しでも上がる成果につなげたいと考えています。今後とも、教職員の皆様のご協力をお願いしたいと思います。

最後になりましたが、「学生の学習に関する実態調査（ラーニングライフ）」実施ワーキンググループ委員の先生方および学務部職員の方々には、この調査に関してアンケート項目の設定から、調査の実施、集計、結果の分析まで、ご多忙の中すべての事項について精力的に遂行していただき、早期に報告書を作成していただきました。赤池雅史委員長をはじめとする皆さんに心から敬意を表すとともに深く感謝いたします。また、調査にご協力いただいた学生の皆さんにもこの場を借りて感謝いたします。

平成29年3月

徳島大学理事（教育担当）
大学教育委員会委員長

高 石 喜 久

目 次

| | |
|-----------------------------|----|
| まえがき | 1 |
| 序 章 学生の学修に関する実態調査の概要 | |
| 1 調査の目的 | 5 |
| 2 調査の組織 | 5 |
| 3 調査の対象及び方法 | 5 |
| 4 調査の時期 | 5 |
| 5 調査の内容 | 6 |
| 6 調査票の回収状況 | 6 |
| 7 図中の%表示 | 8 |
| 附表「平成28年度学生の学修に関する実態調査票」 | 9 |
| 第1章 将来の希望について | |
| 1-1 将来の希望 | 21 |
| 1-2 将来の希望が明確になった時期 | 22 |
| 1-3 大学院への進学希望 | 23 |
| 第2章 大学教育について | |
| 2-1 大学教育への期待 | 24 |
| 2-2 大学で獲得したい知識、能力 | 25 |
| 2-3 大学教育で獲得が期待できる知識、能力 | 26 |
| 第3章 あなた自身について | |
| 3-1 専門分野への取組 | 27 |
| 3-2 文書での表現 | 28 |
| 3-3 口頭での説明 | 29 |
| 3-4 他者との協調 | 30 |
| 3-5 学修内容の振り返り | 31 |
| 3-6 eポートフォリオシステムの利用 | 32 |
| 3-7 予習・復習の実施状況 | 33 |
| 3-8 予習・復習の時間 | 34 |
| 3-9 授業時間外のアクティブ・ラーニングの実施状況 | 35 |
| 3-10 授業の出席率 | 36 |
| 3-11 授業を休む場合の理由 | 37 |
| 3-12 授業内容を理解できる授業科目の割合 | 38 |
| 3-13 授業内容の理解の促進方法 | 39 |
| 3-14 成績評価分布の公開 | 40 |
| 3-15 成績評価分布の利用 | 41 |
| 3-16 GPAの確認 | 42 |
| 3-17 レポートや宿題をする際の情報源 | 43 |
| 3-18 授業でわからないところの対処方法 | 44 |
| 3-19 授業のノート・資料の取扱い | 45 |
| 3-20 教科書の購入状況 | 46 |
| 3-21 教科書を購入しない理由 | 47 |
| 3-22 大学の授業以外の自分自身のための学修 | 48 |
| 3-23 大学の授業以外の自分自身のための学修時間 | 49 |
| 3-24 学修時間・態度への満足度 | 50 |
| 3-25 図書館の学修支援サービスの利用 | 51 |

| | | |
|------|-----------------------------|----|
| 3-26 | 読書の習慣 | 52 |
| 3-27 | 1日のインターネット利用時間 | 53 |
| 3-28 | カリキュラムマップの公開 | 54 |
| 3-29 | ナンバリングの公開 | 55 |
| 3-30 | シラバスの利用状況 | 56 |
| 3-31 | 高校で未履修科目があるため、大学で理解困難な科目の有無 | 57 |
| 3-32 | 高校での未履修科目について、大学入学後の学修方法 | 58 |
| 3-33 | 高校での未履修科目を大学で履修しない理由 | 59 |

第4章 教養教育（全学共通教育）の授業について

| | | |
|------|--|----|
| 4-1 | 科目の選択基準 | 60 |
| 4-2 | 科目選択の情報源 | 61 |
| 4-3 | 授業を受けて学び得たこと | 62 |
| 4-4 | 「SIH道場」での学修 | 63 |
| 4-5 | 「SIH道場」での学びの内容 | 64 |
| 4-6 | 教養科目群（教養科目）について | 65 |
| 4-7 | 社会性形成科目群（ウェルネス総合演習・共創型学習・ ヒューマンコミュニケーション） | 66 |
| 4-8 | 基盤形成科目群（外国語科目・情報科学）について | 67 |
| 4-9 | 基礎科目群（基礎科目）について | 68 |
| 4-10 | 一般教養教育科目群について | 69 |
| 4-11 | グローバル化教育科目群について | 70 |
| 4-12 | イノベーション教育科目群について | 71 |
| 4-13 | 基礎基盤教育科目群について | 72 |
| 4-14 | 汎用的技能教育科目群について | 73 |
| 4-15 | 地域科学教育科目群について | 74 |
| 4-16 | 医療基盤教育科目群について | 75 |
| 4-17 | 外国語教育科目群について | 76 |

第5章 専門教育の授業について

| | | |
|-----|------------------|----|
| 5-1 | 授業を受けて学び得たこと | 77 |
| 5-2 | 授業内容の難易度 | 78 |
| 5-3 | 実習形式の授業時間数に対する希望 | 79 |

第6章 免許・資格について

| | | |
|-----|----------------|----|
| 6-1 | 教員免許取得に興味のあるもの | 80 |
|-----|----------------|----|

第7章 卒業研究，医学研究実習，看護研究，研究基礎ゼミについて

| | | |
|-----|--------------------------------|----|
| 7-1 | 研究室選考の基準 | 81 |
| 7-2 | 卒業研究，医学研究実習，看護研修，研究基礎ゼミで学び得たこと | 82 |
| 7-3 | 教員，TAによる研究指導時間の満足度 | 83 |
| 7-4 | 学修（自習）設備，スペースの満足度 | 84 |
| 7-5 | 研究設備，スペースの満足度 | 85 |

第8章 英語学修・教育について

| | | |
|-----|-------------|----|
| 8-1 | 英語学修の時間 | 86 |
| 8-2 | 英語の学修方法 | 87 |
| 8-3 | 本学の英語教育の満足度 | 88 |
| 8-4 | 本学の英語教育への要望 | 89 |

| | |
|------------------------------------|-----|
| 第9章 海外留学について | |
| 9-1 海外留学体験 | 90 |
| 9-2 海外留学で学び得ること | 91 |
| 9-3 海外留学を行わない理由 | 92 |
| 第10章 eラーニングについて | |
| 10-1 eラーニングサービスの利用 | 93 |
| 10-2 eラーニングの利用場所 | 94 |
| 10-3 eラーニングの使用時間 | 95 |
| 10-4 eラーニングの利用目的 | 96 |
| 10-5 今後のeラーニングの利用希望 | 97 |
| 10-6 eラーニングの学修効果 | 98 |
| 10-7 オンライン学修科目の提供 | 99 |
| 10-8 オンライン学修科目への要望 | 100 |
| 第11章 授業評価アンケートについて | |
| 11-1 授業評価アンケートの回答姿勢 | 101 |
| 11-2 授業評価アンケートの回答時間 | 102 |
| 11-3 授業評価アンケートの効果（教員への意見伝達） | 103 |
| 11-4 授業評価アンケートの設問内容 | 104 |
| 11-5 授業評価アンケートの効果（授業改善への活用） | 105 |
| 11-6 授業評価アンケートの設問提案 | 106 |
| 第12章 大学に関する評価 | |
| 12-1 大学教育全体の満足度 | 107 |
| 12-2 徳島大学の教育改善についての提案 | 108 |
| 第13章 学部等の現状と課題 | |
| 13-1 総合科学部 | 109 |
| 13-2 医学部医学科 | 110 |
| 13-3 医学部栄養学科・医科栄養学科 | 111 |
| 13-4 医学部保健学科 | 112 |
| 13-5 歯学部 | 114 |
| 13-6 薬学部 | 116 |
| 13-7 工学部 | 118 |
| 13-8 理工学部 | 119 |
| 13-9 生物資源産業学部 | 119 |
| 13-10 教養教育（全学共通教育） | 121 |
| 13-11 FD（Faculty Development）の観点から | 122 |
| 13-12 eラーニング | 123 |
| 13-13 附属図書館 | 125 |
| 第14章 まとめと提言 | 126 |

序章 学生の学修に関する実態調査の概要

1. 調査の目的

この調査は、本学学生の学修意識や学修に関する実態を把握し、今後の教育改革並びに修学指導に資する基礎資料を得ることを目的として実施した。

2. 調査の組織

この調査は、「学生の学習に関する実態調査（ラーニングライフ）」実施ワーキンググループの次の委員が中心となり調査を実施し、分析作業を行った。

| 区分 | 氏名 | 部局 | 職名 |
|-----|-------|-------------------|-----------------|
| 委員長 | 赤池雅史 | | 副理事 (教育支援担当) |
| 委員 | 三浦哉 | 総合科学部 | 教授 |
| 委員 | 三笠洋明 | 医学部 医学科 | 准教授 |
| 委員 | 竹谷豊 | 医学部 医科栄養学科 | 教授 |
| 委員 | 吉永哲哉 | 医学部 保健学科 | 教授 |
| 委員 | 三好圭子 | 歯学部 | 准教授 |
| 委員 | 難波康祐 | 薬学部 | 教授 |
| 委員 | 高橋浩樹 | 工学部・理工学部 | 教授 |
| 委員 | 宇都義浩 | 生物資源産業学部 | 教授 |
| 委員 | 南川慶二 | 教養教育院 | 教授 |
| 委員 | 川野卓二 | 総合教育センター | 教授 |
| 委員 | 吉田博 | 総合教育センター | 講師 |
| 委員 | 久保田祐歌 | 総合教育センター | 助教 |
| 委員 | 吉本勝彦 | 附属図書館 | 館長 |
| 委員 | 金西計英 | 総合教育センターICT活用教育部門 | 部門長 |

3. 調査の対象及び方法

この調査は、本学に在学する学部学生全員 6,051 人（平成 28 年 10 月 1 日に在籍するもの）を調査対象とした。

調査方法は、各学部の学務（教務）係及び「学生の学習に関する実態調査（ラーニングライフ）」実施ワーキンググループの協力を得て調査票を配布し、回答用紙（マークシート）を回収した。

4. 調査の時期

この調査は、平成 28 年 10 月 1 日から 11 月 30 日まで実施し、10 月 1 日現在の実状について回答を依頼し、回答用紙の提出期限を 11 月 30 日までとした。

5. 調査の内容

今回で4回目となるこの調査の項目は、学生の学修意識や学修に関する実態を把握する目的に基づき、「学生の学習に関する実態調査（ラーニングライフ）」実施ワーキンググループ委員が作成した、全87項目とした。

6. 調査票の回収状況

調査票の回収状況は、調査対象者6,051人のうち回答数は4,185人で、回収率は69.2%であった。学部・学科別の回収状況は次表のとおりである。

平成28年度 学生の学修に関する実態調査集計表

[学部学科別]

| 学部 | 学科 | 対象者数 | 回答数 | 回収率(%) | |
|-------|-------------|-------------|------|--------|-------|
| 総合科学部 | 社会総合科学科 | 179 | 108 | 60.3 | |
| | 人間文化学科 | 331 | 143 | 43.2 | |
| | 社会創生学科 | 322 | 99 | 30.7 | |
| | 総合理数学科 | 215 | 96 | 44.7 | |
| | 計 | 1,047 | 445 | 42.5 | |
| 医学部 | 医学科 | 718 | 428 | 59.6 | |
| | 医科栄養学科・栄養学科 | 205 | 195 | 95.1 | |
| | 保健学科 | 看護学専攻 | 301 | 178 | 59.1 |
| | | 放射線技術科学専攻 | 153 | 131 | 85.6 |
| | | 検査技術科学専攻 | 71 | 49 | 69.0 |
| | | 保健学科計 | 525 | 358 | 68.2 |
| 計 | 1,448 | 981 | 67.7 | | |
| 歯学部 | 歯学科 | 269 | 236 | 87.7 | |
| | 口腔保健学科 | 61 | 57 | 93.4 | |
| | 計 | 330 | 293 | 88.8 | |
| 薬学部 | 薬学部共通学科 | 184 | 96 | 52.2 | |
| | 薬学科 | 166 | 155 | 93.4 | |
| | 創製薬科学科 | 75 | 69 | 92.0 | |
| | 計 | 425 | 320 | 75.3 | |
| 理工学部 | 日間コース | 社会基盤デザインコース | 86 | 62 | 72.1 |
| | | 機械科学コース | 102 | 84 | 82.4 |
| | | 応用化学システムコース | 79 | 75 | 94.9 |
| | | 電気電子システムコース | 95 | 95 | 100.0 |
| | | 情報光システムコース | 126 | 121 | 96.0 |
| | | 応用理数コース | 65 | 49 | 75.4 |
| | | 計 | 553 | 486 | 87.9 |
| | 夜間主コース | 社会基盤デザインコース | 11 | 8 | 72.7 |
| | | 機械科学コース | 12 | 5 | 41.7 |
| | | 応用化学システムコース | 5 | 5 | 100.0 |
| | | 電気電子システムコース | 10 | 9 | 90.0 |
| | | 情報光システムコース | 11 | 11 | 100.0 |
| | | 応用理数コース | 1 | 1 | 100.0 |
| | | 計 | 50 | 39 | 78.0 |
| 計 | 603 | 525 | 87.1 | | |

| 学部 | 学科 | 対象者数 | 回答数 | 回収率(%) | |
|----------|----------|---------|-------|--------|------|
| 工学部 | 昼間コース | 建設工学科 | 269 | 179 | 67.0 |
| | | 機械工学科 | 397 | 245 | 61.7 |
| | | 化学応用工学科 | 256 | 234 | 91.4 |
| | | 生物工学科 | 198 | 165 | 83.3 |
| | | 電気電子工学科 | 349 | 272 | 77.9 |
| | | 知能情報工学科 | 285 | 225 | 78.9 |
| | | 光応用工学科 | 170 | 101 | 59.4 |
| | | 計 | 1,922 | 1,421 | 73.9 |
| | 夜間主コース | 建設工学科 | 36 | 17 | 47.2 |
| | | 機械工学科 | 39 | 16 | 41.0 |
| | | 化学応用工学科 | 14 | 13 | 92.9 |
| | | 生物工学科 | 16 | 15 | 93.8 |
| | | 電気電子工学科 | 36 | 21 | 58.3 |
| | | 知能情報工学科 | 34 | 32 | 94.1 |
| 計 | | 175 | 114 | 65.1 | |
| 計 | 2,097 | 1,535 | 73.2 | | |
| 生物資源産業学部 | 生物資源産業学科 | 101 | 84 | 83.2 | |
| 合計 | | 6,051 | 4,185 | 69.2 | |

注) 対象者数は、平成28年10月1日現在での現員数である。

※平成28年4月:

総合科学部・工学部→総合科学部社会総合科学科・理工学部・生物資源産業学部に改組

平成26年4月:

医学部栄養学科→医学部医科栄養学科に改組

※理工学部理工学科夜間主コース応用理数コースについては少人数のためグラフは非公開

7. 図中の%表示

複数回答可の設問については、グラフ中に回答者数における回答数の割合を表示した。
 択一の設問については、端数処理の関係で合計が100%にならない場合がある。

平成28年度 学生の学修に関する実態調査

平成28年10月
徳島大学

お願い

この調査は、みなさんの学修意識や学修に関する実態を把握し、今後の教育改革並びに修学指導に資する基礎資料を得ることを目的として実施するものです。

本調査は、平成28年10月1日現在、本学に在学する学部学生全員を対象に行います。マークカードに無記名で記入してください。他の目的に使用することはありませんので、ありのままを正確にお答えください。

質問事項も多く、大変だとは思いますが、この調査の趣旨をご理解のうえ、ご協力をお願いします。

※「学修」とは、授業およびその事前の準備、事後の展開などの主体的な学びを意味しています。

調査実施期間 10月1日～11月30日の内の1週間
(※所属の部局により異なります。)

回答用紙（マークカード）の提出期限及び提出場所は各部局の指示にしたがってください。

回答記入上の注意事項

- 1 平成28年10月1日現在で記入してください。
- 2 回答用紙はマークカードです。回答内容の該当するものを一つだけ選んで、その番号を塗りつぶして回答してください。ただし、複数回答可を指定している場合は、複数選んでも差し支えありません。
- 3 質問中、回答者を指定している箇所は、指定された人のみ回答してください。
- 4 マークカードの裏面に設問番号を明記して記入欄を設けています。また、自由記入欄を設けていますので、教育（カリキュラム、授業内容等）や研究について、気づいたこと、大学に対して要望したいこと、期待することがあれば、自由に記入してください。

問1 所属学部はどこですか。

1. 総合科学部
2. 医学部
3. 歯学部
4. 薬学部
5. 工学部（昼間コース）
6. 工学部（夜間主コース）
7. 理工学部（昼間コース）
8. 理工学部（夜間主コース）
9. 生物資源産業学部

問2 学科・専攻・コースはどこですか。

- | | | | | | |
|----------|---|------------------|-------------------|----------------------|---|
| 総合科学部 | { | 1. 社会総合科学科 | 2. 人間文化学科 | 3. 社会創生学科 | } |
| | | 4. 総合理数学科 | | | } |
| 医学部 | { | 1. 医学科 | 2. 栄養学科／医科栄養学科 | | } |
| | | 3. 保健学科・看護学専攻 | 4. 保健学科・放射線技術科学専攻 | | } |
| | | 5. 保健学科・検査技術科学専攻 | | | } |
| 歯学部 | { | 1. 歯学科 | 2. 口腔保健学科 | | } |
| 薬学部 | { | 1. 薬学科 | 2. 創製薬科学科 | （薬学部の1・2年生については選択不要） | |
| 工学部 | { | 1. 建設工学科 | 2. 機械工学科 | 3. 化学応用工学科 | } |
| | | 4. 生物工学科 | 5. 電気電子工学科 | 6. 知能情報工学科 | } |
| | | 7. 光応用工学科 | | | } |
| 理工学部 | { | 1. 社会基盤デザインコース | 2. 機械科学コース | | } |
| | | 3. 応用化学システムコース | 4. 電気電子システムコース | | } |
| | | 5. 情報光システムコース | 6. 応用理数コース | | } |
| 生物資源産業学部 | { | 1. 生物資源産業学科 | | | } |

問3 何年生ですか。

1. 1年生（平成28年度入学）
2. 1年生（平成27年度以前の入学）
3. 2年生
4. 3年生
5. 4年生
6. 5年生
7. 6年生

問4 あなたの将来の希望として当てはまるものがありますか。（複数回答可）（「その他」をマークした場合は、カード裏面に内容を記入）

1. 民間企業に就職して活躍したい
2. 行政機関などに勤めて公務員として活躍したい
3. 専門職として医院、病院、薬局などで活躍したい
4. 小学校、中学校、高校などの教育現場で活躍したい
5. NPOなど社会問題と積極的に関わる分野で活躍したい
6. 独立した経営者として活躍したい
7. 大学などの教育研究施設で活躍したい
8. 海外へ出て国際的な分野で活躍したい
9. まだ将来の希望は明確になっていない
0. その他（ ）

問5 あなたの将来の希望がほぼ明確になったのはいつ頃ですか。（「その他」をマークした場合は、カード裏面に内容を記入）

1. 小・中学生の頃
2. 高校1・2年の頃
3. 高校3年から大学入学まで
4. 大学1・2年次
5. 大学3・4年次
6. 大学5・6年次
7. まだ明確になっていない
8. その他（ ）

問6 あなたの将来の希望を叶えるために、大学院への進学を考えていますか？

1. はい
2. どちらともいえない
3. いいえ

問7 大学における教育に対して、何を期待しますか。（複数回答可）（「その他」をマークした場合は、カード裏面に内容を記入）

1. 社会に出た時に役に立つ知識・技術・技能
2. 人生を支える幅広い教養
3. 資格取得に必要な知識あるいはその受験に必要な単位
4. 特に期待するものはない
5. その他（ ）

問8 大学在学中にあなたが特に獲得したい知識・能力を3つ選んでください。「その他」をマークした場合は、カード裏面に内容を記入)

- | | |
|----------------|------------------------|
| 1. 一般知識・教養 | 2. 専門的知識 |
| 3. 課題発見・解決力 | 4. チームで目標を達成するマネジメント能力 |
| 5. コミュニケーション能力 | 6. 討論する能力 |
| 7. 語学力 | 8. 情報機器を活用する力 |
| 9. 論理的な文章を書く能力 | 0. その他 () |

問9 問8で特に大学の教育によって獲得が期待できる知識・能力を3つ選んでください。「その他」をマークした場合は、カード裏面に内容を記入)

- | | |
|----------------|------------------------|
| 1. 一般知識・教養 | 2. 専門的知識 |
| 3. 課題発見・解決力 | 4. チームで目標を達成するマネジメント能力 |
| 5. コミュニケーション能力 | 6. 討論する能力 |
| 7. 語学力 | 8. 情報機器を活用する力 |
| 9. 論理的な文章を書く能力 | 0. その他 () |

以下の問10-14に書かれている項目の内容は、あなたにどの程度当てはまると思いますか。それぞれの項目について、次の1から5のうち該当するものを選んでください。

- | | | | |
|-------------|---------|--------------|-----------|
| 1. 全くそう思う | 2. そう思う | 3. どちらともいえない | 4. そう思わない |
| 5. 全くそう思わない | | | |

問10 自分の専門分野について興味関心を持ち、意欲的に取り組んでいる。

[1. 2. 3. 4. 5.]

問11 自分の考えを文章による表現で、効果的に相手に伝えることができる。

[1. 2. 3. 4. 5.]

問12 自分の考えを口頭による説明や資料を用いて、効果的に相手に伝えることができる。

[1. 2. 3. 4. 5.]

問13 1つの課題に対して、他者と協力して取り組むことができる。

[1. 2. 3. 4. 5.]

問14 日常的に自身の学修内容等を振り返り、改善点を見出し向上を図っている。

[1. 2. 3. 4. 5.]

※問14で「1. 全くそう思う」または「2. そう思う」と回答した方は下記(1)及び(2)を回答してください。

どのような振り返りを行っていますか。振り返りの内容と改善方法について具体的にお書きください。

(1) 振り返りの内容について(カード裏面に内容を記入)

(2) 改善方法について(カード裏面に内容を記入)

問15 eポートフォリオシステム(Mahara)を使用していますか。(複数回答可)

1. 授業での学修成果の蓄積や自身の学修の記録のために自発的に使用している。
2. 授業等での教員からの指示により使用している。
3. 使用していない。
4. eポートフォリオシステム(Mahara)とは何か知らない。

問16 定期試験前以外に、大学の授業に関して、授業時間外に学修を行っていますか。

1. 必ず全科目予習あるいは復習を行っている
2. 興味のある科目や分からない科目は自主的に予習あるいは復習を行っている
3. 教員から課題・宿題が出される科目のみ予習あるいは復習を行っている
4. 何もしていない

問17 1日平均すると、大学の授業に関して、どれくらい授業時間外に学修を行っていますか。

1. 4時間程度もしくはそれ以上
2. 3時間程度
3. 2時間程度
4. 1時間程度
5. 30分
6. 全くしていない

問18 アクティブ・ラーニング科目※に関して、1日あたりに換算するとどれくらい授業時間外に学修を行っていますか。

1. 4時間程度もしくはそれ以上
2. 3時間程度
3. 2時間程度
4. 1時間程度
5. 30分
6. 全くしていない

※アクティブ・ラーニング科目とは、教員による一方的な知識伝達とは異なり、課題演習、質疑応答、振り返り、グループワーク、ディスカッション、プレゼンテーション等を取り入れた、教員と学生との双方向のやり取りを含む授業が実施されている科目のことです。

問19 授業の出席率は平均でどのくらいですか。

1. 90%以上
2. 70%以上～90%未満
3. 70%未満

問20 病気などのやむを得ない場合を除き、授業を休む理由は何ですか。(複数回答可) (「その他」をマークした場合は、カード裏面に内容を記入)

1. 朝寝坊
2. サークル・クラブ活動
3. アルバイト
4. 遊び
5. 他科目のレポート作成・試験勉強
6. 教員が出席をとらないから
7. 出席しても遅刻すると欠席になるから
8. 授業が理解できないから
9. 授業がおもしろくないから
0. その他 ()

問21 授業内容を理解できる科目の割合はどれくらいですか。

1. 80%以上
2. 70%以上
3. 60%以上
4. 60%未満

問22 あなたにとってどの方法が授業内容の理解の促進につながりましたか。(複数回答可)

1. 課題演習
2. 質疑応答
3. 振り返り※1
4. グループワーク
5. ディスカッション
6. 反転授業※2
7. ラーニング・ポートフォリオ※3

※1 学んだことについてまとめ、その内容を学生同士あるいは教員が確認しフィードバックを行う方法

※2 授業を受講する前に講義や説明の部分を事前に配付資料や動画で学修し、その内容に関する確認課題(簡単な復習テスト等)を行い、対面の授業時間内では講義以外の授業方法を取り入れて、学生の能動的な学修を促進する方法

※3 授業のある単元が終了した後で、学生が学修(実験、実習、演習等)に関する振り返りを行い、その内容を記述し、他者と共有できる形で蓄積し、フィードバックを受けることができるシステムまたは教材等を取り入れた方法

問23 平成27年度前期開講科目(履修登録者が11名以上の科目)から、受講後に自身の成績評価分布上の位置をウェブで確認できるようになっていることを知っていますか。

1. 知っており、見たことがある
2. 知っているが見たことはない
3. 知らない

- 問33 あなたは、現在の自分の学修時間や学修態度に満足していますか。(「4. そう思わない」もしくは「5. 全く思わない」をマークした場合は、カード裏面に内容を記入)
1. 全くそう思う
 2. そう思う
 3. どちらともいえない
 4. そう思わない
 5. 全くそう思わない
- 問34 図書館のどんな学修支援サービスを利用していますか。(複数回答可) (「その他」をマークした場合は、カード裏面に内容を記入)
1. 教員・学修支援アドバイザーによる学修相談 (SSS)
 2. 授業サポートナビ (各講義の参考図書, 関連情報提供サービス)
 3. 学修に関するイベント (講習会等)
 4. 文献複写サービス
 5. 本の購入リクエスト
 6. グループ学修スペースの利用
 7. 調べもの相談
 8. 利用していない
 9. その他 ()
- 問35 あなたは、読書についてどのように考えていますか。(「その他」をマークした場合は、カード裏面に内容を記入)
1. 読書は習慣として身に付いている
 2. もっと読書したいが、現在読みたい書籍はない
 3. もっと読書したいが、時間がない
 4. 読書の必要性を感じない
 5. その他 ()
- 問36 学修のためにインターネットを1日何時間くらい使用していますか。
1. 2時間以上
 2. 1時間～2時間
 3. 1時間以内
 4. 全く使用していない
- 問37 徳島大学では、卒業に必要な履修科目やそれらの科目を学修していく順序等を一覧できる「カリキュラムマップ」を公開していることを知っていますか。
1. 知っており、見たことがある
 2. 知っているが見たことはない
 3. 知らない
- 問38 徳島大学では、学部の授業科目のレベルに基づく学修の段階や順序を整理し適切な番号を付与した「科目ナンバリング」を公開していることを知っていますか。
1. 知っており、見たことがある
 2. 知っているが見たことはない
 3. 知らない
- 問39 シラバスはどのように利用していますか。
1. 毎週確認し、授業の予習・復習に役立てている
 2. 気になった時に時々確認している
 3. 初回の授業を受ける前に確認したが、その後はほとんど見ていない
 4. 授業の選択を考える時に確認したが、その後はほとんど見ていない
 5. 全く見ていない
- 問40 高校で履修しなかったために大学での学修に支障を感じた理系科目 (数学, 物理, 化学, 生物, 地学) はありますか。(複数回答可)
1. ある (数学)
 2. ある (物理)
 3. ある (化学)
 4. ある (生物)
 5. ある (地学)
 6. ない
- 問41 高校で履修していない数学, 物理, 化学, 生物について、大学入学後どのように勉強しましたか。(複数回答可) (「その他」をマークした場合は、カード裏面に内容を記入)
1. 高校の教科書, 参考書を使い、勉強した
 2. 教養教育 (全学共通教育) で開講されている高大接続科目や自然科学入門又はその他の科目を受講した
 3. HP上の徳島大学LMS (リメディアル教材) を利用して勉強した
 4. 勉強の必要性を感じたが、LMS (リメディアル教材) の存在を知らず何もしていない
 5. 支障を感じないので何もしていない
 6. その他 ()

教養教育（全学共通教育）について該当するものをあげてください。

問48-55 教養教育（全学共通教育）のそれぞれの項目について、次の1から3のうち該当するものを選んでください。（複数回答可）

1. 授業内容の水準をもっと高度にすべき科目がある
2. 授業内容の水準は適切である
3. 授業内容の水準をもっと易しくすべき科目がある
4. 履修していない

| <u>平成27年度以前の入学生が回答</u> | <u>平成28年度の入学生（留年生を除く1年生）が回答</u> |
|---|---------------------------------------|
| 問48 教養科目群(教養科目)について 〔1. 2. 3. 4.〕 | 問48 一般教養教育科目群について 〔1. 2. 3. 4.〕 |
| 問49 社会性形成科目群（ウェルネス総合演習・共創型学習・ヒューマンコミュニケーション）について 〔1. 2. 3. 4.〕 | 問49 グローバル化教育科目群について 〔1. 2. 3. 4.〕 |
| 問50 基盤形成科目群(外国語科目・情報科学)について 〔1. 2. 3. 4.〕 | 問50 イノベーション教育科目群について 〔1. 2. 3. 4.〕 |
| 問51 基礎科目群(基礎科目)について 〔1. 2. 3. 4.〕 | 問51 基礎基盤教育科目群について 〔1. 2. 3. 4.〕 |
| 問52 〔設問無し。この番号の設問はマークせず空欄としてください。〕 | 問52 汎用的技能教育科目群について 〔1. 2. 3. 4.〕 |
| 問53 〔設問無し。この番号の設問はマークせず空欄としてください。〕 | 問53 地域科学教育科目群について 〔1. 2. 3. 4.〕 |
| 問54 〔設問無し。この番号の設問はマークせず空欄としてください。〕 | 問54 医療基盤教育科目群について 〔1. 2. 3. 4.〕 |
| 問55 〔設問無し。この番号の設問はマークせず空欄としてください。〕 | 問55 外国語教育科目群について 〔1. 2. 3. 4.〕 |

専門教育の授業について

問56 専門教育科目の授業を受けて何を学ぶことができると感じますか。（複数回答可）

1. 専門の知識を身に付けるのに役立った
2. 自分の進路について考えることができるようになった
3. 学問・研究に興味を湧いた
4. 社会で役立つ能力を身に付けるのに役立った
5. 特に得るものはなかった

問57 授業内容の難易度についてどう感じますか。

1. 授業内容の水準をもっと高度にすべきである
2. 授業内容の水準は適切である
3. 授業内容の水準をもっと易しくすべきである

問58 実習形式の授業時間数についてどう思いますか。(2年生以上)

1. もっと増やしてほしい
2. これくらいでよい
3. 減らすべきである

問59 教員免許の取得に興味がありますか。

1. 教員を目指している
2. とりあえず免許はとっておきたい
3. 取得すべきか否か迷っている
4. 関心がない

卒業研究, 医学研究実習, 看護研究, 研究基礎ゼミについて (3, 4年生または該当する学生のみ)

問60 卒業研究または医学科では医学研究実習, 保健学科看護学専攻では看護研究, 歯学科では研究基礎ゼミの研究室をどういう基準で決めましたか。(複数回答可)

1. 関心の深い研究内容であったから
2. 将来のやりたい仕事や進路に必要と思ったから
3. 先輩や友人の勧めで
4. 教員の人柄に魅力を感じたから
5. 研究室の雰囲気
6. やむを得ず入った
7. どこでもよかった

問61 卒業研究, 医学研究実習(医学科), 看護研究(保健学科看護学専攻), 研究基礎ゼミ(歯学科)によって何が得られると思いますか。(複数回答可)

1. 専門的知識や技術
2. 進路を考えるための広い視野
3. 学問・研究への興味や知的好奇心
4. コミュニケーション能力や対人関係能力
5. 課題発見能力や問題解決能力
6. プレゼンテーション能力
7. 文章作成能力
8. 大学院への進学意欲の向上
9. 特に得るものがない

問62 教員, TAの研究指導(データの相談, 実験指導等)の時間は十分だったと思いますか。

1. 全くそう思う
2. そう思う
3. どちらともいえない
4. そう思わない
5. 全くそう思わない

問63 学修(自習)を進めるための設備, スペースは確保されていますか。

1. 設備, スペースともに十分である
2. 設備は十分であるが, スペースがせまい
3. スペースは十分であるが, 設備が足りない
4. 設備, スペースともに足りない

問64 研究を進めるための設備, スペースは確保されていますか。

1. 設備, スペースともに十分である
2. 設備は十分であるが, スペースがせまい
3. スペースは十分であるが, 設備が足りない
4. 設備, スペースともに足りない

英語学修・教育について

問65 英語は毎日または定期的に勉強していますか。

1. はい
2. いいえ

問66 問65で「はい」と答えた人は, 質問に教えてください。

どのように, 英語の勉強を行っていますか。(複数回答可)

1. 毎日または定期的にテレビ, ラジオの英語教育番組を利用して勉強している
2. 英会話スクールに行ったことがある。または現在通っている
3. 図書館または大学の英語教材, 施設を利用して定期的に英語を勉強している
4. TOEICなどの参考書, 問題集を購入して定期的に勉強している
5. TOEIC, TOEFLや英検などの英語能力試験を定期的に受験している
6. 授業で使用している教科書, 英語論文をよく勉強している
7. 留学生と交流している

問67 徳島大学における英語教育の内容について満足していますか？（「4. そう思わない」及び「5. 全く思わない」をマークした場合は、カード裏面に内容を記入）

1. 全くそう思う
2. そう思う
3. どちらともいえない
4. そう思わない
5. 全くそう思わない

問68 徳島大学における英語教育についてどう思いますか。（複数回答可）

1. 教養教育（全学共通教育）、専門教育で行われる英語教育で十分である
2. もっと授業数を増やしてほしい
3. もっと授業数を減らしてほしい
4. もっと少人数のクラスにしてほしい
5. ネイティブスピーカーの教員による授業を増やしてほしい
6. 専門英語の時間を増やしてほしい
7. 専門英語のライティング、会話に重点を置いた授業を増やしてほしい

徳島大学における海外留学について

問69 徳島大学在籍中に長期・短期海外留学を体験しましたか。

1. はい
2. 1年以内に予定している
3. いいえ

問70 問69で「はい」または「予定している」と答えた人は、質問に教えてください。

海外留学はどのようにその後の学修に活かされていますか（活かされると思いますか）。（複数回答可）

1. 国際的感覚を身に付けるのに役立つ
2. 専門の知識を身に付けるのに役立つ
3. 自分の進路について広い視野で考えることができるようになる
4. 学問・研究に興味を沸く
5. 社会で役立つ能力を身に付けるのに役立つ
6. マナー、人格形成に役立つ
7. 特に思い当たらない

問71 問69で「いいえ」と答えた人は、質問に教えてください。

海外留学を行わない理由は何ですか。（複数回答可）

1. 教養教育（全学共通教育）、専門教育で行われる外国語教育で十分で、海外留学に興味はない
2. 魅力的な海外留学プログラムがない
3. 海外留学を行いたい資金的な援助が十分ではない
4. 専門教育においては短期でも時間的に海外留学を行う余裕はない
5. 留学するためのプロセスがわからない
6. 全く興味がない
7. 帰国後の就職活動に出遅れる心配がある

eラーニングについて

問72 徳島大学のeラーニングサービスを利用したことはありますか？利用したことのある人は以下の項目から利用したことのあるサービスを選んでください（複数選択可）。（「その他」をマークした場合は、カード裏面に内容を記入）

1. i-Collabo（全学）
2. Moodle（全学）
3. Mahara（全学）
4. スーパー英語（全学）
5. 各学部やコース内で提供されているeラーニングサービス
6. その他（ ）
7. 利用したことはない

問73 問72で利用したことがあると答えた人は、質問に教えてください。あなたはeラーニングをどこから使いましたか、以下の項目から該当するものを選んでください。(複数選択可) (「その他」をマークした場合は、カード裏面に内容を記入)

1. 情報センターや学部の計算機室のPCから
2. 図書館(本館・分館)に置かれているPCから
3. 学生研究室等のPCから
4. 学内に持ってきたノートPC(学内Wi-Fi利用)から
5. 自宅のPCから
6. スマホから
7. 自宅のタブレットから
8. その他()

問74 問72で利用したことがあると答えた人は、質問に教えてください。あなたはeラーニングを一週間に平均してどれくらい使いましたか。以下の項目から該当するものを選んでください。

1. 6時間以上
2. 5時間～6時間まで
3. 4時間～5時間まで
4. 3時間～4時間まで
5. 2時間～3時間まで
6. 1時間～2時間まで
7. 1時間まで

問75 問72で利用したことがあると答えた人は、質問に教えてください。あなたはeラーニングをどのようなことのために使いましたか。以下の項目から該当するものを選んでください。(複数選択可) (「その他」をマークした場合は、カード裏面に内容を記入)

1. 授業時間中に利用
2. 授業の予習のため
3. 授業の復習のため
4. スライド等の資料の閲覧・ダウンロード
5. 課題レポートの提出
6. 先生やTAへの質問
7. クラスメイトと講義内容の議論
8. 試験勉強
9. その他()

問76 問72で利用したことがあると答えた人は、質問に教えてください。あなたは今後も本学の提供する各種のeラーニングのサービスを使い続けたいと思いますか。

1. 全くそう思う
2. そう思う
3. どちらともいえない
4. そう思わない
5. 全くそう思わない

問77 本学の提供するeラーニングサービス全般について質問します。あなたは、eラーニングサービスは、学修に役立つと思いますか。使ったことのある人、無い人のいずれもお答えください。

1. 全くそう思う
2. そう思う
3. どちらともいえない
4. そう思わない
5. 全くそう思わない

問78 あなたはeラーニングサービスの一つとして、本学では、単位を取得できるオンライン学修科目(対面講義のない自学自習形態)を提供していることを知っていましたか。

1. 知っていた
2. 知らなかった

問79 (1) あなたは本学が提供しているようなオンライン学修科目を、今後も増やした方が良いと思いますか。

1. 全くそう思う
2. そう思う
3. どちらともいえない
4. そう思わない
5. 全くそう思わない

(2) eラーニングサービス、オンライン学修科目について特に意見があればお書きください(カード裏面に内容を記入)。

授業評価アンケートについて

問80-84 本学では、学生のみなさんに対して、授業の中間期および最後に「授業評価アンケート」をおこなっています。この「授業評価アンケート」に関して書かれている次の項目の内容は、あなたにどの程度当てはまりますか。それぞれの項目について、次の1から5のうち該当するものを選んでください。

1. 全くそう思う 2. そう思う 3. どちらともいえない 4. そう思わない
5. 全くそう思わない

問80 授業評価アンケートに対して、よく考えて回答している。

[1. 2. 3. 4. 5.]

問81 回答するための十分な時間が確保できていると思う。

[1. 2. 3. 4. 5.]

問82 アンケートは、学生の意見を教員に伝えるよい機会になっていると思う。

[1. 2. 3. 4. 5.]

問83 設問は、授業改善に必要な内容であると思う。

[1. 2. 3. 4. 5.]

問84 授業評価アンケート結果は授業改善に活用されていると思う。

[1. 2. 3. 4. 5.]

問85 「授業評価アンケート」に設問を追加できるとしたら、どのような設問を提案したいと思いますか。具体的に書いてください。(カード裏面に内容を記入)

大学に関するあなたの評価を教えてください

問86 大学教育全体の満足度は100点満点で何点ぐらいですか。マーク番号86-88に具体的な数字を記入してください。

(例) 84点の場合 マーク番号86に0, マーク番号87に8, マーク番号88に4をマークしてください。

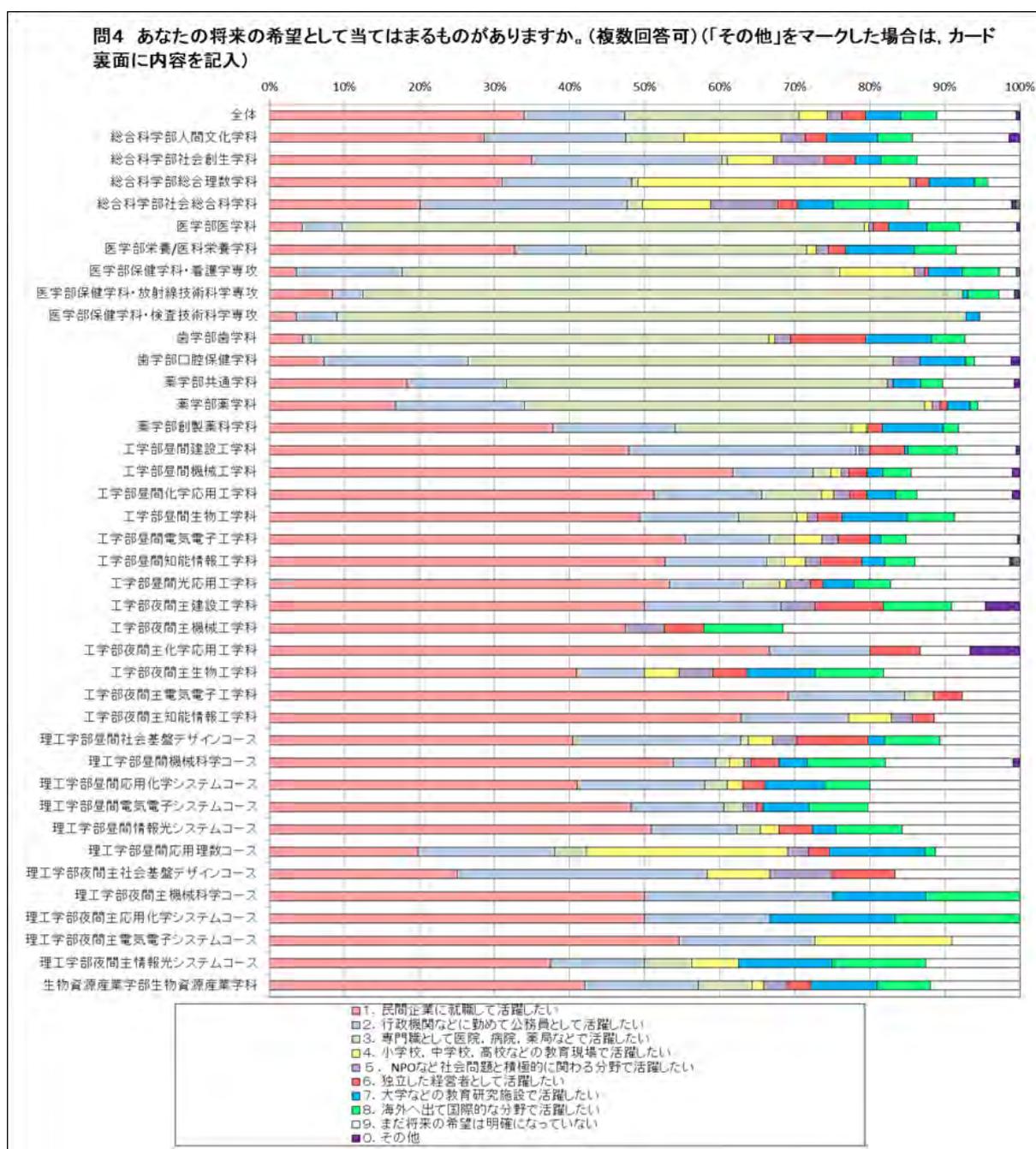
問87 徳島大学の教育を改善するには、何を、どうすれば良いですか?具体的に提案してください。(カード裏面に内容を記入)

ご協力ありがとうございました。

第1章 将来の希望について

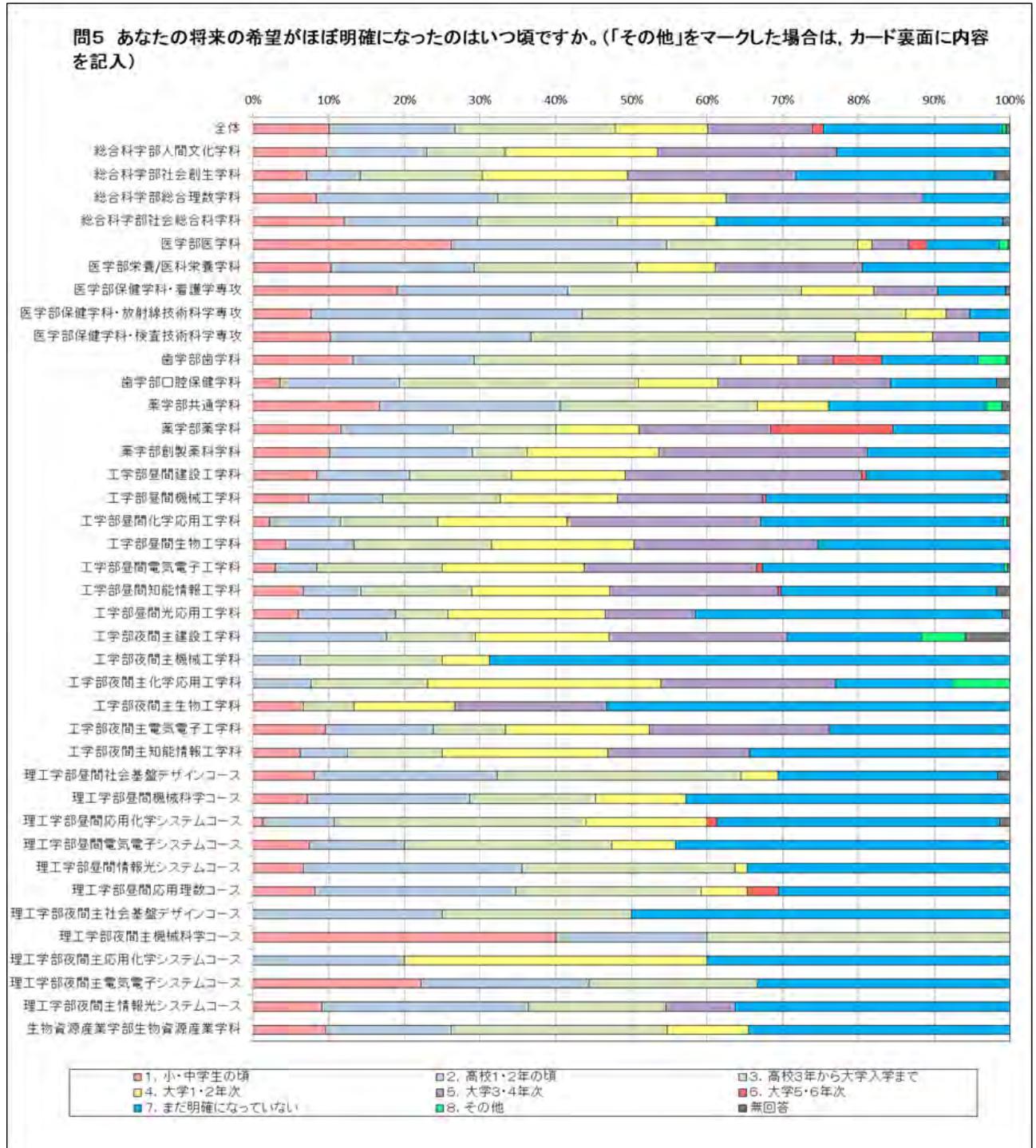
1-1 将来の希望

将来の希望として、全体では「民間企業に就職して活躍したい」が最も多かった。次いで「専門職として医院、病院、薬局などで活躍したい」、「行政機関などに勤めて公務員として活躍したい」と続いていた。学部系で見ると、医歯薬系では、「専門職として医院、病院、薬局などで活躍したい」が高く、それ以外の学部系では、「民間企業に就職して活躍したい」が高かった。しかし、特徴的な学科も見られる。総合科学部総合理数学科では、「小学校、中学校、高校などの教育現場で活躍したい」が最も高く、総合科学部社会総合科学科では、「行政機関などに勤めて公務員として活躍したい」が最も高かった。医歯薬系学科の中にも「民間企業に就職して活躍したい」を最も高く選択した学科が2つあった。医学部栄養/医科栄養学科と薬学部創製薬科学科である。



1-2 将来の希望が明確になった時期

将来の希望が明確になった時期として、全体としては、選択肢の「7. まだ明確になっていない」が最も割合が多かった。次いで、「3. 高校3年から大学入学まで」であった。学部・学科コースの特徴として、医歯薬系学科では、高校時代に明確になった学生が多く、それ以外の学科・コースでは、まだ明確になっていない割合が高かった。逆に、まだ明確になっていない割合が低かったのは、医学部保健学科の3専攻であった。



1-3 大学院への進学希望

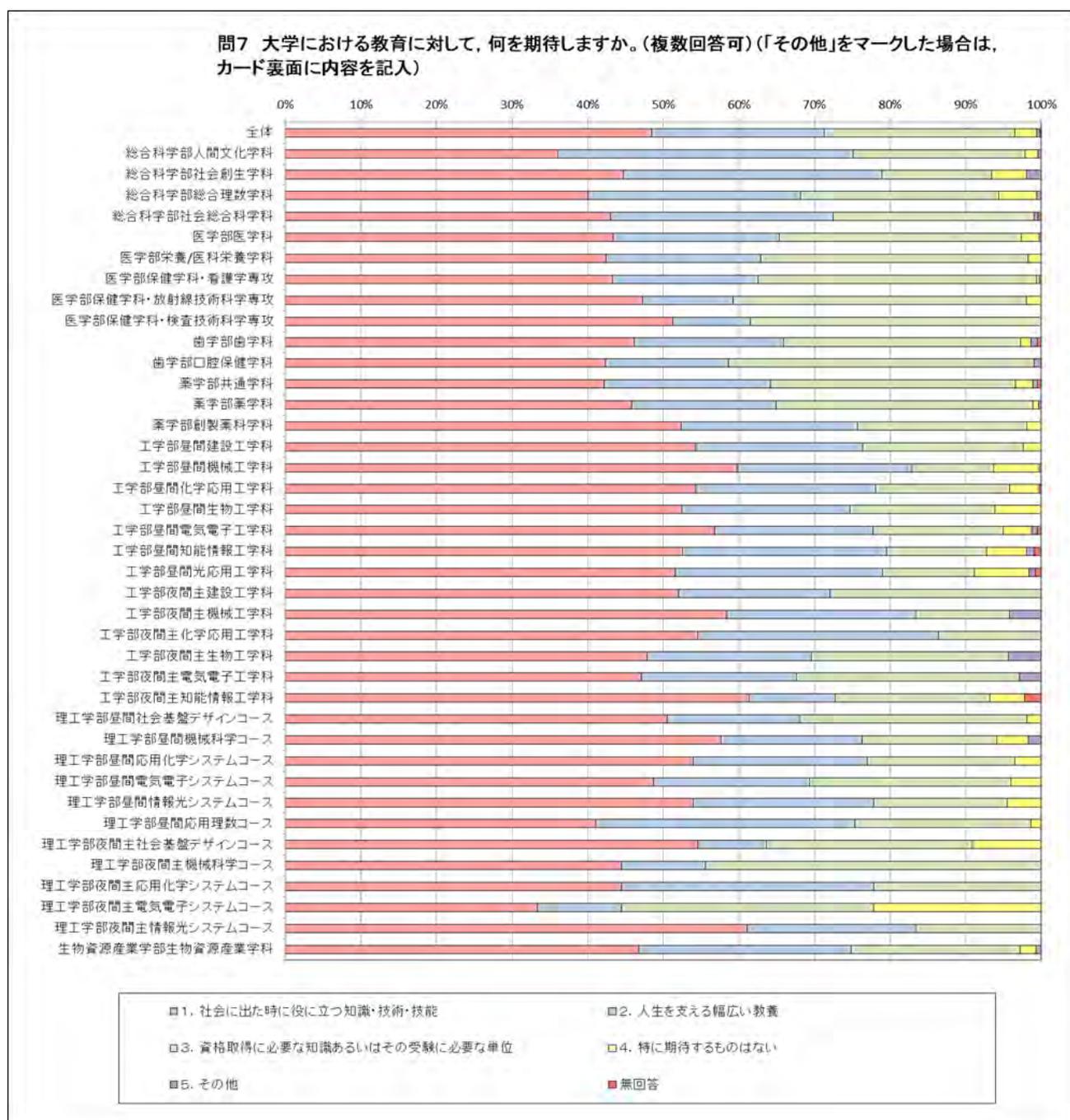
全体として、大学院進学を考えているかで「はい」と答えた割合は36%、「いいえ」と答えた割合は34%、「どちらともいえない」は29%となり、大きく3分されていた。工学部、理工学部では総じて大学院進学を考えているものが多く、医学部・薬学部の6年制学科やその他の学部、学科では、大学院進学を考える割合が低かった。しかし、薬学部創製薬科学科（4年制）では、大学院進学を考えている割合が88%と顕著に高かった。



第2章 大学教育について

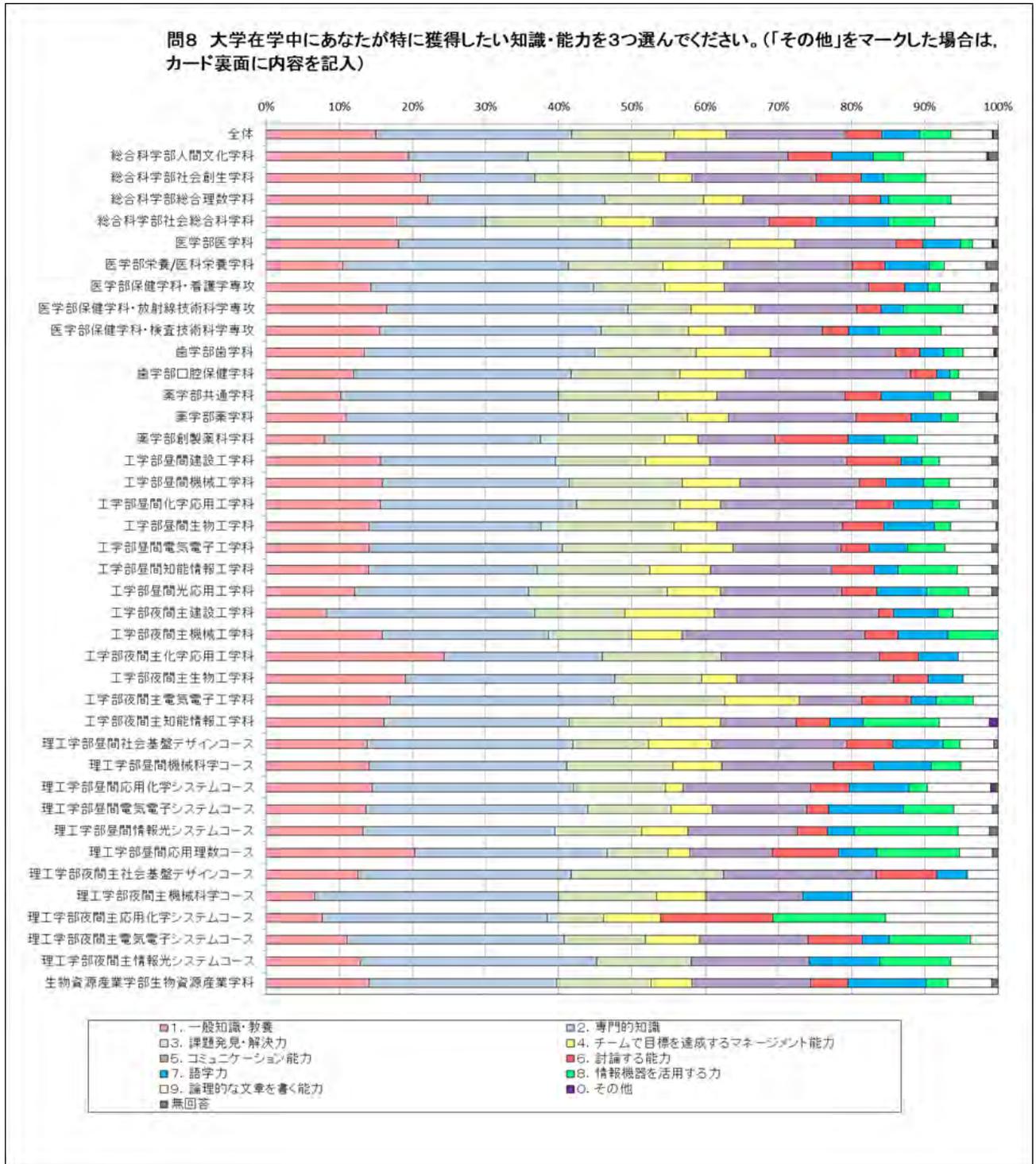
2-1 大学教育への期待

大学での教育に何を期待するかとの問に対して、全体としては「社会に出た時に役に立つ知識・技術・技能」が最も多く、次いで「3. 資格取得に必要な知識あるいはその受験に必要な単位」、「人生を支える幅広い教養」となっていた。昼間学科コースの中で、「特に期待するものはない」を選択した割合が10%以上であったところはなく、大多数が大学教育に何らかの期待を持っていることがわかる。



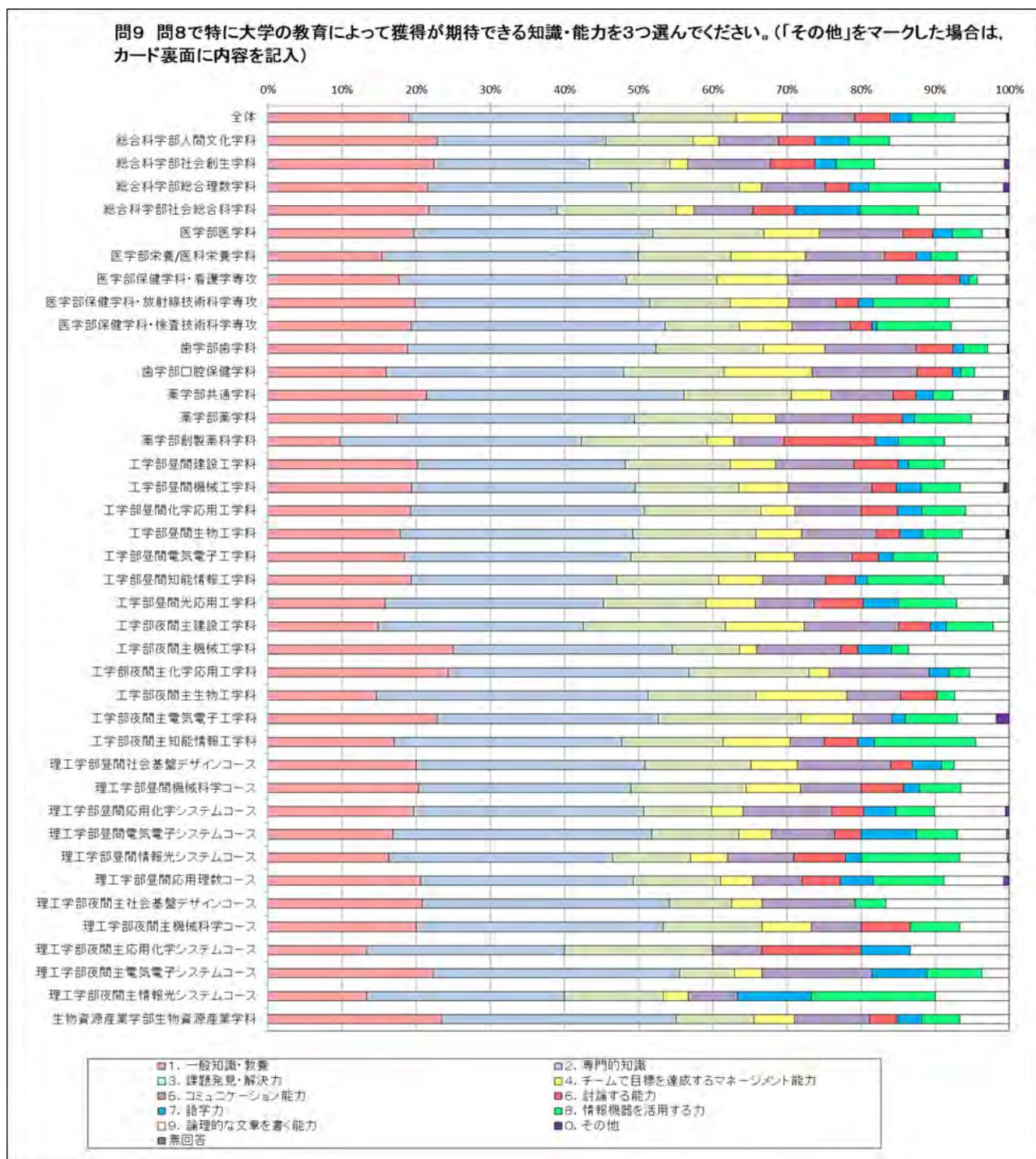
2-2 大学で獲得したい知識、能力

大学在学中に獲得したい知識・能力として「専門的知識」が最も多かった。次いで、「コミュニケーション能力」、「一般知識・教養」、「課題発見・解決力」となっている。他に、昼間学科コースで特徴的な項目として、理工学部昼間情報光システムコースの学生が、「情報機器を活用する力」を選択していた。



2-3 大学教育で獲得が期待できる知識、能力

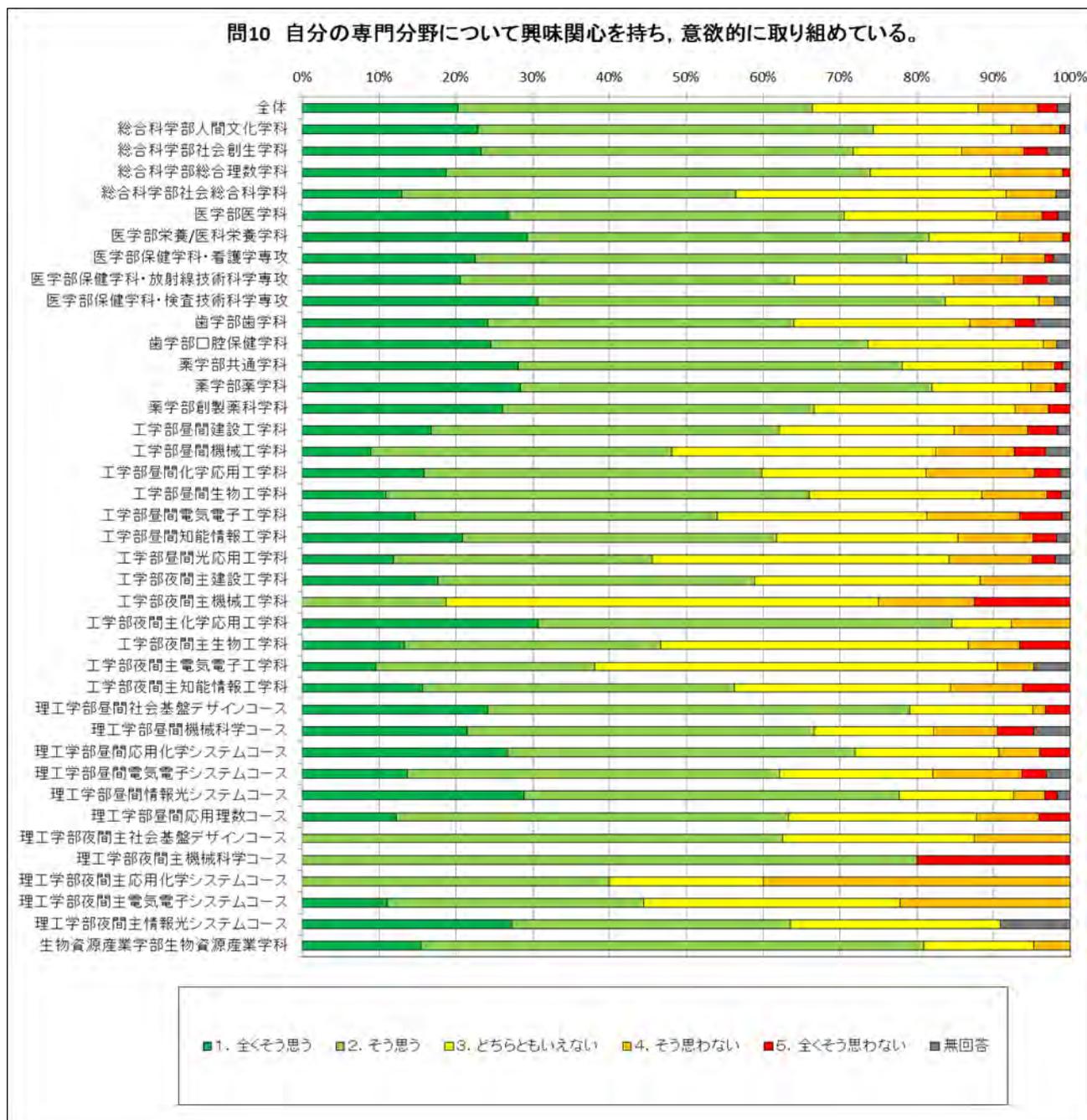
大学での教育によって獲得が期待できる知識・能力として最も割合が高かった3項目は、「専門的知識」、「一般知識・教養」、「課題発見・解決力」であった。学科・専攻・コースの特徴的な項目として、総合科学部社会創生学科、および総合科学部人間文化学科において「論理的な文章を書く能力」が、医学部保健学科・看護学専攻、および歯学部口腔保健学科において「コミュニケーション能力」が、いずれも高かった。



第3章 あなた自身について

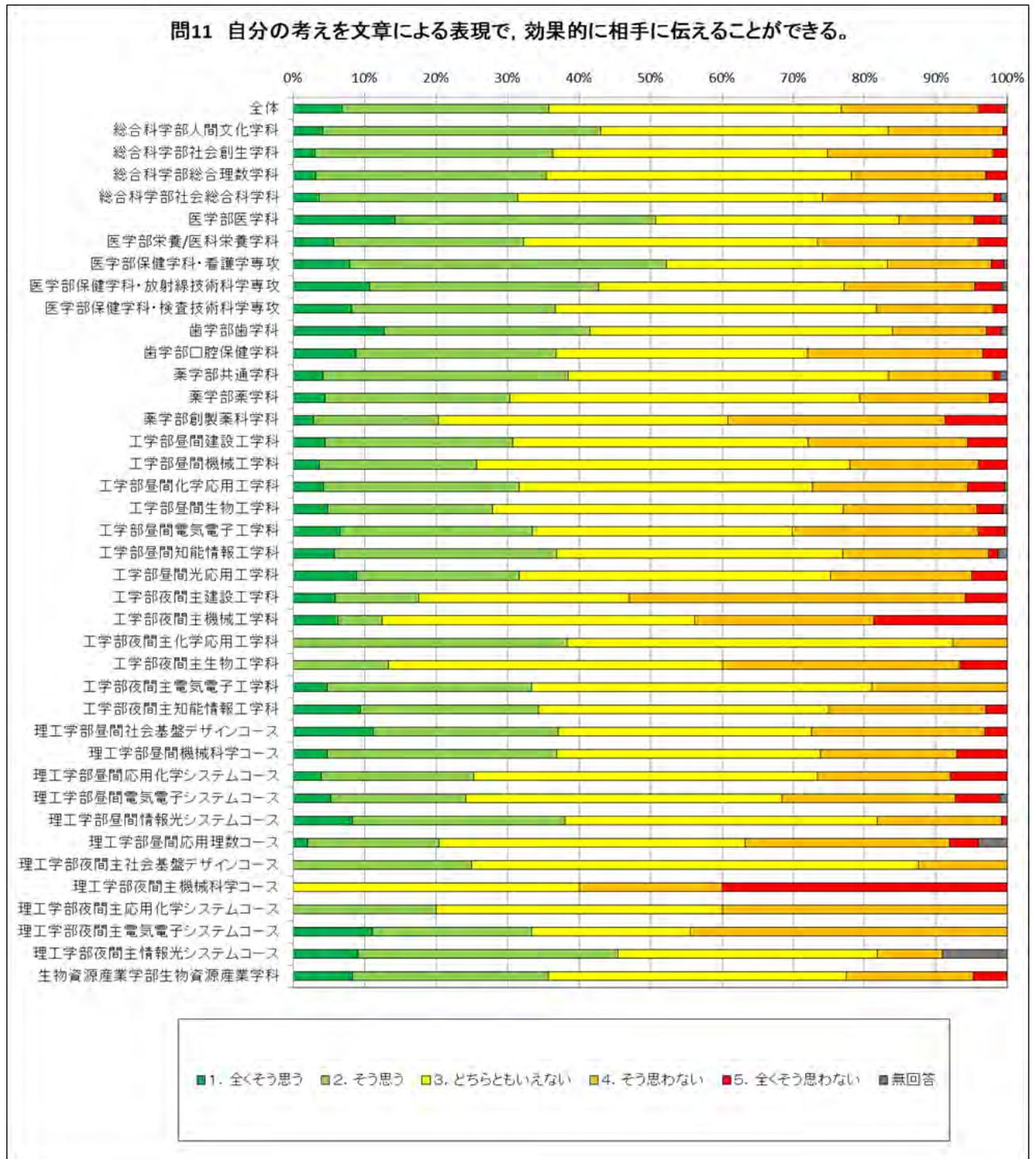
3-1 専門分野への取組

学科による差があるものの、おおよそ 60%~80%の学生が「1.全くそう思う」、「2.そう思う」と回答している。蔵本キャンパスの学部・学科では、常三島キャンパスの学部・学科と比較すると「1.全くそう思う」という回答の割合が多く、「4.そう思わない」という回答の割合が少ない。蔵本キャンパスの方は将来の職業と直結している学問分野であることが要因として考えられる。



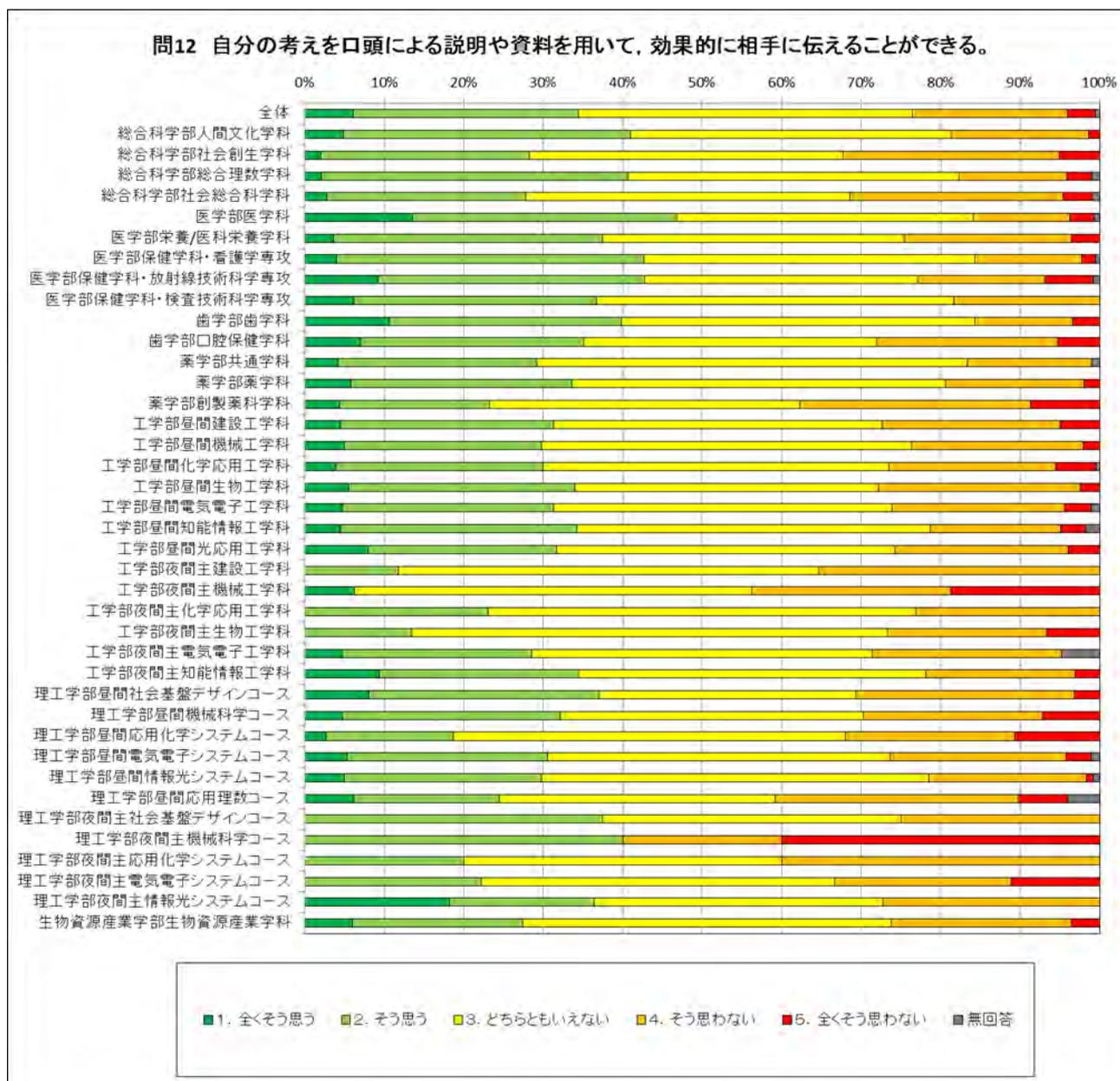
3-2 文書での表現

全体的に 30%~40%の学生が、「1.全くそう思う」、「2.そう思う」と回答しており、「3.どちらともいえない」と回答した学生も同数程度いることが分かる。また、工学部、理工学部が比較的、「4.そう思わない」、「5.全くそう思わない」という回答の割合が多い。



3-3 口頭での説明

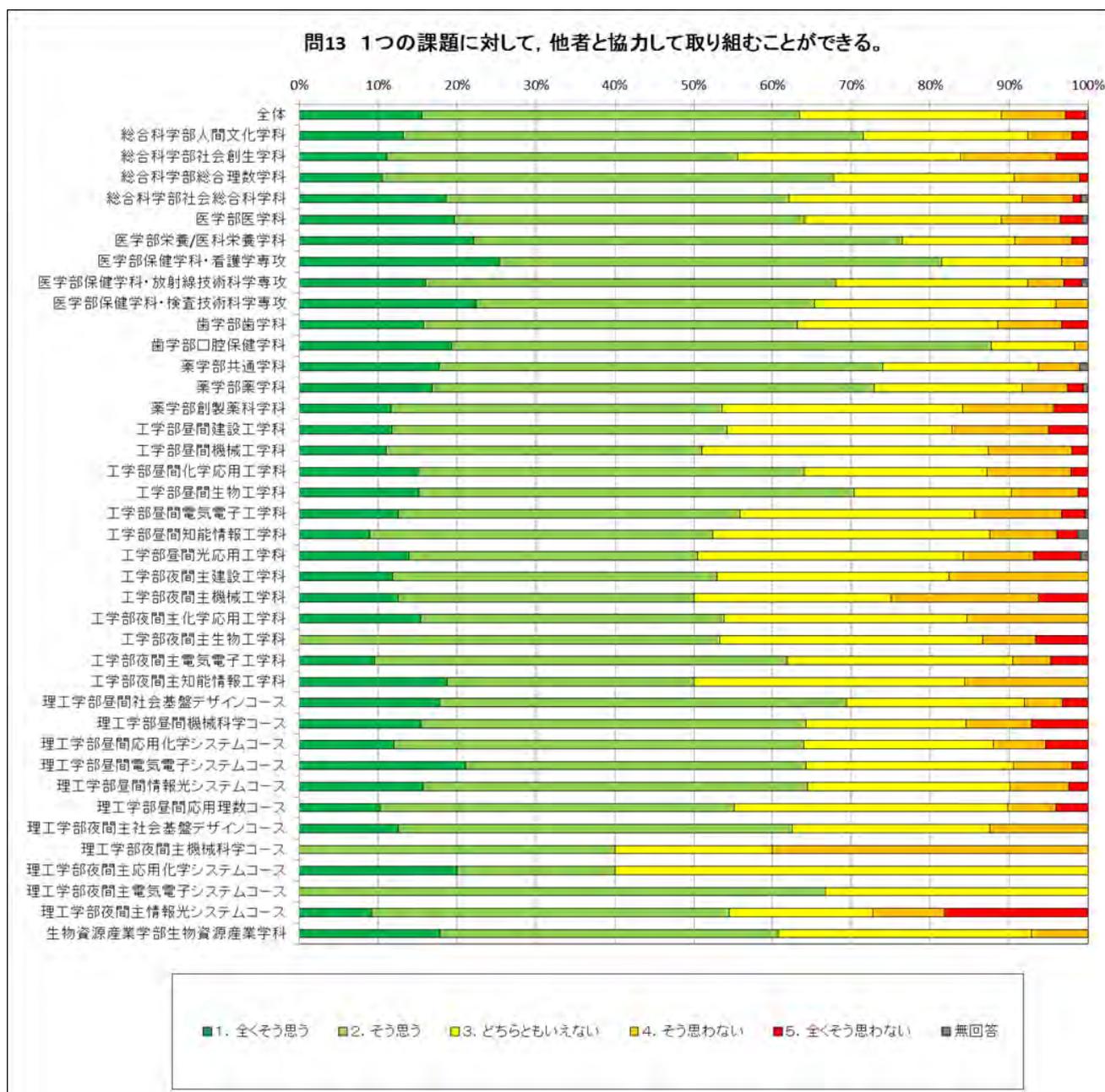
全体的に 30%~40%の学生が、「1.全くそう思う」、「2.そう思う」と回答しており、「3.どちらともいえない」と回答した学生も同数程度いることが分かる。総合科学部人間文化学科、総合理数学科、医学部、歯学部は、比較的「1.全くそう思う」、「2.そう思う」と回答した学生の割合が高いことが分かる。



3-4 他者との協調

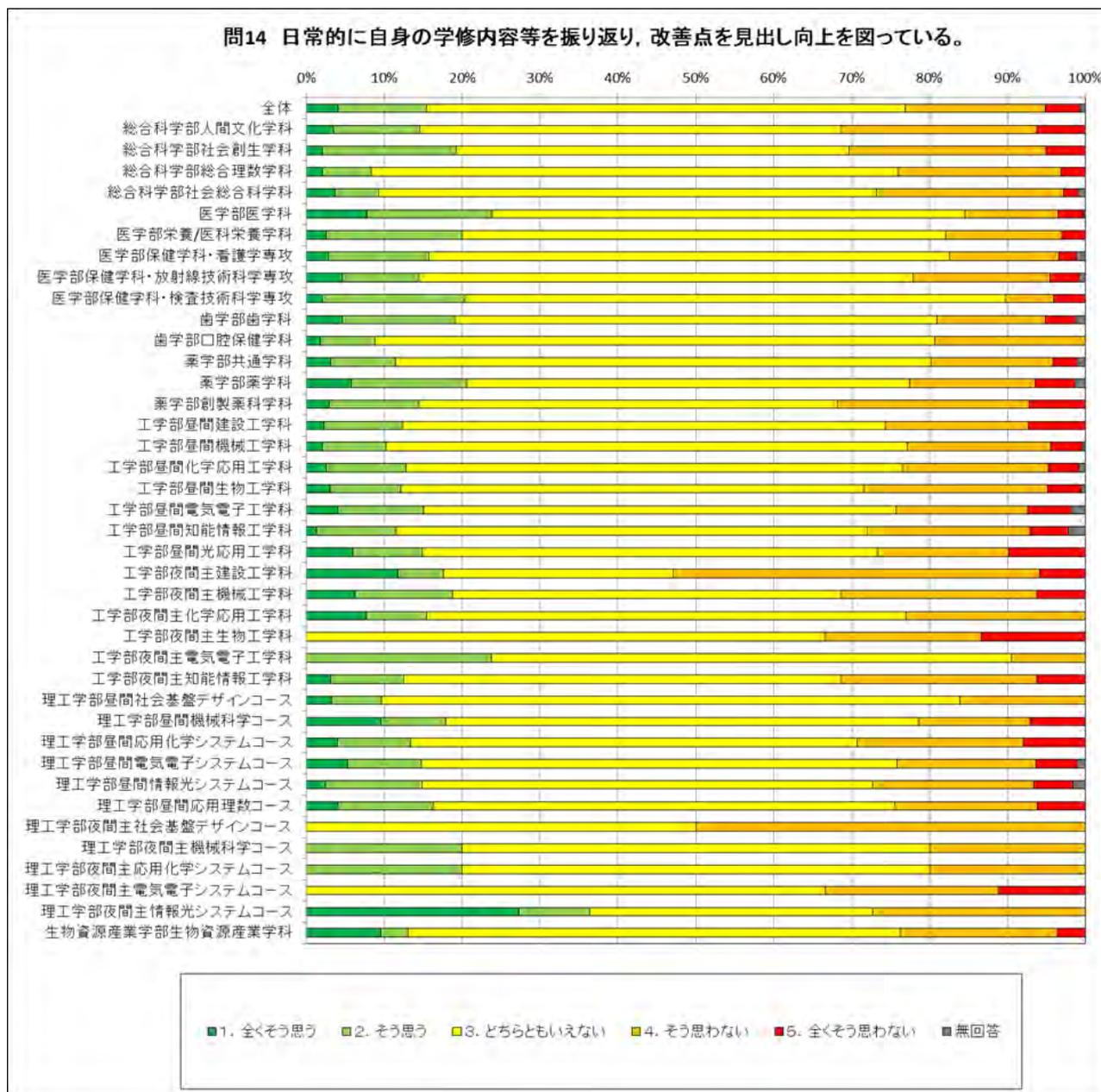
学科による差があるものの、おおよそ 50%~70%の学生が「1.全くそう思う」、「2.そう思う」と回答している。特に、歯学部口腔保健学科では、約 90%の学生が「1.全くそう思う」と回答をしている。また、「1.全くそう思う」、「2.そう思う」と回答した学生の割合について、工学部と理工学部を比較すると、改組後の理工学部の方が比較的ポイントが高いことが分かる。これは、平成 27 年度より実施されている初年次教育科目「SIH 道場」の成果ということもできるのではないかと。

※「SIH 道場」では、学習目標の 1 つに「協働力の習得」が設定されている。



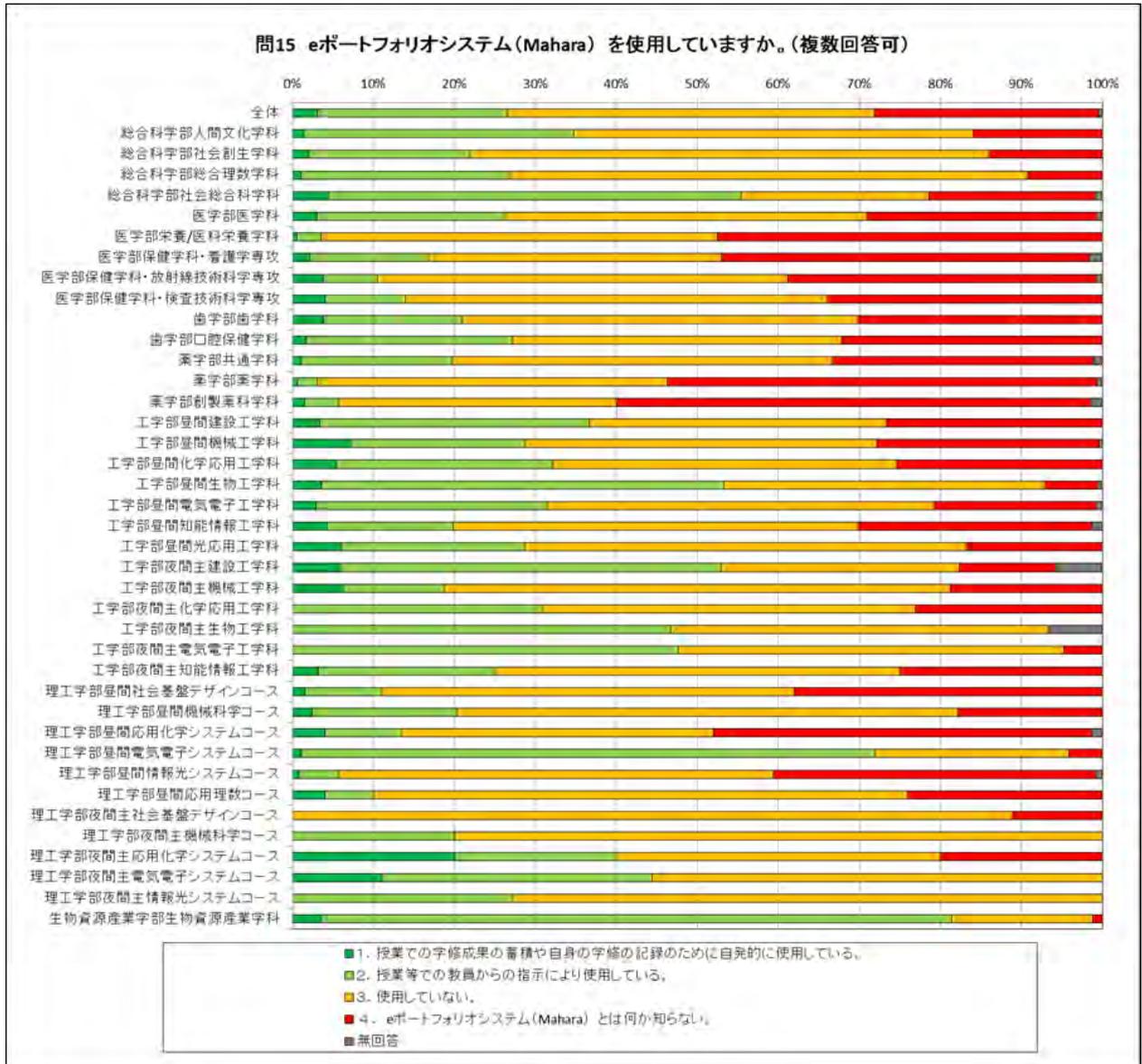
3-5 学修内容の振り返り

全体的に「1.全くそう思う」、「2.そう思う」と回答した学生の割合が低く、約60%の学生が「3.どちらともいえない」と回答している。振り返りの内容については、授業内容に関連する事柄がほとんどであるが、自身の学習への取り組み方や設定した目標の評価を行ったという記述もいくつか確認できる。改善方法については、教科書やノートの見直し、教員や友達と協働して行う学生もいることが分かる。



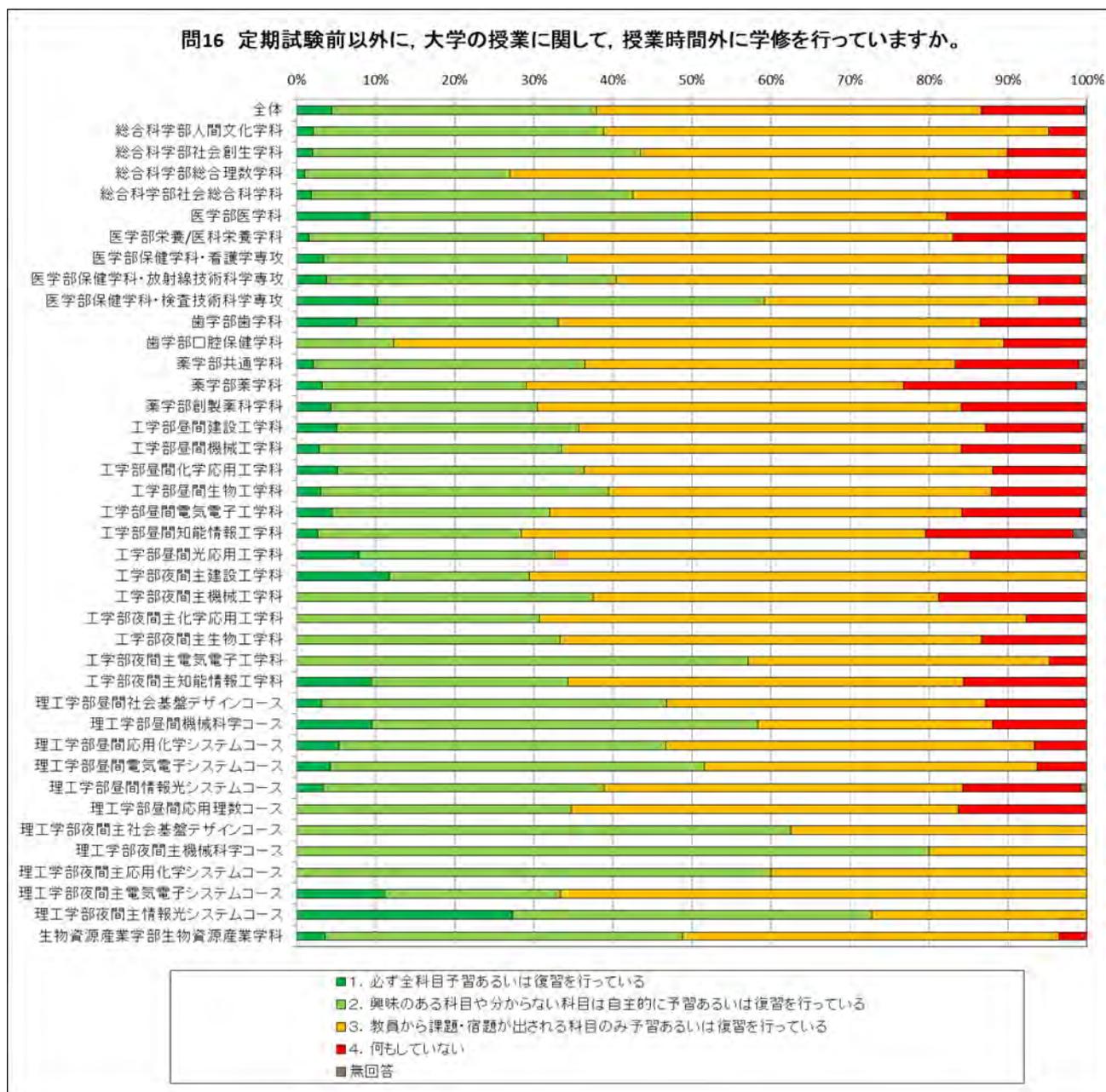
3-6 eポートフォリオシステムの利用

eポートフォリオは、SIH道場での利用に合わせて導入されたため、学年によって利用にばらつきがある実態が推察される。1年生しかいない学部等において、eポートフォリオの利用率は高いところが見られる。



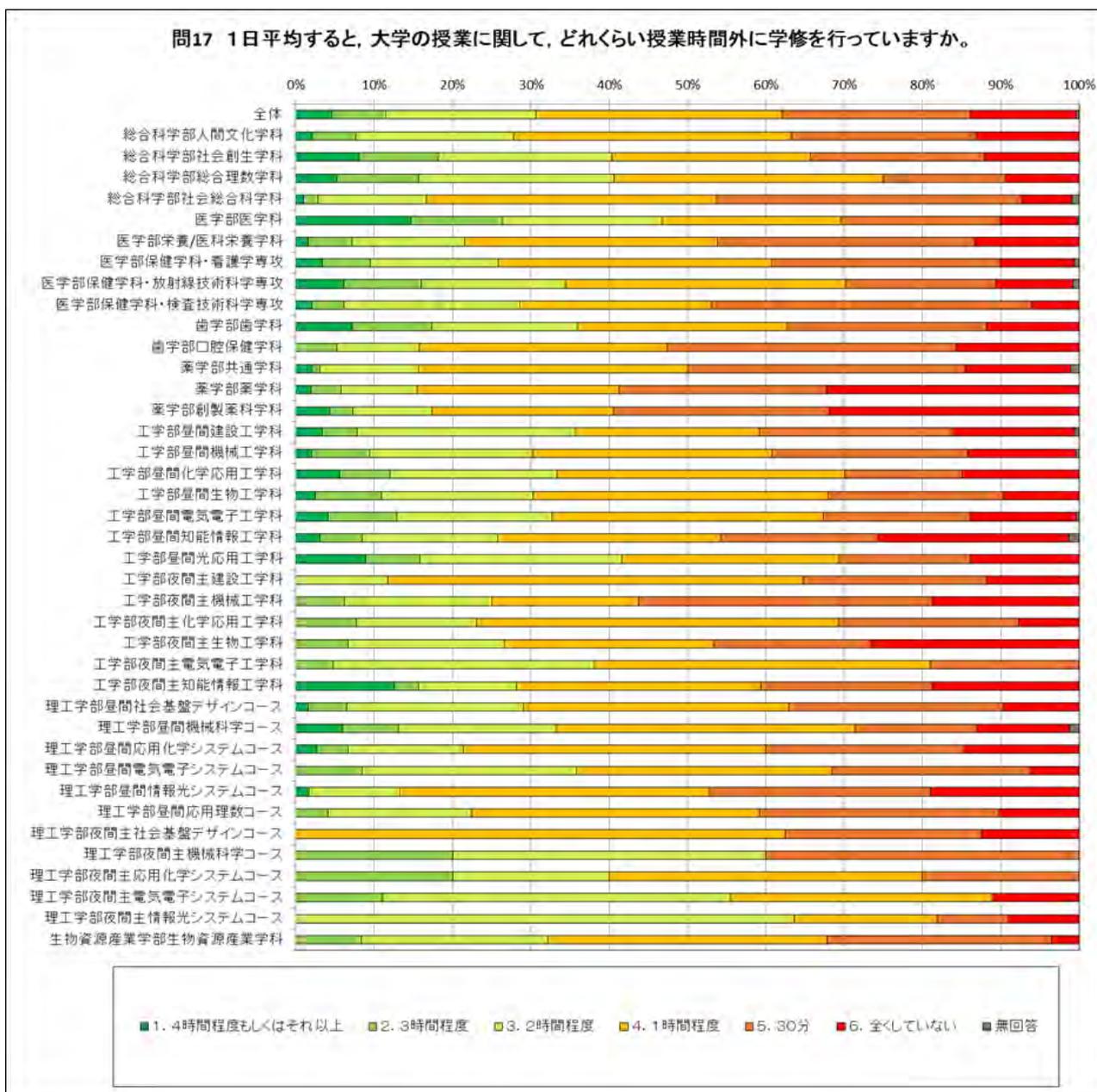
3-7 予習・復習の実施状況

選択肢のうち、学生自らが主体的に学習を行っていると考えられる「1.必ず全科目予習あるいは復習を行っている」、「2.興味のある科目や分からない科目は自主的に予習あるいは復習を行っている」と回答した学生の割合は30%~40%程度である。このうち、夜間主を除いて医学部医学科、保健学科検査技術科学専攻、理工学部機械科学コース、電気電子システムコースについて、比較的点が高いことがわかる。



3-8 予習・復習の時間

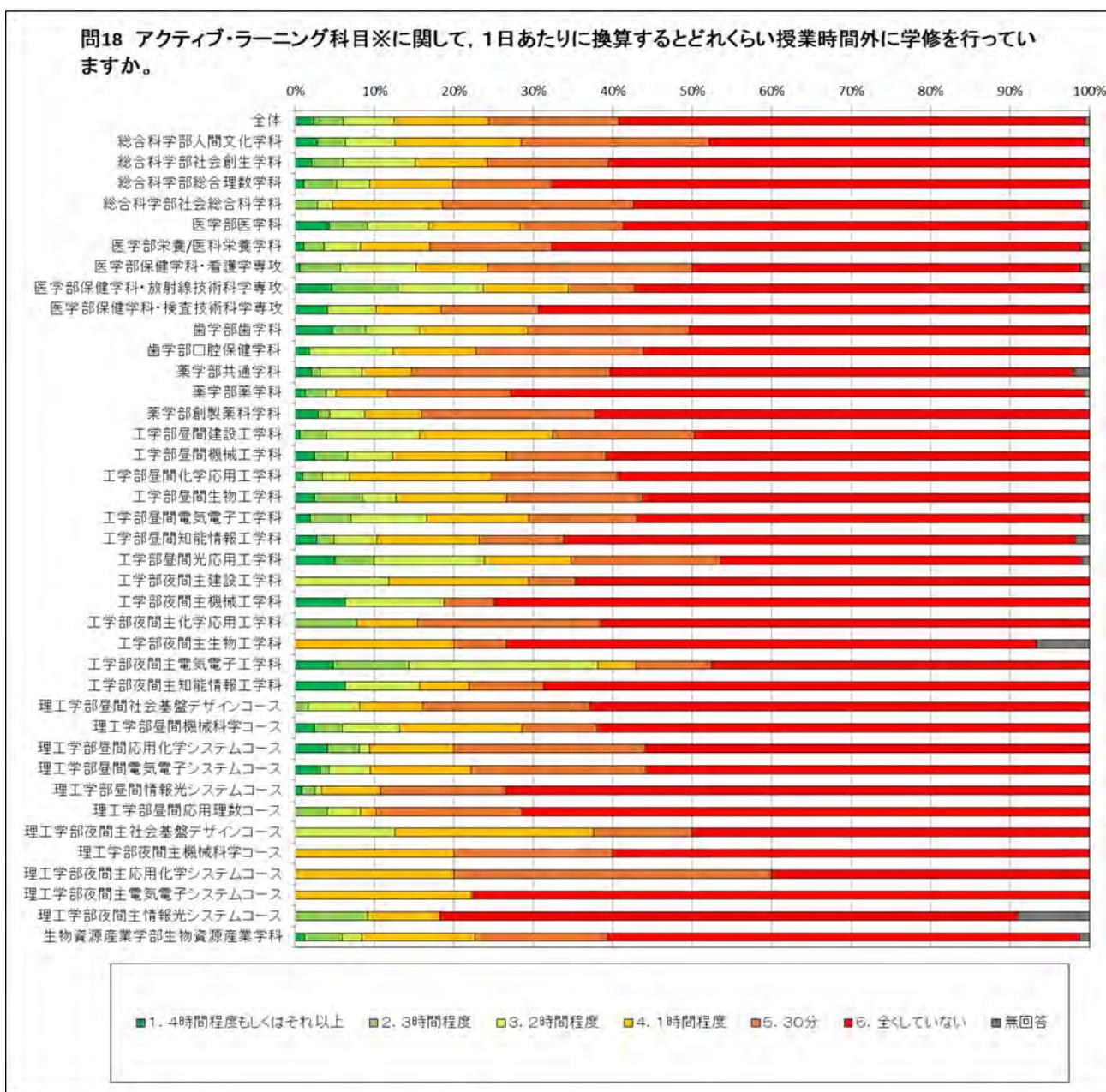
全体的に、1日の授業外学修時間が1時間程度より短いと回答している学生の割合が約70%であることが分かる。また、薬学部においては、学科が決定した3年次以降で薬学科、創製薬学科ともに「6.全くしていない」と回答した学生の割合が約2倍なっていることから、学科配属以降にも学修を継続させることが課題である。



3-9 授業時間外のアクティブ・ラーニングの実施状況

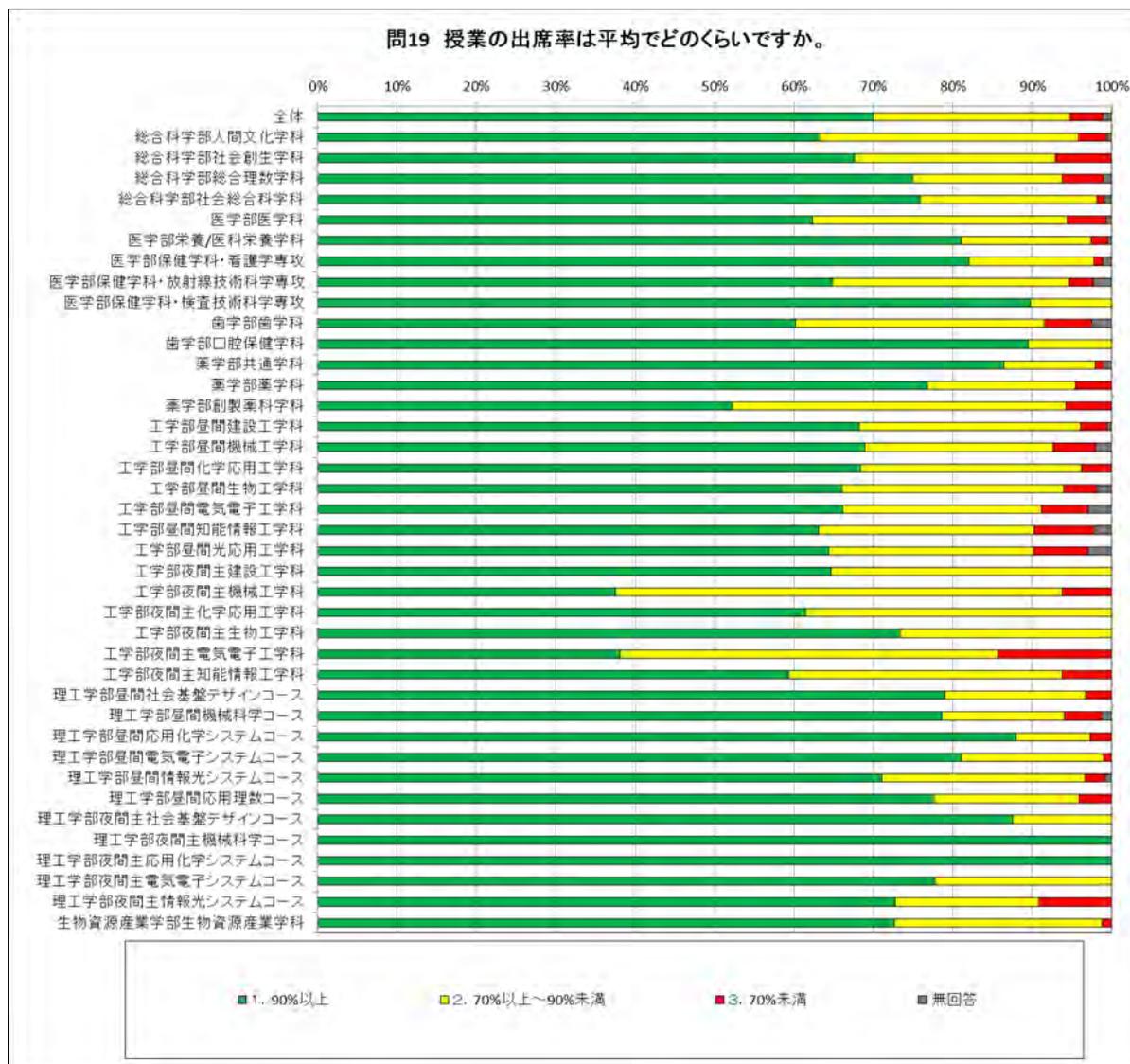
ほとんどの学部・学科において、「6.全くしていない」と回答した学生の割合が50%を超えていることから、授業時間以外の学修が必要でないアクティブ・ラーニング科目がある程度存在している可能性がある。しかし、回答者である学生がアクティブ・ラーニングを理解できているのかどうかについて留意する必要がある。

※アクティブ・ラーニング科目とは、教員による一方的な知識伝達とは異なり、課題演習、質疑応答、振り返り、グループワーク、ディスカッション、プレゼンテーション等を取り入れた、教員と学生との双方向のやり取りを含む授業が実施されている科目のこと。



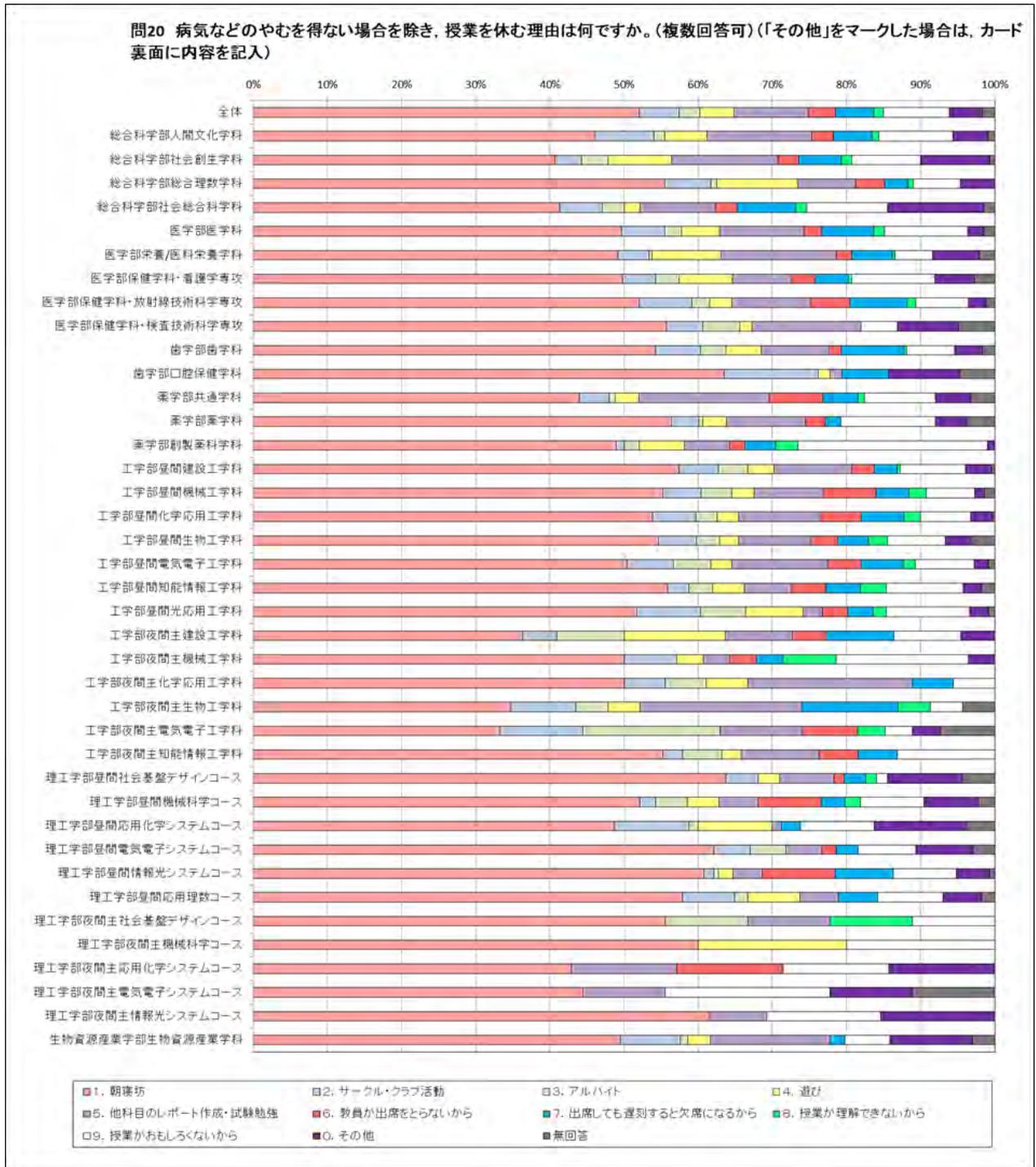
3-10 授業の出席率

ほとんどの学部・学科において、授業の出席率が70%以上と回答した学生の割合が90%以上である。



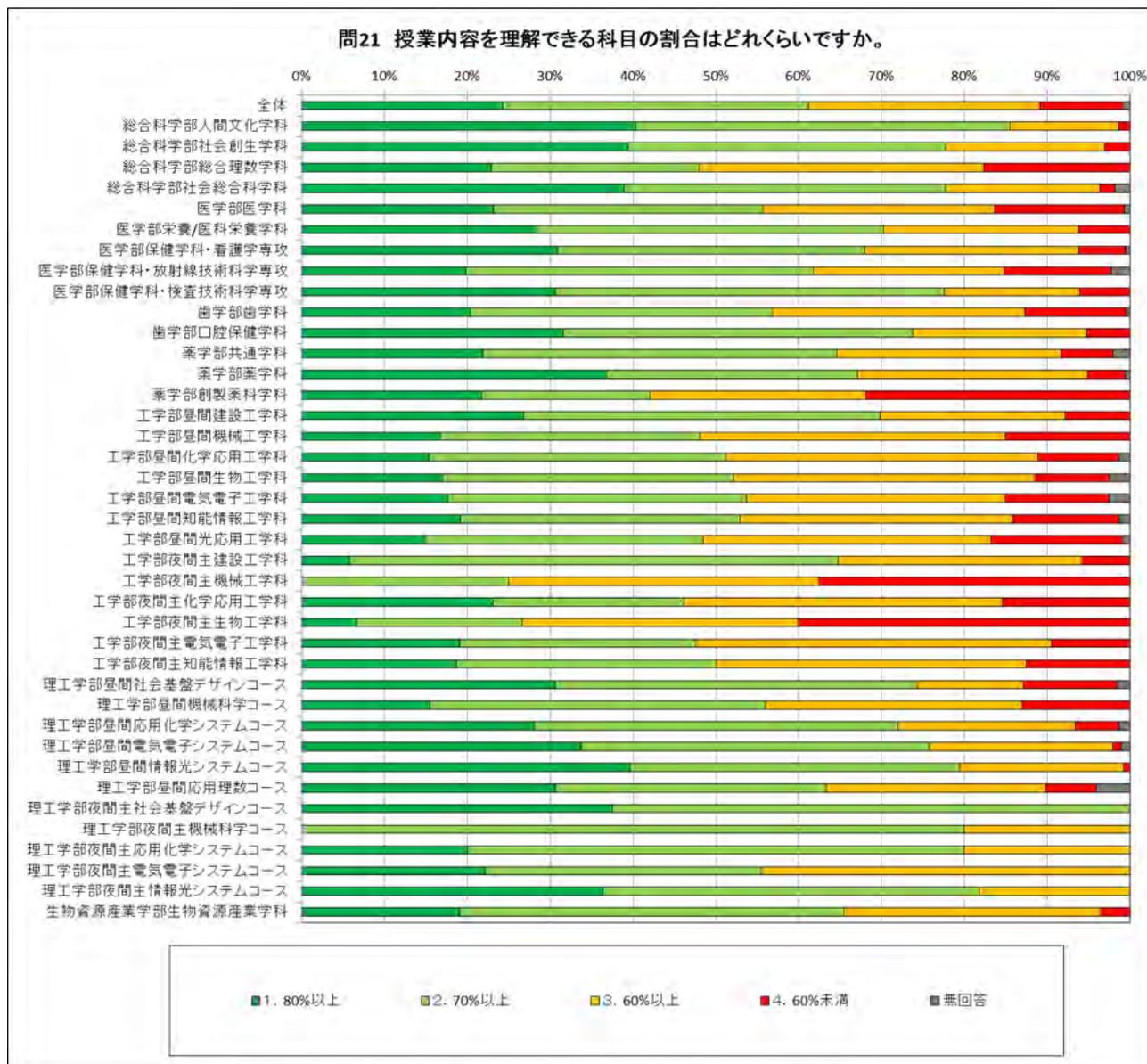
3-11 授業を休む場合の理由

複数選択可能の設問であるため、数値をそのまま比較することができない点に注意する必要があるが、授業を休む理由が「1.朝寝坊」と回答した学生が最も多いことが分かる。このことから、自身の学生生活において、自己管理ができていない学生が多いように感じる。続いて、「9.授業がおもしろくない」と回答した学生が多くなっていることが分かる。この点においては、教員が学習に対する動機づけを行うなど、授業を工夫する必要があることが伺える。



3-12 授業内容を理解できる授業科目の割合

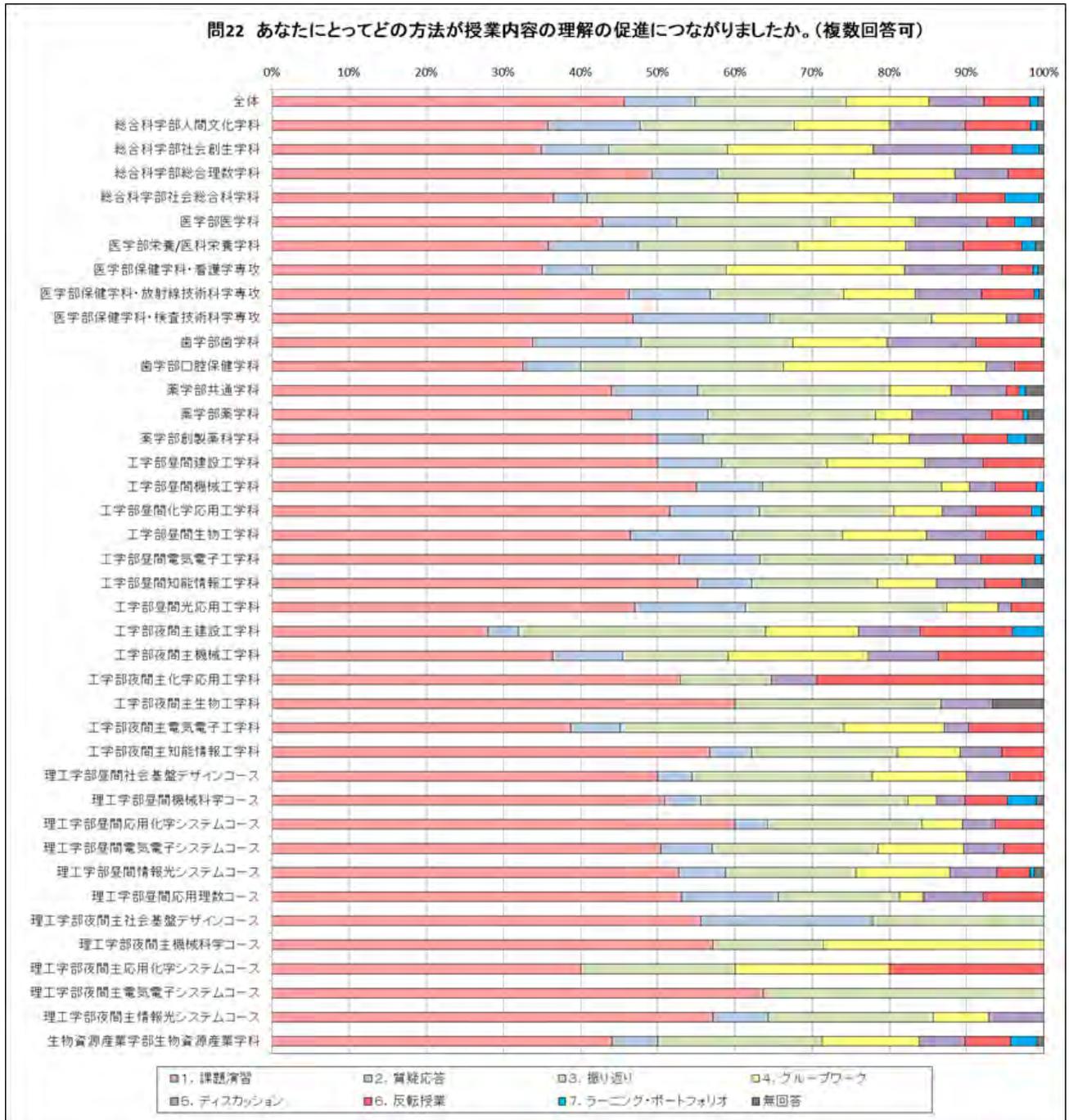
全体的に、70%以上の授業内容が理解できていると回答した学生の割合が60%程度であることが分かる。このうち、夜間主を除いて薬学部創製薬学科、総合科学部総合理数学科、建設工学部を除く工学部では、比較的ポイントが低いようにも感じる。薬学部においては、学科が決定した3年次以降において、薬学科の方が創製薬学科に比べて、授業内容の理解についてポイントが高いことが分かる。



3-13 授業内容の理解の促進方法

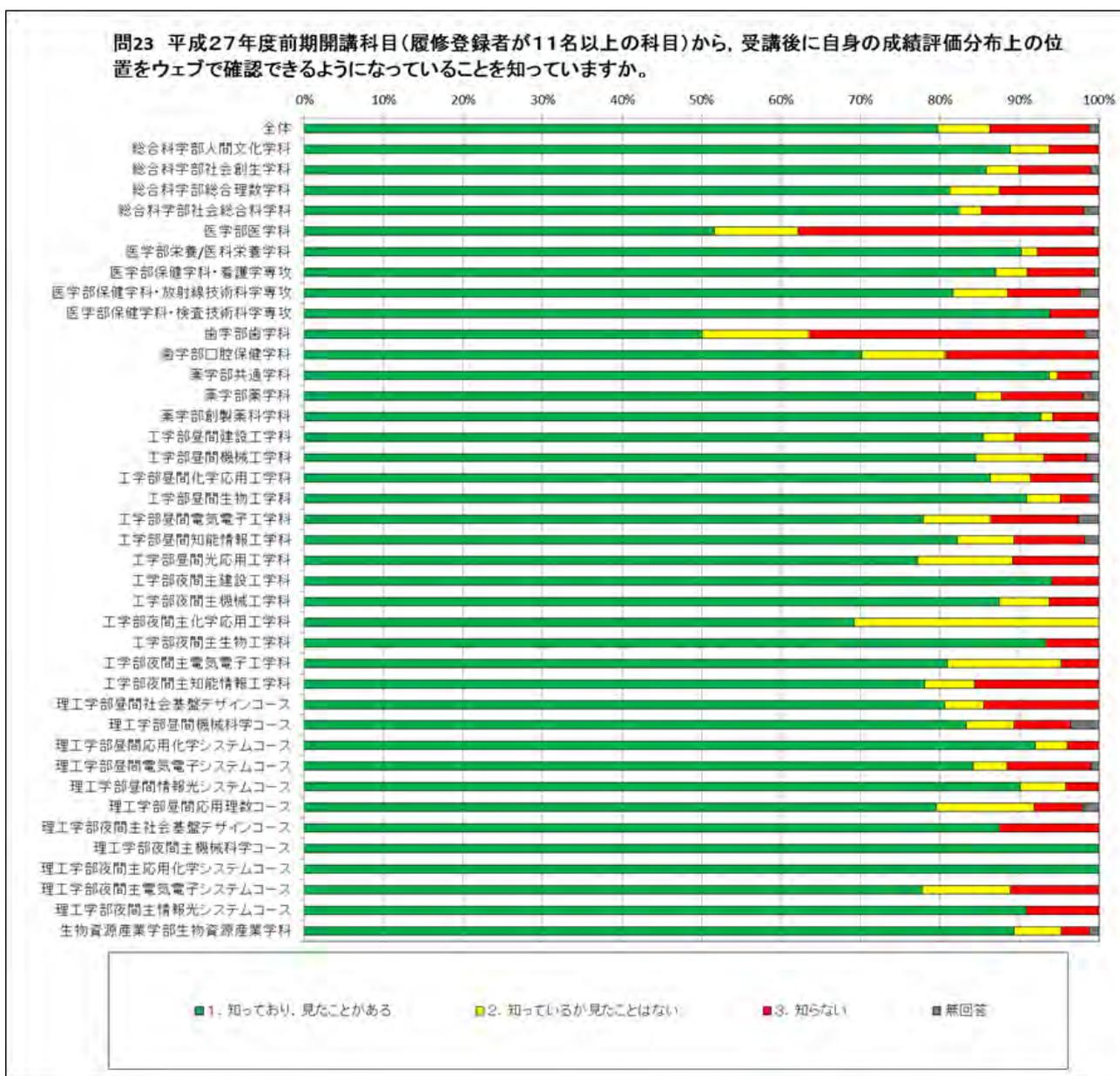
複数選択可能の設定であるため、数値をそのまま比較することができない点に注意する必要があるが、全体的に「1.課題演習」が授業内容の理解促進につながると回答した学生が多いたることが分かる。総合科学部、医学部、歯学部においては、「4.グループワーク」や「5.ディスカッション」を選択している学生も多いことが分かる。

- ※3. 振り返り：学んだことについてまとめ、その内容を学生同士あるいは教員が確認しフィードバックを行う方法
- ※6. 反転授業：授業を受講する前に講義や説明の部分を事前に配付資料や動画で学修し、その内容に関する確認課題（簡単な復習テスト等）を行い、対面の授業時間内では講義以外の授業方法を取り入れて、学生の能動的な学修を促進する方法
- ※7. ラーニング・ポートフォリオ：授業のある単元が終了した後で、学生が学修（実験、実習、演習等）に関する振り返りを行い、その内容を記述し、他者と共有できる形で蓄積し、フィードバックを受けることができるシステムまたは教材等を取り入れた方法



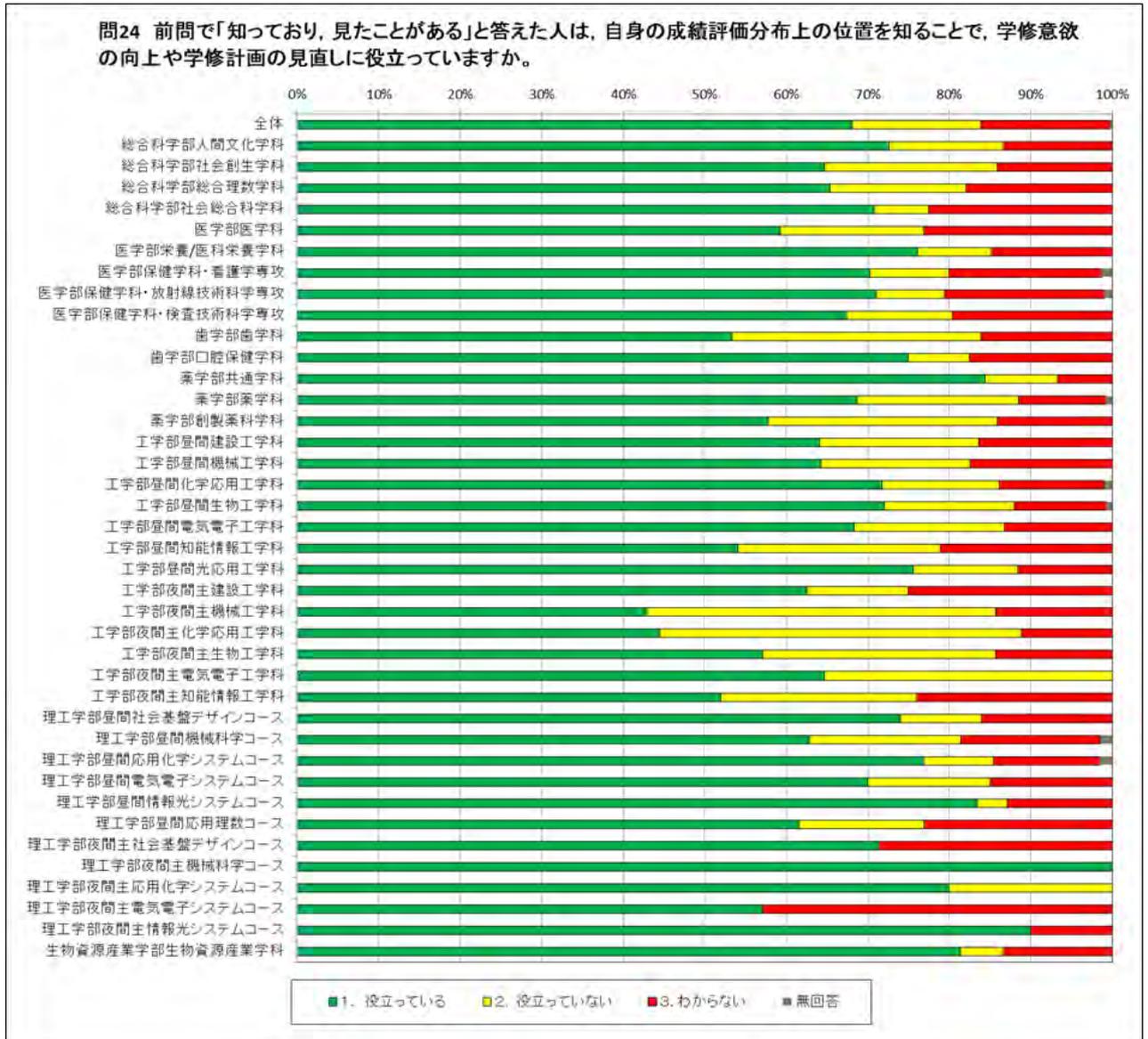
3-14 成績評価分布の公開

全体的に「1.知っており、見たことがある」と回答した学生の割合が高いことが分かる。しかし、医学部医学科、歯学部歯学科においては、約40%の学生が「3.知らない」と回答していることから、学科内において学生に周知する対応も必要になると考えられる。また、「2.知っているが見たことはない」と回答した学生の割合が高い学科等においては、活用方法やその意義についても周知する機会を持つことが必要であると考えられる。



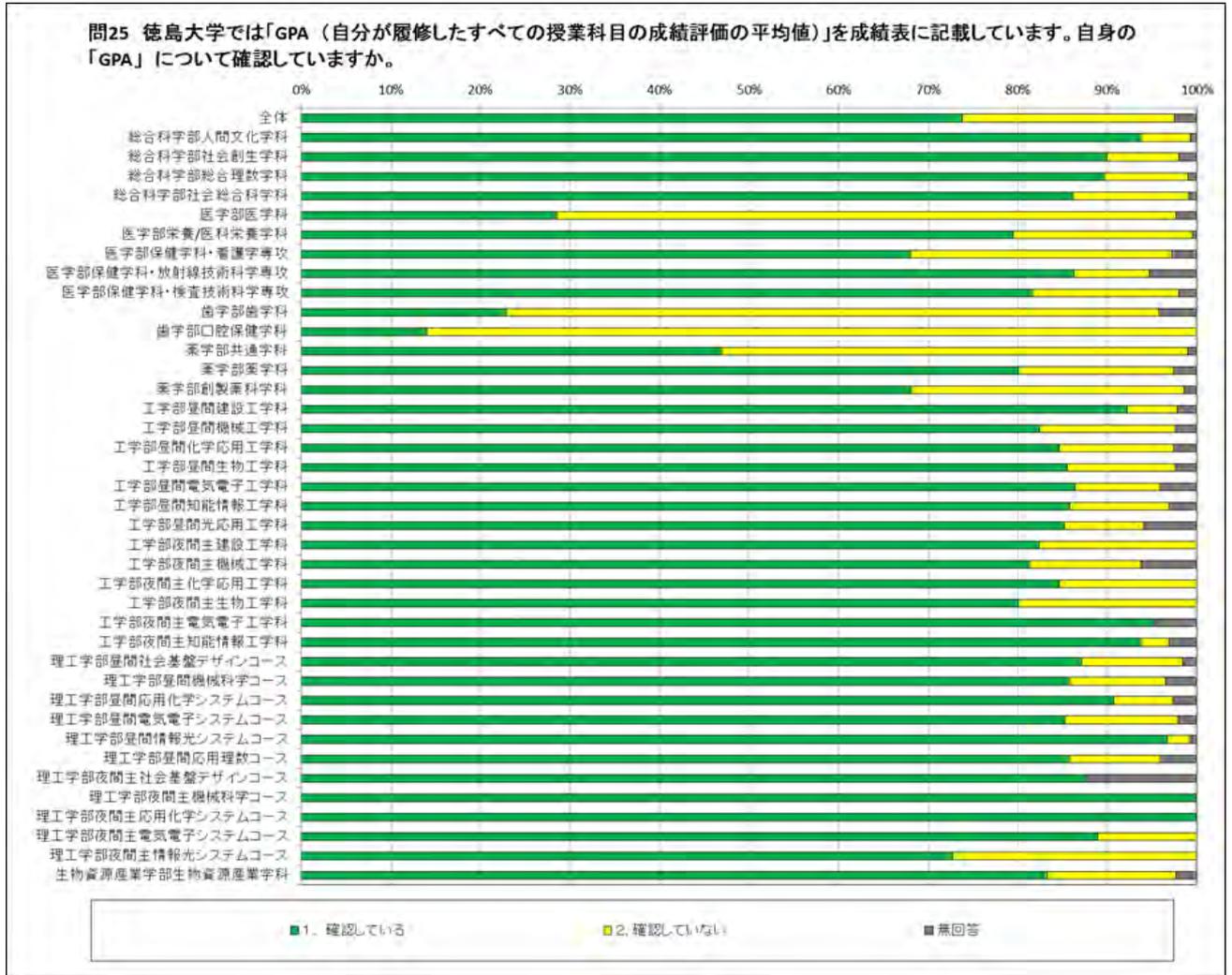
3-15 成績評価分布の利用

学科による差があるものの、おおよそ 50%~70%の学生が「1.役立っている」と回答している。また、「2.役立っていない」と回答した学生の割合が 20%以上の学科は、夜間主を除いて総合科学部社会創生学科、歯学部歯学科、薬学部創製薬学科、工学部知能情報工学科であり、前問と同様に、活用方法や意義を周知する機会を持つことが必要であると考える。



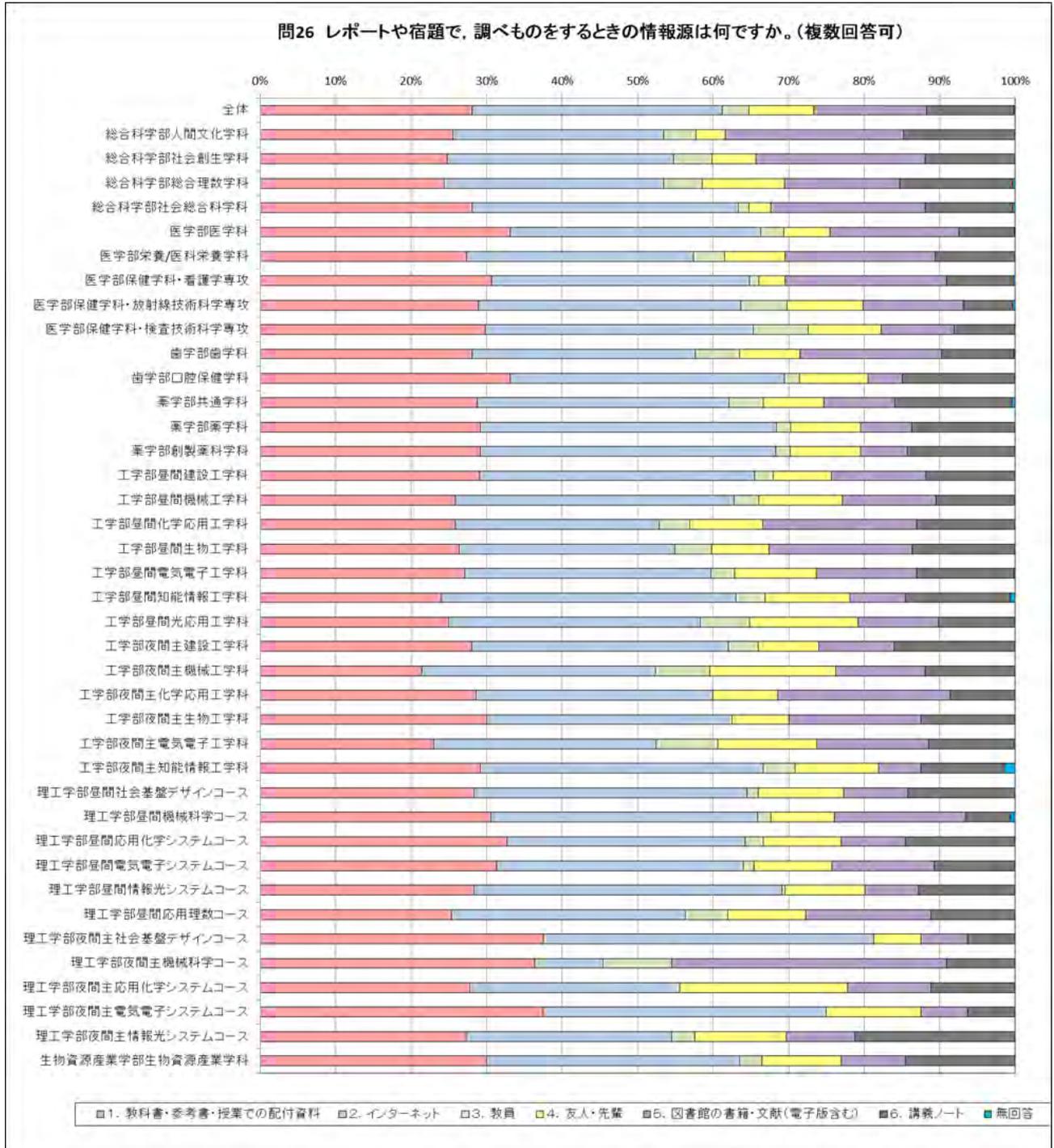
3-16 GPAの確認

全体的に、70%以上の学生が「1.確認している」と回答しているが、医学部医学科、歯学部、薬学部共通学科においては、その割合が比較的低いことが分かる。学部によるカリキュラムの特性から、特に「GPA」を意識する必要がないと考えることもできるが、学生の学修を促進させるために活用することもできると考える。



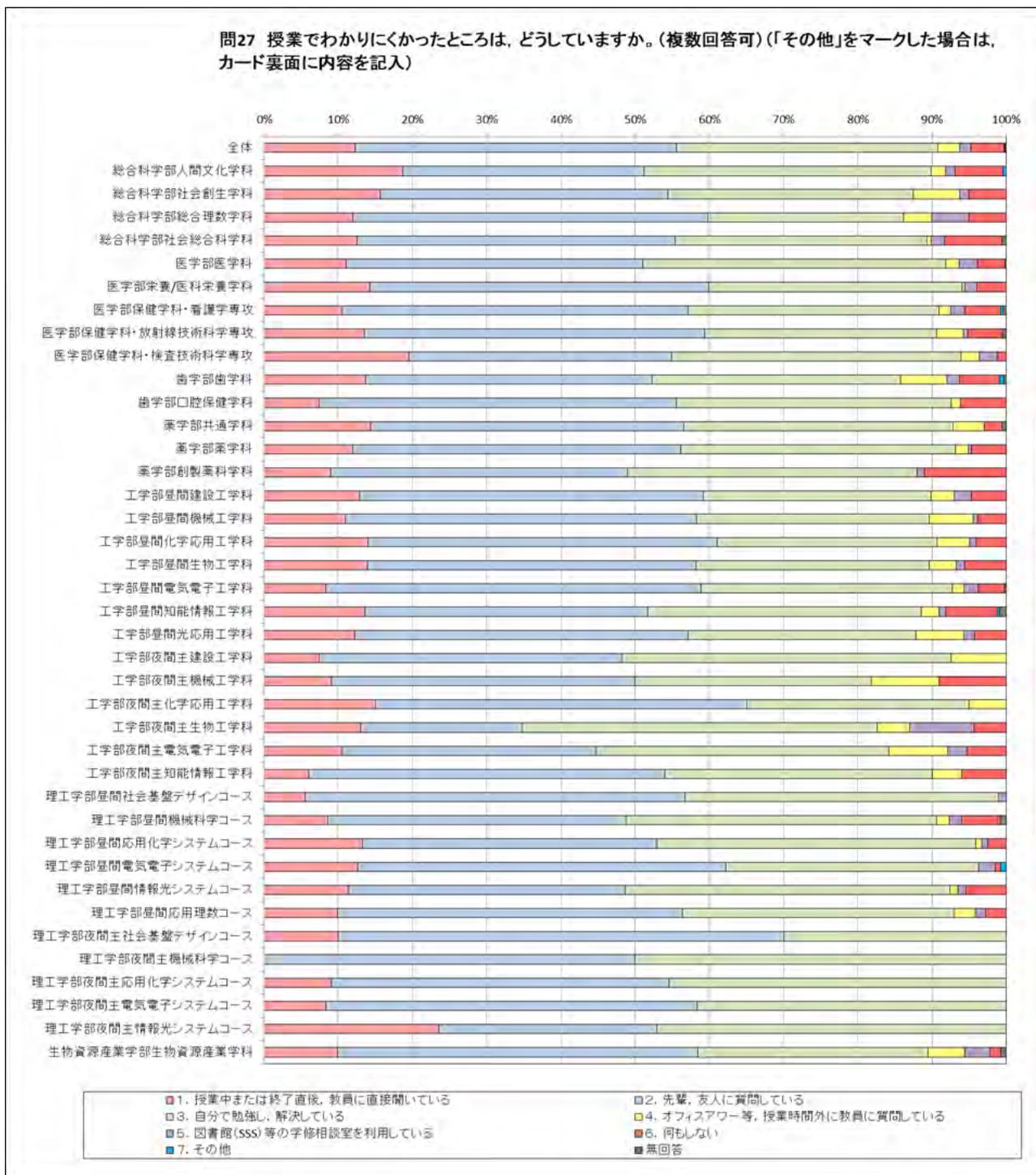
3-17 レポートや宿題をする際の情報源

全ての学部学科において、調べものをする時、インターネットと回答した学生が多く、次に、教科書・参考書・授業での配布資料となっている。インターネットの普及などにより、自分の知りたい情報をいち早く確認できるようになったが、インターネットの情報は正確性に欠ける部分があることを学生に伝え、情報リテラシー能力を身につけさせることが重要である。



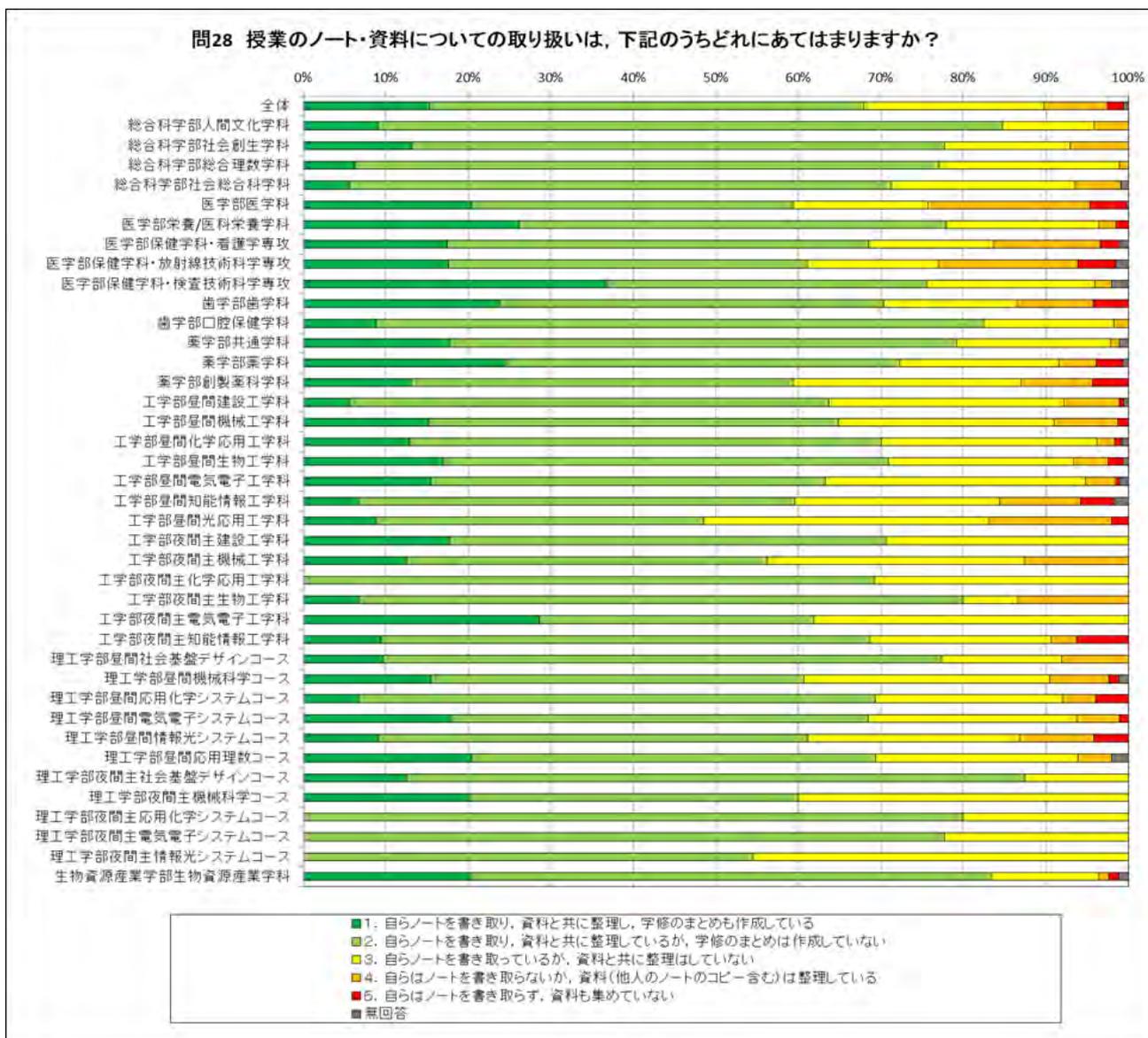
3-18 授業でわからないところの対処方法

授業での疑問点は、先輩・友人に質問することで解決していると回答した学生が全体として多く、次に、自分で勉強し解決しているになっている。一方、授業での疑問点に対して、何もしないと回答した学生も目立つことから、学修のつまづきや疑問点など気軽に相談できる場所を設けることやオフィスアワーの利用を促すなど必要である。



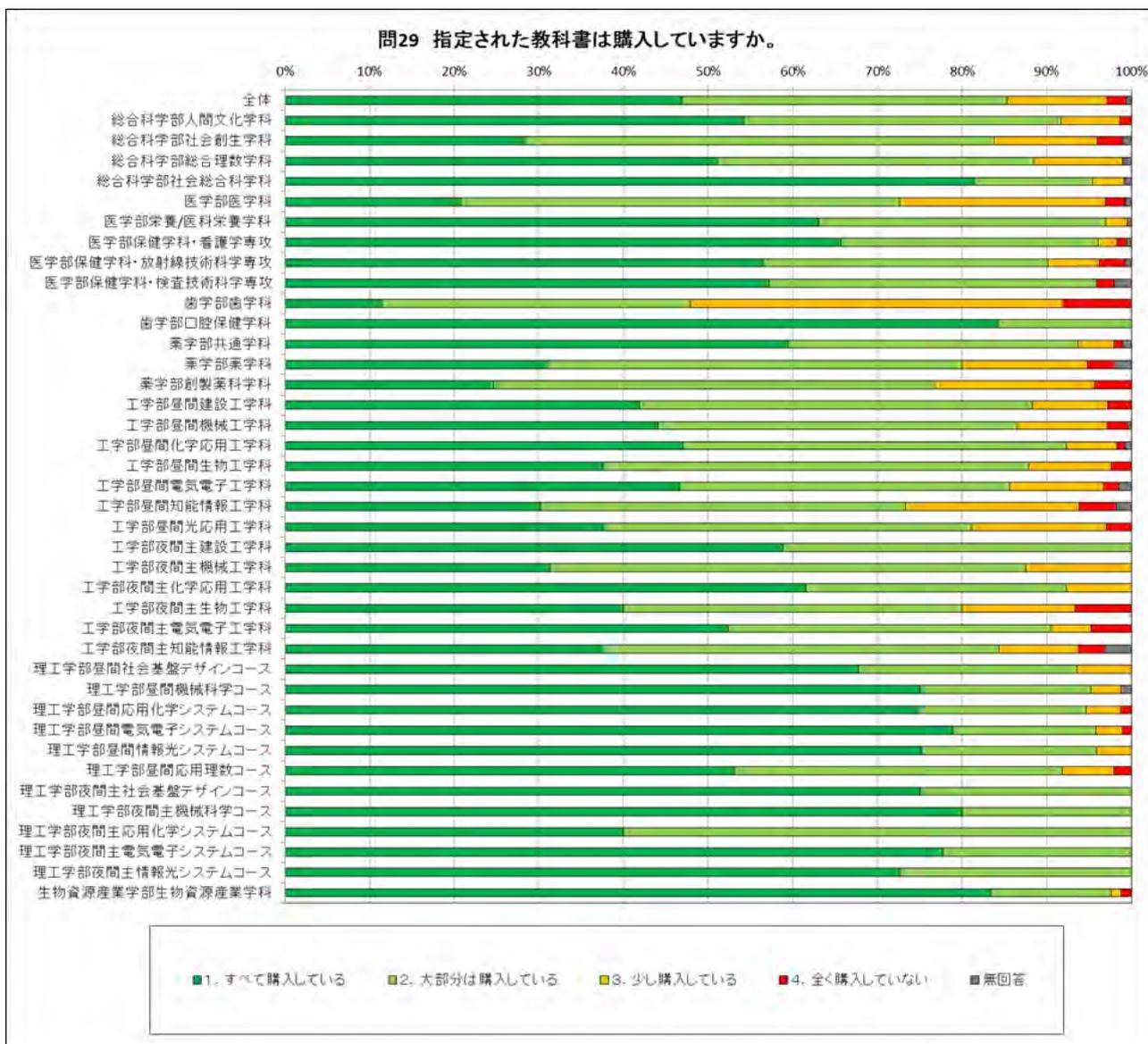
3-19 授業のノート・資料の取扱い

授業のノート・資料については、自らノートを書き取り、資料と共に整理しているが、学修のまとめは作成していないと回答した学生が全体として多くなっている。医学部保健学科検査技術科学専攻の学生は、自らノートを書き取り、資料と共に整理し、学修のまとめも作成している学生の割合が他学科に比べ高くなっている。



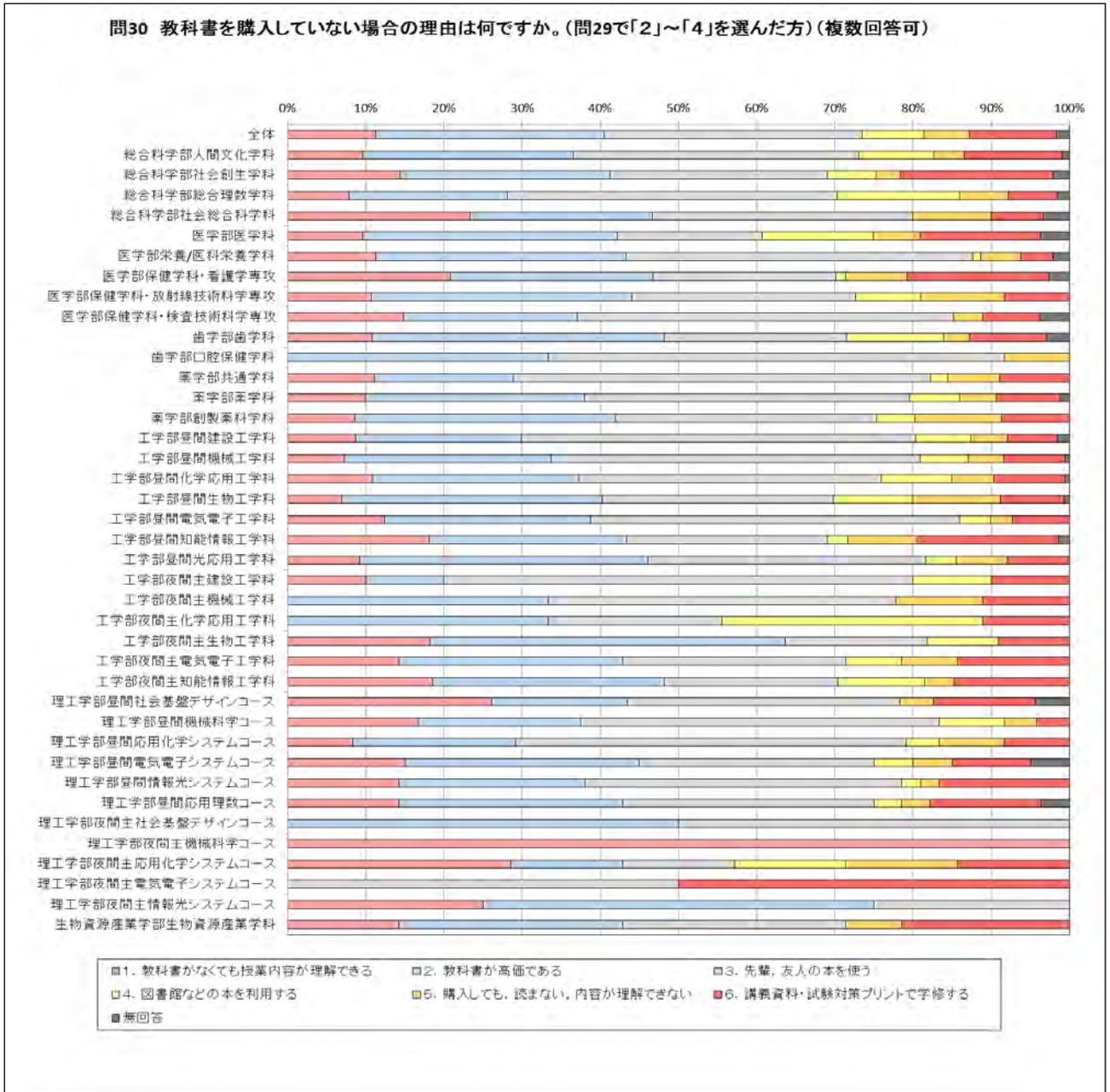
3-20 教科書の購入状況

指定された教科書を、すべてまたは、大部分購入すると回答した学生が大部分であるが、歯学部歯学科では、少しまたは、購入しないと回答した学生が50%以上を占めている。理工学部は他学部 비해、すべて購入している学生が多い傾向にある。



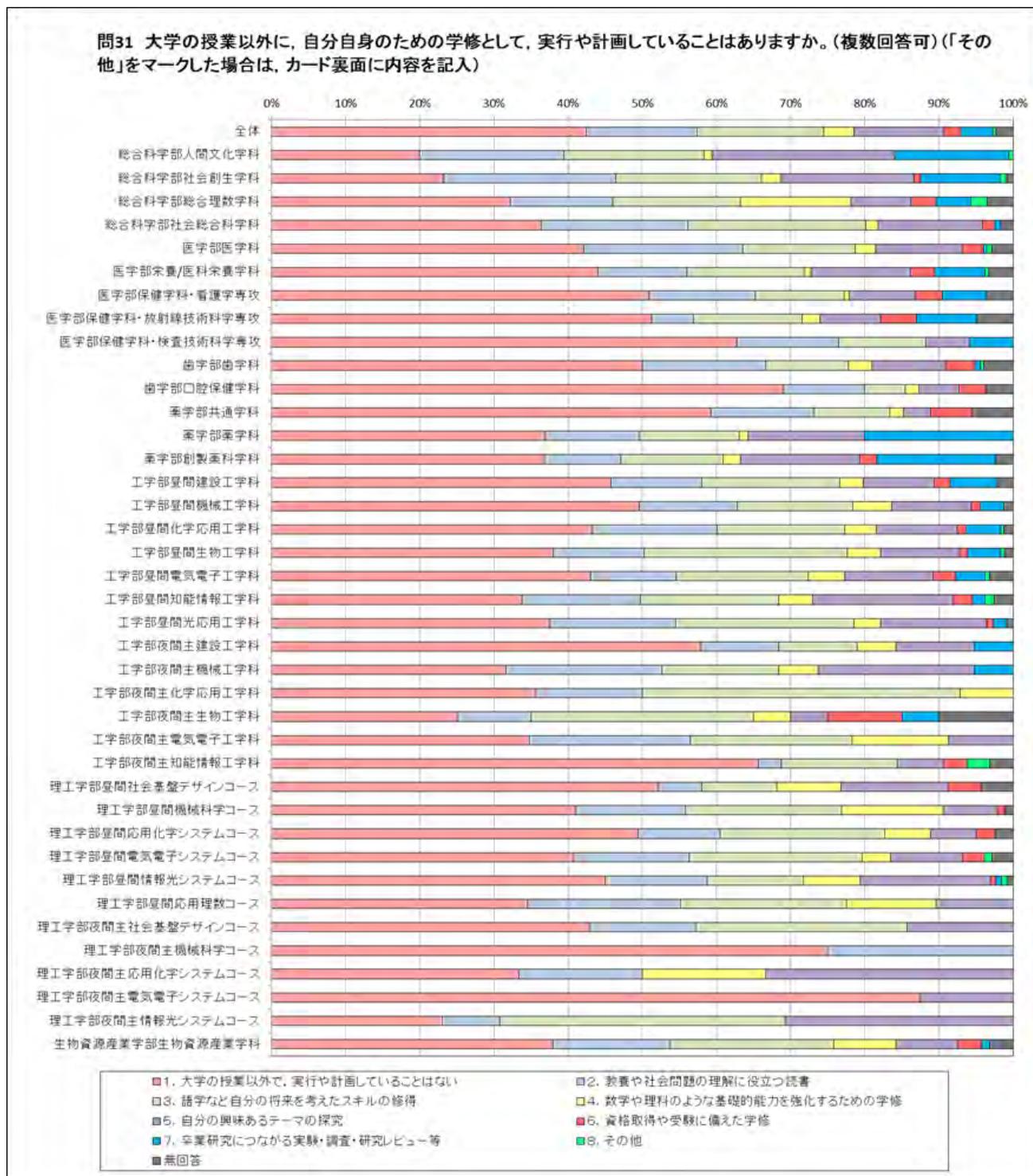
3-21 教科書を購入しない理由

教科書を購入しない理由として、高価であることと先輩・友人の本を使用していると回答した学生が全体として多くなっている。問29で、教科書をすべて購入していない傾向にあった医学科及び歯学科では、教科書が高価だと思っている学生の割合が高いことが窺える。



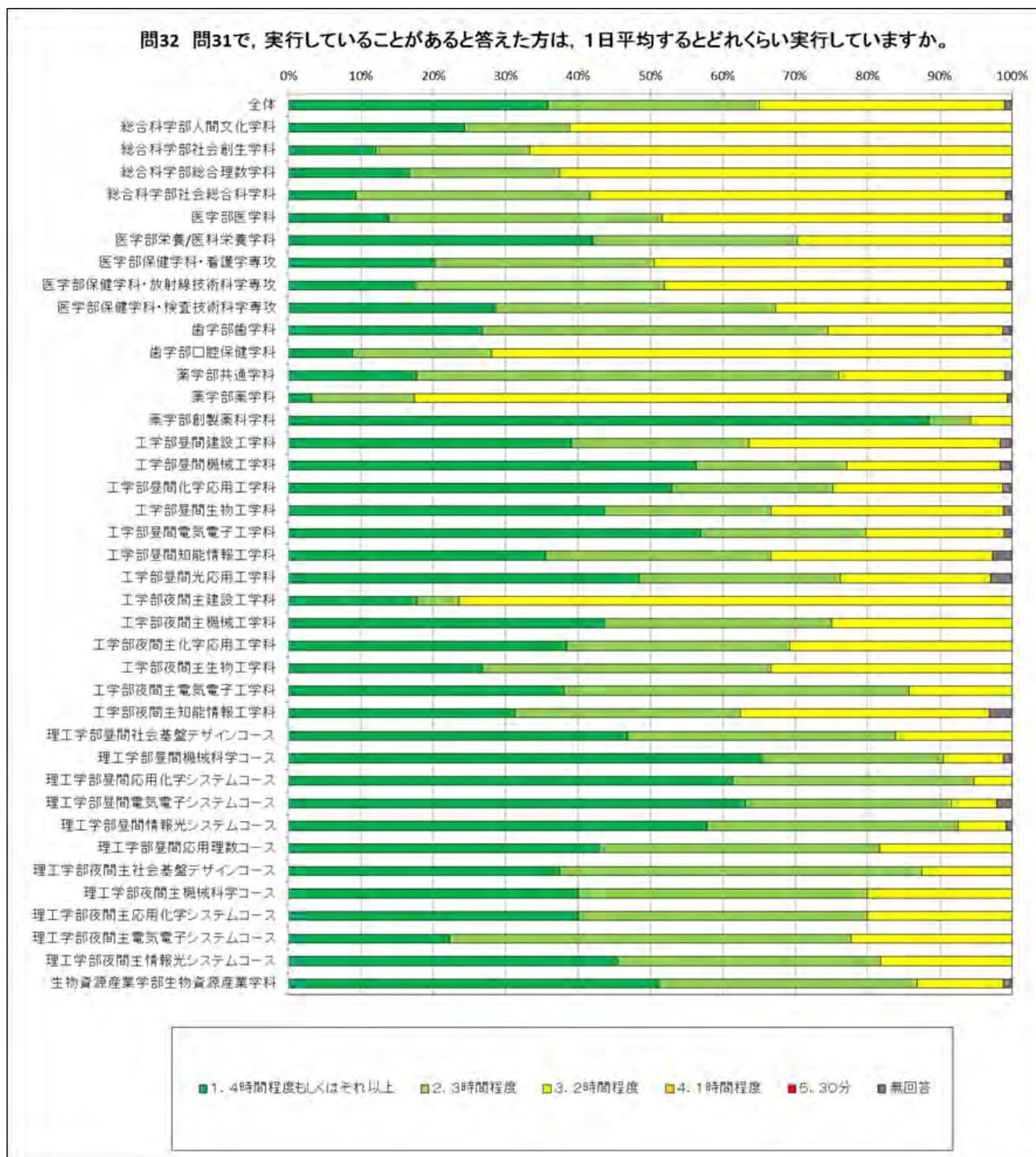
3-22 大学の授業以外の自分自身のための学修

総合科学部社会創生学科の学生は、大学の授業だけでなく、自分自身のための学修をしている割合が高いことが窺える。一方、歯学部口腔保健学科の学生は、大学の授業以外に自分自身のための学修をしている割合が少ない傾向にある。



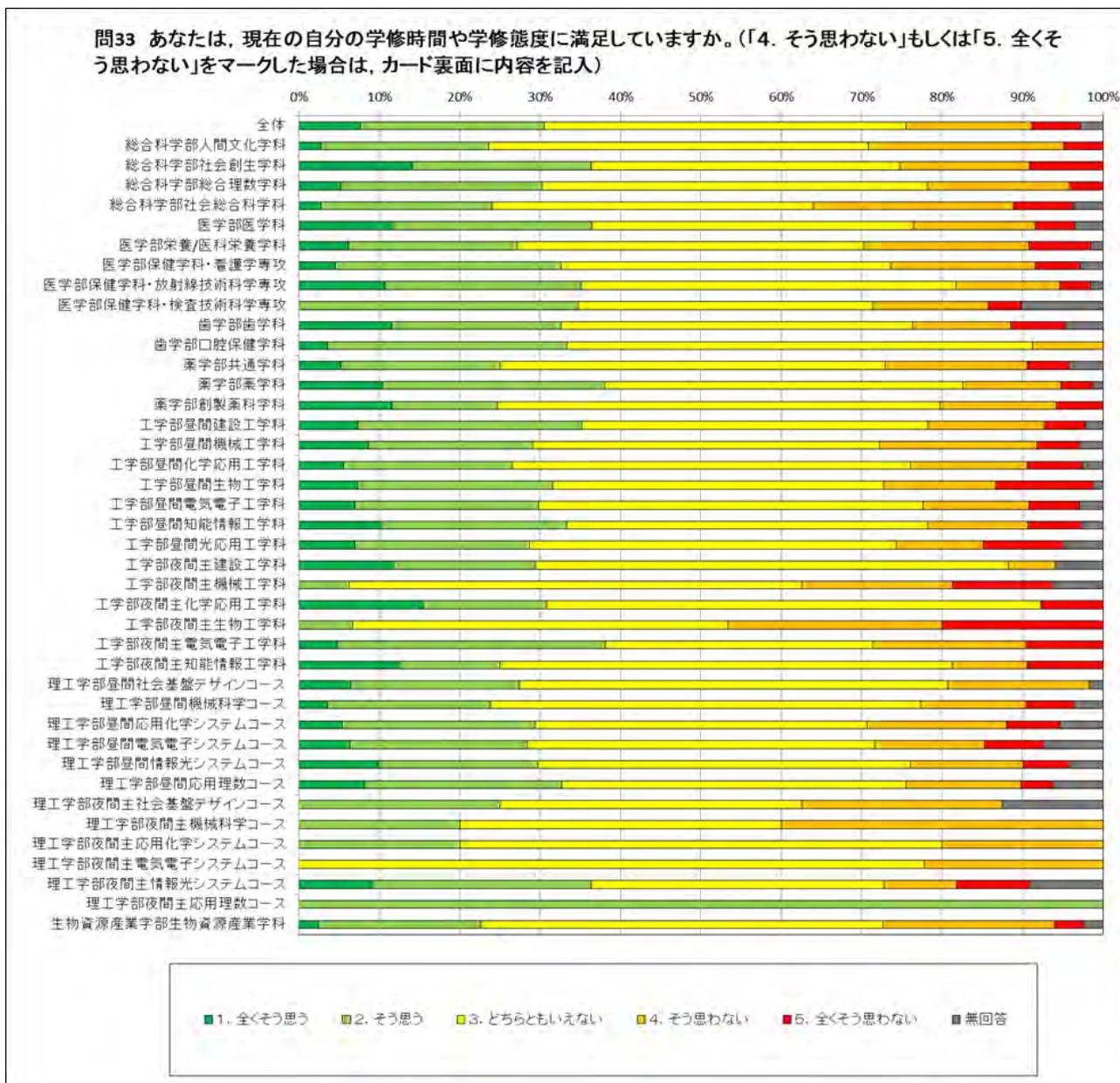
3-23 大学の授業以外の自分自身のための学修時間

自分自身のための学修を1日平均2時間程度実行していると回答した学生が全体として多くなっている。薬学部創製薬科学科は、4時間程度もしくはそれ以上実行していると回答した学生の割合が高いことが窺える。



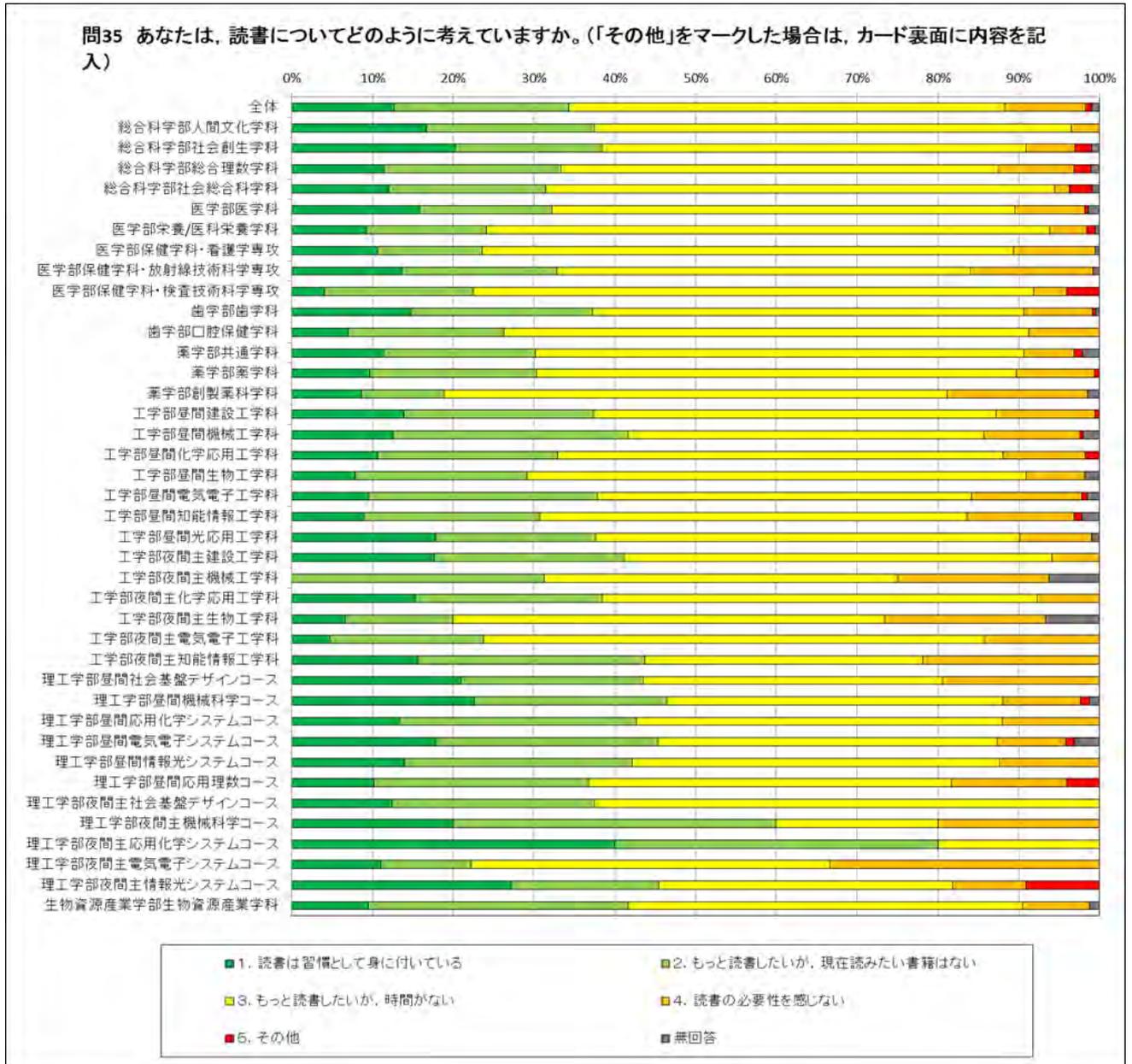
3-24 学修時間・態度への満足度

学修時間や学習態度に満足していると回答した学生が3割程度を占めている。一方、どちらともいえないと回答した学生が全体的に多くなっている。



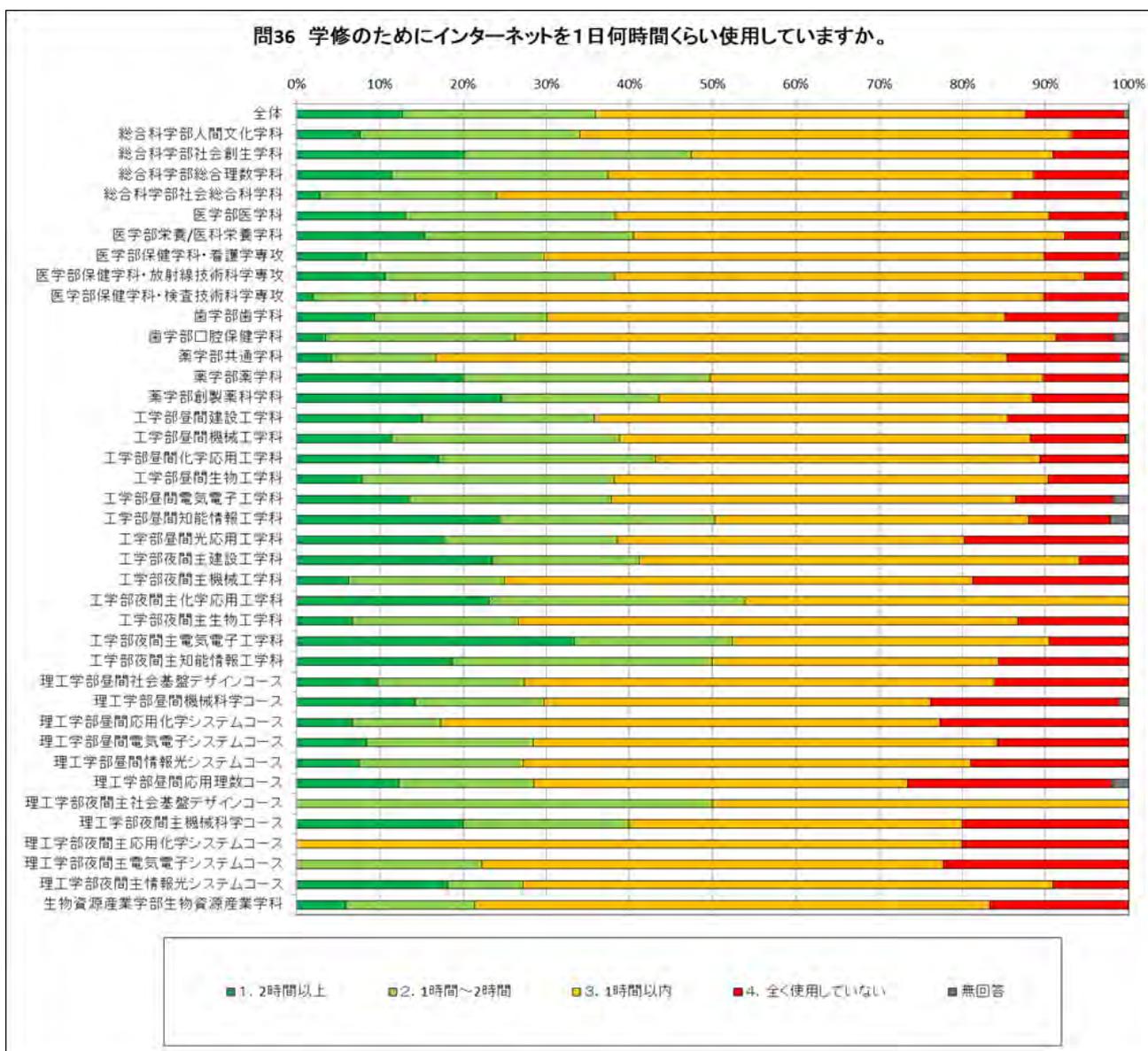
3-26 読書の習慣

読書については、全体的に「3. もっと読書したいが、時間がない」が多く、次に「2. もっと読書したいが、現在読みたい書籍はない」となっている。「4. 読書の必要性を感じない」は全体で10%程となり、必要性は感じているが、時間や読みたい書籍がないため「1. 読書は習慣として身につけている」は全体で13%程にとどまっている。



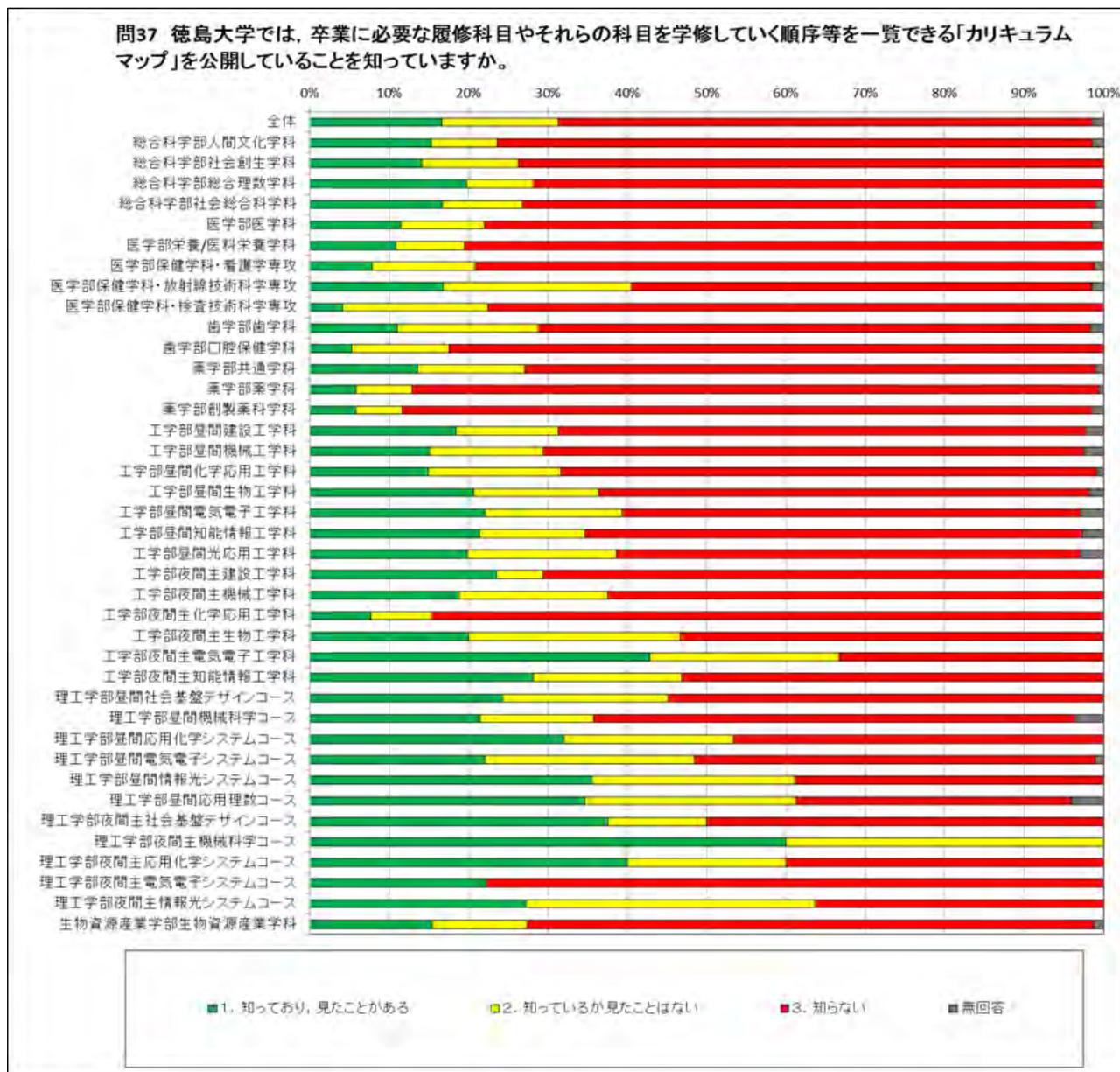
3-27 1日のインターネット利用時間

学修のためのインターネット使用時間は、1時間以内と回答した学生が最も多くなっている。



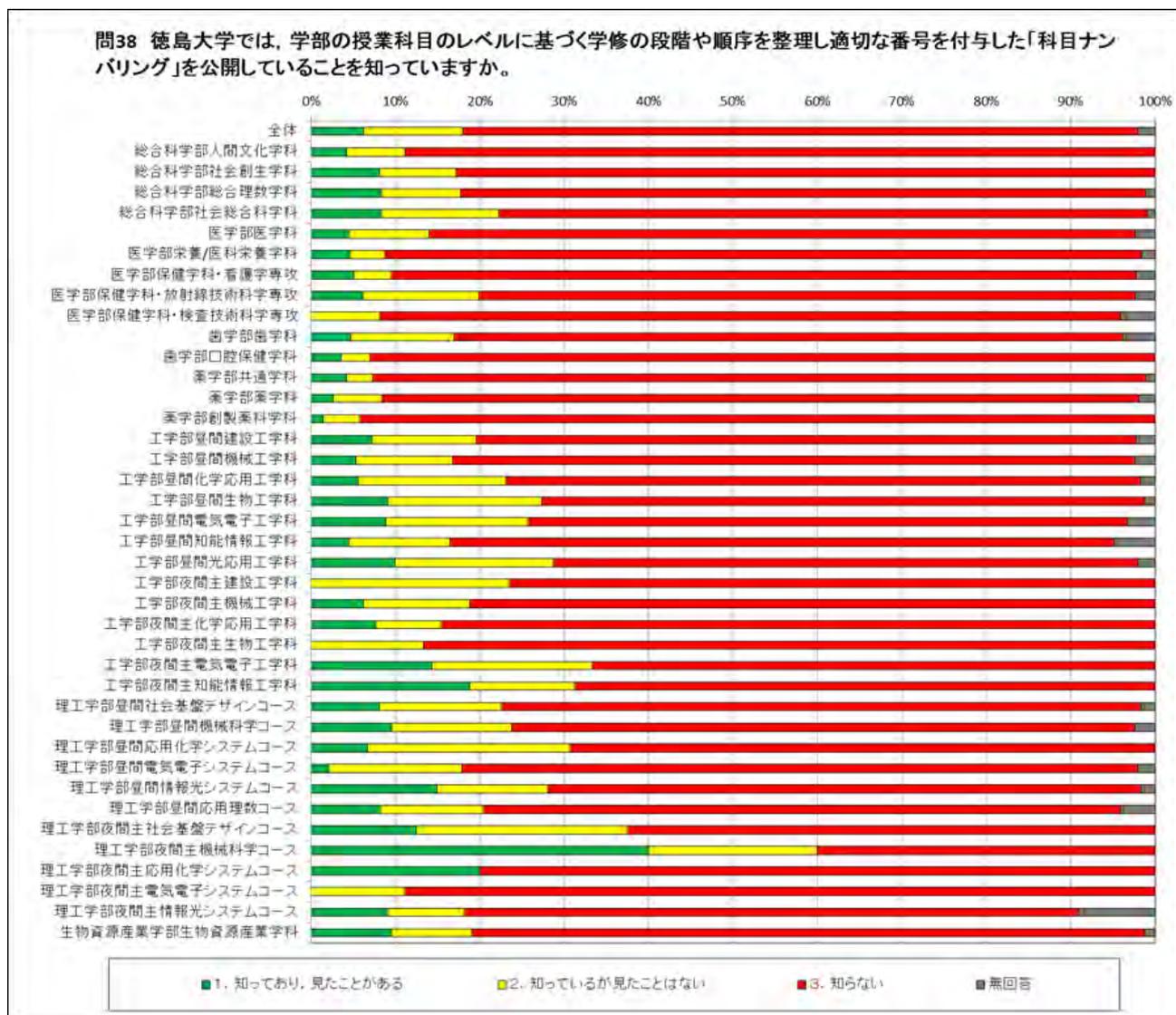
3-28 カリキュラムマップの公開

カリキュラムマップについては、全体として「知らない」を選択した学生が 67%であった。昼間の学科・コースで「知っており、見たことがある」「知っているが見たことはない」を合わせて 40%を超えたのは、「理工学部昼間機械科学コース」を除く理工学部昼間コースすべてと、「医学部保健学科・放射線技術科学専攻」においてであり、学科・コース間の偏りが見られた。



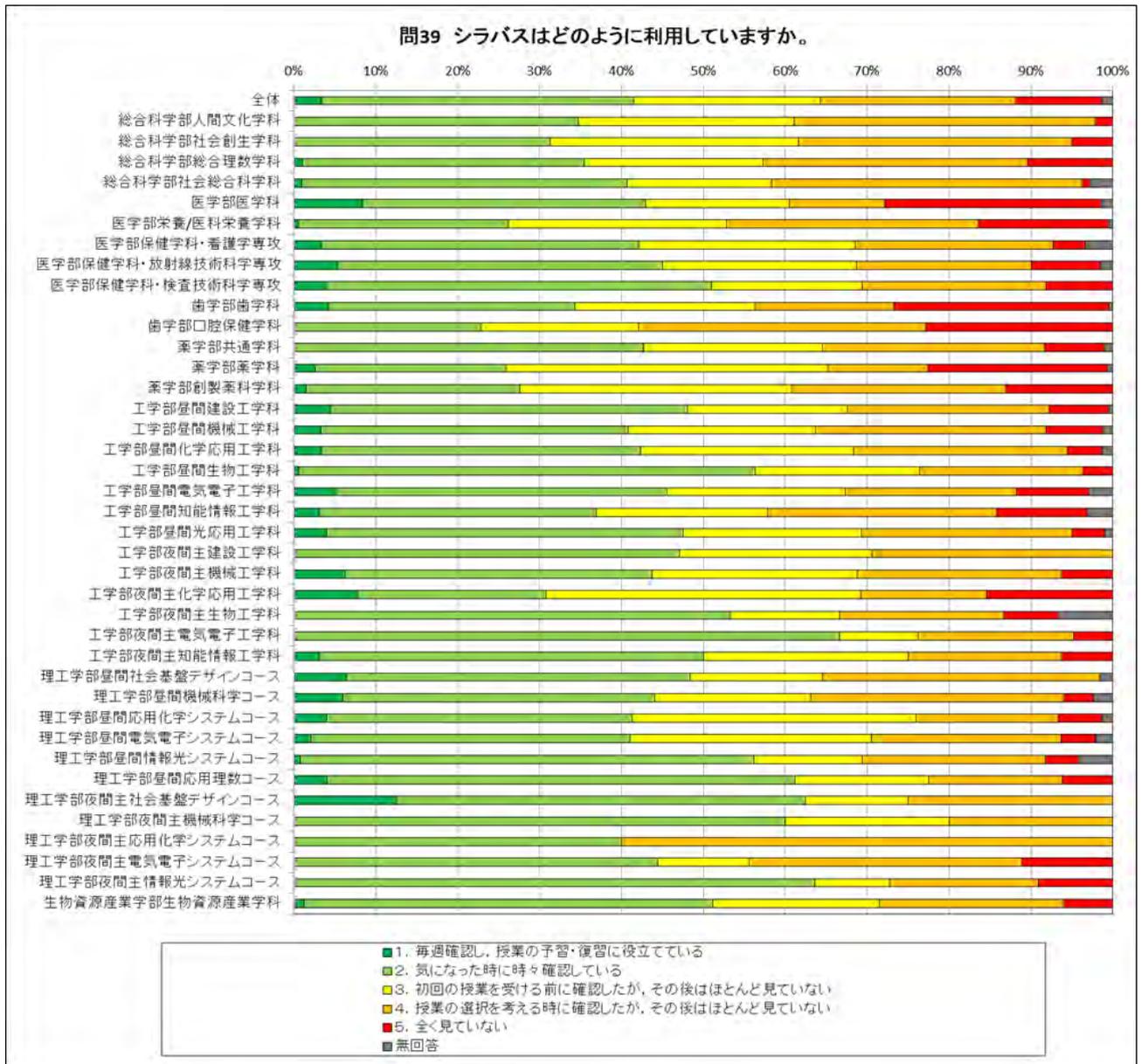
3-29 ナンバリングの公開

科目ナンバリングについては、全体として「知らない」を選択した学生が80%であった。特に、医歯薬系の学科で顕著に高かった。一方、昼間の学科・コースで「知っており、見たことがある」「知っているが見たことはない」を合わせて30%を超えたのは、「理工学部昼間応用化学システムコース」のみであった。



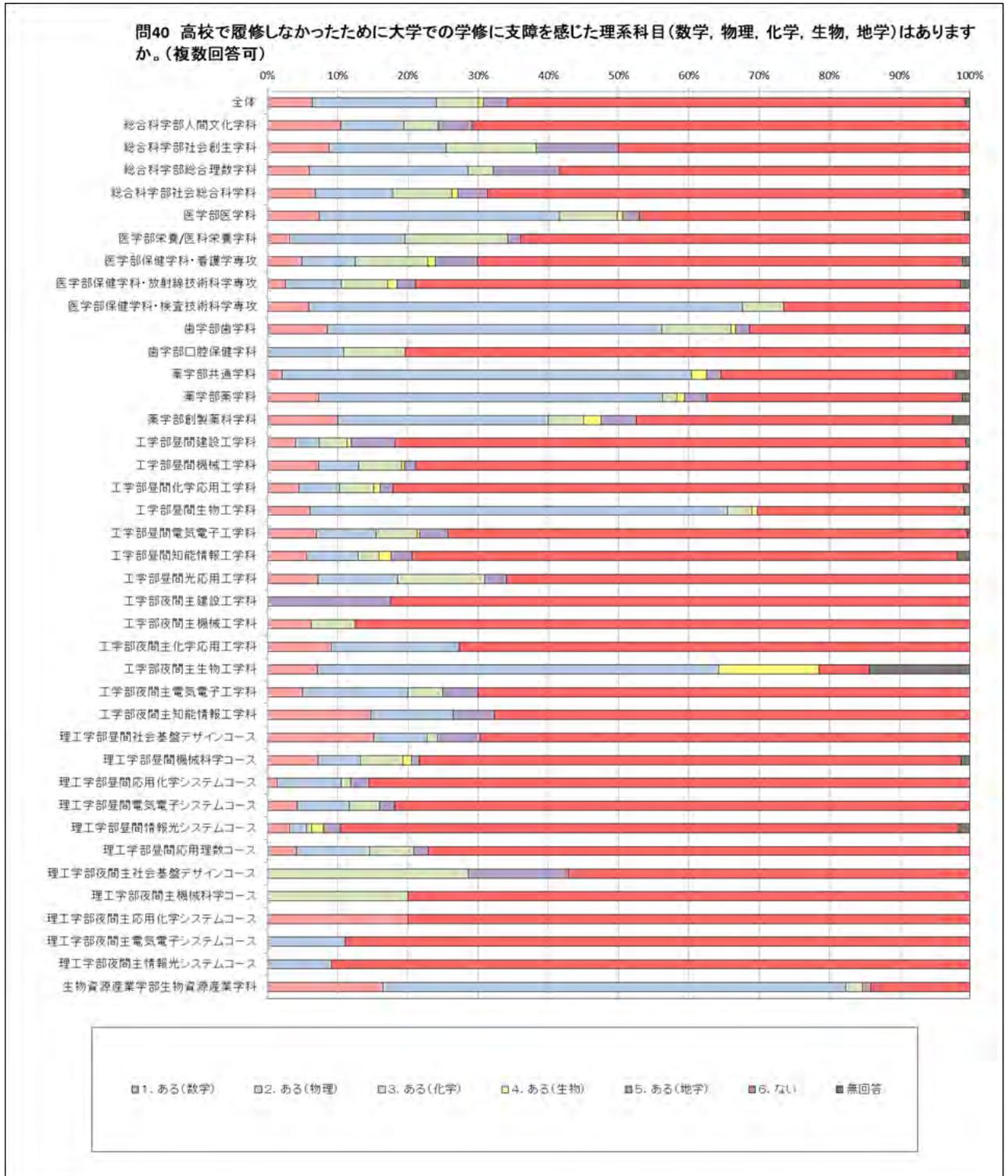
3-30 シラバスの利用状況

全体としては、「気になった時に時々確認している」が最も多く、38%であった。また、「初回の授業を受ける前に確認したが、その後はほとんど見ていない」「授業の選択を考える時に確認したが、その後はほとんど見ていない」がともに 23%と次に多かった。どの学科も同じような傾向がみられたが、医学部医学科、歯学部歯学科、同じく口腔保健学科、薬学部薬学科においては 20%以上の学生が「全く見ていない」を選択した。



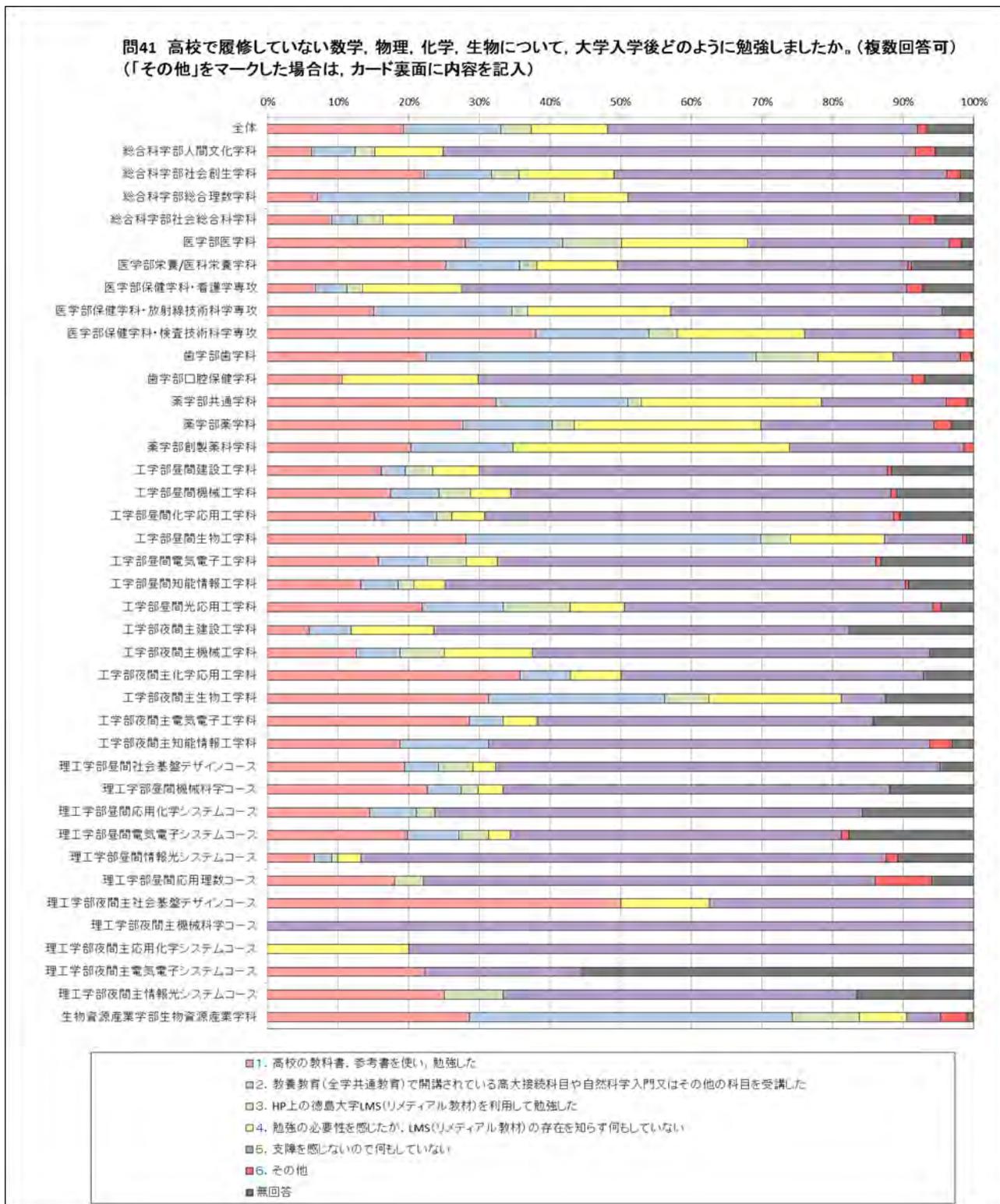
3-31 高校で未履修科目があるため、大学で理解困難な科目の有無

「ない」と答えた学生が全体で最も多かった。一方、「ある」と答えた学生の中で、最も支障を感じた理系科目として「ある(物理)」が多かった。特に、医学部保健学科・検査技術科学、工学部生物工学科、生物資源産業学部の学生が物理に支障を感じたと答えた。



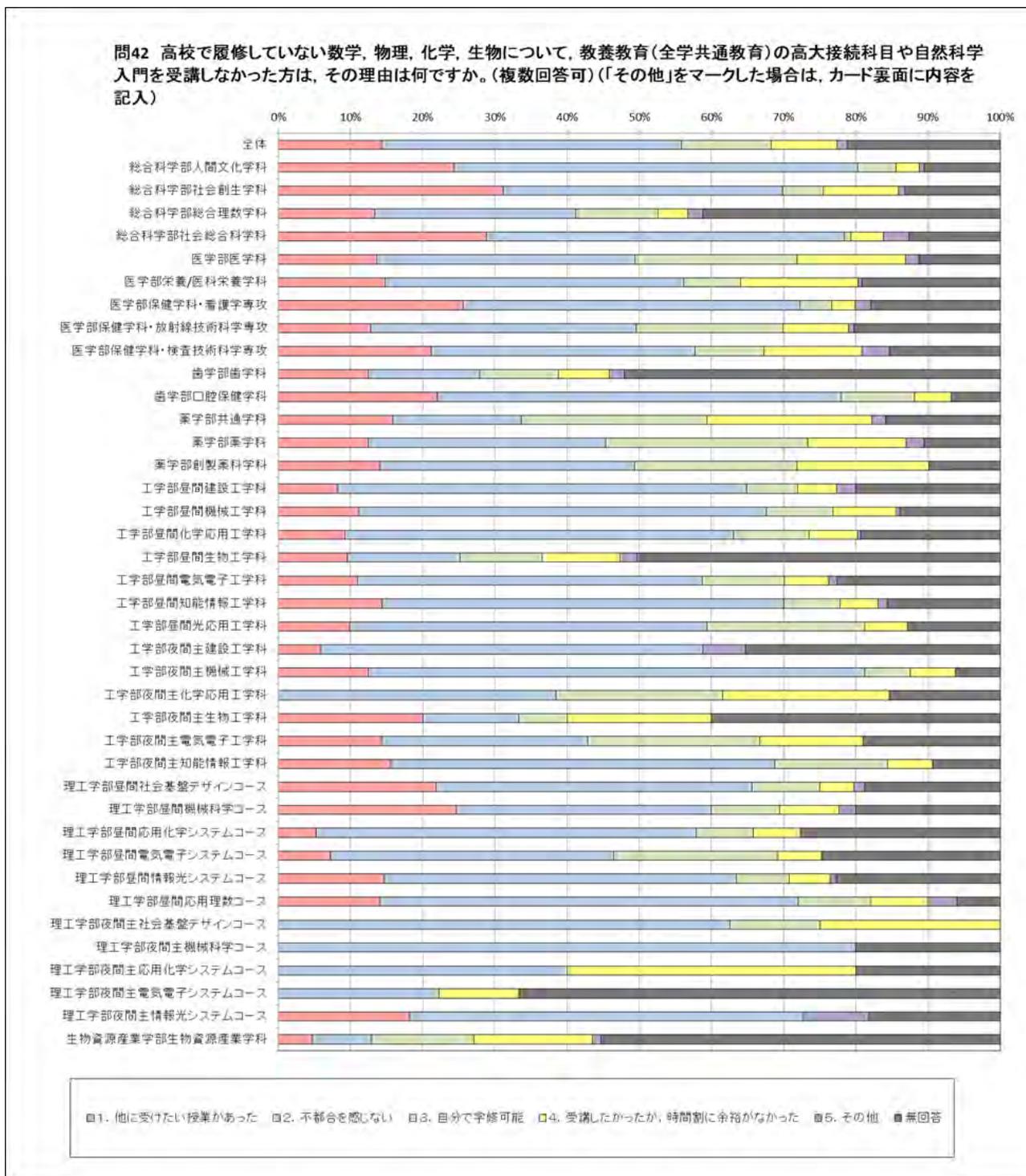
3-32 高校での未履修科目について、大学入学後の学修方法

全体では、「支障を感じないので何もしていない」が最も多く、「高校の教科書、参考書を使い、勉強した」学生が続いた。薬学部の学生は、「勉強の必要性を感じたが、LMS(リメディアル教材)の存在を知らず何もしていない」と約3割が答えた。一方、「HP上の徳島大学 LMS(リメディアル教材)を利用して勉強した」学生は、非常に少なかった。



3-33 高校での未履修科目を大学で履修しない理由

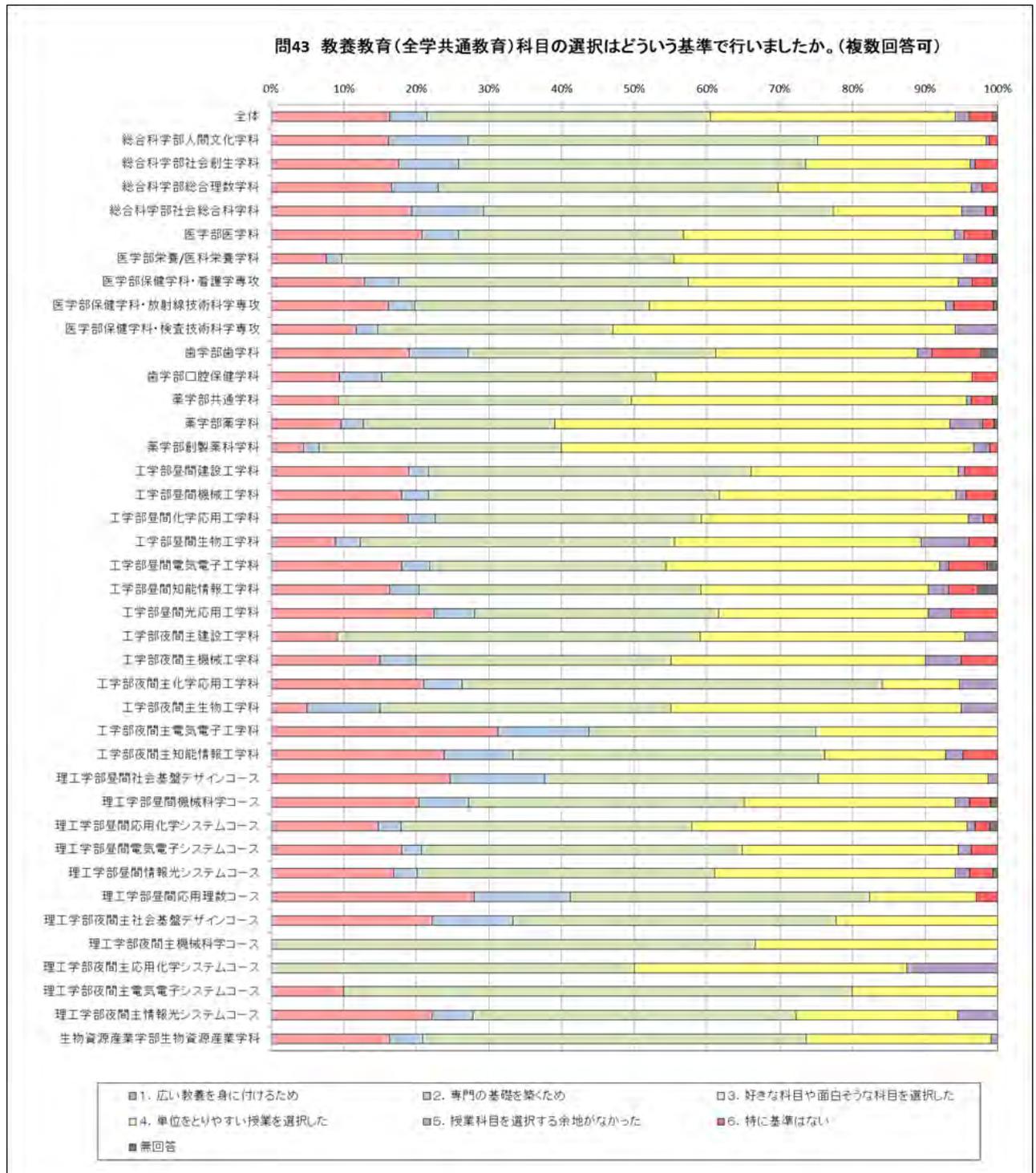
全体では4割以上の学生が、「不都合を感じない」と答えている。しかし、薬学部共通学科では、「自分で学修可能」「受講したかったが、時間割に余裕がなかった」の項目を選んだ学生が比較的多かった。



第4章 教養教育（全学共通教育）の授業について

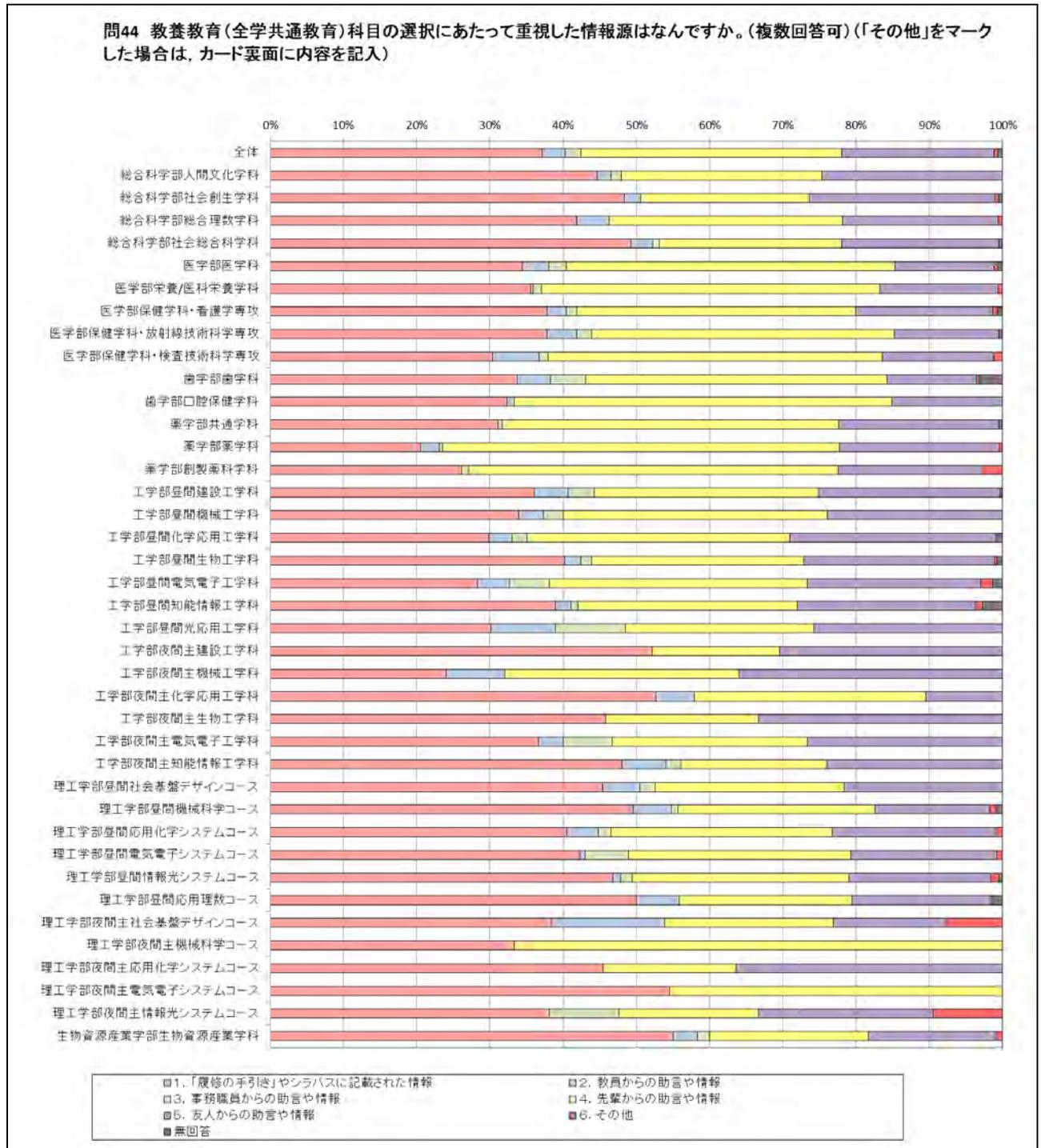
4-1 科目の選択基準

受講する科目の選択基準は、全体として「3. 好きな科目・面白そうな科目」という回答が多いが、学科により多少の違いがみられる。薬学部で「4. 単位をとりやすい科目」が比較的多いのは3年前の結果と同様である。



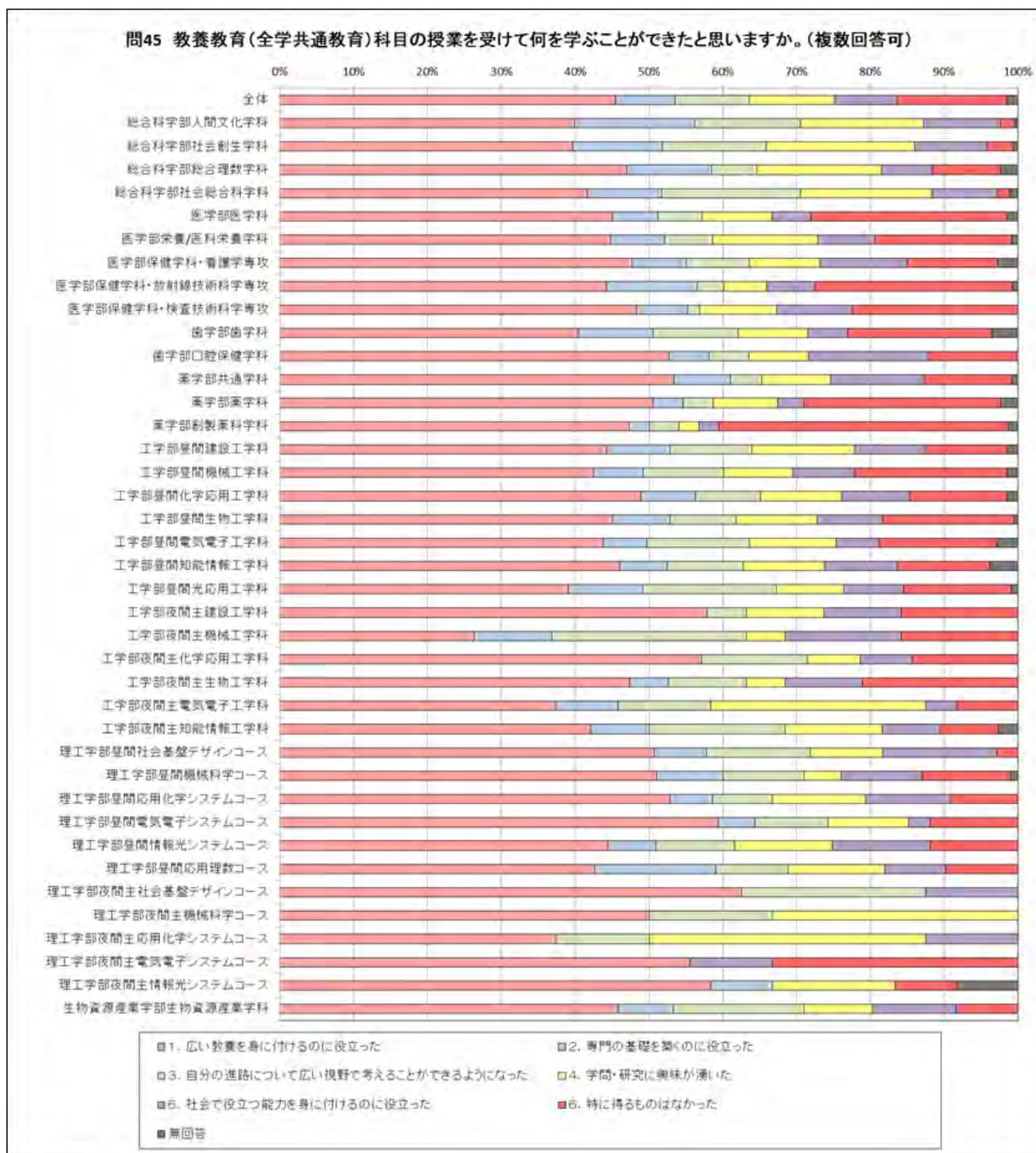
4-2 科目選択の情報源

受講目選択時の情報源は、「1. シラバス」「3. 先輩」「4. 友人」がほとんどであり、教職員からの助言はそれほど重視されていない。常三島地区で「シラバス」蔵本地区で「先輩」が多い傾向は従来通りである。新設の生物資源産業学部でも「先輩」という回答が20%あまりあるのは、他学部の先輩からの情報も役立っていることを示している。



4-3 授業を受けて学び得たこと

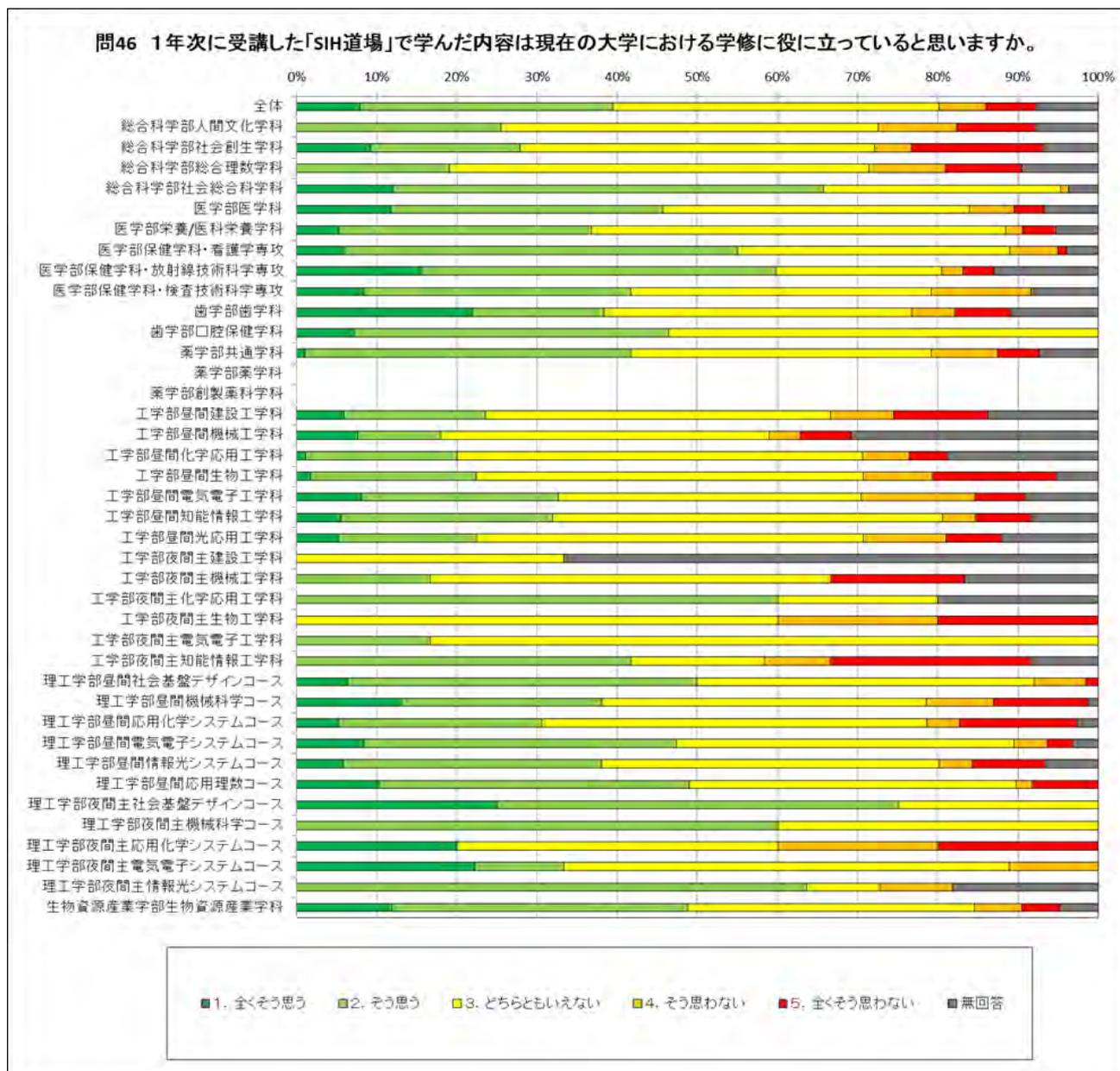
教養教育(全学共通教育)科目で得られたことは、「1. 広い教養」がどの学科も半数前後で最も多い。前回と同様に創製薬科学科で「6. 得るものがない」が比較的多いことは、問43で教養や専門基礎が極端に少なく、単位を取りやすい科目に集中していることに対応した結果と思われる。



4-4 「SIH道場」での学修

(平成27年度以降の入学者のみ回答)

平成27年度より全学で必修となった初年次教育プログラム「SIH道場」について、多くの学科・専攻・コースにおいて「3. どちらともいえない」を選んだ学生が最も多い結果という結果になった。また、「1. 全くそう思う」と回答した学生はいずれの学科・専攻・コースにおいても少数であったが、医学部及び理工学部においては「2. そう思う」と回答した学生が比較的多い傾向がある。

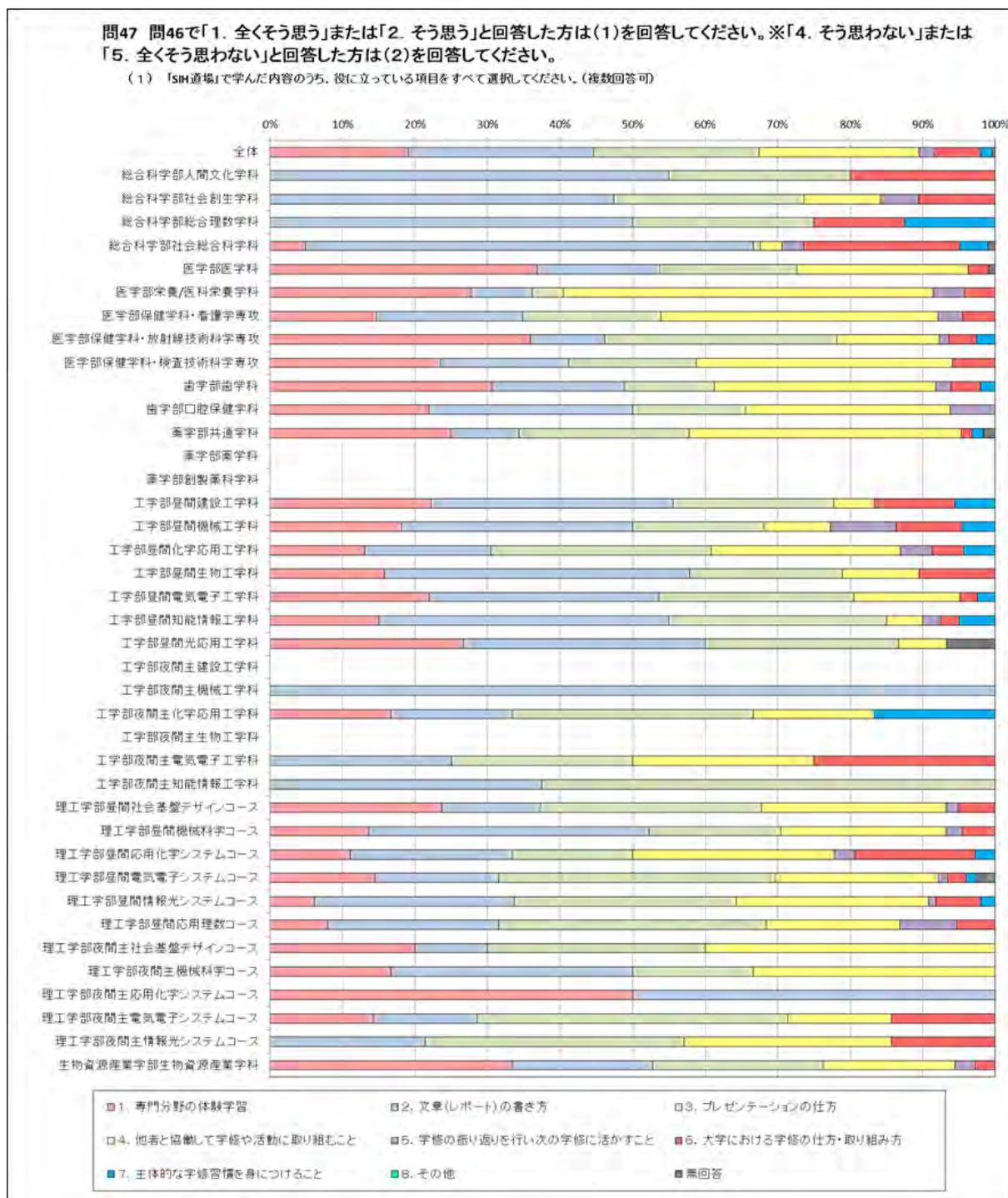


4-5 「SIH道場」での学びの内容

(平成27年度以降の入学者のみ回答)

(1) 役に立っている内容 (2) 役に立っていない内容 (自由記述)

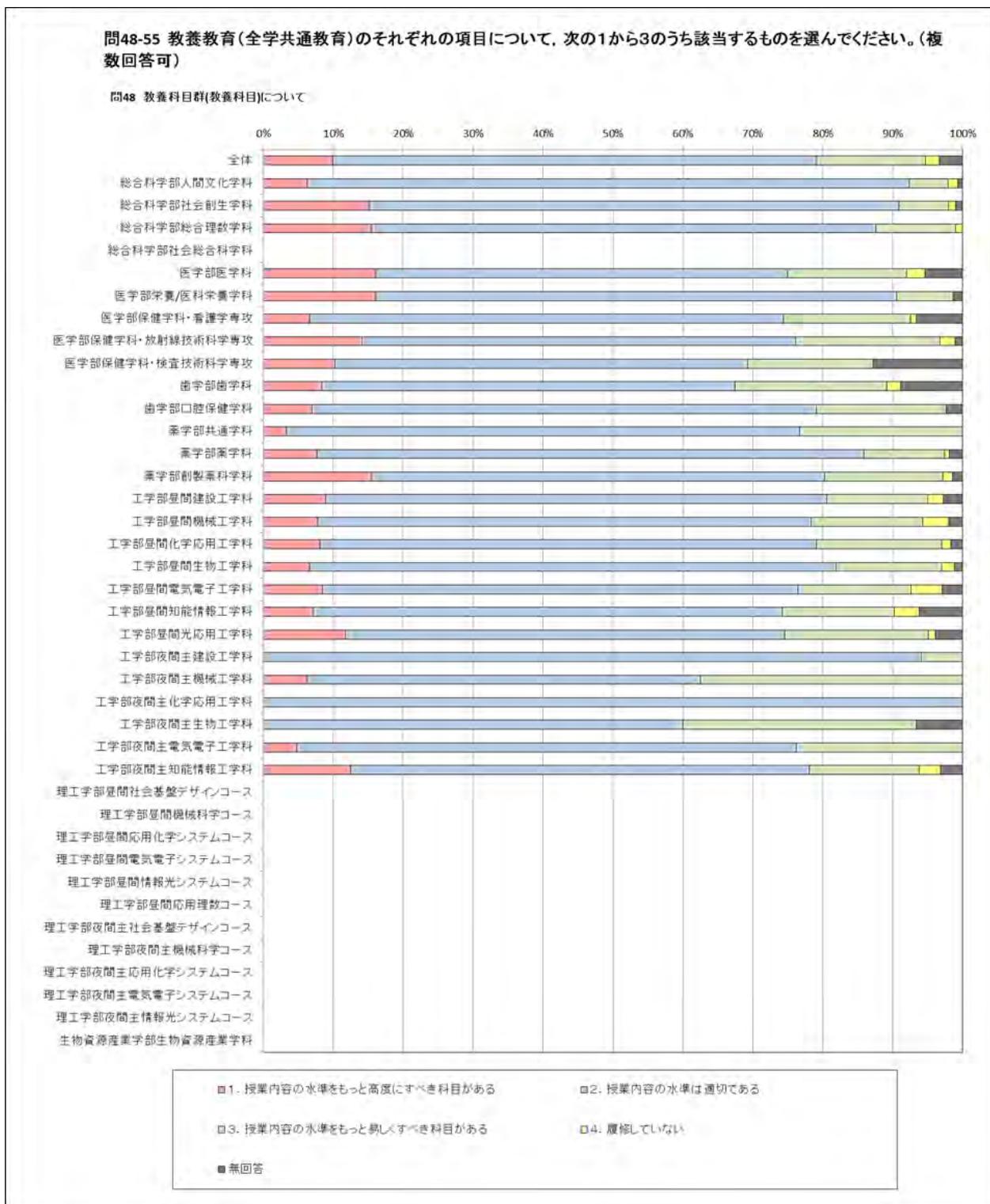
平成27年度より全学で必修となった初年次教育プログラム「SIH道場」における役に立っている学修内容について、「専門分野の体験学習」及びラーニングスキル(文章力・プレゼン力・協働力)を選択する学生が多いという結果になった。一方で、自由記述においては「SIH道場で何をやったかを覚えていない」という趣旨の記述が多くみられる。一部「SIH道場を受けていない」などの記述があり、平成26年度以前入学者が誤って回答したものが混在している可能性が考えられるが、今後SIH道場の意義について慎重な検討が必要である。



4-6 教養科目群（教養科目）について

（平成27年度以前の入学生が回答）

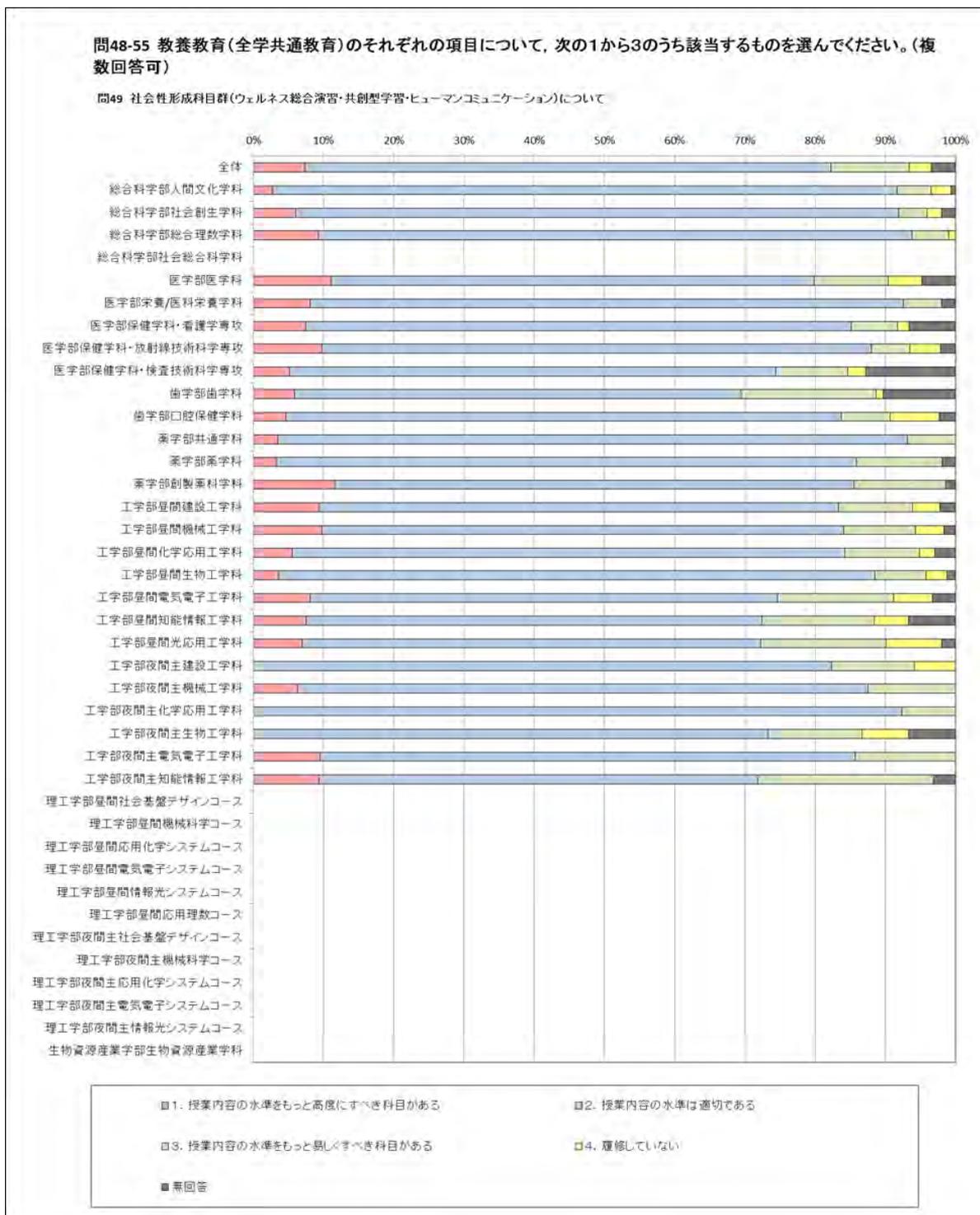
27年度以前入学の教養科目の難易度については、いずれも回答者数の少ない夜間主コースの一部を除き、「2. 適切な水準」という回答が過半数を占めており、学生の不満は少ないと思われる。



4-7 社会性形成科目群（ウェルネス総合演習・共創型学習・ヒューマンコミュニケーション）について

（平成27年度以前の入学生が回答）

社会性形成科目も、前問と同様全体的に「2. 適切な水準」という回答が多く、学生の不満は少ないと思われる。



4-8 基盤形成科目群（外国語科目・情報科学）について

（平成27年度以前の入学生が回答）

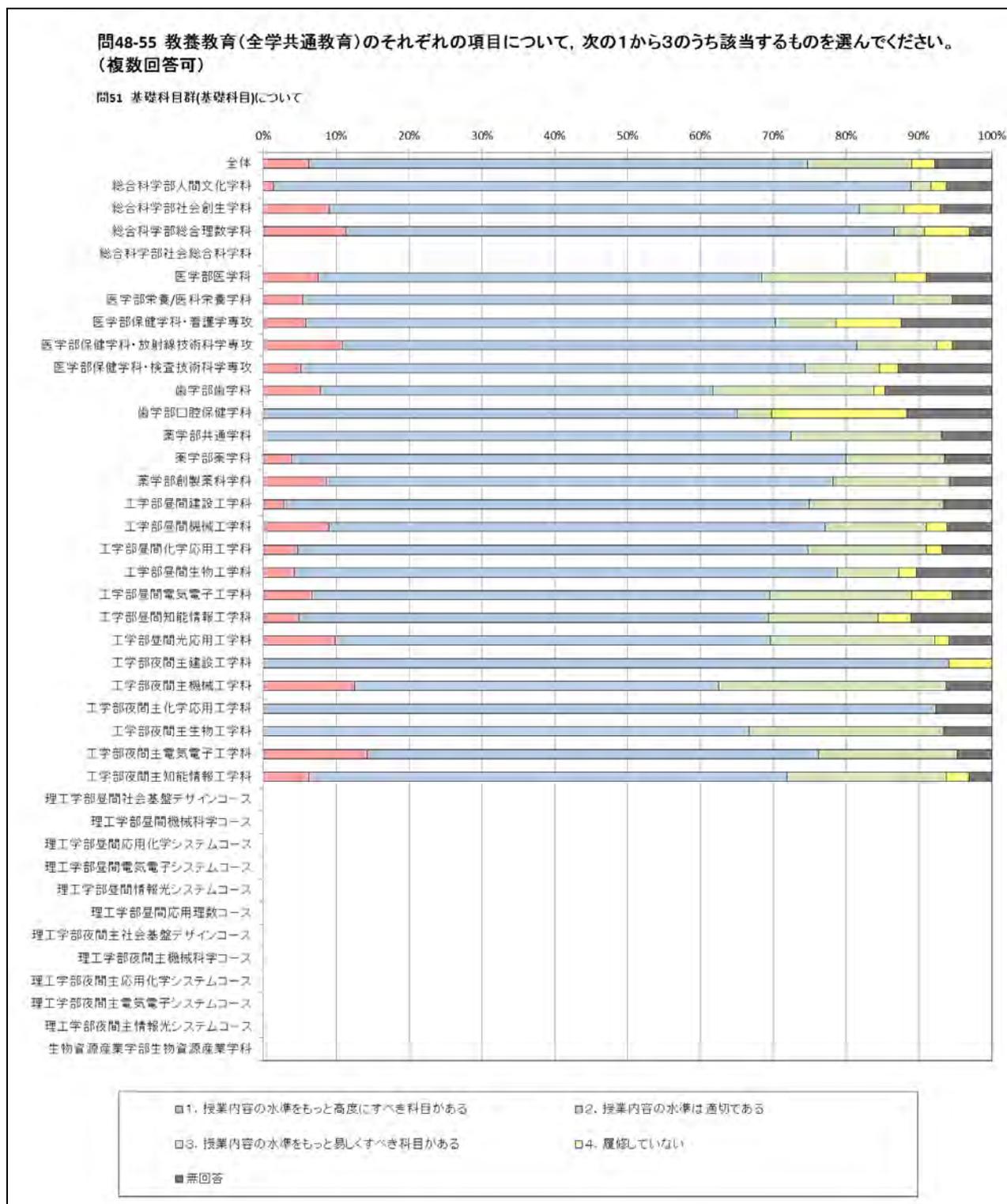
外国語科目・情報科学については、全体的には、「2. 適切な水準」という回答が多いが、学科によっては「1. もっと高度に」「3. もっと易しく」がやや多い傾向もみられる。調査が外国語と情報科学という異なる分野をまとめていることが結果に影響しているかもしれない。



4-9 基礎科目群（基礎科目）について

（平成27年度以前の入学生が回答）

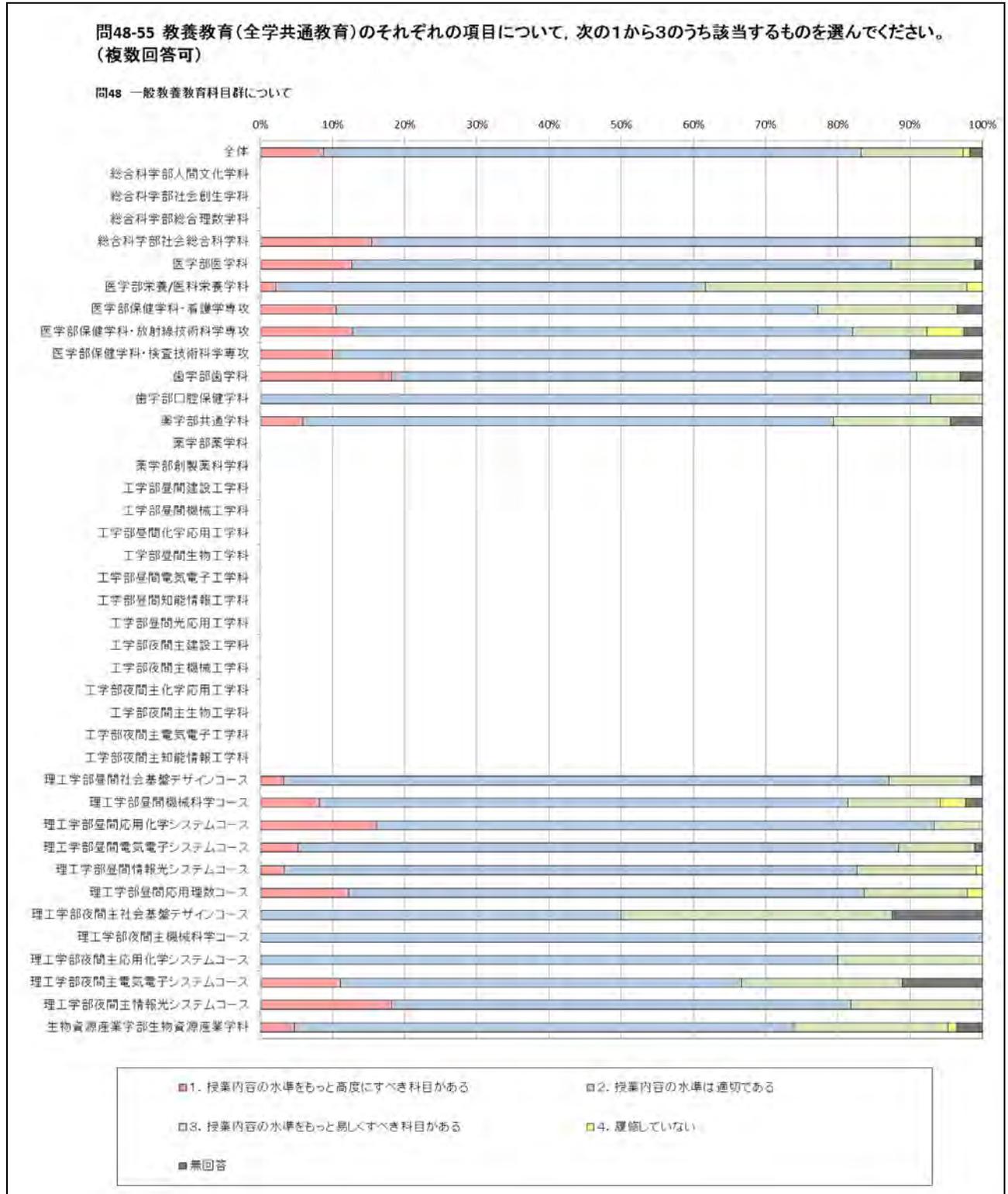
基礎科目については、全体的には、「2. 適切な水準」という回答が多いが、「1. もっと高度に」が少なく、「3. もっと易しく」がやや多い学科もある。一部の学生が難しさを感じていることに対策が必要と思われる。



4-10 一般教養教育科目群について

(平成28年度の入学生(留年生を除く1年生)が回答)

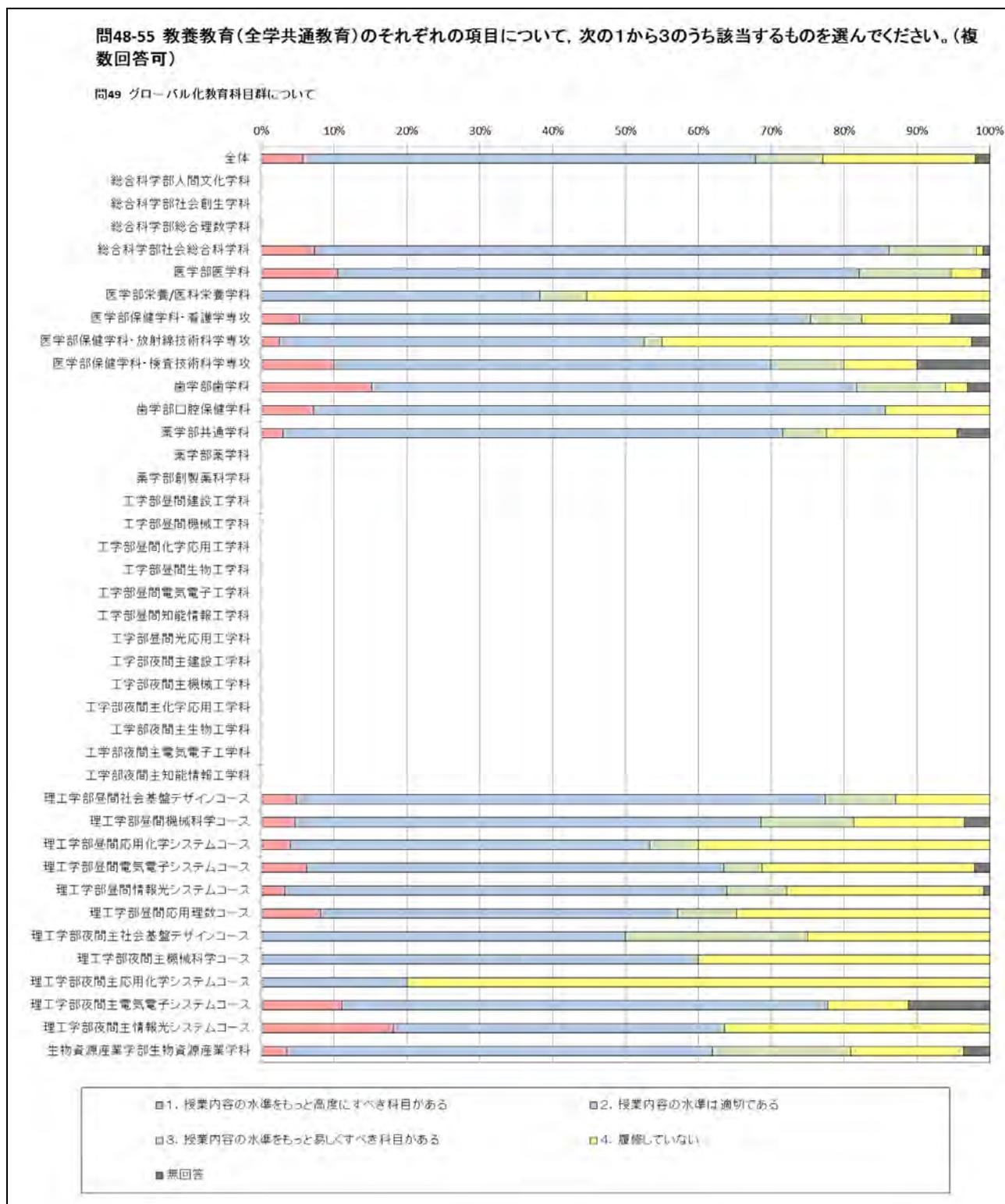
一般教養教育科目群の難易度については、回答者数の少ない夜間主コースの一部を除き、「2. 適切な水準」という回答が過半数を占めており、学生の不満は少ないと思われる。



4-11 グローバル化教育科目群について

(平成28年度の入学生(留年生を除く1年生)が回答)

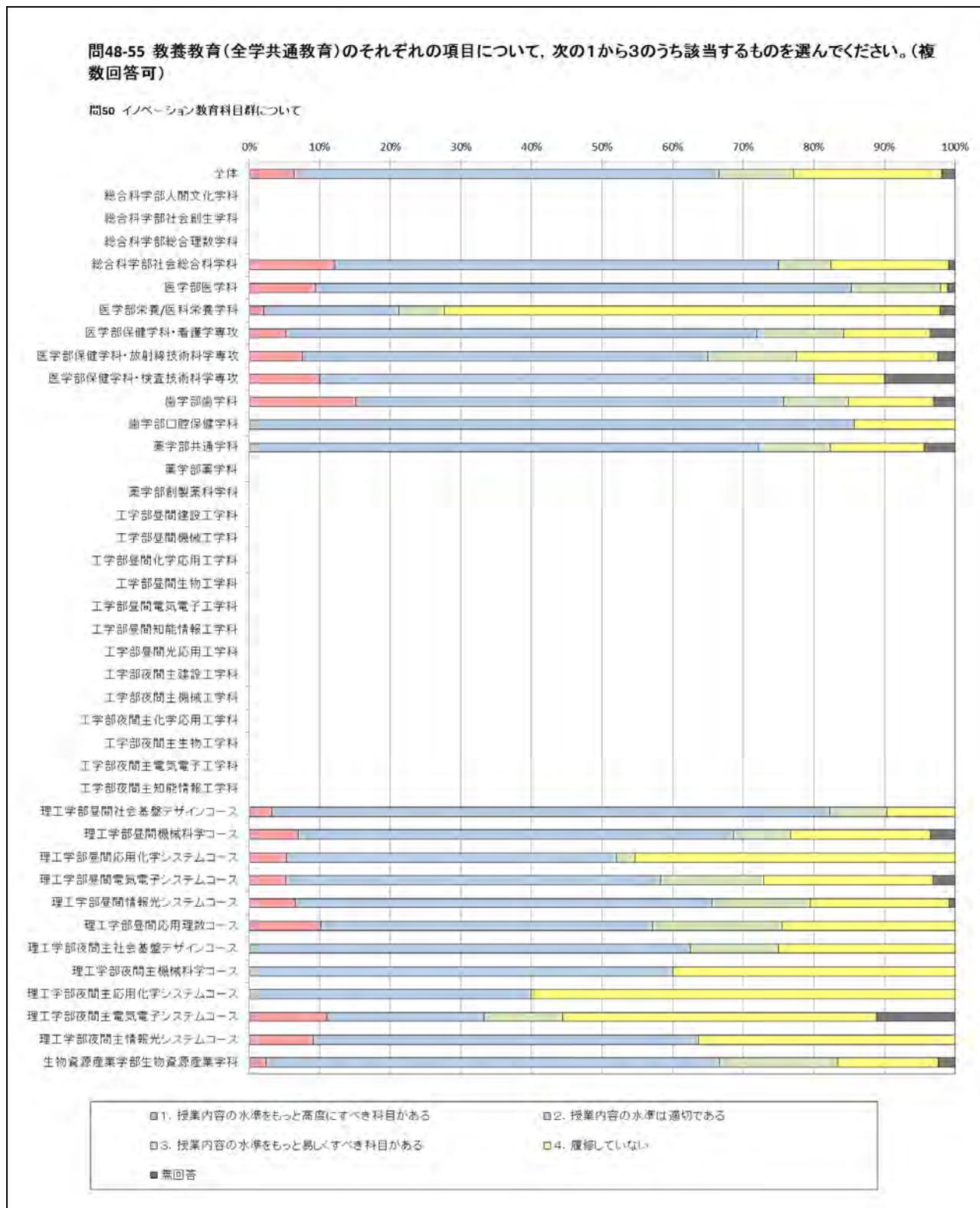
グローバル化教育科目は、「4. 履修していない」という回答が多い学科もあるが、履修した学生の回答は「2. 適切な水準」が多く、学生の不満は少ないようである。



4-12 イノベーション教育科目群について

(平成28年度の入学生(留年生を除く1年生)が回答)

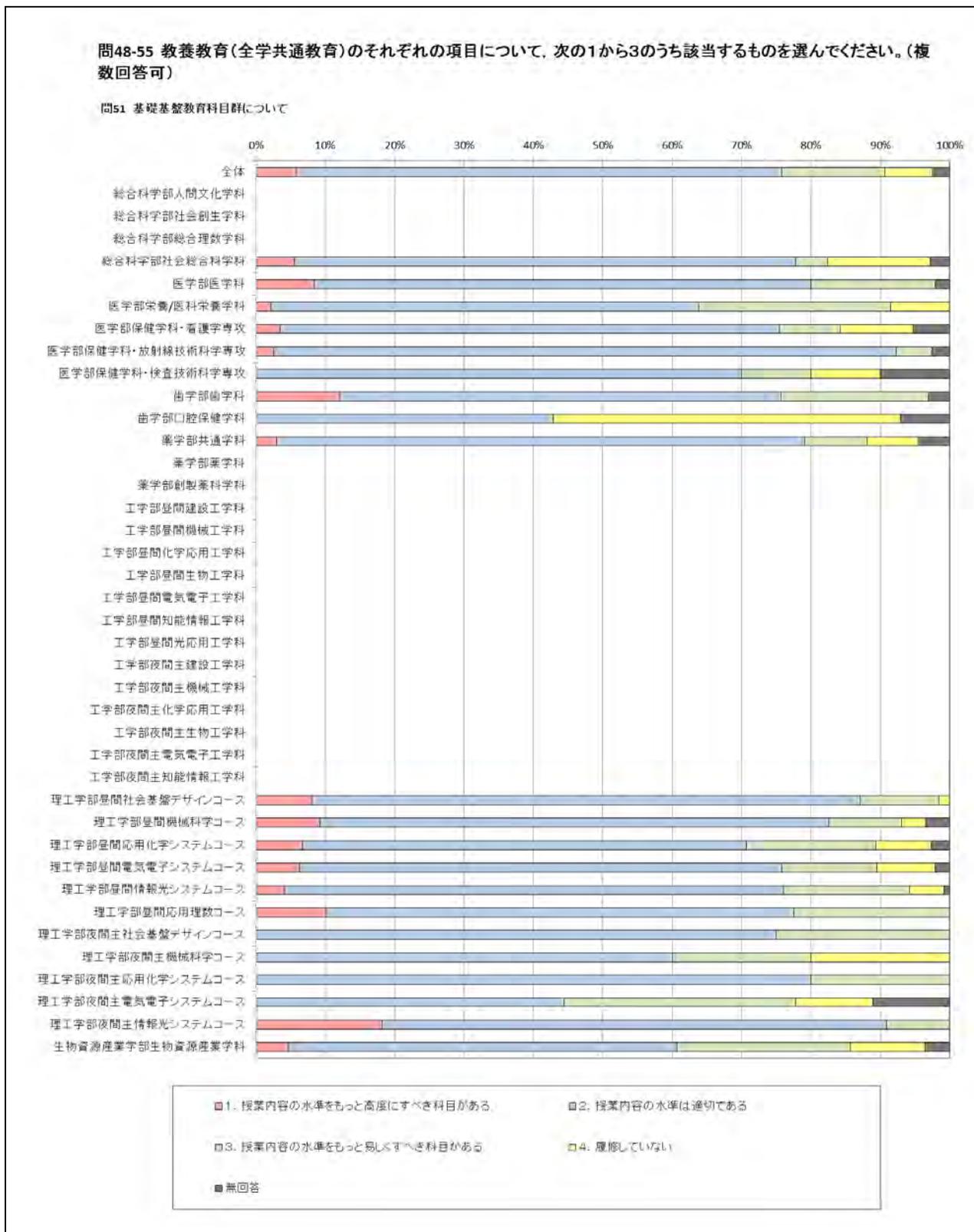
イノベーション教育科目は、前問と同様に「4. 履修していない」とする回答が多い学科もあるが、その他の回答は「2. 適切な水準」が多く、学生の不満は少ないようである。



4-13 基礎基盤教育科目群について

(平成28年度の入学生(留年生を除く1年生)が回答)

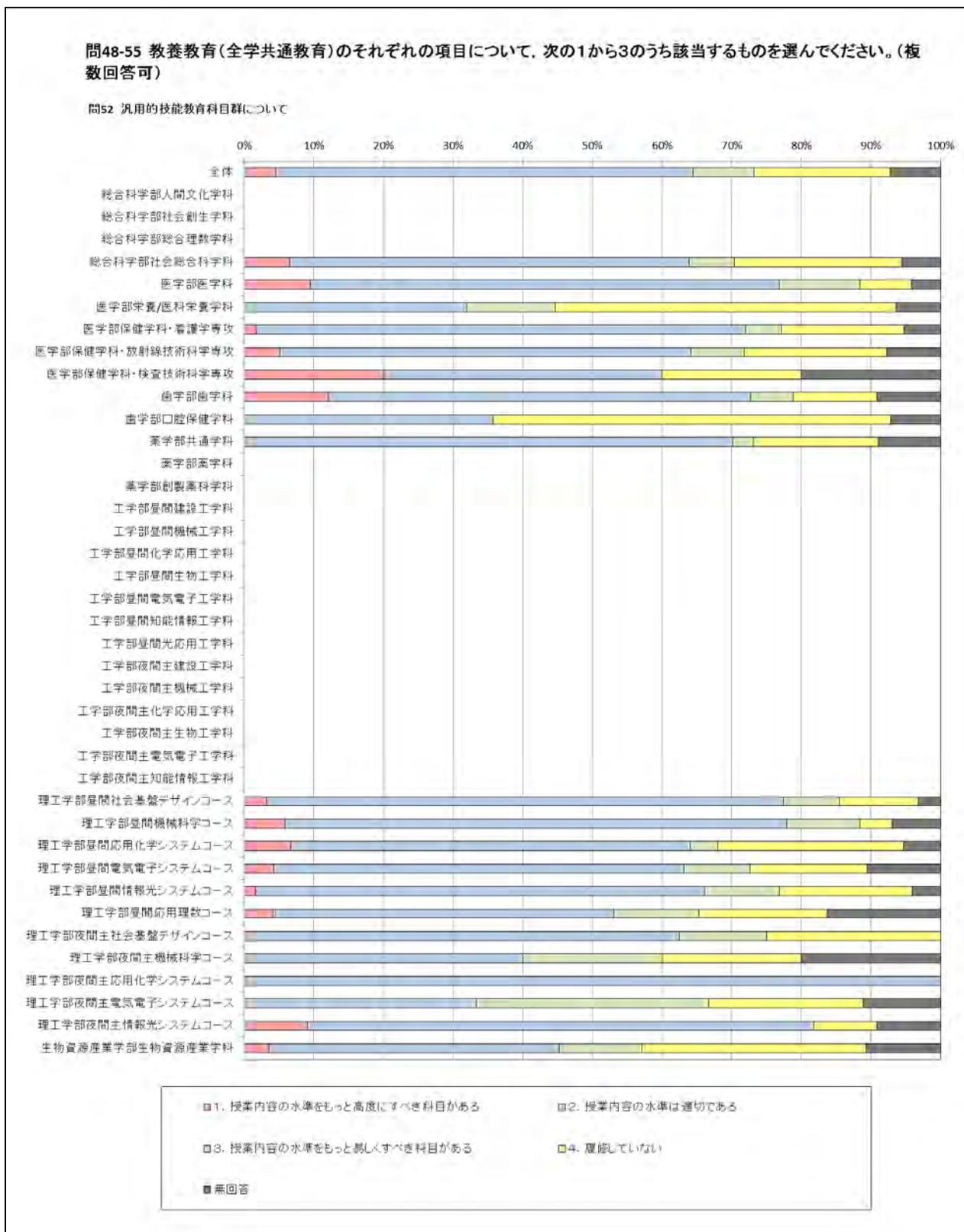
基礎基盤教育科目については、全体的には、「2. 適切な水準」という回答が多いが、「1. もっと高度に」が少なく、「3. もっと易しく」がやや多い学科もある。



4-14 汎用的技能教育科目群について

(平成28年度の入学生(留年生を除く1年生)が回答)

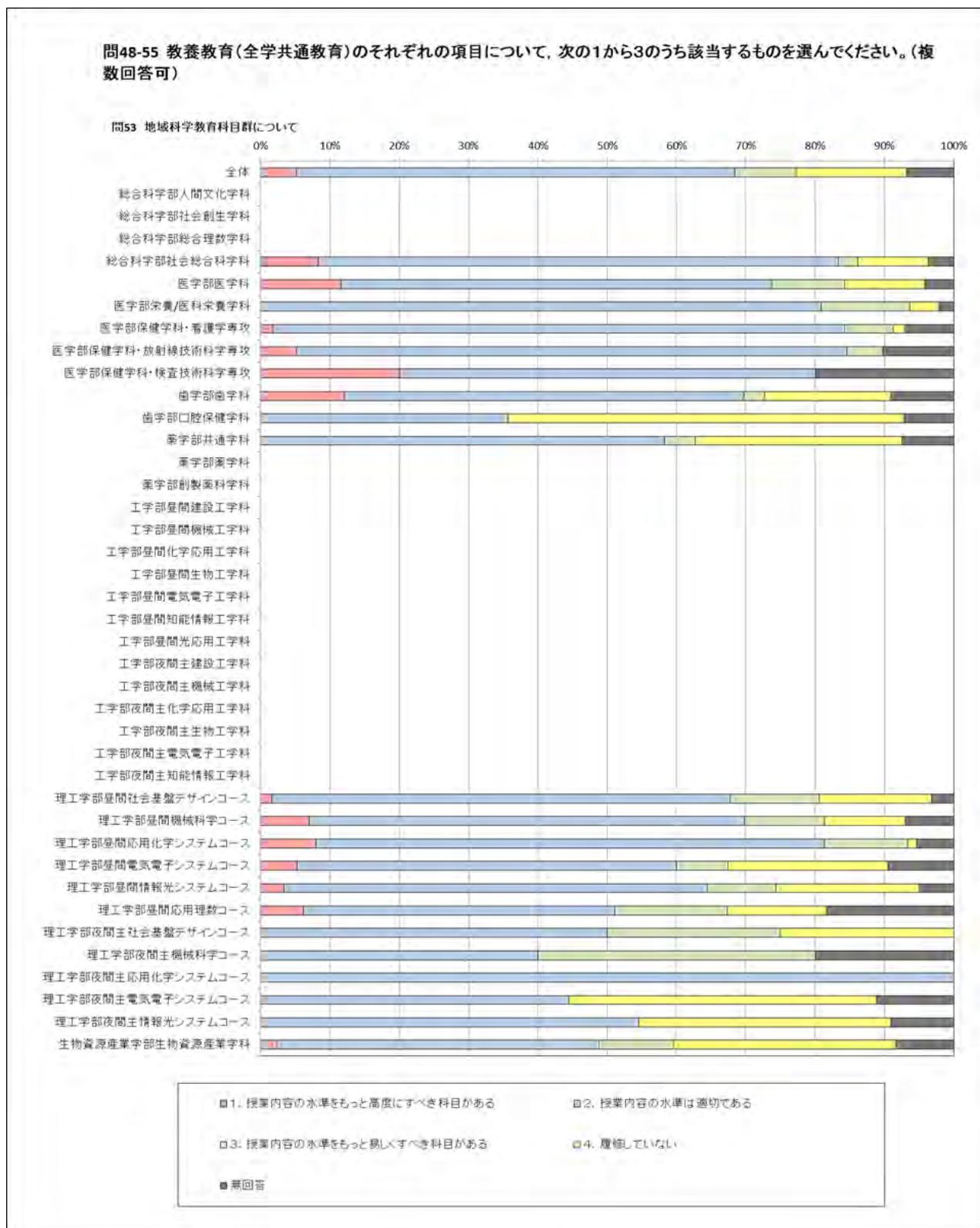
汎用的技能教育科目は、「2. 適切な水準」という回答が多いが、学科による違いがあり、「1. もっと高度に」または「3. もっと易しく」がやや多い学科もある。



4-15 地域科学教育科目群について

(平成28年度の入学生(留年生を除く1年生)が回答)

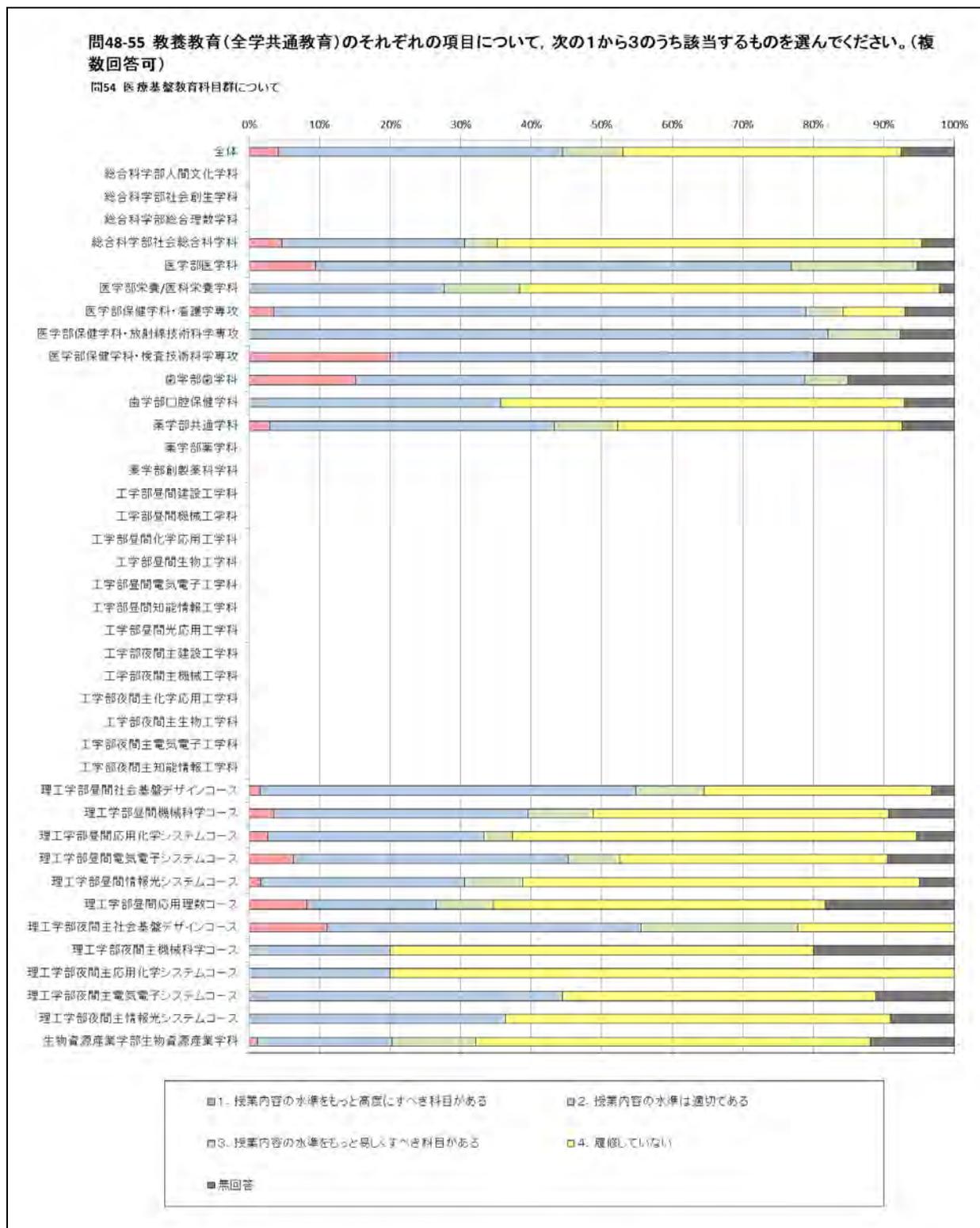
地域科学教育科目は、全体としては「2. 適切な水準」という回答が多いが、「1. もっと高度に」がやや少ない傾向にある。



4-16 医療基盤教育科目群について

(平成28年度の入学生(留年生を除く1年生)が回答)

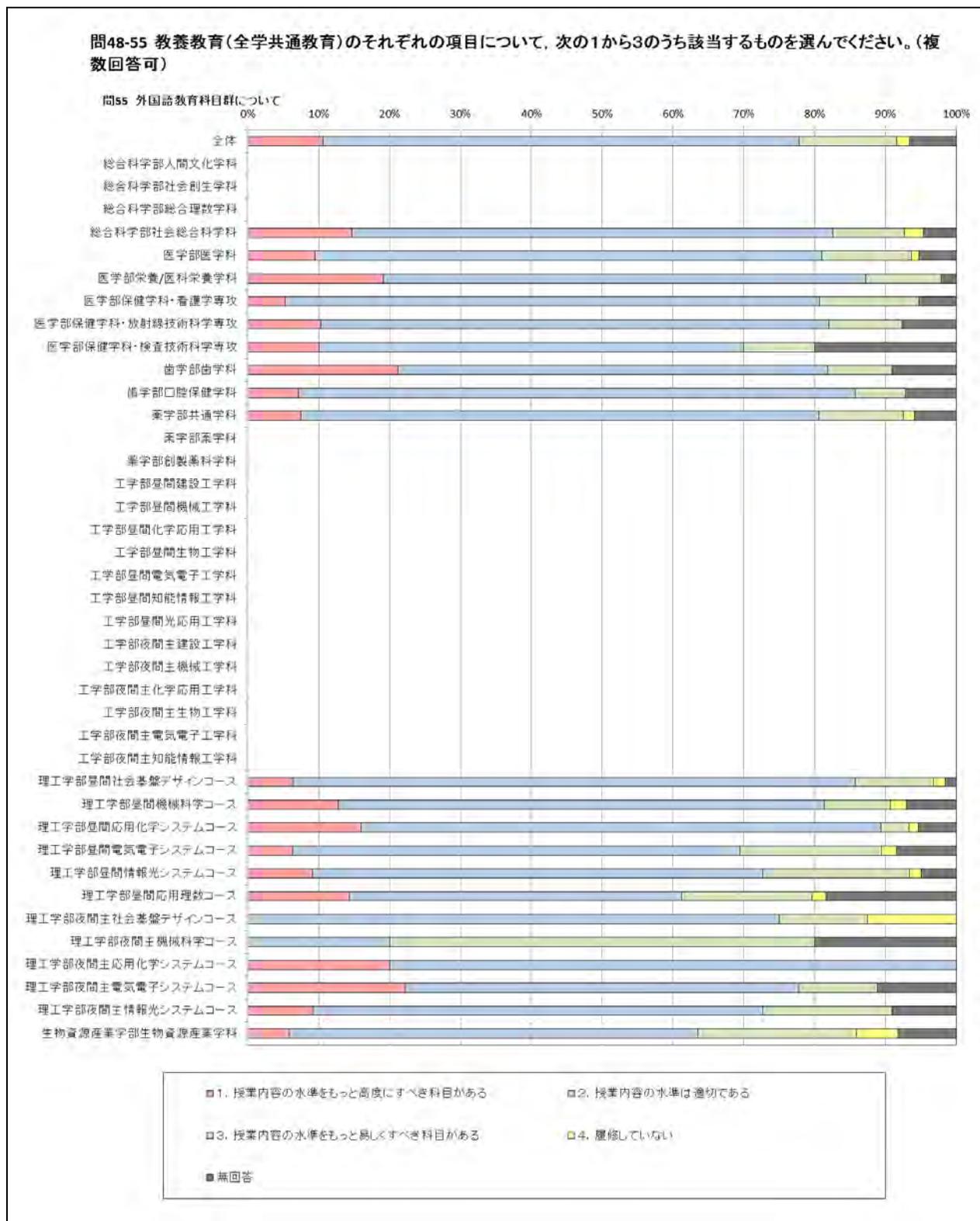
医療基盤教育科目は、常三島地区で「4. 履修していない」が多く、蔵本地区でも学科によっては履修率が低い。履修者の中では、医学科で「3. もっと易しく」がやや多いほかは、大多数が「2. 適切な水準」、一部が「1. もっと高度に」を回答している。学科によって難易度が異なるためと思われる。



4-17 外国語教育科目群について

(平成28年度の入学生(留年生を除く1年生)が回答)

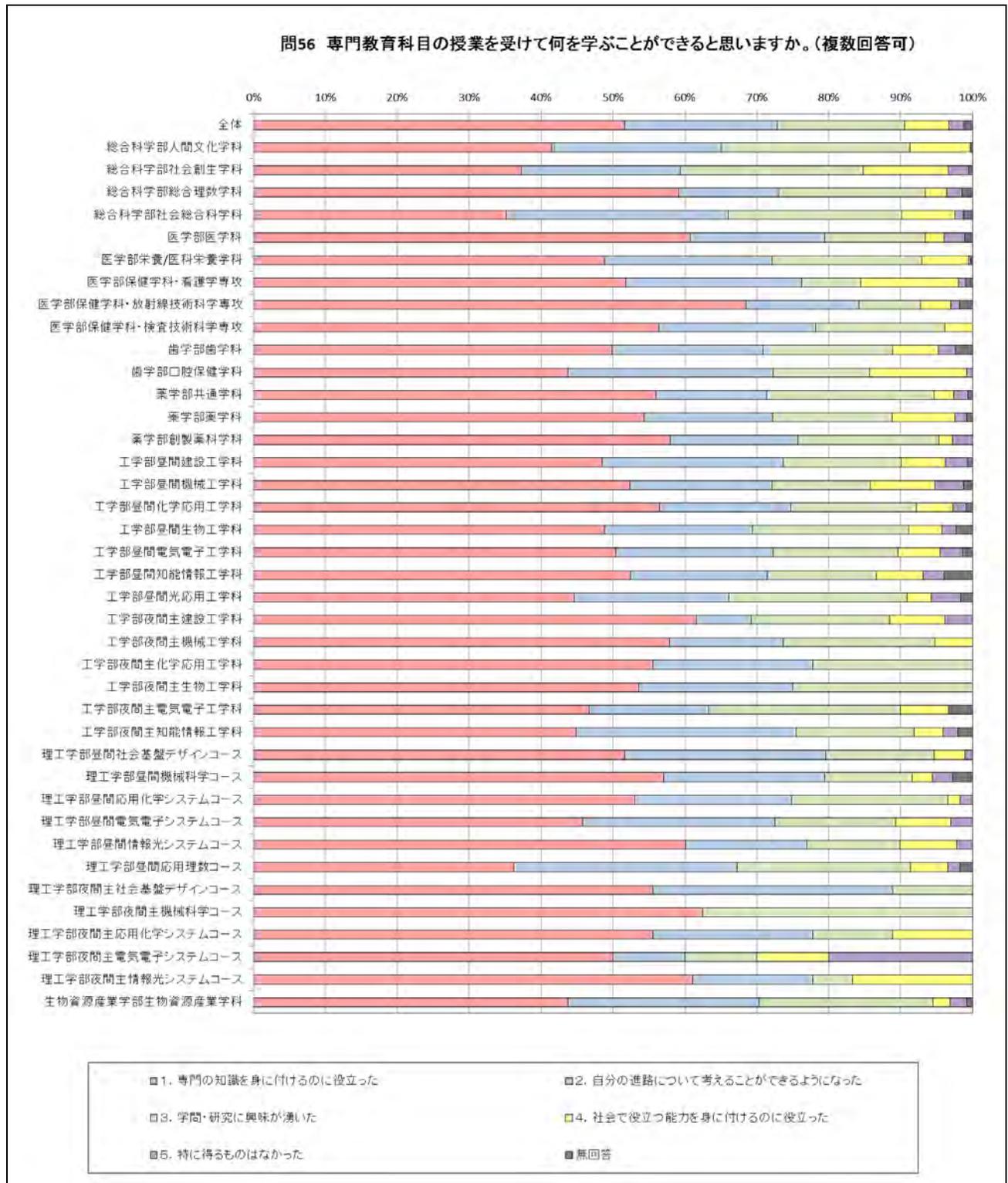
外国語教育科目も、全体的には他の科目群と同様に「2. 適切な水準」が多いものの、理工学部などで「1. もっと高度に」と「3. もっと易しく」の両者がやや多い学科もあり、学力分布の幅がやや広いことを示しているようである。



第5章 専門教育の授業について

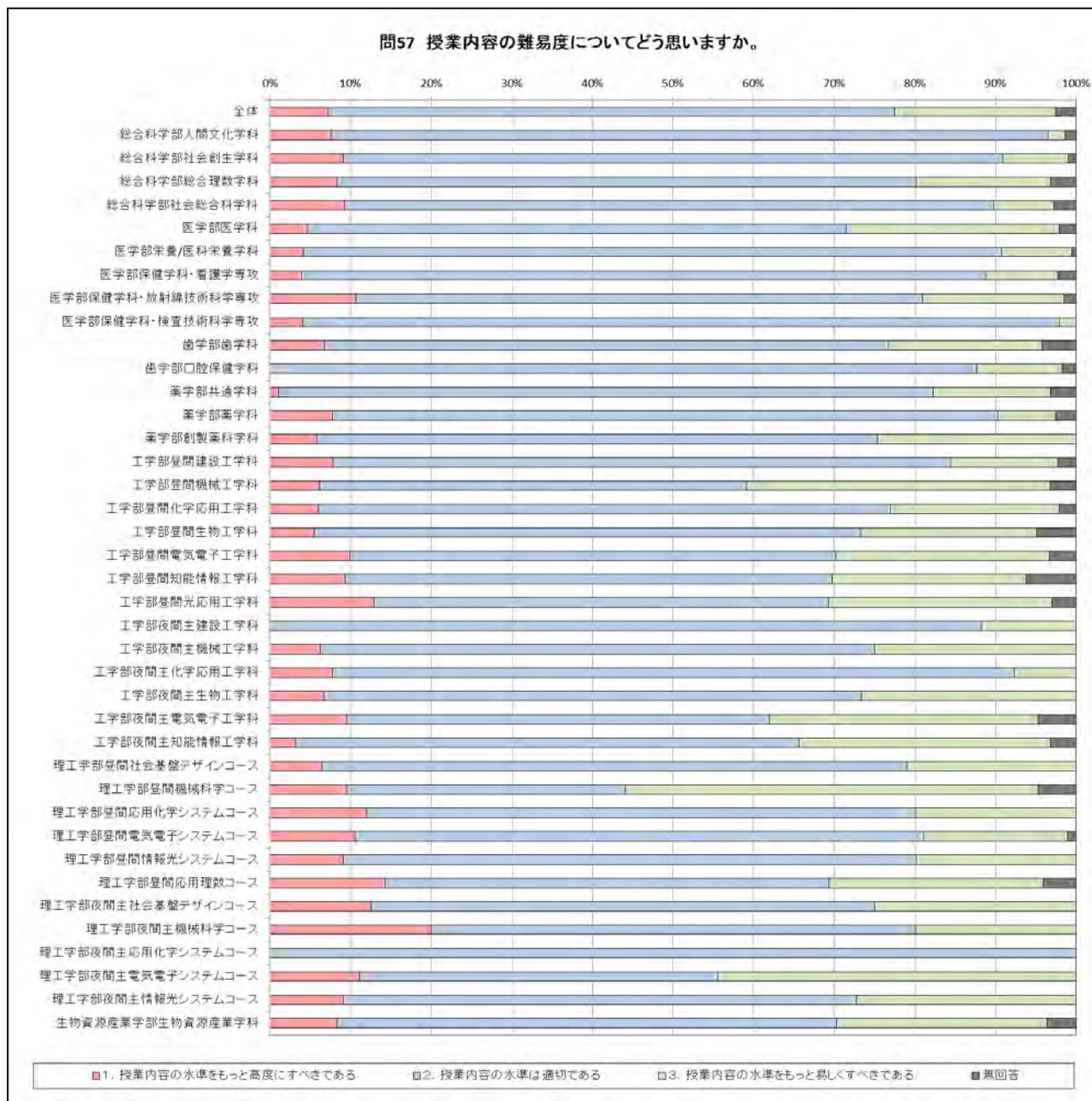
5-1 授業を受けて学び得たこと

専門教育科目で学べることとして、いずれの学科・専攻・コースにおいても「専門の知識を身につけるのに役立った」を選択する学生が最も多い。また「自分の進路について考えることができるようになった」「学問・研究に興味を沸かした」を選択する学生も比較的多く、専門科目の履修が自身のキャリアパスの検討や専門領域への興味喚起につながっていることが示唆される。



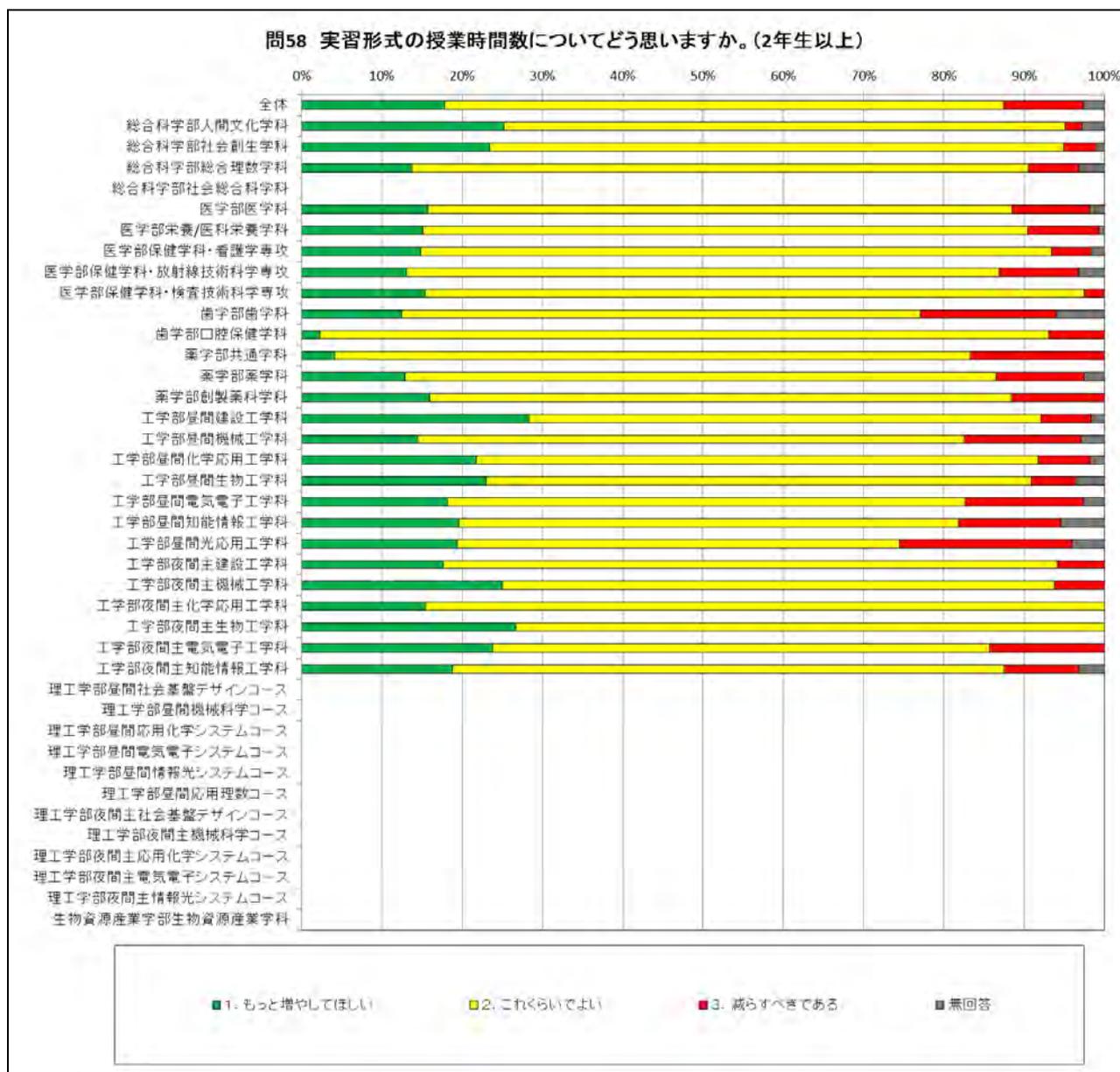
5-2 授業内容の難易度

授業内容の難易度については、いずれの学科・専攻・コースにおいても「適切である」と回答する学生が最も多い結果となり、多くの学生にとって適切な水準の授業が実施されていると考えられる。



5-3 実習形式の授業時間数に対する希望

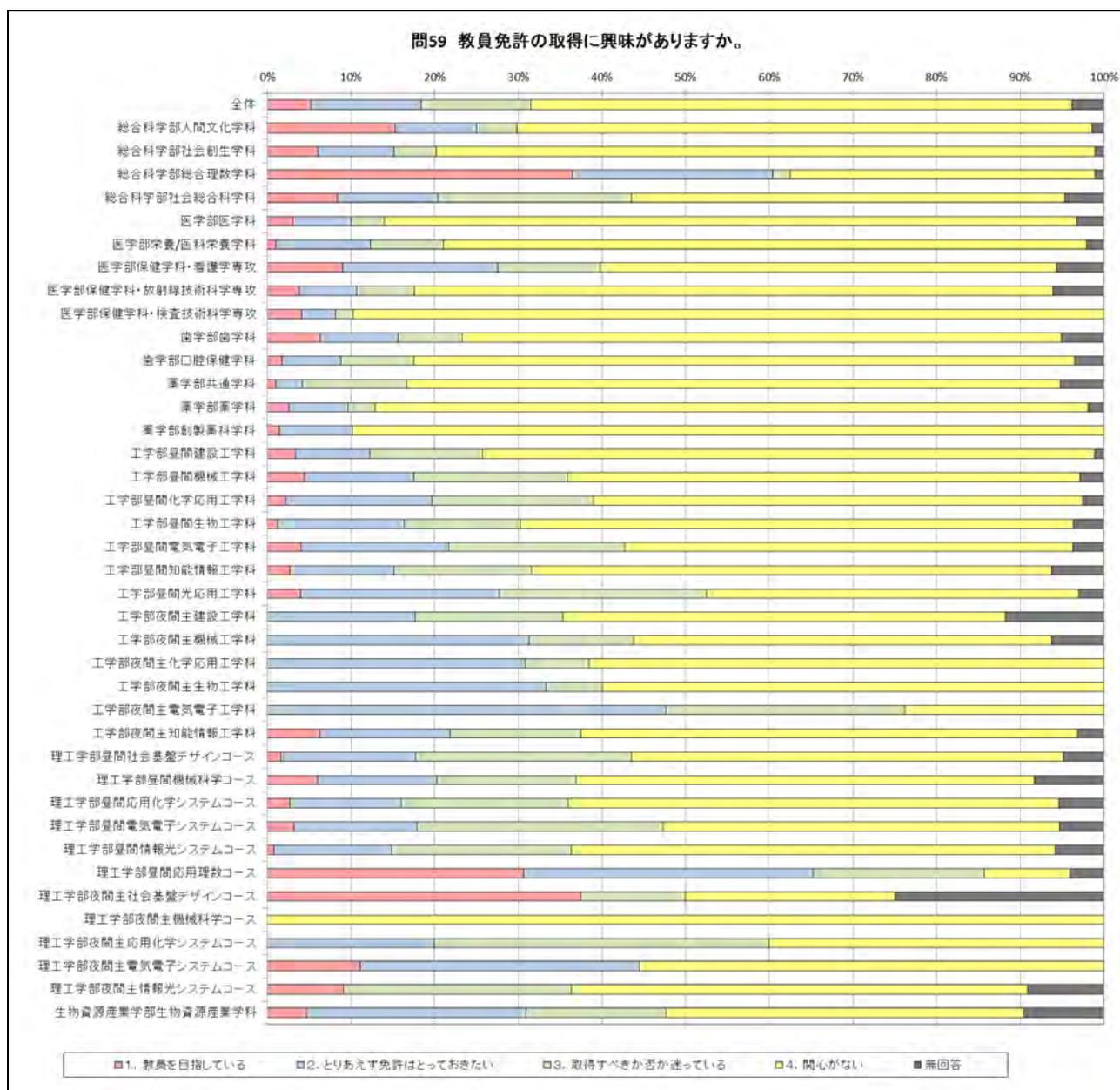
実習形式の授業時間数について、全ての学科・専攻・コースにおいて「これくらいでよい」と回答した学生が最も多い結果となった。選択された割合は少ないが、「もっと増やしてほしい」の回答が「減らすべきである」を上回っている学科・専門・コースがほとんどであったのに対して、歯学部の2学科と薬学部の共通学科では、「減らすべきである」とする回答の方が多く、他とは異なっていた。



第6章 免許・資格について

6-1 教員免許取得に興味のあるもの

殆どの学科・専攻・コースにおいて、教員免許の取得に「関心がない」と回答した学生が最も多い。しかし総合理数学科，応用理数コース及び夜間主社会基盤デザインコースでは3割以上の学生が「教員を目指している」と回答している。またいずれの学科・専門・コースにおいても「とりあえず免許はとっておきたい」「取得すべきか否か迷っている」と回答する学生も一定数存在しており，将来の進路の選択肢として教員を視野に入れている，あるいは入れるべきかどうか迷っている学生も少なくないといえる。



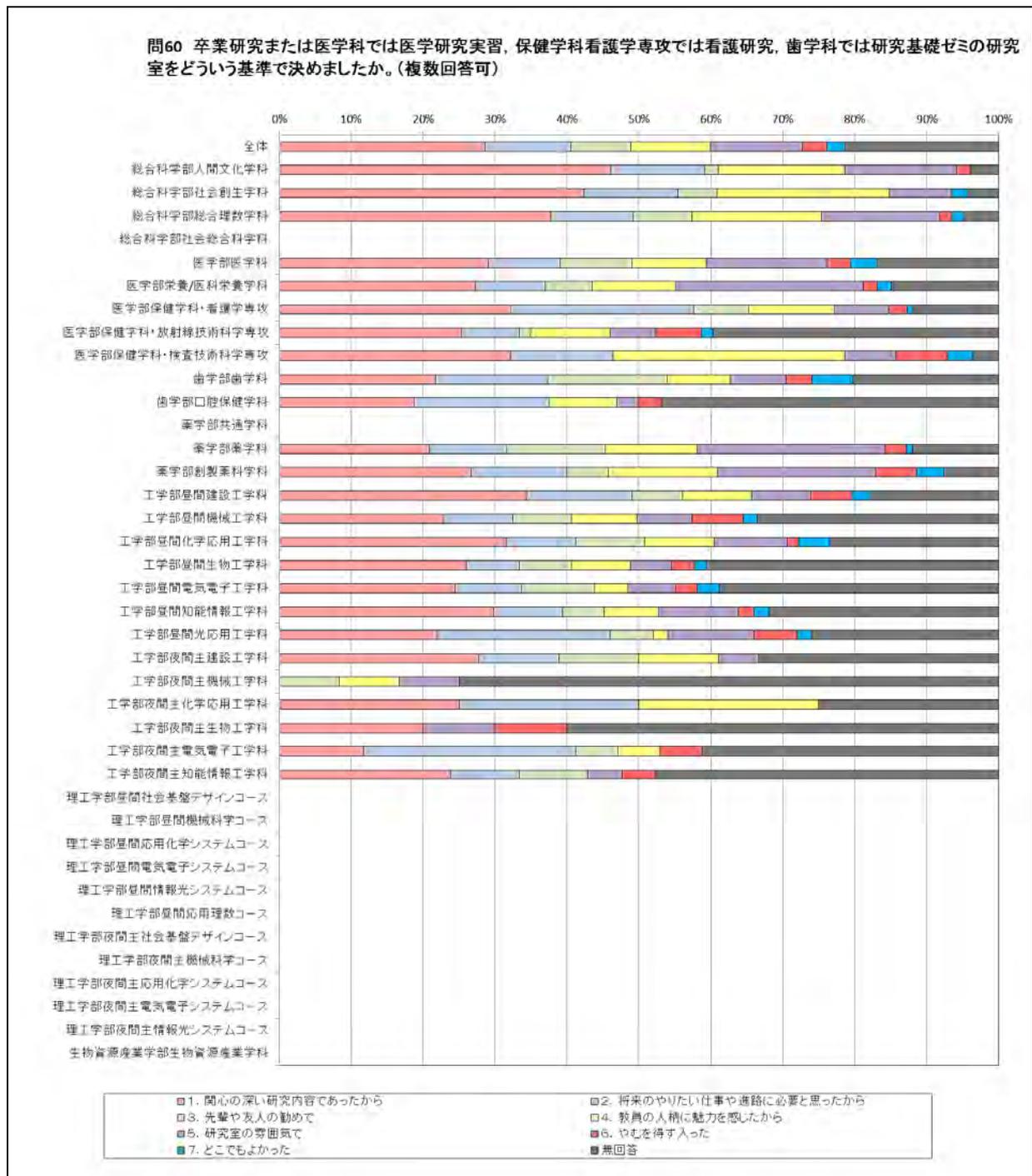
第7章 卒業研究，医学研究実習，看護研究，

研究基礎ゼミについて

7-1 研究室選考の基準

(3, 4年生または該当する学生のみ)

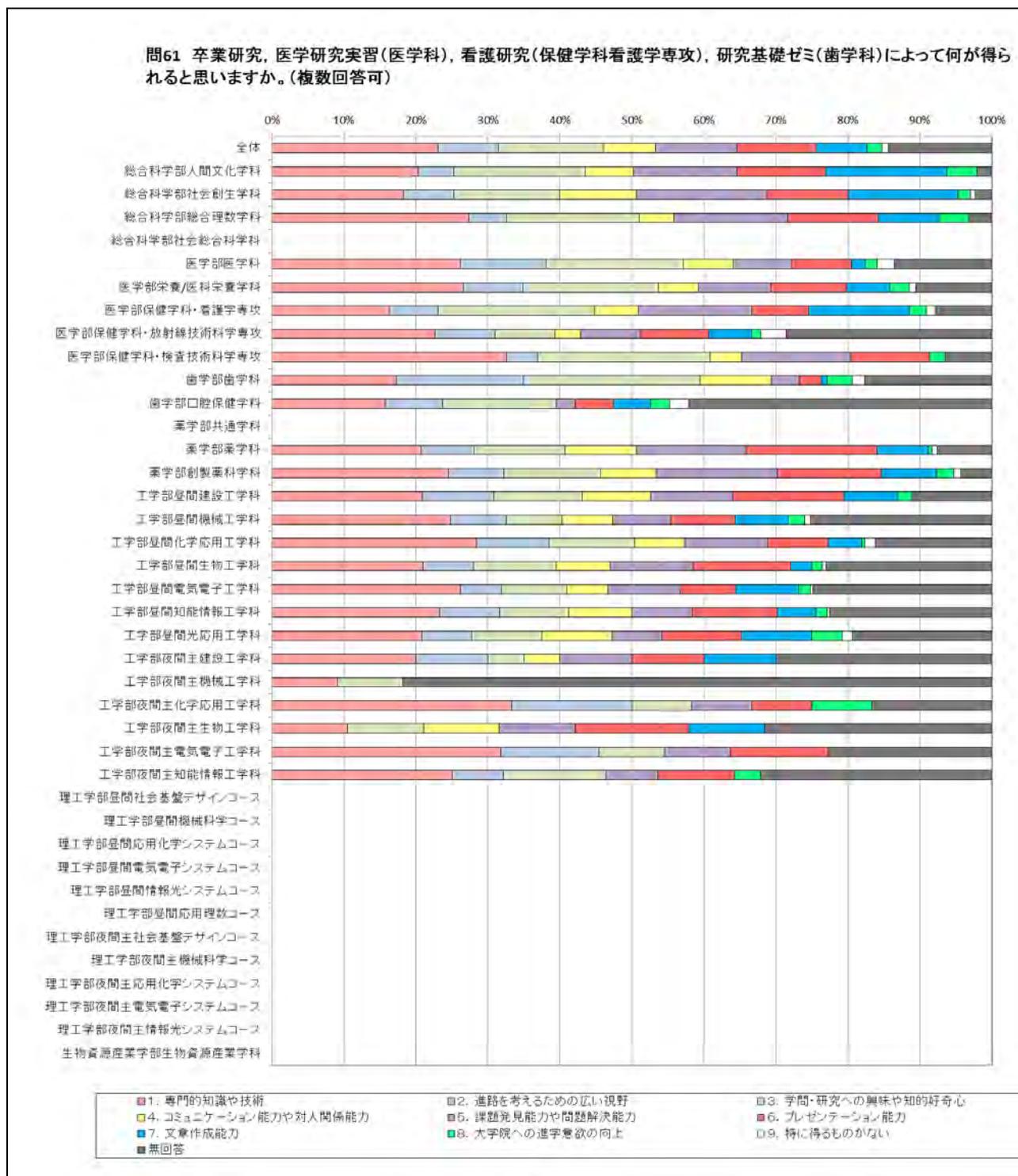
全体として，研究室選択の理由に「やむを得ず入った」や「どこでもよかった」を選ぶ学生は少なく，前向きな検討を通して研究室を選択している学生が多いことが窺える。多様な研究領域の中と自らの関心を照らし合わせて研究室を選択している学生が多いといえる。



7-2 卒業研究, 医学研究実習, 看護研修, 研究基礎ゼミで学び得たこと

(3, 4年生または該当する学生のみ)

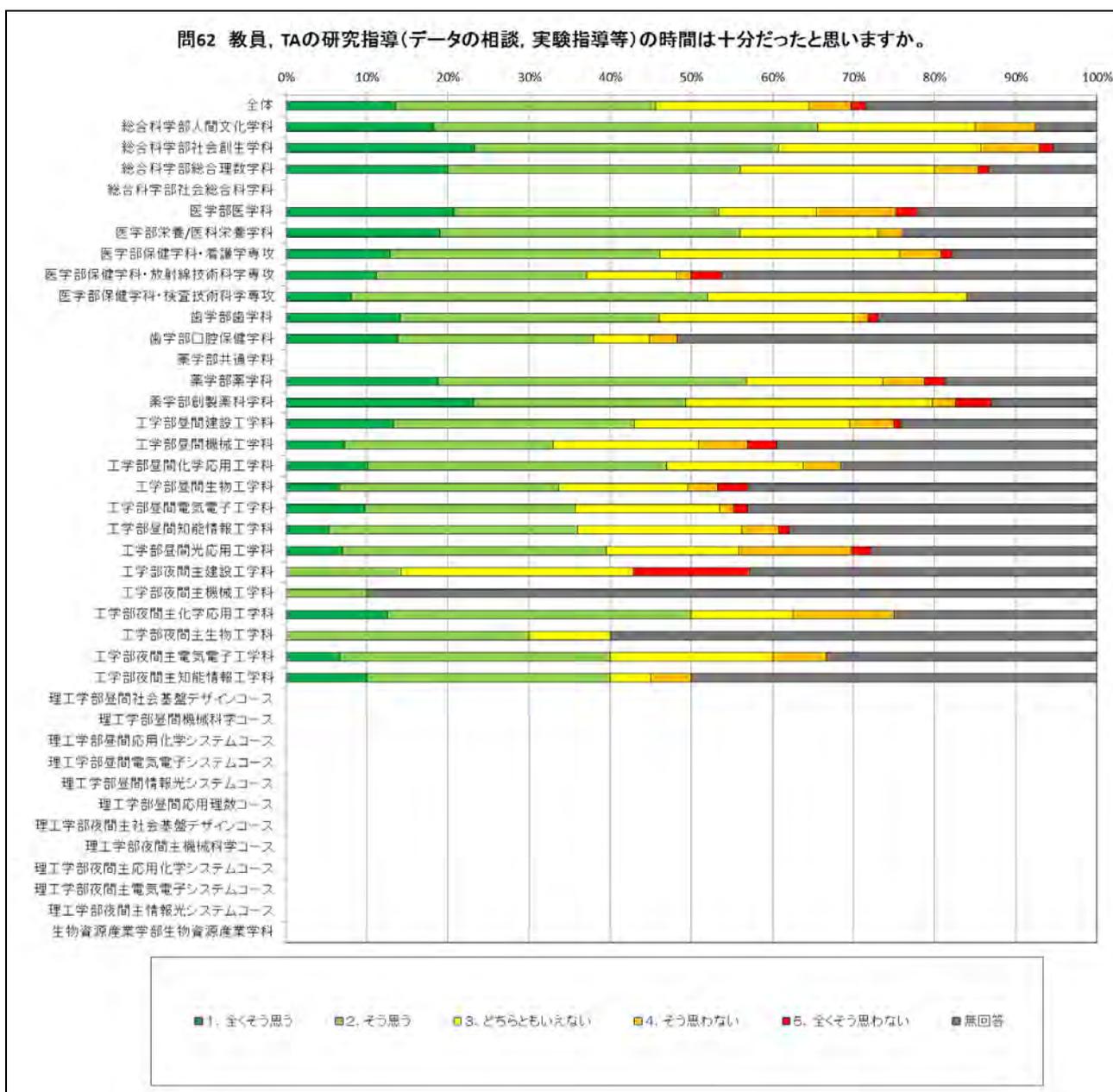
研究室配属で得られるものについて「特に得るものはない」と回答する学生は少なく、殆どの学生が研究室配属後の生活に何らかの価値を見出しているという結果になった。特に「専門的知識や技術」を選択する学生が多いが、総合科学部, 医学部, 歯学部, 薬学部では「学問・研究への興味や知的な好奇心」を選択する学生も多い。また薬学部では他の学科・専攻・コースと比べて「プレゼンテーション能力」を挙げる学生も多い。



7-3 教員，TAによる研究指導時間の満足度

(3, 4年生または該当する学生のみ)

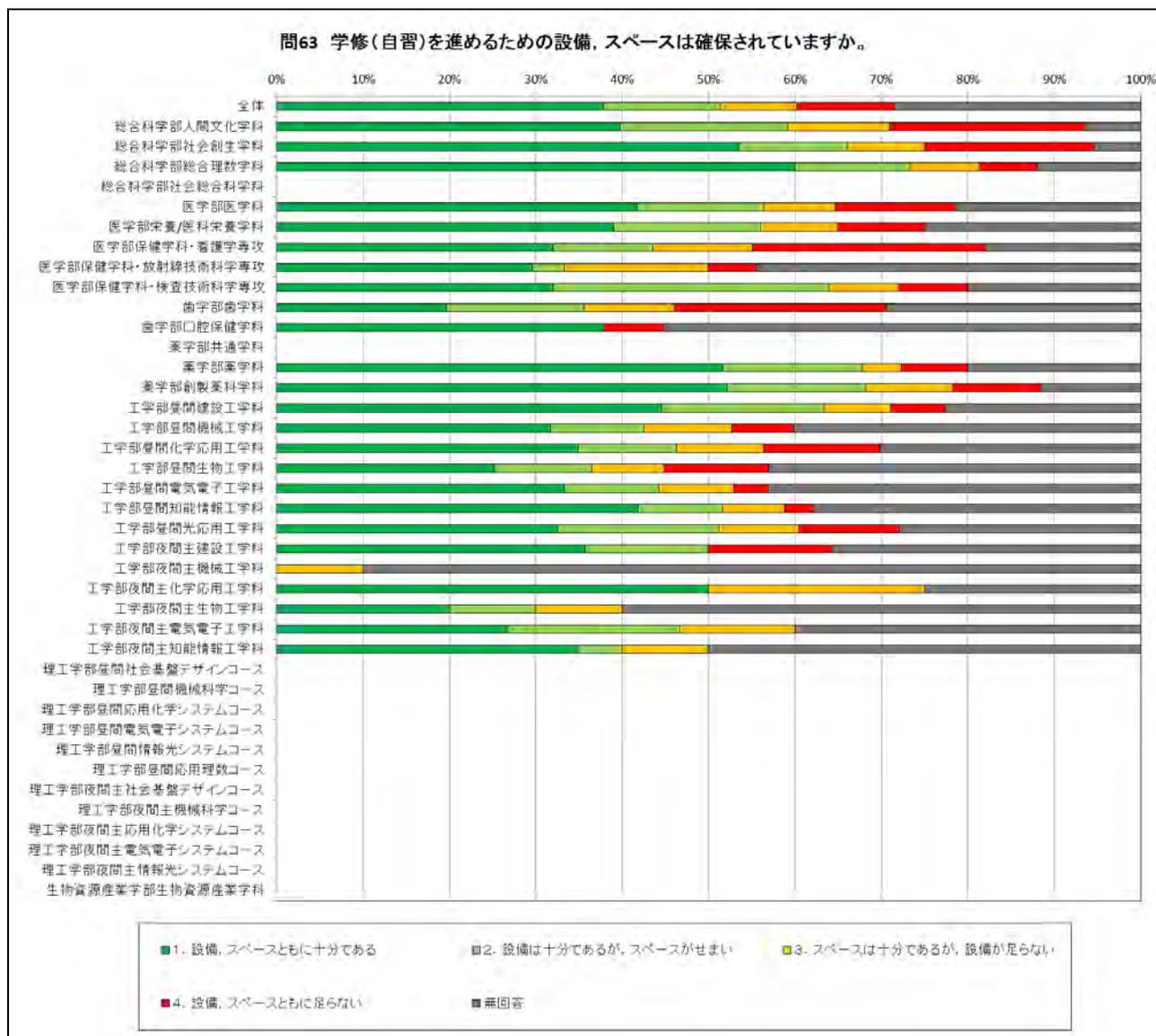
教員・TAの研究指導の時間は十分だったかについて、全ての学科・専攻・コースにおいて、「そう思わない」「全くそう思わない」を選択した学生は少なく、研究指導には概ね十分な時間が割かれていると考えられる。



7-4 学修（自習）設備，スペースの満足度

（3，4年生または該当する学生のみ）

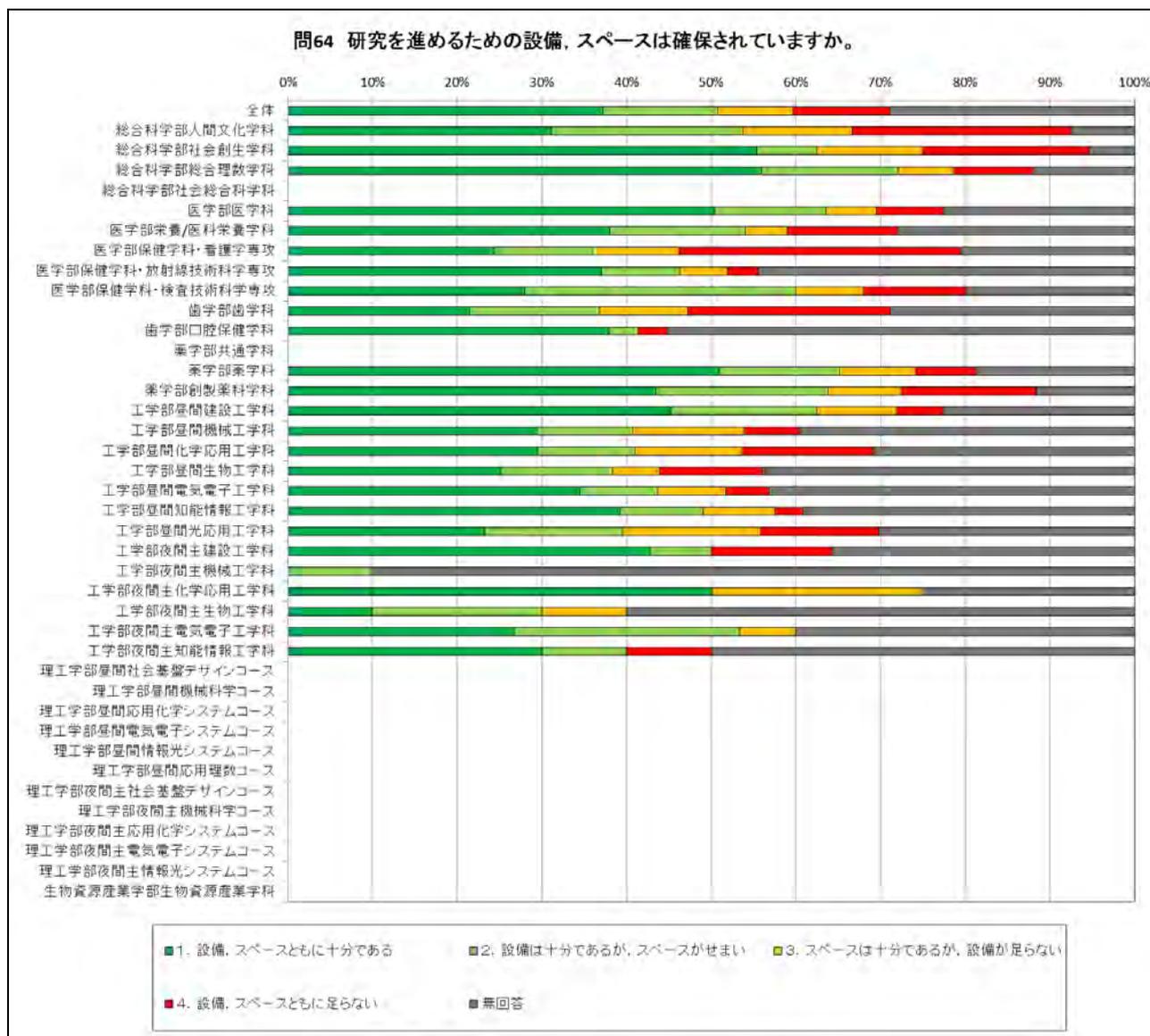
自習スペースの整備状況については、「設備・スペースともに十分である」と回答した学生が全体の38%を占めており、適切な環境整備が為されているといえよう。一方、「設備は十分であるが、スペースがせまい」や「設備、スペースともに足りない」という回答も、概ね全ての学科・専攻・コースにおいて1割～3割弱程度存在しており、改善の余地が残されている可能性が示唆される。



7-5 研究設備, スペースの満足度

(3, 4年生または該当する学生のみ)

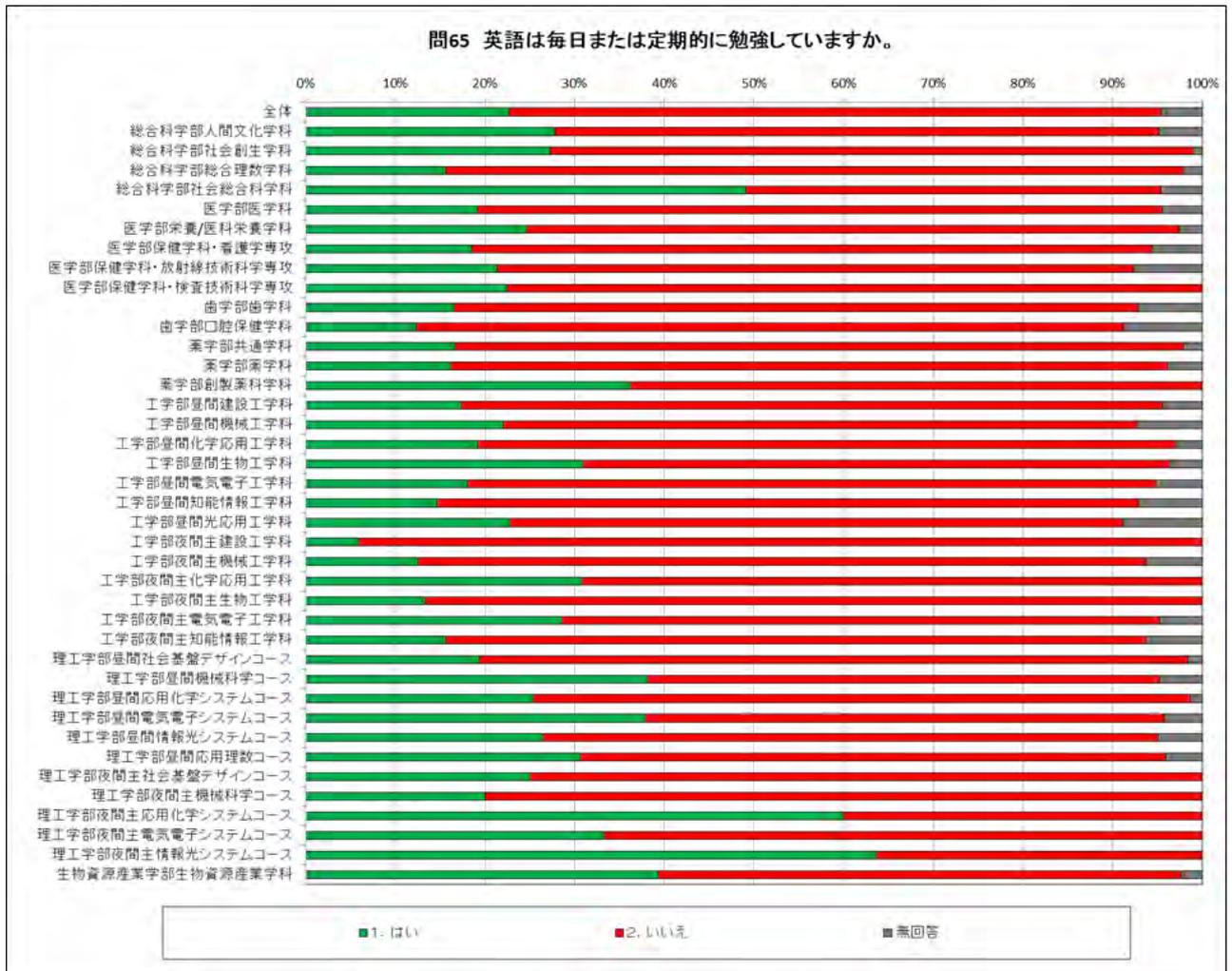
研究のための設備・スペースの配備状況については、回答者の37%が「設備・スペースともに十分である」と回答しており、概ね適切な環境整備が為されているといえる。



第8章 英語学修・教育について

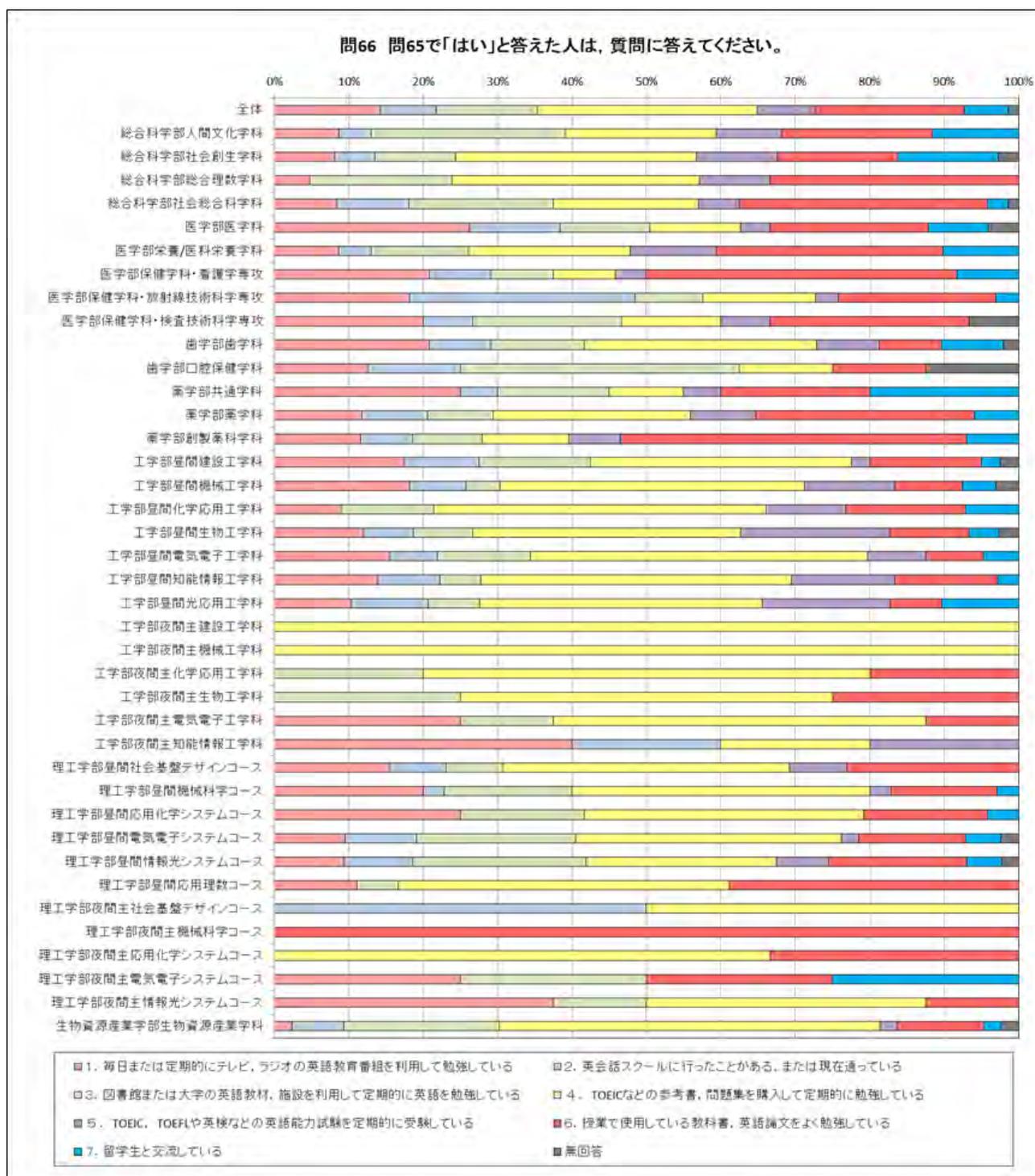
8-1 英語学修の時間

英語の定期的な学習は、前回同様全般的に「いいえ」が7～8割を占めているので、授業以外で定期的に自学している学生は少ない。その中でも比較的「はい」が多いのは、総合科学部総合科学科が5割、生物資源産業学部と理工学部機械科学コースと電気電子システムコースが4割弱、薬学部創製薬学科が3.5割である。



8-2 英語の学修方法

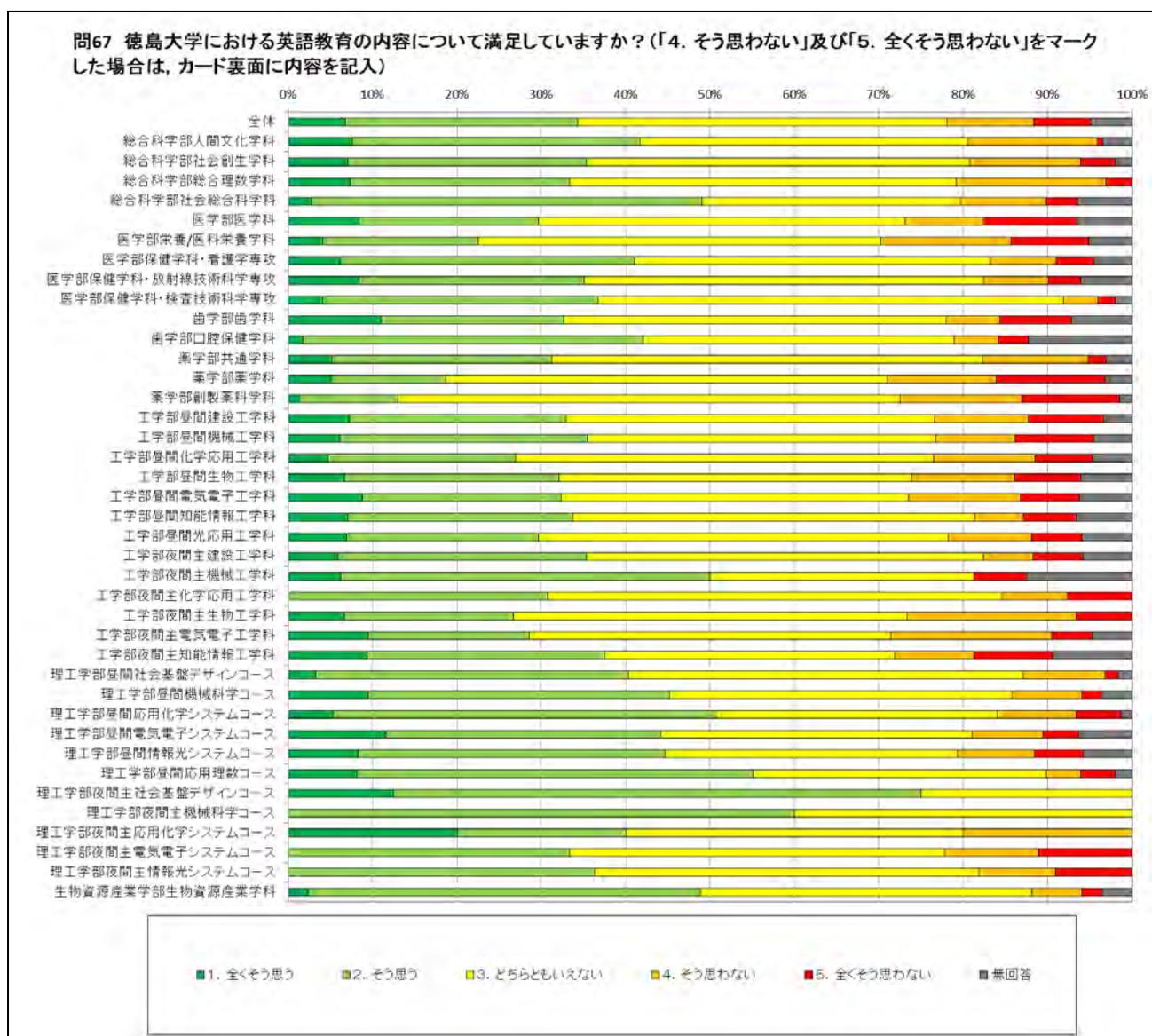
英語学習の方法はかなり多様であるが、前回同様全般的に「授業で使用している教科書、英語論文をよく勉強している」と「TOEICなどの参考書や問題集を購入して定期的に勉強している」が比較的多い。それ以外で目立つのは、歯学部口腔保健学科では「図書館または大学の英語教材、施設を利用して定期的に英語を勉強している」が一番多く4割ほどあり、積極的に大学施設を利用して学習している様子が窺われる。



8-3 本学の英語教育の満足度

今回の調査で新しい設問である「徳島大学の英語教育に満足しているか」では、「どちらともいえない」を除くと、肯定的な「全くそう思う」と「そう思う」が3～4割を占め、否定的な「そう思わない」と「全くそう思わない」の1～2割より多い。一番満足しているのは総合科学部総合科学科が5割弱、やや不満が多いのは、薬学部が3割弱、工学部夜間主生物工学科と電気電子工学科が3割近くで目立っている。

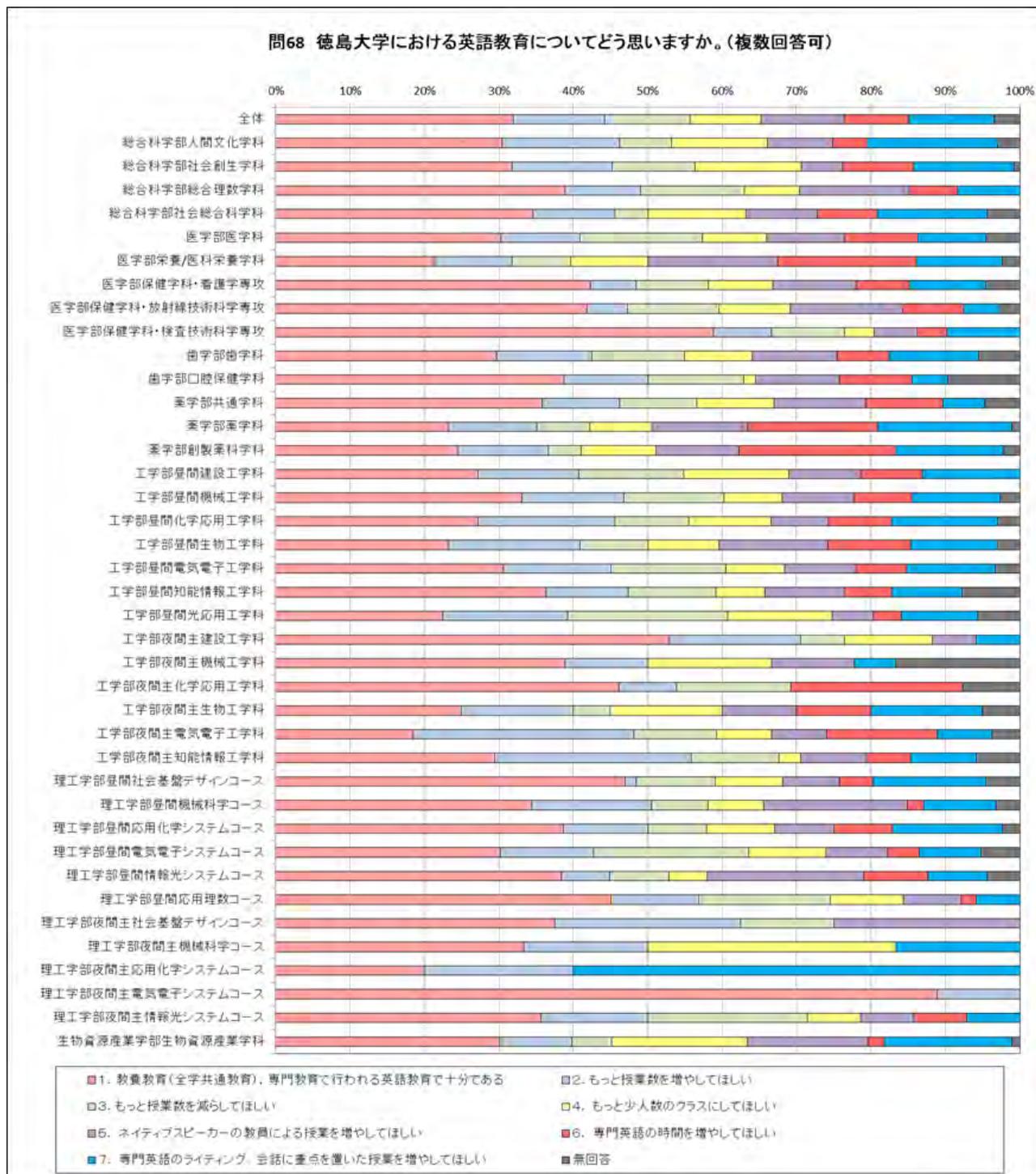
徳島大学の英語教育の内容に満足しているかの問いで「4. そう思わない」、「5. 全くそう思わない」をマークしたもののからの自由記述（約60件）の中で約半数から、中学生レベル、高校レベル、役に立たない、実践的でない等、授業のレベルが低すぎるとの指摘が目立った。さらに授業の難易度が教員により異なっていることを指摘する声が多かった。またもっと専門科目と関連する内容 TOEIC 等の対策になるような内容を扱って欲しいとの記載が見られた。



8-4 本学の英語教育への要望

英語教育の時間数では、全体的に概ね3～5割が「教養教育、専門教育で行われる英語教育で十分である」と回答している。無回答を除いた「もっと授業数を増やしてほしい」と「もっと授業数を減らしてほしい」では、要望が拮抗していることから、時間数は現在のままで十分だと思われる。英語学習についての自由記述の中に、医学部や総合科学部の学生からの意見として、「内容が簡単すぎる」、「内容が低レベルである」との指摘があるので、学習内容にレベルについては担当教員は学部を考慮する必要があるようである。

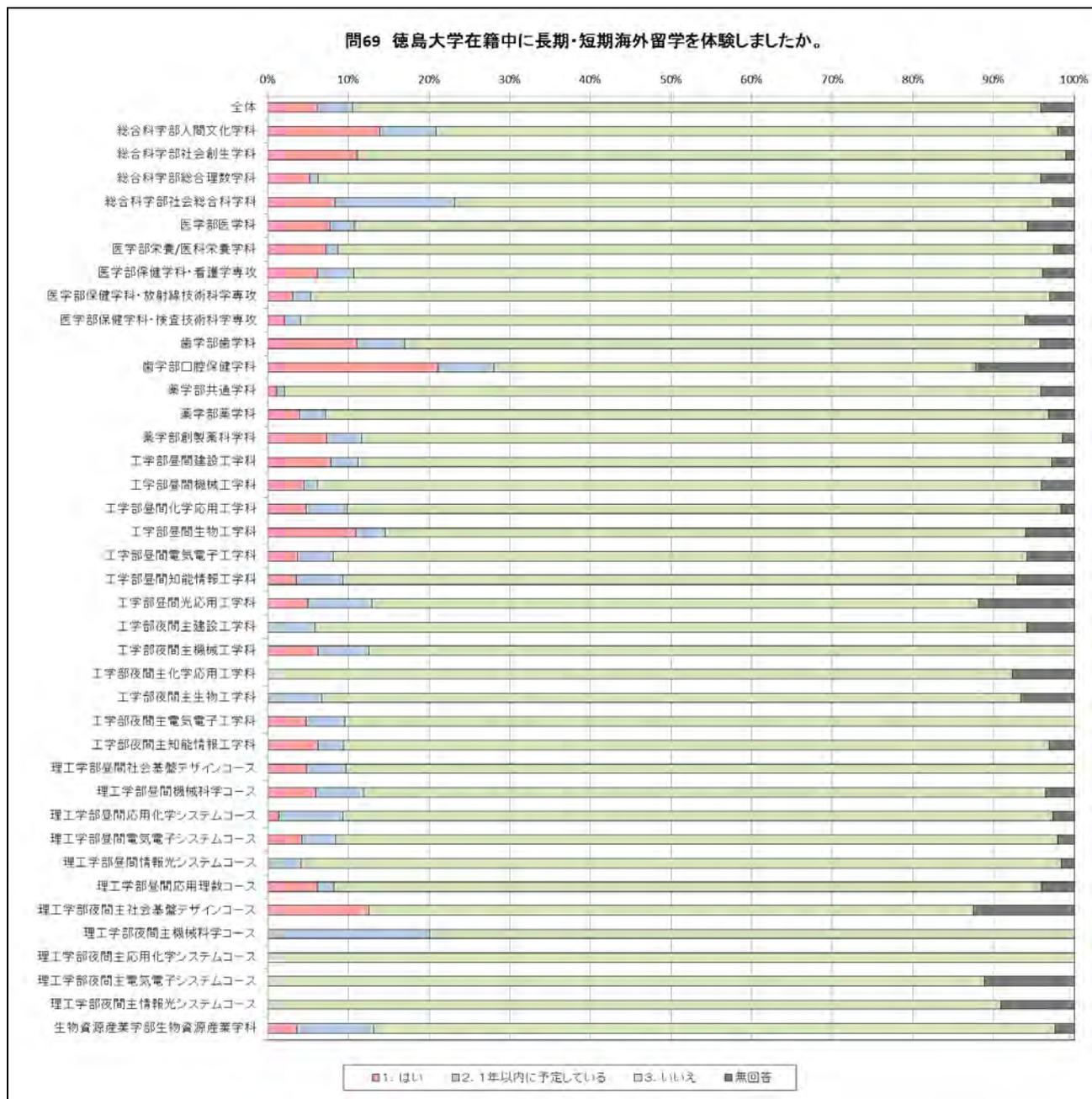
※複数回答可の項目のため、本文中の数値は、グラフ上で示される割合と異なるので注意が必要



第9章 海外留学について

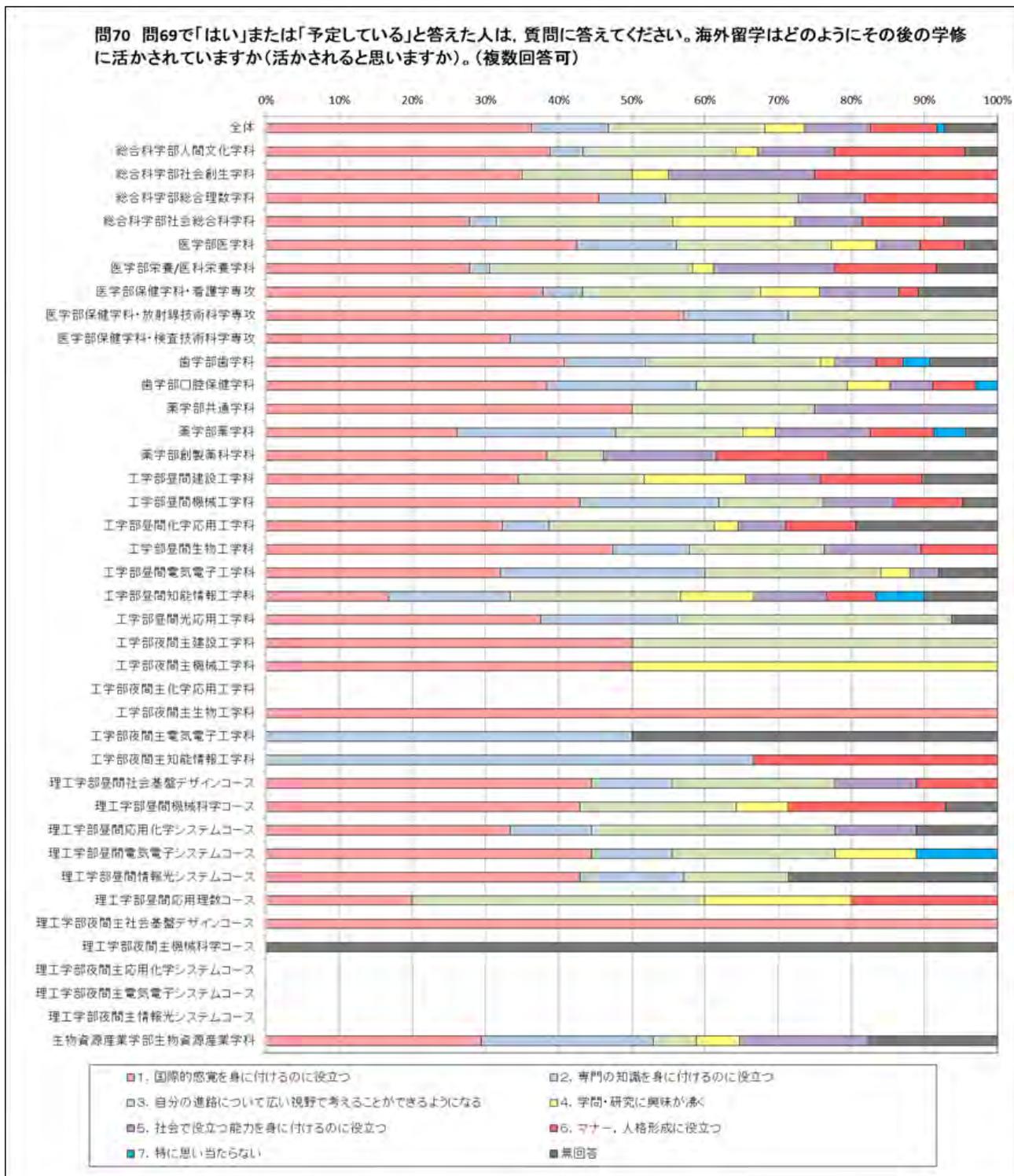
9-1 海外留学体験

海外留学体験については、設問「はい」と「一年以内に予定している」が全体で1割ほどしかなく、数が少ないのが現状である。比較的多いのは、歯学部口腔保健学科が3割弱、総合科学部人間文化学科と社会総合科学科が2割強である。海外留学は経済的な条件が揃わないと難しいので、なかなか本人の希望だけでは難しいと思われる。



9-2 海外留学で学び得ること

海外留学で得られることとしては、やはり全体的に「国際的感覚を身につける」が一番多い。その他は学科によってまちまちであるが、「自分の進路について広い視野で考えることができるようになる」や「学問・研究に興味を沸く」が多い学科も目立つ。



9-3 海外留学を行わない理由

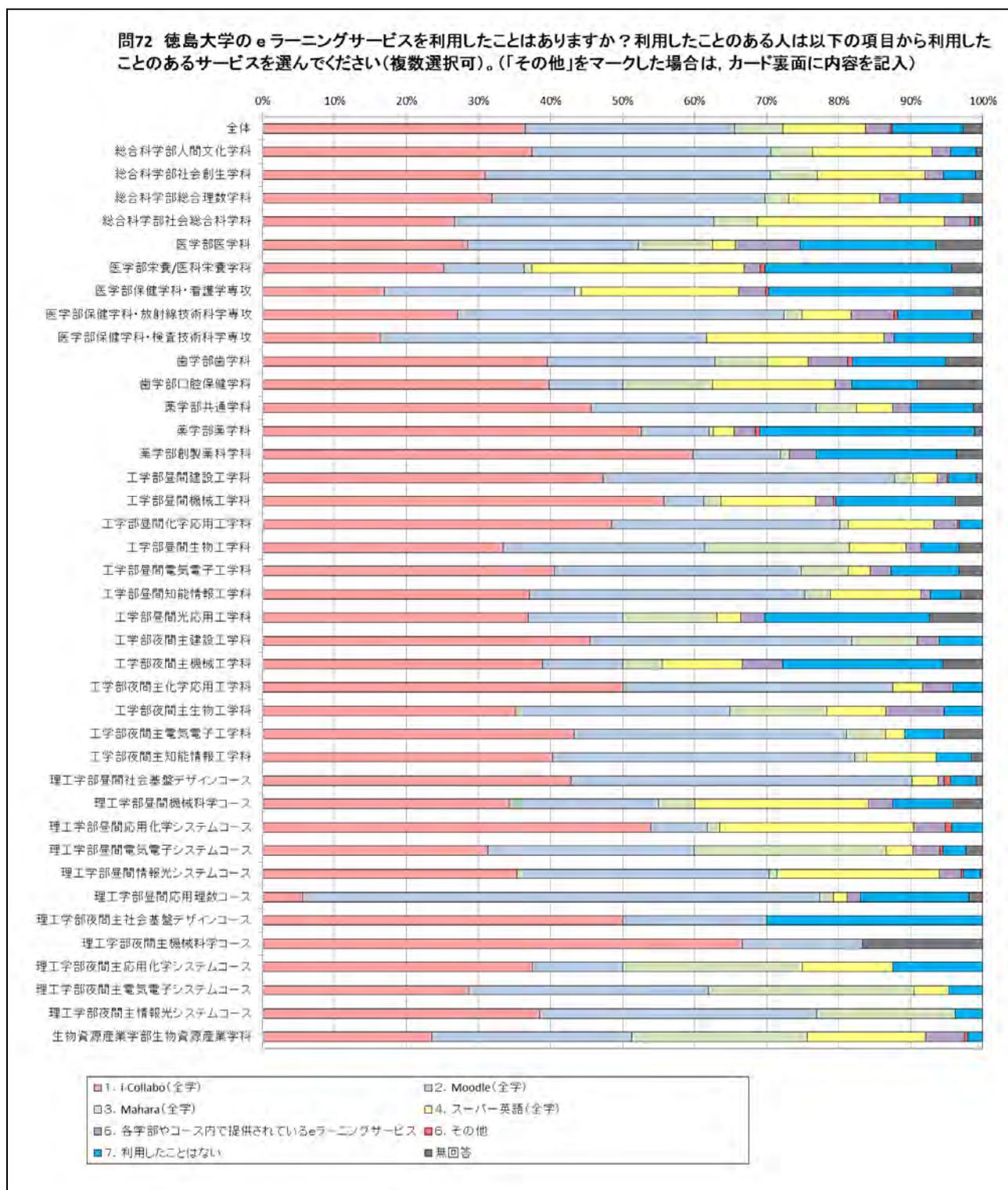
海外留学しない理由は、どの学科・コースでも「海外留学を行いたいですが資金的な援助が十分でない」と「専門教育においては短期でも時間的に海外留学を行う余裕がない」という回答が多い。しかしそれにもまして「全く興味がない」が目立って多いので、今後支援の課題としては、資金援助をしながらいかに魅力的な海外留学プログラムを提供するかが上げられると思われる。



第10章 eラーニングについて

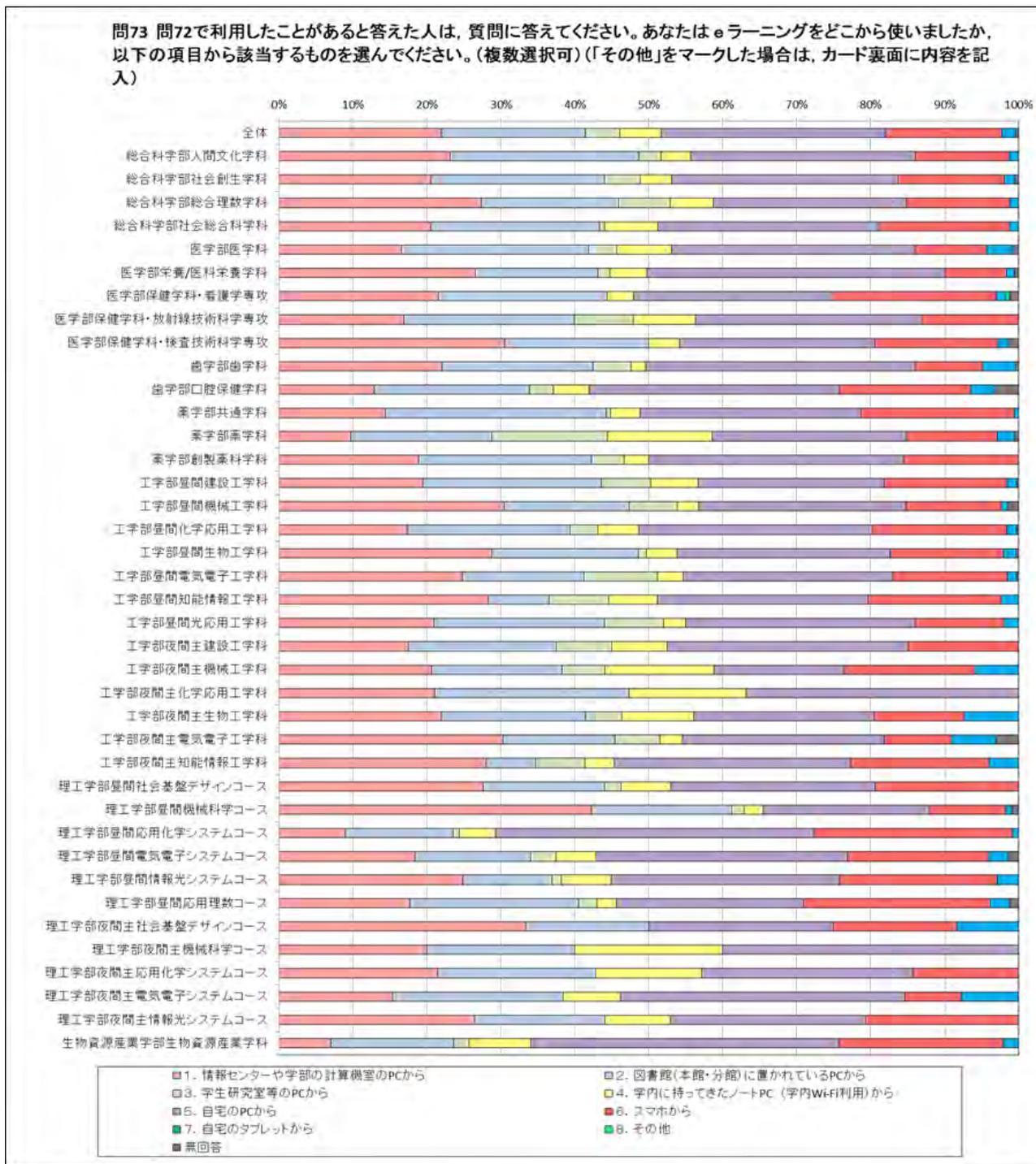
10-1 eラーニングサービスの利用

全体的に各種 eラーニングは用いられている。中でもLMS（i-Collabo と Moodle）が利用されている。総合科学部社会総合科学科、理工学部昼間機械科学コース、理工学部昼間応用化学システムコース等では、スーパー英語の利用が高く、1年生の利用増を表していると思われる。



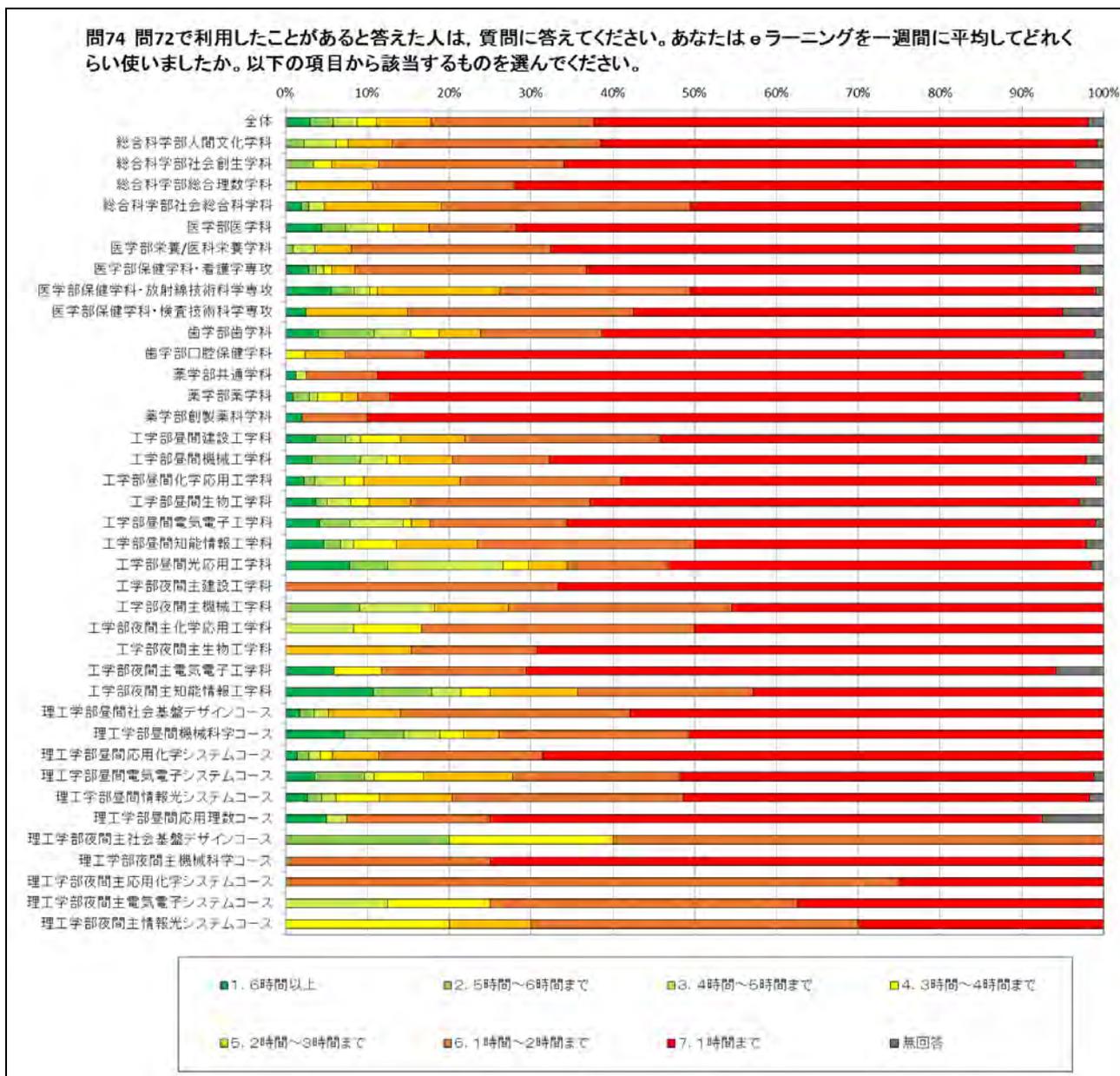
10-2 eラーニングの利用場所

学生のeラーニングサービス利用の環境は、学内に整備された計算機室や図書館PC、自宅PC、スマホからと多様化していることが分かる。学生は、いろいろな場所から、そのときどき活用している姿が想像される。また、スマホ利用は、全体的にみて一定の割合を占めており、今後もスマホの割合は増えることが予想される。



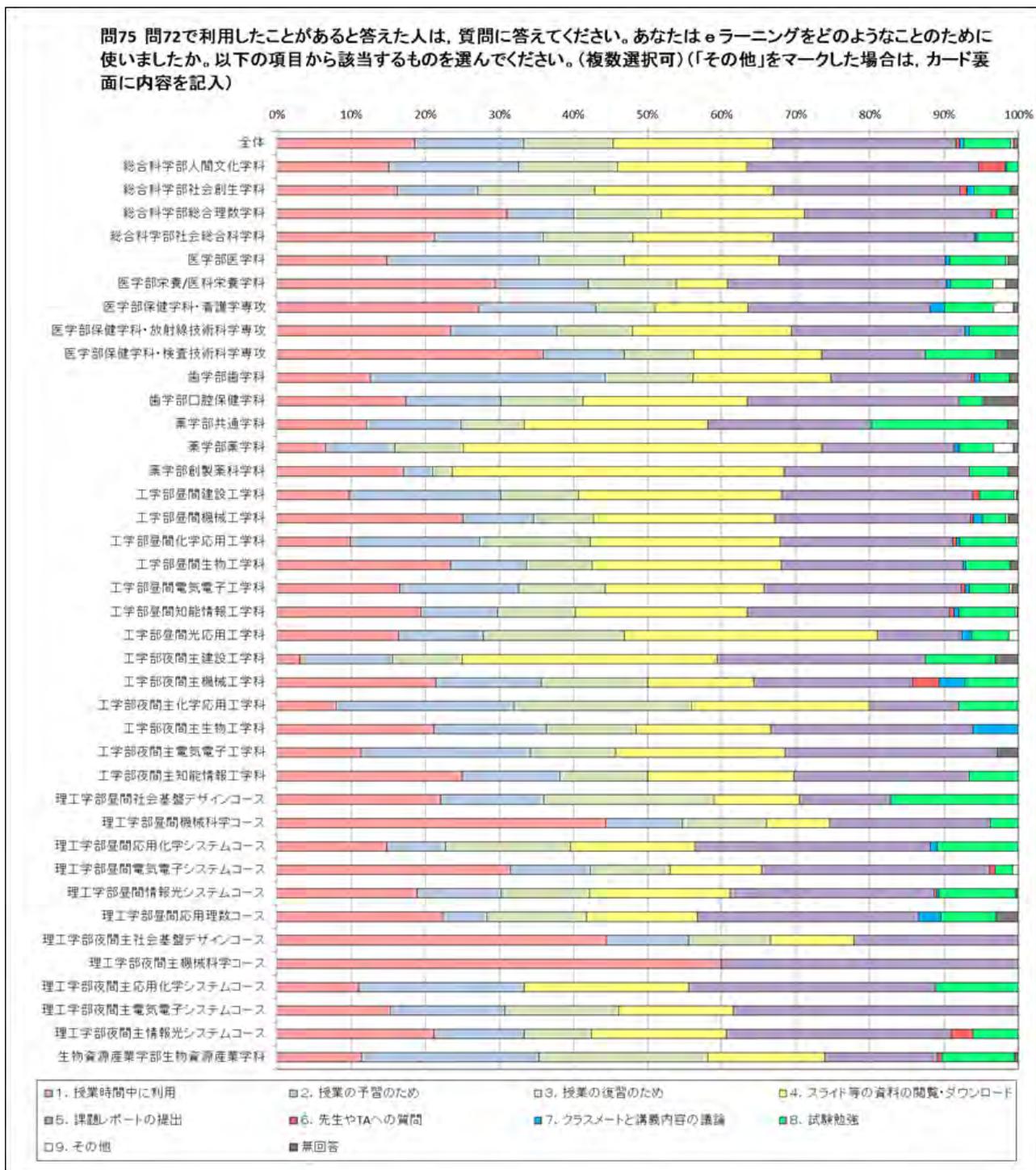
10-3 eラーニングの使用時間

全体的には1週間に1時間程度の利用が60%超と一番多く、学修の実質化のためにはさらに利用が増えることが望まれる。生物資源学部の学生は、他の部局等と比べて、利用時間が長いことが分かる。工学部、理工学部 of 学生も、他の部局と比べると、やや利用時間が長い傾向にあると思われる。



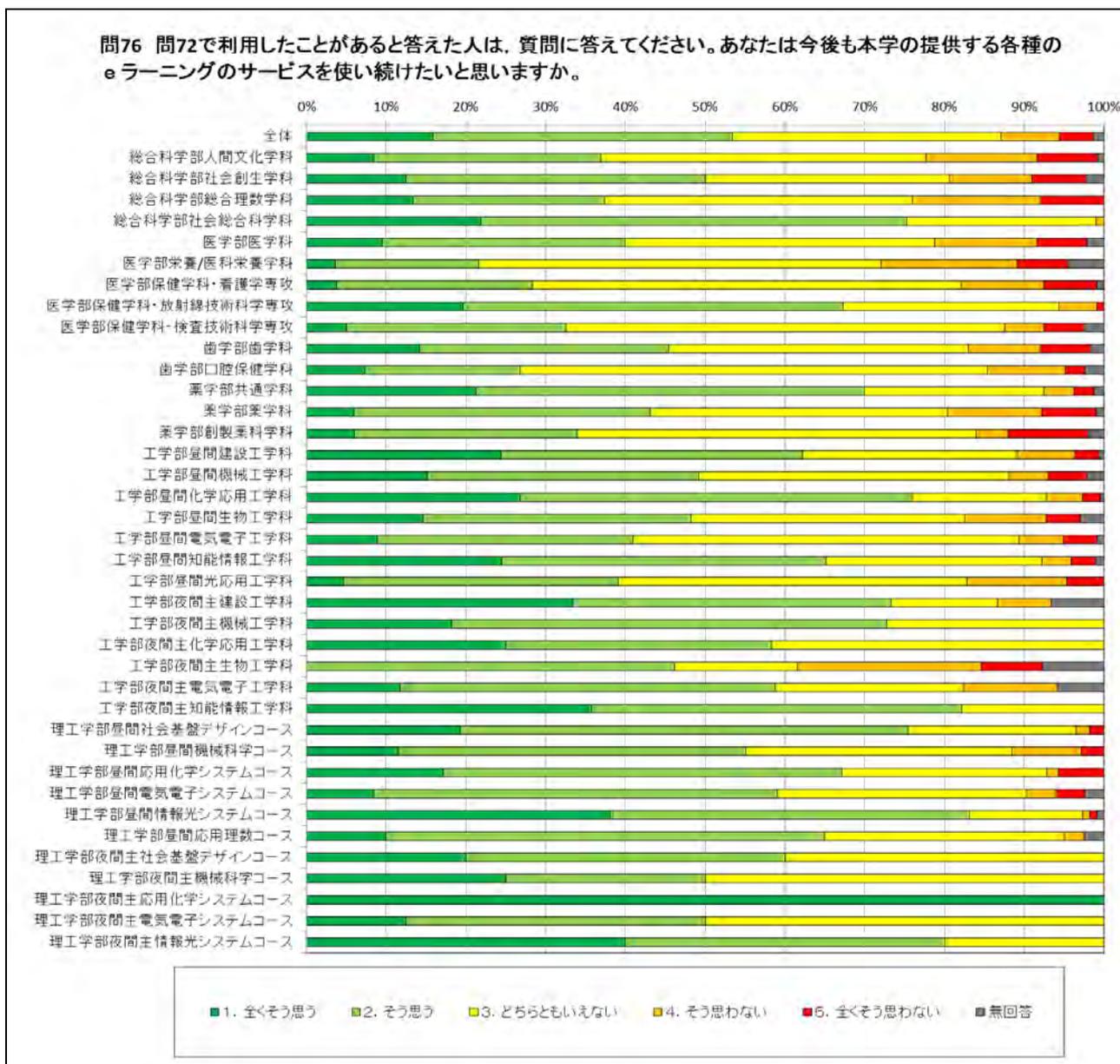
10-4 eラーニングの利用目的

eラーニングの利用目的は、全体的には各項目に散らばっていることが分かる。eラーニングの活用が多様化していることが見受けられる。授業時間中の利用が、全体、各部局等のいずれも一定の割合で存在しており、授業のICT活用は進んでいると思われる。また、復習だけではなく予習での利用という回答が一定の割合で存在しており、反転学習等での利用が始まったことが推測される。



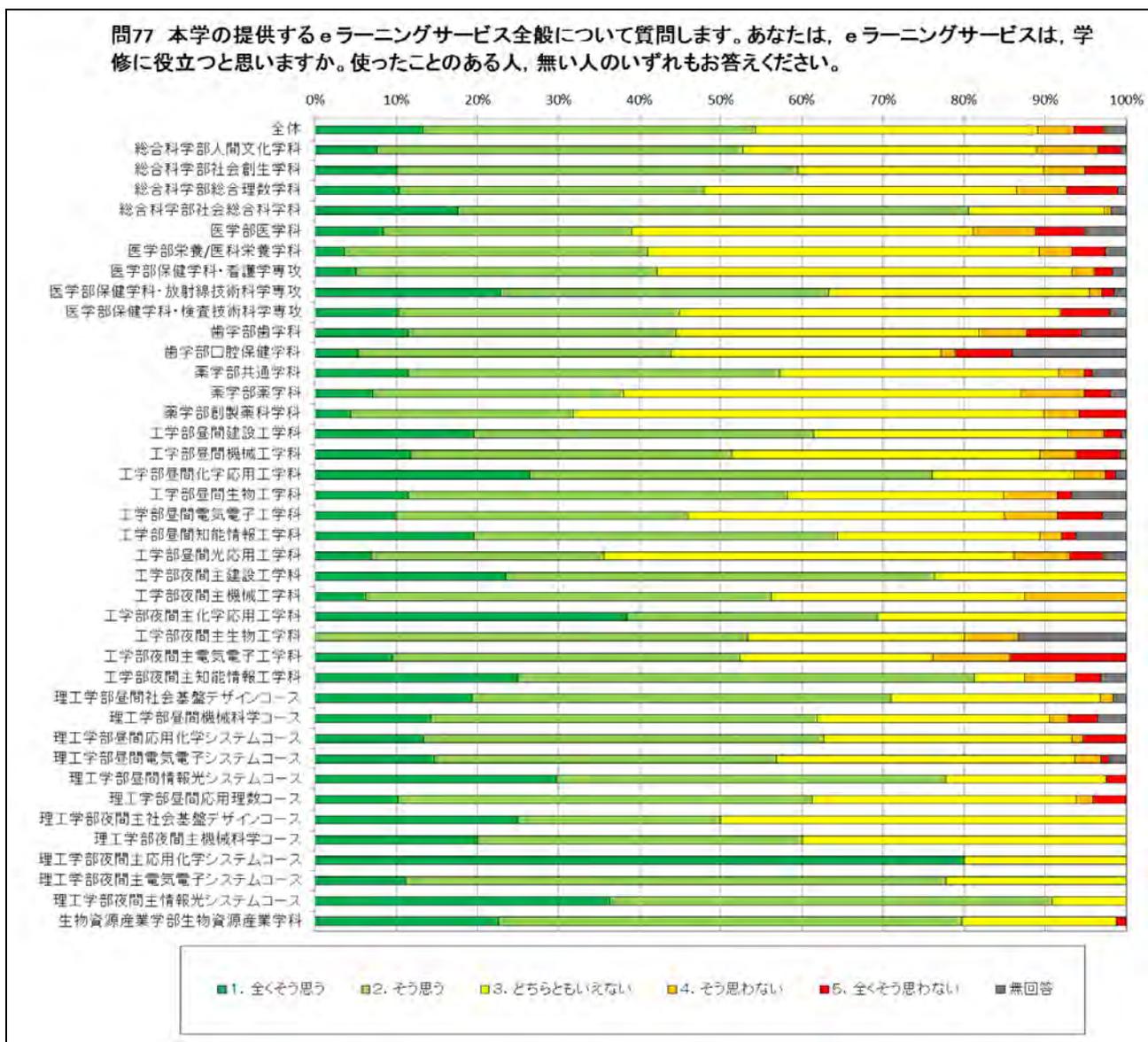
10-5 今後のeラーニングの利用希望

全体としてeラーニングの利用に満足している学生は50%を越えている。総合科学部社会総合科学科、薬学部薬学科、工学部昼間化学応用工学科、工学部夜間主建設工学科、工学部夜間主機械工学科、工学部夜間主知能情報工学科、理工学部昼間社会基盤デザインコース、理工学部昼間情報光システムコース、生物資源産業学部では「1. 全くそう思う」「2. そう思う」が70%を超えており、高い値を示している。



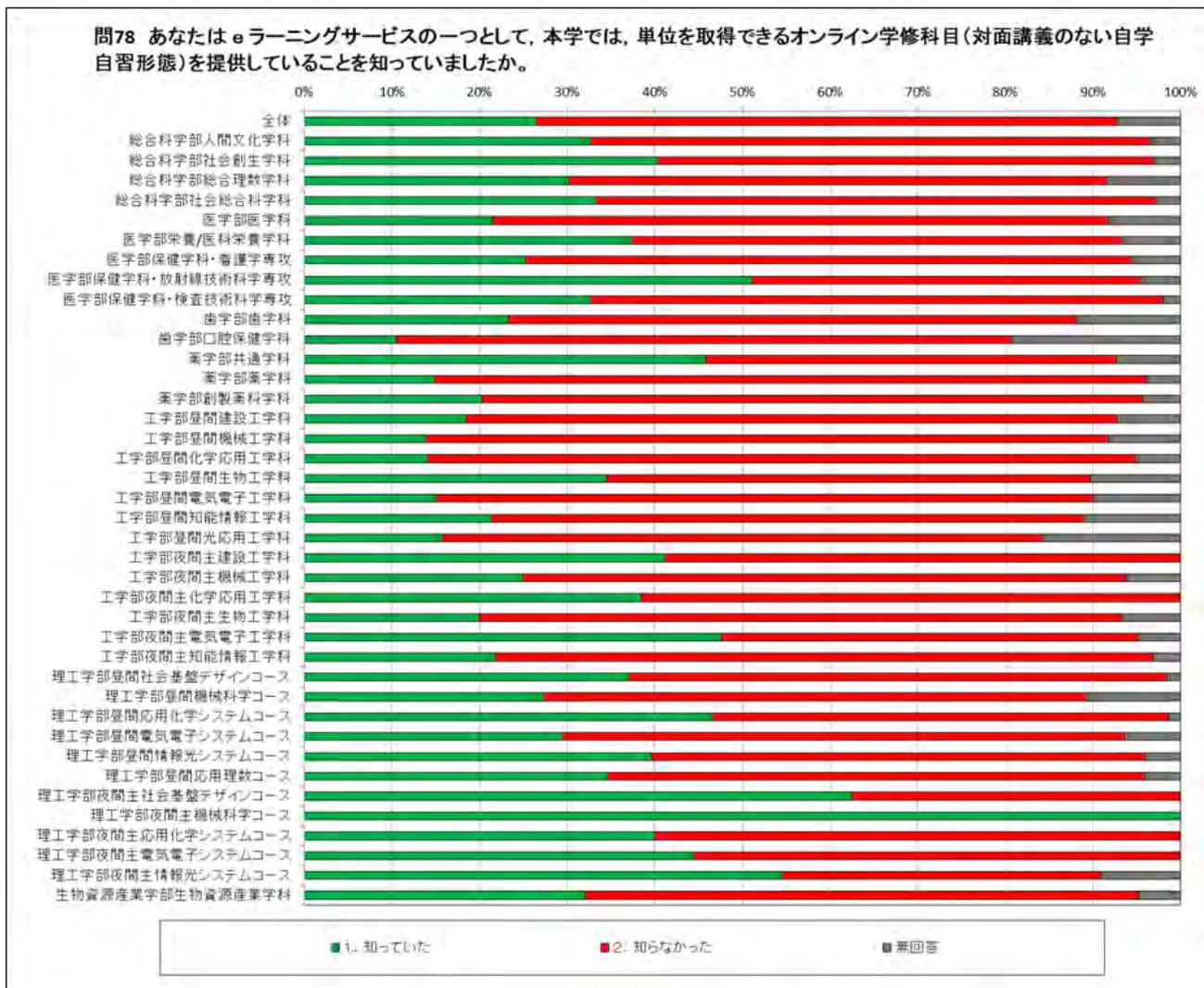
10-6 eラーニングの学修効果

eラーニングの学修効果について、全体では50%を越える学生が肯定的に捉えている。総合科学部社会総合科学科、工学部夜間主知能情報工学科、理工学部昼間情報光システムコース、生物資源産業学部などでは「1. 全くそう思う」「2. そう思う」が80%前後の値を示しており、学生はeラーニングに対する可能性を強く感じていることが分かる。



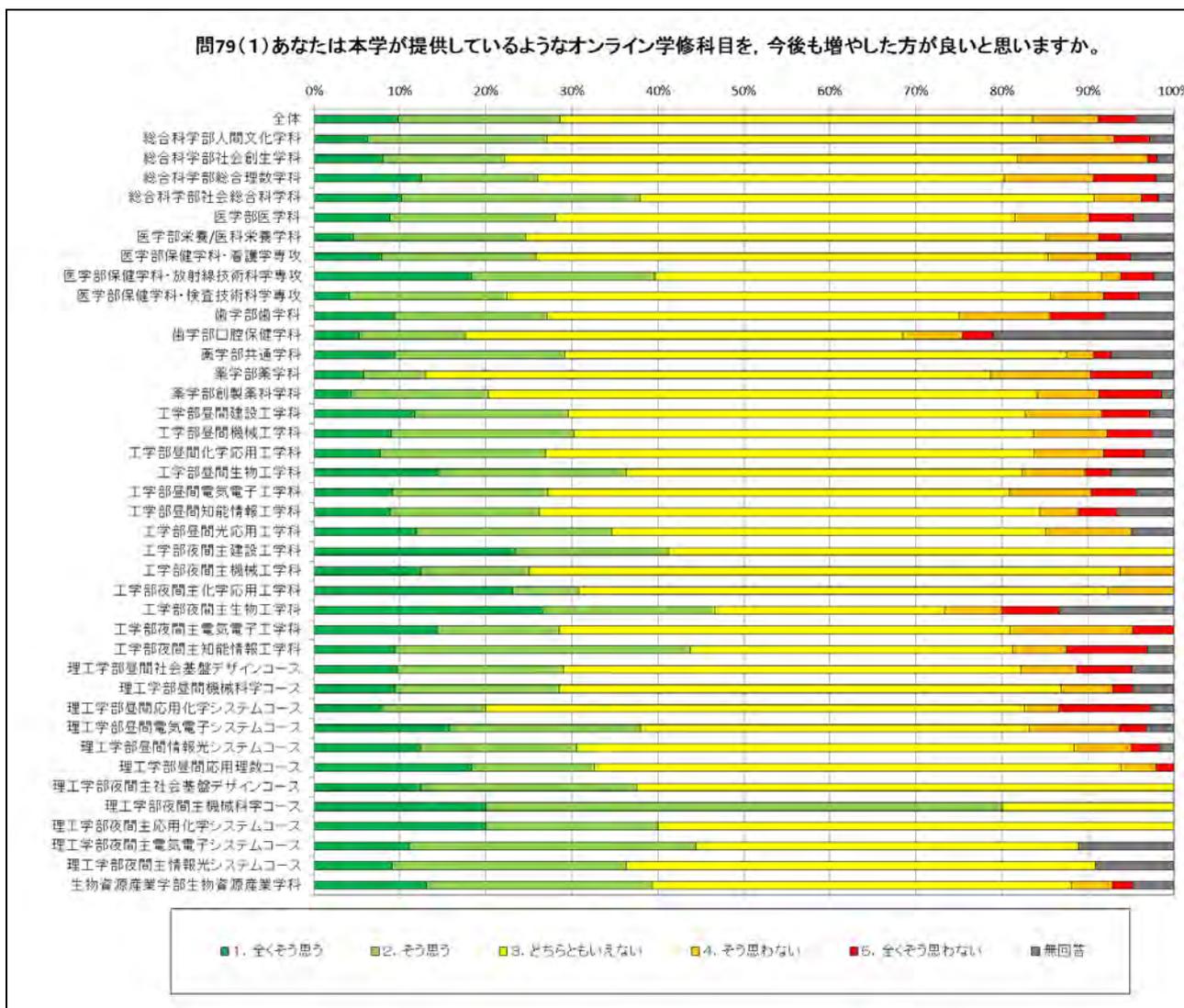
10-7 オンライン学修科目の提供

オンライン学修科目を知っている答えた学生は、全体では26%であり認知度は広がっているとは言えない。その中で、医学部保健学科・放射技術科学専攻では51%の学生が「1. 知っていた」と答えている。部局間での理解度のばらつきが大きいと言える。



10-8 オンライン学修科目への要望

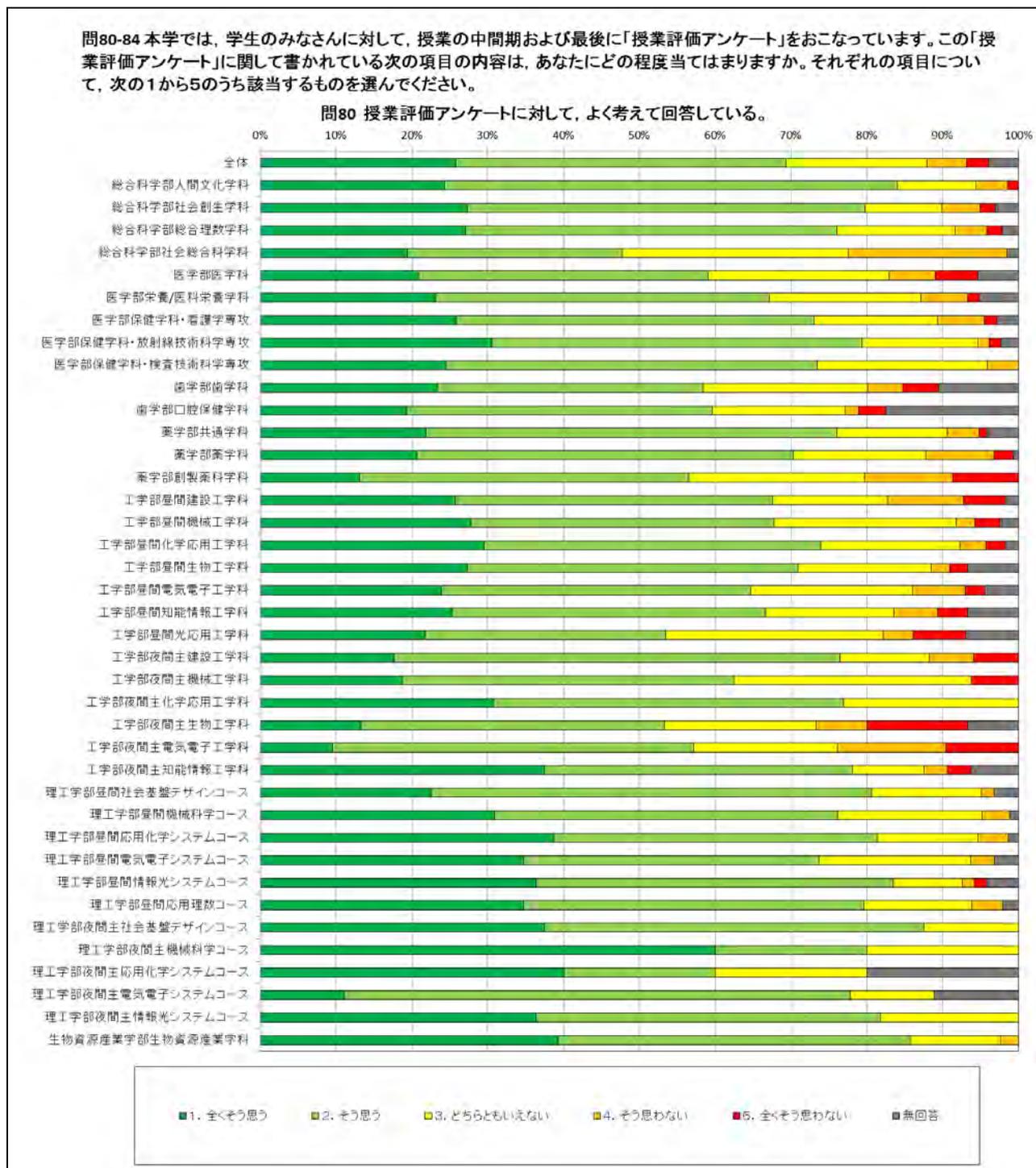
「1. 全くそう思う」「2. そう思う」の肯定的な意見は全体で29%であった、問29の結果とほぼ同じであるといえる。「3. どちらとも言えない」が大半を占め、54%であった。オンライン学修科目に対する学生の理解を深める必要があることが明らかになったと言える。総合科学部社会総合科学科、医学部保健学科・放射技術科学専攻、工学部・理工学部の夜間主の学科やコース、生物資源産業学部の学生は比較的オンライン学修科目に対する期待が高いように思われる。



第11章 授業評価アンケートについて

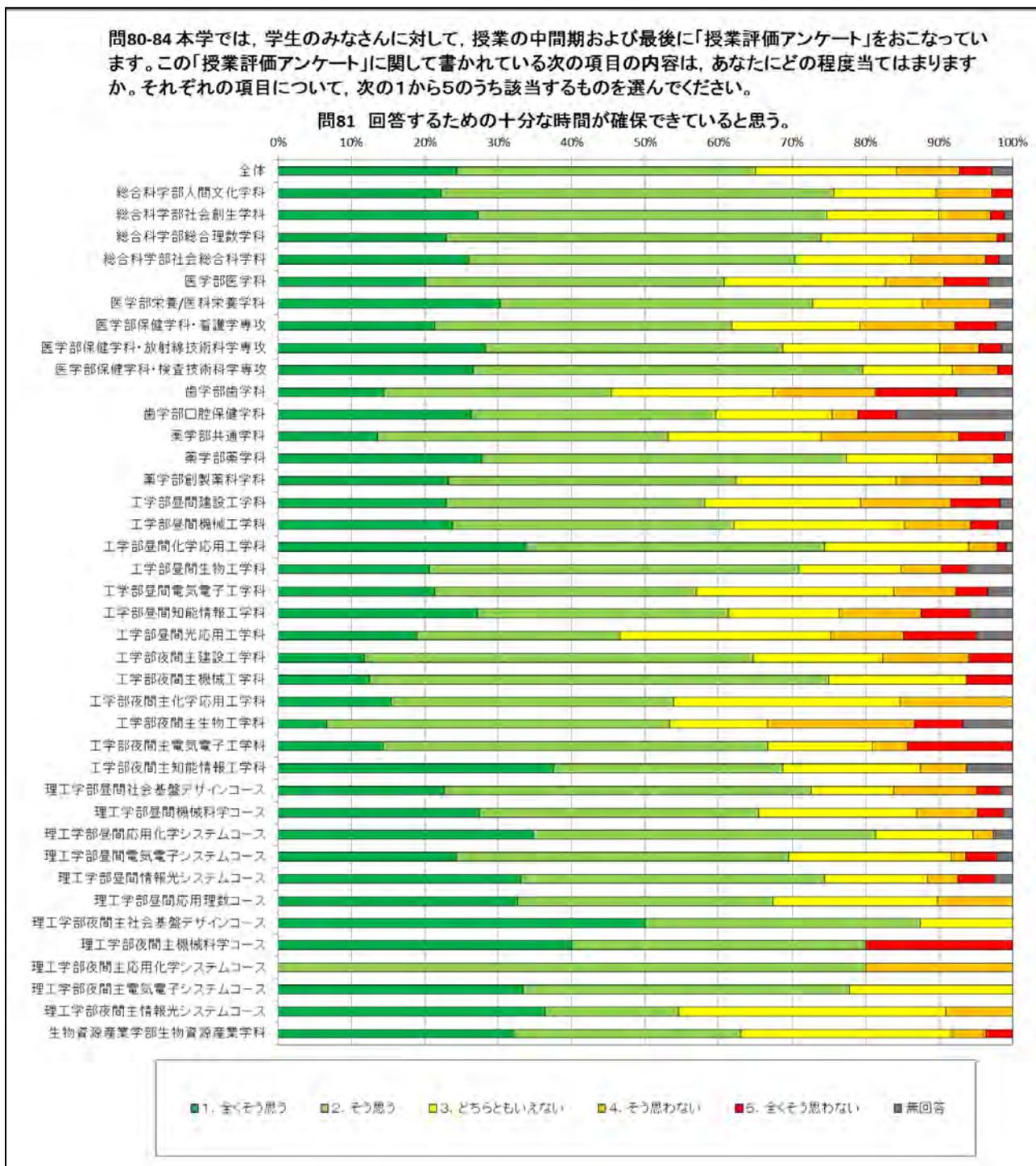
11-1 授業評価アンケートの回答姿勢

授業評価アンケートに対してよく考えて回答しているでは、学科・コースにばらつきがあるが、平均すると7割近くが肯定的な「全くそう思う」と「そう思う」と回答している。特に工学部や理工学部の夜間主コースの学生は8割近くが真面目に回答している。



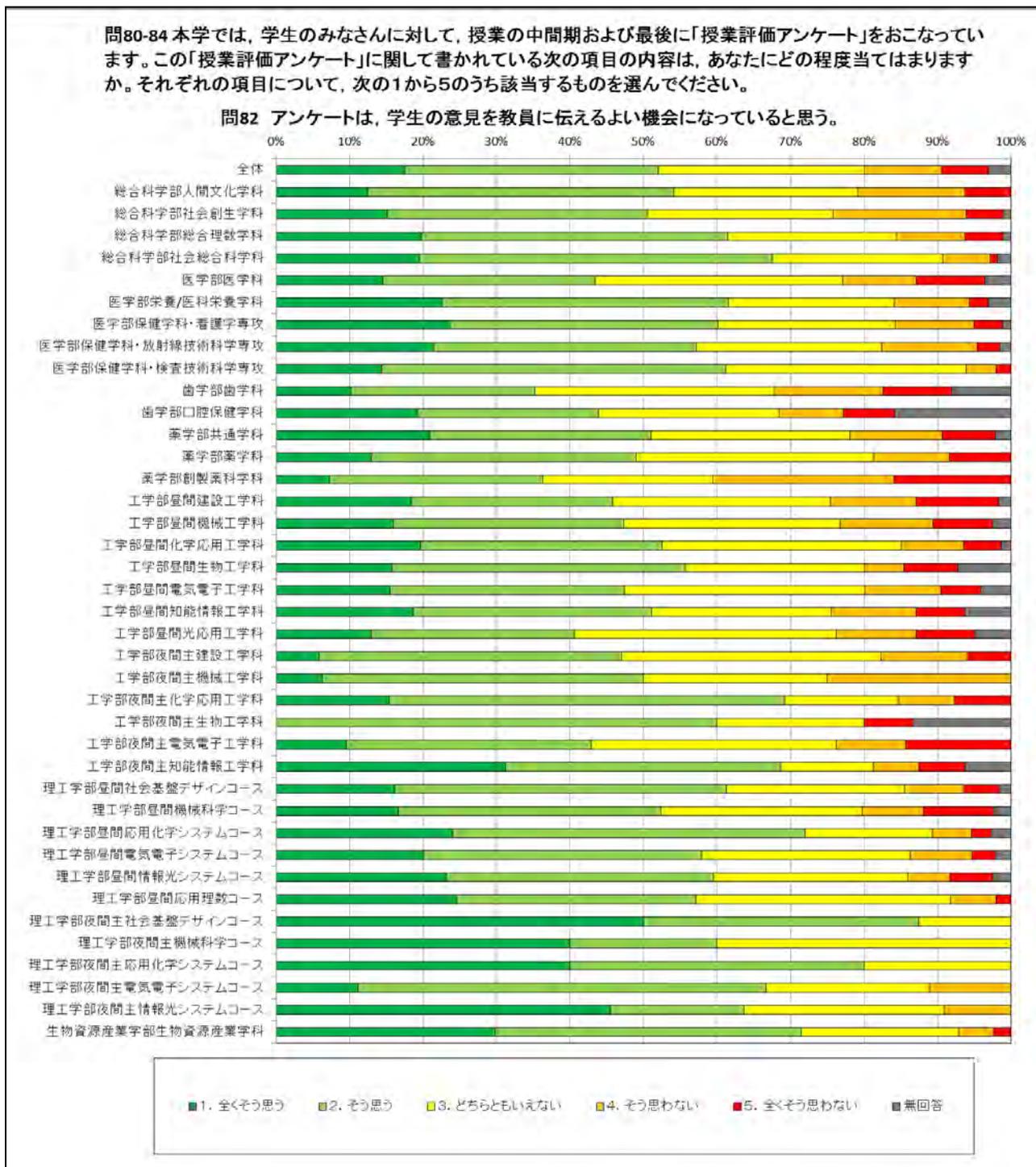
11-2 授業評価アンケートの回答時間

回答するための十分な時間が確保できていると思うの問いに対しては、肯定的な「全くそう思う」と「そう思う」という回答と「どちらともいえない」が、平均すると8割近くであるので、回答するには十分時間は確保されていると思われる。



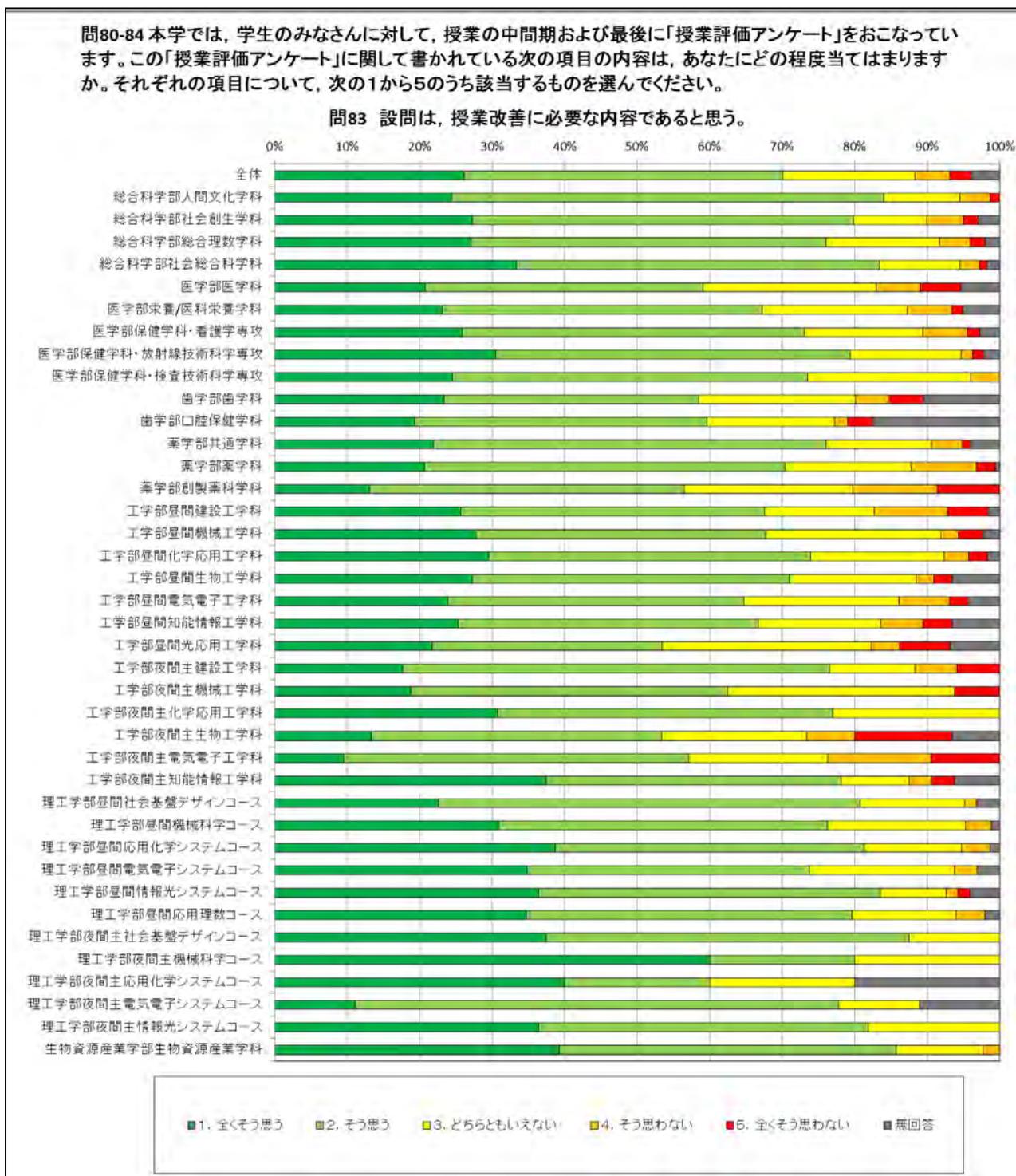
11-3 授業評価アンケートの効果（教員への意見伝達）

「アンケートは学生の意見を教員に伝えるよい機会になっていると思う」の問いに対しては、2～3割の「どちらともいえない」を除くと、肯定的な「全くそう思う」と「そう思う」という回答が、平均すると5～6割近くであるので、授業評価アンケートは授業を評価するには有用な方法だと考えられる。



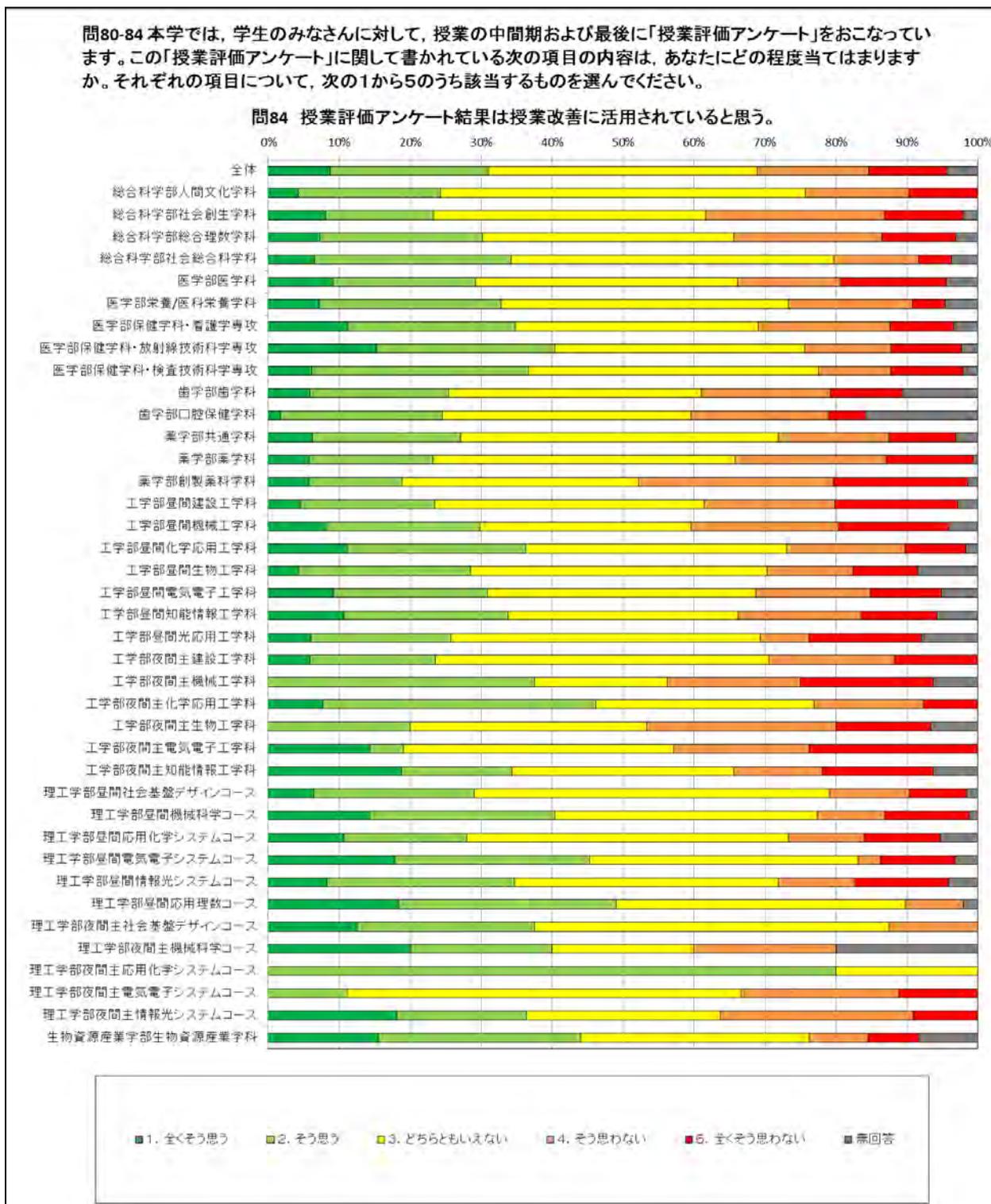
11-4 授業評価アンケートの設問内容

「設問は授業改善に必要な内容であると思う」の問いに対しては、2～3割の「どちらともいえない」を除くと、肯定的な「全くそう思う」と「そう思う」という回答が、平均すると7割近くであるので、授業評価アンケート項目は妥当であると考えられる。「どのような設問項目を追加したいか」という問いに対する自由記述には「この授業は面白かったか」、「宿題などの課題の量は適当だったか」、「授業評価アンケートは必要か」とかその他多数の意見が記載されていて、今後アンケート作成の際に考慮すべきものが見られる。



11-5 授業評価アンケートの効果（授業改善への活用）

「授業評価アンケート結果は授業改善に活用されていると思う」の問いに対しては、全体的に「どちらともいえない」が4割近くで授業評価アンケートの項目の中で一番多く、否定的な2～3割を足すと、肯定的な「全くそう思う」と「そう思う」という回答が、平均すると3～4割近くしかなく、学生は授業評価アンケート結果が十分に活用されていないと実感していることが浮き彫りになっている。いかに授業評価アンケートを学生にフィードバックするかが課題となっている。



11-6 授業評価アンケートの設問提案

問85 「授業評価アンケート」に設問を追加できるとしたら、どのような設問を提案したいと思いますか。具体的に書いてください。

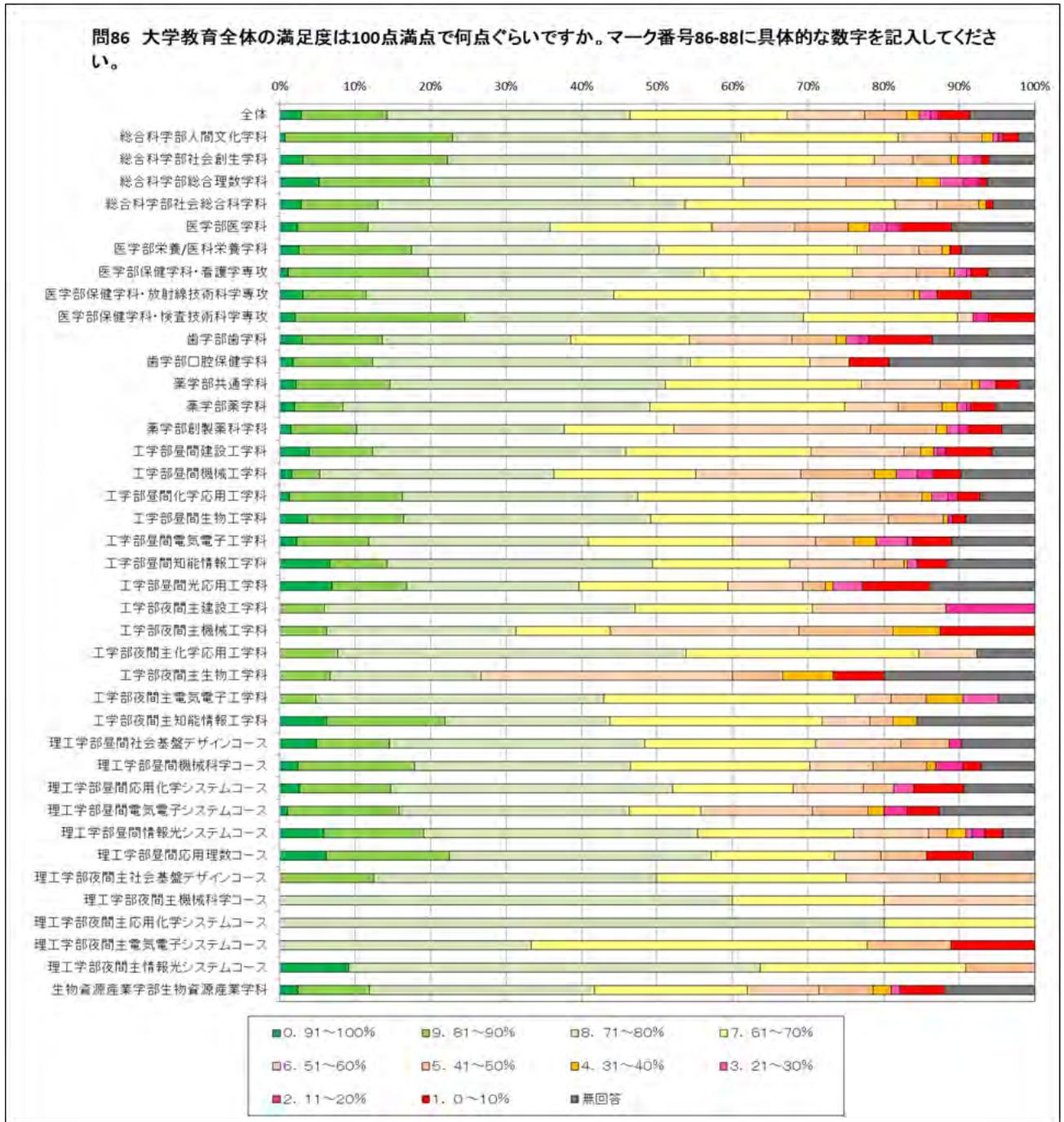
授業評価アンケートに設問を追加できるとしたら、どのような設問を提案したいか書いてもらったところ、このアンケートに答えたいかどうか？このアンケートに答えることに意味があると思うかどうか？を問うて欲しいという、アンケートへの回答に対する意志を表明できる設問の提案があった。また、シラバスとの整合性があったかどうか、学生の声に応じて改善が見られたかどうかなどの設問も希望していた。他にも、授業評価を科目ごとに行うのではなく、他の科目と比較しながら記入できるような様式にすること、教員間を比較したコメントが記入できるような様式のアンケートにすること、ウェブを利用したアンケートにすることなどの提案があった。

特に、今後は、ウェブを利用したオンラインアンケートによる方法が求められていた。この方法は、回答率は低くなるかもしれないが集計する側にも利点があり、学内全体での導入を検討する段階が来ているようである。

第12章 大学に関する評価

12-1 大学教育全体の満足度

全体の平均値は、68.1%であったが、学生が0～100%で答えた数値を10%ごとにまとめて集計した結果、全体では、71～80%の範囲が最も多く、32%の学生が評定していた。その次は、61～70%の範囲に21%の学生が評定した。最も高い評定平均となった学部は、総合科学部であり、71.9%、一方、最も低い評定平均は生物資源産業学部の65.5%であった。この質問項目に対する無効回答の割合が8.6%となり、大きな値となっている点が憂慮される。



12-2 徳島大学の教育改善についての提案

問87 徳島大学の教育を改善するには、何を、どうすれば良いですか？具体的に提案してください。

徳島大学の教育を改善するために、カリキュラム内容や授業方法、設備などについての意見が多く寄せられた。カリキュラムについては、卒業に必要な教養教育の単位数が多すぎることや専門科目を増やしてほしい等の意見が多く寄せられた。また、授業方法については、体験型の授業やディスカッションする授業を増やしてほしい等、講義中心ではなく体験して成長を実感できるような授業を望んでいる学生も多くいることが分かった。設備については、講義室が暑いことや空調調節が可能な自習スペースをもっと増やしてほしい等の意見が多く寄せられた。今回のアンケートの質問項目に対する意見も多く寄せられ、長くてやる気が起きにくい、設問を減らしてほしい等、学生がアンケートを負担に感じていることが窺えた。また回答方法についても、質問や選択肢の穴が気になり答える気が失せたやオンラインアンケートにすると記入する手間がかからないのでありがたい等、web 回答を求める声も多く、次回に向けて検討していきたい。

第13章 学部等の現状と課題

13-1 総合科学部

総合科学部の学習に関する現状と課題は次のとおりである。

将来の希望では、全学科共通で民間企業、行政機関への就職希望者が多いのが本学部の特徴である（問4）。また、これに加えて総合理数学科では、これまでと同様に教員を希望する学生が多く（36.3%）、さらに社会総合科学科では、NPOなど社会問題と積極的に関わる分野（9.1%）、国際的な分野への就職（10.3%）を希望する学生が多い。平成28年度より改組後の新学部となった総合科学部は、グローバル化する現代社会の諸問題、地域課題を的確に理解し、科学的思考性に基づいて問題を解決できる人材の育成を目指しており、この趣旨に見合った学生が入学していることがうかがえる。

大学教育に関して、在学中に獲得を期待している知識・能力として、人間文化学科、社会創生学科、総合理数学科では、「一般知識・教養」、「課題発見・解決力」、「コミュニケーション能力」などが多いのに対して、社会総合科学科では、「専門的知識」が少なく、「語学力」が多いのが特徴である（問9）。語学力に関連し、「留学体験者」、「1年以内に留学を予定している学生」は、社会創生学科で23.1%と大変高く（問69）、このような状況が「語学力」への高い要望につながる要因になっていると考えられる。

一方、社会総合科学科では、他学科と比較して、「自分の考えを文書、口頭で効果的に相手に伝える能力」といった文書での表現、口頭での説明、「課題に対して、他者と協力して取り組む能力」といった他者との協調に関する能力が低いと感じている学生が多い傾向にある（問11～13）。これは本学部の改組によるカリキュラムの違い、解析対象となったアンケート回答者の学年の違い（人間文化学科、社会創生学科、総合理数学科は主に2年生以上、社会総合科学科は1年生が対象）がこのような差に影響したと考えられる。また、1年生を対象に開講しているSIH道場は、「体験学習」、「文書力」、「プレゼン力」、「協働力」の4つの必須項目で構成されており、その中でも本学部では早期から「文書力」、「体験学習」に焦点をあて、「プレゼン力」、「協働力」に関しては後期授業科目である課題発見ゼミナールで対応している。今後は、早期から「課題発見」、「解決力」に関連する授業を提供する必要性が推察される。

自主学習に関して、学習等の振り返り、向上を図っている学生は、他学科と比較して、総合理数学科、社会総合科学科で少ない傾向にあるが（問14）、全学科共通で、定期試験・授業時間外に予習・復習を実施している学生が多く（問16）、授業時間以外に1日に全く学修していない学生が少ないのが特徴となっている（問17）。これは、授業においてアクティブラーニング、eラーニングサービスなどの利用を全学で促進したこと、課題等で自主学習を促す授業が多くなったことが影響したと考えられる。

一方、授業以外の学修について、総合理数学科では「数学、理科のような基礎能力強化のため」、社会総合科学科では「語学などの将来を考えたスキル習得のため」に学修を実行/計画している学生が多く、実行している学生のほとんどが1日に2時間以上の授業以外学修をしている（問31、32）。本年度より授業以外の自主学習を促すために履修においてCAP制（履修登録単位の上限）が導入されたことが、このような授業時間外の学修習慣につながったと考えられる。今後、更なる自主学習の推進のために、本年度より導入された全学年の学生を対象に担任制を利用し、教員側から授業以外の学修に関する情報（推薦図書、学修方法など）を提供することも重要になるとと思われる。

なお、本アンケート調査では、総合科学部の改組の関係で、人間文化学科、社会創生学科、総合理数学科は主に2年生以上、社会総合科学科は1年生の学生をそれぞれ対象としている。そのために、各質問項目の回答結果を単純に学科ごとに比較検討することは困難であり、データの解釈には、学年の違い、授業プログラムの違いなどを十分に考慮する必要がある。

13-2 医学部医学科

医学科全体の回収率は59.6%、学年別で見ると4年生5年生が50%を割り込んでおり、今回の結果が医学科全体の代表であるとは言いがたいと考えられ、実施時期、回収方法など改善が必要と考えられた。

回収率の低さと関連するのは、学生が納得するフィードバックが成されているかという課題がある。アンケートの実施が目的となり、徳島大学の教育改善のきっかけになるPDCAサイクルの一環足り得る内容であるかの検討も、学生を交えて行う必要があると考えられる。

将来の希望では約70%が専門職を希望していた。研究職や海外での活動を考えているものも少数ながら居た。また、その希望が明確になった時期は大学入学までという回答が80%を占めていることも、医師免許を取得する医学科の特性であろうと考えられた。

大学院への進学希望は13%と少なく希望の無いものが48%を占めていた。専門医の資格を取れば学位が無くても活動は出来ることから関心が低いと考えられるが、MD, PhD コースに進学するものも居るので、研究の重要性が十分に浸透していないのではないかと考えられた。

大学の教育に何を期待するか(問7)に関しては社会に出たときに役立つ知識、技術、技術43%と資格取得に必要な知識33%が大部分を占めており、幅広い教養22%は比較的少なかった。

在学中に獲得したい知識、能力(問8)は専門知識が最も高く、次いで一般知識・教養、コミュニケーション力、課題発見力などが上位であることが判るが、全学年での割合であり、学年による推移を検討できるような形でデータを提供していただくと詳細な分析が可能になる。

在学中に獲得が期待できる知識能力(問9)は問8と同様な傾向であったが、学年推移での変化を見るべきではないかと考えられた。

専門分野への取り組み(問10)はどちらともいえないまでを含めると90%以上が、全くそう思う、そう思うまでも70%を超えていた。

文章での表現(問11)では全くそう思う、そう思うまでで50%を超え、どちらともいえないまでを含めると84%以上が肯定的であった。しかしながら、否定的な回答も16%あった。

口頭発表(問12)、他者との協調(問13)では肯定的な回答が47%、64%であったが、学修の振り返り(問14)では23%しかなく、学生自身も十分ではないと考えていることが明らかであった。

予習復習の実施(問16)では肯定的な回答が50%、どちらともいえないを合わせると82%学習時間(問17)では1時間以上の学習をしていると答えたものの割合は70%程度であった。ただ、学習に関しては主体的な取り組みなど質の問題も検討すべきであると考えられる。

アクティブラーニング(問18)科目の割合は42%、全く無いと答えたものの割合が58%と半分を超えており、まだ十分実施されていない可能性が示唆された。ただ、反転授業など形式をなぞればアクティブラーニングになるわけではなく、拙速なアクティブラーニングの導入よりも、学生の主体的な学習を促進する講義、実習の方策を考えつつ導入するのが望ましいと考えられる。

出席率(問19)では出席記録システムの効果であると考えられるが、95%の学生が70%以上出席していると答えている。

欠席の理由(問20)では朝寝坊が最も多く(50%)、次いで他科目のレポートや試験の準備、授業が面白くないなどが続いた。垂直連携や水平連携などで、現在の学修がこれからの学修にどのように関連するのかを、教員が積極的に学生に示すことが重要ではないかと考えられる。

理解できる科目の割合(問21)は肯定的な解答が56%に留まっていた。どちらでもないを合わせると83%であるが、年々増え続ける医療情報が大きな負担になっていることが伺われる。

理解促進になった方法(問22)は課題演習が最も多く、次いで振り返り、グループワーク、質疑応答などが続いた。

しかしながら、一般的な講義が選択肢に含める必要があったかもしれない。

成績評価分布の公開（問 23）は医学部の科目は複数の試験結果をまとめて可否を出す形になっていた経緯から、学生にとって有用でない場合があり、学生への周知が十分でなかった可能性がある。

GPA（問 25）の確認。これまで可否でしか成績を出していなかった科目が多く、学生には有用とはいえない状況が続いてきた。数値化できる成績は明示し、GPA に反映するように整備を続けており、学生への周知も行っていきたい。

調べ物の情報源（問 26）はインターネットが最も多く、次いで教科書等、図書館が続いた。インターネットは情報の質の検討が必要であり、十分な情報提供が必要であると考えられた。

授業で判りにくかった点の解決（問 27）は先輩友人に聞くが最も多く、次いで自分で学修して解決しているが続いた。教員に直接聞くは 12%、オフィスアワーの利用は 3%と少なかった。

指定教科書の購入（問 29）はすべて購入していると答えたものの割合は 21%、大部分購入しているが 52%、少し購入が 22%と購入していないものも少なくないと考えられた。購入しない理由（問 30）には高価であるが最も多く、友人先輩のを利用する、図書館の利用、配布資料の利用が挙げられているが、無回答が 16%に上り、不正コピーの利用の可能性があると考えられ、電子書籍の利用や、著作権が十分に理解できていないなどの課題も横たわっていると考えられる。

高校での未履修の科目の問題など統計解析を行うとより多くのことが明らかになると考えられる。単純集計のグラフを提示して文章を書いても通り一遍のことしかかけない。満足度も数字を書いてもらったのに結局グラフ。元データをそのまま渡していただければ、満足度に一体どの項目がどのように影響しているのかが明らかになる可能性がある。

単純集計では項目間の関連は不明で限界が大きすぎる。

13-3 医学部栄養学科・医科栄養学科

医学部栄養学科は、平成 26 年度より医科栄養学科へと改組した。今回の調査では、4 年次が改組前の学年で、1～3 年次が医科栄養学科の学生となる。改組後のカリキュラムでは、医学を基盤とした栄養学の教育をより重点化した内容となっているが、管理栄養士の養成を第一に考えたものである点に変わりはない。これらを踏まえて、栄養学科・医科栄養学科学生の学修に関する現状と課題は、以下の通りである。

将来の進路については、約 3 割の学生が専門職として医療機関等での活躍を、また同等の約 3 割の学生が民間企業での活躍を希望している。また、大学入学までに半数の学生が将来の希望を明確にしているとともに、約 4 割の学生が大学院への進学を希望している。これは、栄養学科・医科栄養学科では、約半数が大学院に進学している状況と合致するものであり、早い段階から進学を考えていることが伺える。大学教育に期待することとしては、「社会に出たときに役立つ知識・技術・技能」および「資格取得に必要な知識」であり、在学中に獲得したい知識・能力として「専門的知識」、「コミュニケーション能力」を挙げているものが多い。大学の教育によって獲得が期待できる知識・能力では、「専門的知識」を挙げるものが多い一方で、「コミュニケーション能力」は少ない。大学の教育に対しては、「専門的知識」の獲得について評価しているが、「コミュニケーション能力」については、大学の教育では不十分と感じているようである。専門分野に対する関心と意欲については 80%以上の学生が肯定的であり、学生の学修に対するモチベーションは高いといえる。

学修への取り組みについては、授業時間外の学習時間は、1 日平均 2 時間以上と回答した学生が約 2 割であった。一方で、授業評価の学生アンケートでは自学自習時間を 2 時間以上と回答した学生は約 30%であったことから、本アンケート結果のデータとやや乖離が認められた。授業の出席率や授業内容の理解については概ね高い評価であり、学修意欲や授業内容の理解については良好である。授業で理解できないところは、「授業中または終了直後に教員に直接

聞く」、「先輩、友人に質問している」、「自分で勉強し、解決している」がほとんどであり、オフィスアワーなど授業時間外に教員に質問している人はほとんどいなかった。学生自身の学修時間や学修態度に満足しているかの問いについては、約3割が「全くそう思う」、「そう思う」であり、授業への出席率や内容の理解度の評価に比べて低く考えているようである。

専門科目の教育については、「専門の知識を身につけるのに役立つ」、「自分の進路について考えることができるようになった」、「学問・研究に興味を湧いた」と評価する者が多い。授業内容の難易度については、約85%が現在の水準が適切であると回答しており、先の授業内容の理解が高い評価であったことに合致するものであった。卒業研究は、栄養学科・医科栄養学科の教育内容で最も重要と考えている点である。研究室の選択基準としては、「関心の深い研究内容であったから」が最も多く、次いで「研究室の雰囲気」、「教員の人柄に魅力を感じたから」と続く。卒業研究で何が得られるかについては、「専門的知識や技術」が最も多く、次いで「学問・研究への興味や知的な好奇心」、「プレゼンテーション能力」が続く。教員の指導時間については、十分であったかという質問に対し、回答した中では「全くそう思う」、「そう思う」が約7割を占めており、卒業研究の指導については概ね満足していると思われる。これらの回答のうち、約半数が無回答となっている。これは、設問が3.4年生または該当する学生のみとなっており、栄養学科・医科栄養学科では、アンケート実施時点において3年生は研究室配属になっていないため無回答者が多いと思われる。今後の設問においては、該当する学生のみとした方が良いであろう。

授業評価アンケートについては、約7割の学生が良く考えて回答しているとの問いに「全くそう思う」、「そう思う」と回答している。また、約6割の学生が教員に対する学生の意見を伝える良い機会と考えている。一方で、授業改善に活用されていると思うと回答した者は約3割であり、本アンケートのフィードバック方法を考えていく必要がある。

大学教育全体の満足度として61点以上が75%であり、概ね教育に満足していると考えられるが、上述のように、コミュニケーション能力の醸成、教員に対してより質問しやすい環境作りなどが課題となる。また、個別の意見では、教養教育、英語教育、就職活動への配慮を課題に挙げる学生が複数見られる。特に、教養教育については、「蔵本で開講できないのか」、「専門科目とのバランス」などの課題が挙げられている。現在、30年度以降のカリキュラムの見直しを検討している段階であり、これらの意見についても考慮したい。

13-4 医学部保健学科

保健学科学生の学修に関する現状と課題は次の通りである。

将来の進路について、81%の学生が専門職として医療施設等で活躍したいと希望し(問4)、多くの学生の将来像は明確である。将来の希望を大学入学までに決めている学生の割合が78%と高い特徴がある(問5)。大学教育に対し、学生の多くは「社会に出たときに役立つ知識」や「資格取得に必要な知識」が得られることに期待し(問7)、大学で獲得を期待する知識・能力は、第一に、「専門的知識」とし、次に、「コミュニケーション能力」と「一般知識・教養」を挙げている(問8)。専門的学問だけでなく、汎用的技能の修得に期待していることがわかる。授業時間外の学修は「宿題が出たときのみ」(50%)、「興味のある科目や分からない科目を自主的に」(35%)と答えた学生が多い(問16)。自主的に予習・復習を行っている学生の割合が、前回調査の3年前と比べて約10%高くなっている。学科では、平成25年度から、幅広い学修の促進を目的として、専門性を志向した学修方法を入学時に提示し、将来像をイメージした「学修設計」の立案を指導している。学修計画に沿った学修ができるよう継続的に指導と支援を行っており、取り組みの浸透結果が現れ始めていると考えている。授業時間外学修を1日平均2時間以上行っている学生は、学科全体で29%(前回28%)、看護学専攻26%(前回31%)、放射線技術科学専攻34%(前回25%)、検査技術科学専攻29%(前回20%)であり(問17)、前回調査時と同様、大学生としての必要な学習時間の確保が不十分である。このうち、アクティブ・ラーニング科目では、それぞれ、18%、15%、24%、10%であった(問18)。科目によってはアクティブ型授業を導入す

ることで、自主学習を促すことに効果があると考えられる。

授業への出席率が平均で90%以上の学生は77%（前回82%）であり（問19）、すべての授業への出席が強く望まれる。前回調査より比率が低下していることも懸念される。大学の講義以外に自分自身のためのなんらかの学修を「実行・計画していない」学生の割合は、53%と全学の43%より高い（問31）。将来の目標を達成するための学修が教育課程に含まれていることに起因していると考えられるが、学生には、大学時代において教養やスキルを身につける努力を惜しまないでほしいと願う。学生自身の学修時間や学修態度に「満足しているとはいえない」学生は6割と多く（問33）、意欲を高める適切な指導により自発的な学修が可能ともとれる。シラバスを毎週または気になったときに確認している学生は44%のみであり、ほとんどまたは全く見ていない学生が多い（問39）。毎回の授業の予習・復習や自学自習の指示などをシラバスに明示して、教育改善に活用する工夫が求められる。

高校で履修しなかった科目（数学、物理、化学、生物）のために、大学での学修に支障を感じた科目が「ある」と答えたのは、看護学専攻24%、放射線技術科学専攻18%、検査技術科学専攻73%であり、専攻間で大きな差がみられる（問40）。看護学専攻では「化学」と「物理」、検査技術科学専攻では「物理」の学修が特に不足していると感じている。自然科学入門の受講やリメディアル教材の学修を個別に勧める指導が必要である。一方、放射線技術科学専攻では前回調査で不足を感じる科目として挙げられていた「生物」が今回の調査では支障ないとの回答であり、変化がみられる。1年次開講科目「基礎生物学」の時間割配置を前期に移動させ、高大接続を意識した授業内容の実施に基づき、問題が解消したと考えられる。

SIH道場を体験した学生のうち、在学中の学修に役立っていると思っているのは34%であった（問46）。このうち、看護学専攻では「他者との協働」、放射線技術科学専攻では「専門分野の体験学習」が特に役立ったと回答している（問47）。教員の期待通りの項目が挙げられている。SIH道場については在学中だけではなく卒業後に意識される効果の検証も今後必要であろう。

専門教育の内容の難易度が適切と答えた学生は、看護学専攻85%、検査技術科学専攻94%であり、全学の69%より高い傾向にある（問57）。難易度に関して、特に授業改善の必要は無いと考えられる。放射線技術科学専攻においては、授業内容の水準をもっと高度にすべき、易しくすべき、と答えた学生は、それぞれ、11%、18%と共に他専攻と比べて高く、学生間で受け止め方が異なっていることがわかる。個別の面談等を通して状況を把握する必要がある。

教員免許の取得に興味があり、実際、教員を目指しているか免許取得を希望している学生の割合は、看護学専攻で28%、放射線技術科学専攻10%、検査技術科学専攻で8%ある（問59）。看護学専攻において養護教諭を指向している学生は多い。教員免許取得希望に比して教員採用の門戸は狭く、進路相談や採用試験対策等、学生の進路選択への包括的な支援が重要である。一方、教員養成の教育プログラムを用意していない専攻でも希望があり、大学等における教育研究者としての希望者も含まれていると推測できる。これらの学生に対しては、大学院への進学や臨床経験等に関する個別の対応が必要である。

卒業研究配属の選定に関し、研究内容や将来の仕事・進路を基準に配属研究室を決めた学生がほとんどで、「やむを得ず入った」「どこでもよかった」を理由に挙げた学生は6%未満と少数である（問60）。自分の興味や将来の希望に繋がる配属が概ね実現できているとみられる。卒業研究は、「専門知識や技術」または「学問・研究への興味や知的好奇心」が得られると答えた学生が多い（問61）。「特に得るものがない」と答えた学生は、検査技術科学専攻では0であるが、看護学専攻と放射線技術科学専攻ではそれぞれ、2人と3人ある。魅力的かつ達成感のある研究課題を全ての研究室において学生に与えられるよう検討と対応が必要である。

英語を毎日または定期的に学習している学生の割合は20%である（問65）。留学を体験または予定している学生は、看護学専攻19名、放射線技術科学専攻7名、検査技術科学専攻2名であり（問69）、増加している傾向があるのは好ましい。

大学教育全体の満足度として、61点以上、71点以上と答えた学生は、回答した学生のうち、それぞれ、81%、57%

であり、学生は教育に概ね満足していると考えられる(問 86)が、上述の個別の問題を解決させるなど、更なる教育改善が必要である。

13-5 歯学部

歯学部の現状と課題について、以下の項目に大別してまとめ、考察する。

1) 将来の希望と大学への希望

歯学科(歯)・口腔保健学科(口保)ともに、アンケート時には70-80%の学生が将来の専門性を意識しているが(問 4)、将来の進路を入学時から意識していたのは、歯で60%以上、口保で50%であり、在学中に将来が明確になるのは、歯で30%、口保は50%であった(問 5)。大学院への進学は、歯では25%の学生が進学希望の有無が明確だが、あとの50%は未定であり(問 6)、在学中の経験や情報が希望に影響すると思われる。一方、口保は70%の学生が進学を希望していない。また、両学科とも、95%の学生が大学教育により、「社会に出た時に役立つ」「資格取得に必要な」知識や技術、「人生を支える幅広い教養」が学べると期待し(問 7)、「専門的知識」や「コミュニケーション能力」を中心に「課題解決能力」や「チームマネジメント力」など将来につながる知識や能力を在学中に獲得したいと考え(問 8)、実際獲得できると考えており(問 9)、将来の希望を叶え、社会人として自分を高める場として、大学への大きな期待がうかがえる。

2) 自主的学修意識と実態

実際の学修に意欲的な学生は歯・口保ともに65-70%であるが、あいまいな学生も25%ほど存在する(問 10)(問 11, 12, 14, 16)。一方で、「eポートフォリオシステム」の自発的な利用は5%、教員の指示によるのが15~20%で、50%は未使用、30%の学生はシステムを知らない(問 15)。アクティブ・ラーニングは半数の学生は全く行わず、2~3割が30分~1時間程度行っている(問 18)。以上の結果から、学修意識は高いが、積極的に実践している学生が少なく、多くの学生の学修態度は受動的であるようだ。

また、出席率は9割以上が口保で90%に対し、歯では60%だったが、7割以上では、歯でも90%(口保は100%)である(問 19)。欠席の最多理由が「寝坊(55%)」であること(問 20)から、対象となる学生の生活習慣の改善を促すような指導が必要であろう。

授業の理解度は、7割以上理解できる科目がある学生が歯で55%、口保で75%、6割以上の理解では、歯85%および口保95%である(問 21)。理解を促進するためには課題演習(30%)、質疑応答や振り返りで(30%)が効果的ようだ。また、歯ではグループワークとディスカッションによる効果が約12%ずつに対し、口保ではグループワークが25%、ディスカッションが5%であり(問 22)、これは歯の学生は自己表現できる、口保の学生は協調性があると自己評価した(問 13)ことと相関が感じられる。

レポートや宿題に必要な情報源は、教科書や配布資料(30%)とインターネット(30%)、ついで図書館(歯20%)、講義ノート(口保20%)だが(問 26)、図書館の学修支援サービスは、あまり利用せず(歯30%、口保70%;問 34)、インターネットの利用も1時間以内が60%前後(問 36)である。

理解できない場合は約半数の学生が先輩や友人に質問し、残り半数は自主学修で解決し、教員に聞く学生は15%程度(歯)であった(問 27)。講義ノートは85~95%の学生が自分で取るが、ほとんどが自分でまとめない(問 28)。ここにも学生の受動的な側面が垣間見られる。教科書は口保の学生はほぼ購入するが、歯の学生は50%が購入し、40%が高価・先輩や友人の本の利用を理由に、少ししか購入しないようだ(問 29, 30)。

成績評価分布の公開については、歯より口保の学生の方が関心が高く、情報を役立てている(問 23, 24)が、一方でシステムを知らない学生も存在する(歯35%、口保20%)。また、GPAも70%~85%の学生が未確認(問 25)、カリキュラムマップやナンバリングは約8割~9割の学生が知らない(問 37, 38)。従って、歯学部ではこれらのシステムの目

的と意義、利用の仕方等を学生に周知させる方策を再考し、教員側も意識の擦り合わせが必要であろう。一方、シラバスの利用は授業の選択や初回確認に利用する程度だった（問39）。

大学の授業以外の自己学修として、読書や語学に1日に2〜3時間を費やす学生が3割弱いるが、多くの学生は特に何もしていない（歯50%、口保70%；問31・32）。ちなみに高校での未履修科目の理解については、歯で物理が困難（45%）と目立つが、30%の学生は特に支障なく、口保の学生では80%の学生が支障ないようだ（問40）。さらに未履修科目は自主学修（20%）や教養教育の受講で補い（50%）、LMSはほとんど利用しておらず（問41）、未履修科目に対する大学のサポートの必要性は特に感じないようだ（問42）。

こうした自らの学修時間・態度に対し、学生の3割は満足、5割はよくわからず、2割は満足していない（問33）。ここに学修意識と実態の乖離が認められ、高校までの受動的な学習から大学での能動的な学修への移行に戸惑う学生が多いのかもしれない。

3) 大学の講義・実習に対する評価

教養教育は、先輩からの情報（50%）と手引きやシラバス（40%弱）をもとに、興味と単位取得の容易さで70〜80%の学生が選択し（問43,44）、半数の学生は幅広い教養が身につくと回答したが、1〜2割の学生は特に得るものがないと感じている（問45）。

SIH道場については、役に立つと答えた学生は2割以下で、8割の学生は無回答（50%）か、わからない（30%弱）と評価された（問46）。内容についてもほとんどの学生が無回答、自由記述でも、記憶がない、意味不明という回答が目立つことから、SIH道場のあり方は今後、十分検討すべき課題である。

全学共通教育は全般に授業水準は適切と答えた学生が6〜7割で（問48〜55）、専門教育については8割の学生が、専門知識が身につく、進路選択が可能になったと回答した（問56）。専門授業の難易度は、口保は90%が適切、歯では70%が適切で（問57）、実習時間も70%が適切と感じている（問58）。学部特性上、教員免許取得には80%弱の学生が関心ない（問59）。

研究室専攻については無回答が多く（歯40%強、口保70%強；問60〜63）、注意を要するが、研究室で学ぶのは、専門知識や技術、広い視野、知的好奇心が歯で45%、口保では各25%だった（問61）。これは研究指導時間が十分と感じた学生の割合と相関する（歯35%、口保20%；問62）。設備・スペースは、研究用は十分（問64）、学修用は、口保は20%が満足し、歯は満足と不満が拮抗している（問63）。

大学の英語教育に満足している学生は4割弱で（問67）、6〜7割の学生は何らかの改善の必要性を感じている（問68）。一方で英語の自主学修は、15%の学生が定期的に行っているが、80%は行っていない（問65）。また、在学中に8割の学生は留学体験がなく、15%（歯）、30%弱（口保）の学生がある・予定しているが（問69）、予定のない学生理由は資金・時間・魅力がないためであった（問71）。

eラーニングの利用はi-collabo（40%）やmoodle（10〜20%）であるが、利用したことのない学生も10〜15%存在する（問72）。利用時間はほとんどの学生が2時間まで（歯75%、口保90%）、利用目的は予習（歯30%、口保10%）、課題レポートの提出（歯20%口保30%）、資料の閲覧・ダウンロード（15〜20%）、復習（10%）と続く（問75）。eラーニングでの学修効果があると答えた学生は45%、どちらとも言えないという学生は30〜35%いた（問77）。一方、オンライン学修科目についてはほとんどの学生が知らないようだ（65〜70%；問78）。全体的にeラーニングは積極的に使いこなしていないように感じた。

4) その他（評価アンケート及び大学への評価）

授業評価アンケートについては、よく考えて回答している学生が6割、2割弱がどちらとも言えず、1割弱があまり考えず回答していることが明らかになった（問80）。それは、回答時間（問81）に依存し、アンケート結果が教員に伝わると思う学生が5割に満たず（問82）、質問項目が授業改善に必要と思う学生が6割（問83）、さらにアンケート結果が授業改善に活用されている実感はあまりない（問84）ことが、回答の姿勢に反映されていると考えられる。しか

しながら、教員側はアンケート結果を真摯に受け止め、改善の努力をする必要がある。

大学教育全体への満足度が6割以上と感じる学生が、歯では55%弱、口保では70%だった（問86）。自由記載欄には学修環境としての歯学部建物の建物・設備に対する不満が多く、中には他大学と比較した厳しい意見もあった。

本アンケート結果を通して、理想と現実の間で全体的に学修に対し、受動的な学生が増えている現状と課題が浮き彫りとなった。今後の教育改革や就学指導の参考として大いに役立て、改善して行く必要がある。

13-6 薬学部

薬学部では3年前期終了後に薬学科（6年制）と創製薬科学科（4年制）に配属されるため、本アンケートでは共通学科（1,2年生）と、薬学科（3-5年生）、創製薬科学科（3,4年生）の3グループに分けて、調査結果を分析した。なお、今回の調査回収率は共通学科52.2%、薬学科93.4%、創製薬科学科92.0%、薬学部全体では75.3%であった。薬学科および創製薬科学科のアンケートは各研究室に依頼したため高い回収率であった。一方、共通学科の低い回収率は、回収ボックス設置による回収が原因と考えられ、次回以降は授業時間内に回収するなどの回収率向上に向けた対策が必要である。

将来の希望は、共通学科では薬剤師職50%、企業等32%であった。前回の調査よりも企業等への希望が若干増加しており、創製薬研究職志向の学生が増加していることが伺える。学科配属後では、薬学科は薬剤師職志望が53%と前回の75%から大幅に減少する一方で、研究職志望が34%と大幅に増加している。これは、本来の希望は創製薬研究職であるが、薬剤師の免許も取得しておきたいという学生が増加しているためと推察できる。一方、創製薬科学科では企業等の研究職志望が54%であったものの、薬剤師職を希望する者も25%に達している。以上のように、半数以上の学生は各学科の教育理念を反映した配属となっているものの、志望とは異なる学科に配属している学生も両学科共に顕著に増加している。薬剤師を養成する薬学科と創製薬研究者を養成する創製薬科学科という理念が学科配属に十分に反映されていない現状が浮かび上がっているが、平成30年度以降の分割入試制度によってこの問題は解消できると期待されている。

大学院への進学は、創製薬科学科で88%と徳島大学全体の中でも飛び抜けて高い進学希望率となっており、創製薬研究者育成という創製薬科学科の理念に沿った結果となっている。一方、薬学科の進学希望率は3%と逆に最も低い結果となっており、研究のできる薬剤師の育成を掲げている本学薬学部としては今後改善しなければならない課題である。

大学教育に対する期待は、いずれのグループでも「社会に出たときに役立つ知識」および「資格取得に必要な知識あるいはその受験に必要な単位」が高く、大学在学中に獲得したい知識・能力についても同様の傾向が見られることから、学生は実学的な知識や技能を期待していると判断できる。

eポートフォリオシステムを使用している学科配属後の学生は僅かであり、専門教育ではeポートフォリオシステムを殆ど使用していない状況が伺える。FD研修等で積極的なeポートフォリオシステムの利用を教員に促すなどの対策が必要である。

授業時間外の学修については、いずれのグループも「自主的に」行っているのは3割前後であり、学修時間も1時間以内が圧倒的に多く、全くしていないと合わせると80%を超える（他学部・学科に比べても高い）。この割合は前回（70%）より増加しているものの、70%以上授業を理解できる学生も前回の調査（56%）よりわずかに増加し、全体で58%であった。前々回の調査では43%であったことから、授業の理解度は年々向上していると判断できる。これは自修時間が年々減少している結果と矛盾しているようにも見えるが、学修時間の少なさは、自学自修への意識の低下と言うよりも、薬学部の密なカリキュラムが反映している可能性がある。アクティブ・ラーニング科目に関する授業時間外学修については、「全くしていない」がいずれのグループでも60%を超えており、他学部と比べて自修時間が少ない傾向が見られるが、これは薬学部のアクティブ・ラーニング科目の導入率の低さが原因と推察される。現在薬学部ではアクティブ・ラーニングの導入率が飛躍的に伸びていることから、今後は時間外学修の時間も向上することが期待で

きる。

薬学部共通学科の学生の約8割は、受講後に自身の成績評価分布上の位置をウェブで確認できるシステムが学修計画の見直し等に「役立っている」と回答しており、他学部よりも比較的ウェブシステムを良く活用していることが伺える。これは、成績順位が学科配属に関与する薬学部のシステムによるものと推察できる。

調べものをするときの情報源としてインターネットを利用する割合が教科書や参考書を超過しており、勉学において欠かせない存在になっていると言える（1時間以上使用する学生は全体で37%であり、学科配属後の方がこの割合は高い）。理解できなかったときに教員に聴く学生は19%であり、前回調査の25%よりも減少している。一方、自分で調べる学生の割合は増加しており、インターネットの普及により容易に情報を入手できることが要因と考えられる。

自分の学修時間や学修態度を「少し不十分」「不十分」と感じている学生は、全てのグループにおいて20%前後であるが、「十分満足」「ある程度満足」と感じている学生も30%未満であること（薬学科のみ38%）から、学生が「可もなく不可もなく」と考えている様子が伺える。高校で履修しなかったため支障を感じた理系科目として「物理」を挙げる学生が多い（全体で46%）。前回の調査では「生物」を挙げる学生が最も多く、また低学年ほど物理を挙げる学生が多いことから、センター試験の受験科目が「化学、物理」から「化学、生物」に変化している様子が伺える。半数以上の学生は、大学入学後、特に対策を講じていない。

全学共通教育の科目については、約半数の学生が「単位を取りやすい授業」を選択基準に置いており、他学部・学科に比べ「広い教養」を意識する傾向は低く、全学共通教育で「得るものはなかった」と回答する学生も多い。これは3年前期末の学科配属のために、よい成績を取ろうと精一杯であるためかもしれない。平成30年度の分割入試以降にはこの問題は解消されることを期待する。

SIH道場が役に立っていると答えた学生は他学部より少し高めであり（42%）、他者と協働して学修や活動に取り組むことに重要性を感じているようである。

卒業研究における研究室の選択は、薬学科では研究室の雰囲気（39%）や先輩や友人の勧め（21%）を、創製薬科学科では研究内容（41%）や教員の人柄（23%）をそれぞれ重視する傾向がある。学修のためのスペースについては、学科配属後では「十分」という回答（52%）が多かったが、研究のためのスペースについては少々手狭さを感じているようである。

英語を毎日勉強している学生は、創製薬科学科（36%）に多く、薬学科（16%）の2倍以上であった。大手製薬企業の採用試験への対応（TOEICによる足切りや英語での面接）が主な要因と考えられるが、研究職志望の学生は今後のグローバル化社会に対応する必要性を研究活動を通じて肌で感じているものと推察できる。

eラーニングサービスの利用率の低さについては、薬学部でのサービス提供の少なさも要因の一つと考えられ、今後改善すべき課題の一つである。

大学教育全体に対する満足度については、70点以上とする学生は両学科とも50%に到達しておらず、前回よりも低下している。志望学科に入るための競争がより激化していることが要因の一つとして考えられる。

以上、薬学部では3年次前期末からの学科配属が、学生の知的好奇心や満足度など、学生生活のさまざまな面に影響を与えており、志望学科に入るために良い成績を取ろうと頑張る一方、時間的・精神的に余裕のない学修生活を送っている実態が浮かび上がる。平成30年度以降からの分割入試によってこの問題は解消されることが期待できるが、志望学科に入るという勉学のモチベーションが失われることも懸念されている。志望学科に入るための勉強ではなく、学問本来の魅力を提供することによって勉学のモチベーションを保つ工夫を続けていく必要がある。

13-7 工学部

今年度（平成28年度）、工学部および総合科学部は、理工学部、生物資源産業学部、総合科学部の3学部へ改組された。そのため、本アンケートの工学部所属の回答者の学年の割合は1年生2%、2年生33%、3年生36%、4年生29%となっており、アンケートの回収率は73%であった。以下では、全学のアンケート結果と比較して差異が目立った部分について主に取り上げる。

将来の希望（問4）については、前回調査（平成25年）と同様に各学科（昼間コース）とも第1位が民間企業（58～73%）、第2位が公務員（12～36%）であった。独立した経営者（2～7%）、海外での活躍（4～8%）についても、前回の数値に近かった。夜間主コースでも同様の傾向であるが、昼間コースと比較して独立した経営者（3～12%）がやや高い。一方、将来の希望が明確になった時期（問5）については、各学科（昼間コース）で大学入学まで（24～33%）、大学1,2年（15～21%）、大学3,4年生（12%～31%）、まだ明確でない（18～41%）であった。特に夜間主コースの一部学科では、半数近くがまだ明確でないと回答している。免許・資格取得による将来像が描きやすい医歯薬系の学生の回答と比較すると、工学部生の大学在学時および未定という回答の多さが明瞭である。大多数の工学部生が、企業および国や自治体への就職を漠然と希望して入学し、大学在学時に具体的な将来像を徐々に描いている。平成23年度から開講されているキャリア教育とともに新学部で開講されるイノベーション教育、起業家育成教育に関する科目が、学生の意識に積極的な変化をもたらすことを期待したい。

学修状況について、授業の出席率（問19）は全学平均の数値に近いが、授業内容の理解（問21）については学年の影響を加味しても前回と同様やや低い数値になっている。これは専門教育における授業の難易度（問57）と密接に関係しており、教員側としては講義方法や課題の工夫、講義間の連携などの改善策をFDや授業評価アンケート等を利用して模索するべきであろう。

大学の授業以外の学修（問31、問32）については、取り組んでいる学生の割合は医歯薬系に比べ高く、取り組みの時間も長かった。具体的には、IT企業でのアルバイト、NPO法人での社会問題への取り組み、ビジネスの実戦活動、社会人基礎力の養成、地域文化の継承、ボランティア活動、プログラミングの実践などの自由記述があり、イノベーション教育、起業家育成教育の基礎となる自主的な学修の広がりがうかがえる。

未履修科目で理解困難な科目（問40）については、生物工学科の物理が40%以上と高く、他学科でも物理、数学、地学、化学に対し5～15%程度の回答があった。入学後の学修方法（問41）については、高校の教科書・参考書、教養教育の入門科目、徳島大学のリメディアル教材が広く利用された。「勉強の必要性は感じたがリメディアル教材の存在を知らなかった」という回答は5～15%程度で他学部比べて割合が低かったが、さらに0%を目指して周知徹底をはかりたい。

「SIH道場」での学修について、現在の大学における学修に役立っているか（問46）に対し、「全くそう思う」または「そう思う」という回答は各コースで25～38%であり、「そう思わない」または「全くそう思わない」は14～23%であった。

学修設備、スペースの満足度（問63）については、「設備、スペースともに十分」とした回答者の割合（無回答者を除く）が高い学科は知能情報（68%）、建設（56%）、電気電子（55%）であり、平成25年度からの上昇幅が大きい学科は化学応用、知能情報、光応用、機械であった。研究設備、スペースの満足度（問64）については、「設備、スペースともに十分」とした回答者の割合が高い学科は知能情報（62%）、建設（59%）、電気電子（56%）であり、平成25年度からの上昇幅が大きい学科は生物、機械、化学応用であった。これらの結果を踏まえた上で、各学科で環境整備についての議論を引き続き行う必要がある。

13-8 理工学部

今年度、新学部である理工学部は、工学部および総合科学部の改組によって一学科6コース（社会基盤デザイン、機械科学、応用化学システム、電気電子システム、情報光システム、応用理数）の体制でスタートした。そのため、本アンケートの理工学部所属の回答者は1年生のみであり、アンケートの回収率は87%であった。以下では、全学および工学部のアンケート結果と比較して差異が目立った部分について主に取り上げる。

将来の希望（問4）については、応用理数を除く各コース（昼間コース）で第1位が民間企業（61～68%）、第2位が公務員（7～34%）であった。海外での活躍を選択した学生は10%前後であり、工学部と比較して高い。応用理数コースでは、第1位が小中高の教育現場（39%）、第2位が民間企業（29%）、第3位が公務員（27%）と続いた。夜間主コースにおいても民間企業の希望が多いが、昼間コースと比較すると公務員を希望する割合がやや高い。一方、将来の希望が明確になった時期（問5）については、昼間コースで大学入学まで（43～64%）、大学1,2年（2～16%）、まだ明確でない（29～44%）であり、工学部と比較して大学までの割合が高い。ただし、これらの差異については回答者の学年が1年生のみであることを考慮するべきであろう。

未履修科目で理解困難な科目（問40）については、一部コースで化学、地学、数学に対し20%程度の数値となっている。各コースで科目ごとに状況を把握して、教養教育の入門科目、徳島大学のリメディアル教材の周知とともに改善に努めたい。

「SIH道場」での学修について、現在の大学における学修に役立っているか（問46）に対し、「全くそう思う」または「そう思う」という回答は各コースで30～50%であり、「そう思わない」または「全くそう思わない」は7～20%であった。工学部における評価よりも高くなっており、授業改善や回答者の学年の違いによる影響が考えられる。本授業は各コースにおいて「早期の体験学習」、「ラーニングスキルの修得」、「学修の振り返り」を含んだ特色のある授業が設計されているが、これらの結果や担当教員および学生からの意見を踏まえて引き続き改善していく必要がある。

教員免許の取得の希望（問59）について、応用理数コースでは「教員を目指している」が31%、「とりあえず免許はとっておきたい」が35%となっており、他コース、工学部の各学科と比較して高い数値となっている。理工学部では、一定数の学生が総合科学部では取得可能であったが工学部で取得できなかった数学・理科の教員免許を希望しており、今後の教員養成教育に対し注意を払う必要がある。

13-9 生物資源産業学部

生物資源産業学部は今年度の組織改組により工学部生物工学科、総合科学部社会創生学科環境共生コース、医学部栄養学科、歯学部、薬学部、の各教員を集結して新たに設置された新学部であり、1次産業、食料、生命科学に関する幅広い知識と、生物資源の製品化、産業化に応用できる知識と技術を有し、国際的視野に立って、生物資源を活用した新たな産業の創出に貢献できる人材を育成することを基本理念としている。よって、過去のアンケート結果が存在せず比較が出来ないため、本学部の主な母体の1つである工学部生物工学科のデータとの比較より生物資源産業学部の現状と課題を解析した。

まず問4-6より、生物資源産業学部は工学部生物工学科に比べて民間企業への就職希望者が少なく、大学院進学希望者が多いことから、より高い専門性を志している学生が多い事が推察される。このことは、問10の専門分野に関する興味関心を持ち意欲的に取り組んでいる学生が多い事からも支持される。また、問15のeポートフォリオシステムの利用率が高いが、自発的ではなく教員の指示により利用していることから主にSIH道場での利用が反映された結果だと考えられる。問16より自主的な予習・復習の時間が多いという結果が得られているが、問17の授業時間外の学修時間や問18のアクティブ・ラーニング科目の学修時間はほぼ変わらない事から、より学修の負担を感じやすい学年であると思われる。問19より授業への出席率はこれまでと変わらず非常に高いことが分かる。問21より授業内容を

理解できる割合が多いが、専門科目に関する学力・成績は改組前より下がっていることが多くの教員から指摘されているため、学修時間の結果と同様に自分に対する評価が若干甘めであると示唆される。問 22 より、授業内容の理解には課題演習や質疑応答よりも振り返りやグループワークの方が促進効果は高いという結果であるが、これはアクティブ・ラーニング科目が増えたことによるものと推察される。問 26 より、レポートや宿題の情報源としてインターネットの利用率が高い反面、図書館の書籍・文献の利用率が低く、また、問 27 より教員への質問もより少ないことが分かり、ネット依存性が高い現代の風潮を反映している結果であると言える。ただし、問 36 の学修のためのインターネットの利用時間は減っていることから、学修時間そのものが減っていることが示唆される。問 28 からはノートに書き取り、資料と共に整理するが学修のまとめを作成していない割合が多く、復習の方法に問題があると思われる。問 29 より教科書の購入率は極めて高いことが分かる。問 31-33 より、授業外での自主学習としては読書や語学、基礎学習と変化ないが、それに充てる時間は 1 時間程増えているものの、自分の学修時間や学習態度に対する満足度は変化ないことが分かる。問 34 より、図書館の教員・学修支援アドバイザーによる学修相談の利用率が向上しており、これは主に農業系高校からの推薦学生による数学や物理といった基礎学力に対する不安の表れと理解できる(問 40 の結果からも支持される)。問 35 より、読書はしたいが読みたい本が無い学生の割合が多く、図書のおすすめ・案内をより積極的に実施する必要があると思われる。問 43-45 より、教養教育科目は単位を取り易い授業よりも広い教養を身に着ける科目や好きな科目を履修する学生の割合が増えており、文理融合の本学部らしさを反映した結果となっている。問 46-47 より、SIH 道場で学んだ内容が学修に役立っていると感じている学生の割合が多く、体験学習・レポート作成・プレゼンテーション方法・協働性が特に役立っていると思う学生が多いことから、本学部の SIH 道場のプログラムが高い評価を得ていることが分かる。問 48-55 の教養教育の各科目群について、社会性形成科目群・基盤形成科目群・基礎科目群の授業内容が難しいと感じている学生の割合が多いことが分かる。問 56 より、専門教育科目の授業から自分の進路について考えることができたと感じている学生の割合が多く、1 年次に生物資源産業学概論、キャリアパス、経済学基礎、各分野の基礎科目、と学部の教育基本理念に関する内容をバランスよく受講できたことがこの評価に繋がったと思われる。問 59 より、教員免許の取得に興味のある学生の割合が多いが、本学部の科目だけでは教員免許は取得できないため、放送大学や e-ラーニング科目の活用を学生に周知すべきである。問 66-68 より、英語を定期的に勉強している学生が若干増えており、主に TOEIC を利用していること、教養教育の英語教育に満足している学生が多いことが分かる。ただし、問 69 から海外留学経験者の割合は増えておらず、問 71 では魅力的なプログラムがなく資金的な援助が十分でないと感じていることから、年度末に理工学部との合同で実施したマレーシア・マラッカ技術大学への短期留学制度を今後も続けていく必要がある。問 72-77 より、e-ラーニングサービスの利用率は変わらず高く、大学よりも自宅の PC・スマホを使って予習・復習に長時間利用し、今後も使い続ける学生が多いことから、e-ラーニングの活用が自宅での学修時間の確保に重要であると思われる。問 80-84 より、授業評価アンケートはよく考えて回答している学生が大多数であり、学生の意見を教員に伝えるよい機会であること、授業改善に必要な内容であること、授業改善に活用されていると感じている学生の割合が多いことから、授業評価アンケートの有効性が証明された結果であると言える。ただし、否定的な学生も若干いることから、今後も教育委員会もしくは FD 委員会において授業評価アンケートの活用方法とその効果について継続的に検証することが望ましい。最後に問 86 より、大学教育全体の満足度は若干低い結果となっており、生物資源産業学部の 1 年次教育内容の検証と改善が今後必要であると思われる。

13-10 教養教育（全学共通教育）

大学の教育に何を期待するかを複数回答で尋ねた問7に対して、「人生を支える豊かな教養」という回答は35%と低く、最多の回答「社会に出た時に役に立つ知識・技術・技能（74%）の半数以下であった。3年前の同じ設問での選択肢はそれぞれ「豊かな生活を支える幅広い知識（37%）および「社会に出た時に役立つ知識（62%）」と「知識」で統一されていたため直接的な比較はできないが、すぐに役立つ知識や技術が教養よりも優先される傾向がさらに強まっているようである。このことは自由記述のコメントにも表れており、「進級や卒業に必要とされる教養科目が多すぎる」「専門科目をもっと履修したい」との意見が目立ってきている。教養教育の意義をわかりやすく伝えるのは簡単ではないが、大学が専門を学ぶだけの場ではないということを伝える努力の必要性が感じられる。

基礎基盤教育に関して、高校で履修していない理系科目に関連する問40、41、42に対しては、前回の調査と同様に全体平均では60%以上の学生が「大学での学修に支障を感じた理系科目がない」と答えている。しかし、学部・学科による差は大きい。数学・物理・化学・生物・地学について高校での未履修が支障と感じる学生が半数を超える学部・学科は、蔵本地区に多い。また生物工学科および生物資源産業学科において、特に物理と数学の未履修を支障に感じるという学生が目立つ。そのうちの多くは教養教育の高大接続科目や自然科学入門その他を受講し、また高校の教科書や参考書で勉強しているようであるが、支障を感じる学生が多い学部・学科では履修や自習方法をきめ細かく指導する必要があると思われる。

授業の選択基準に関する問43（複数選択）の回答は、「好きな科目や面白そうな科目（52%）」、「単位のとりやすい授業（45%）」、「広い教養を身に付けるため（22%）」の順となっている。順番は3年前と大きく変わっていないが、「興味」や「教養」が少し減り、単位のとりやすさを基準にする学生が少し増えている。また、教養教育（全学共通教育）科目の授業で得られたことを聞いた問45に対しては、ほとんどの学部学科で半数程度が「広い教養」と答えている。興味のある科目を選択し、それが教養として身についたと感じる学生が多いことがわかるが、その一方で、「特に得るものがなかった」という回答が蔵本地区、特に薬学部が多い。これは前回の調査と同様の結果であり、「単位を取りやすい授業」の選択との相関がみられることも一致している。自由記述の回答の中に、薬学部や理工学部の一部で学科や系の振り分けに関する不満がわずかであるが見受けられることから、希望する進路のために、興味のある科目をあきらめて単位を取りやすい科目を選択せざるを得ないと判断する学生もいるようである。成績によって進路が決定されるシステムでは、成績を少しでも上げることができそうな科目を選択する傾向になるのは当然とも言える。これは個々の授業改善では解決できない問題であり、この傾向がさらに進むとすれば何らかの対策を講じる必要がある。

教養科目の各群についての調査では、新旧カリキュラムの違いによる影響はそれほど感じられず、全般的に適切な水準であるという回答が多かった。多少の違いとしては、基礎教育（基礎基盤教育）や汎用的技能教育科目で「もっと高度に」という回答が少なく、「もっと易しく」が多い学科が見られることから、授業が難しいと感じている学生が比較的多いことがわかる。外国語教育科目でも「適切」が多いのは変わらないが、理工学部などで「もっと高度に」と「もっと易しく」の両者がやや多いコースがみられることから、学力分布の幅が広がっているようである。自由記述の回答を見ると、英語の授業について「レベルが低い」「易しすぎる」という意見が多い一方で、「難しい」あるいは「（クラスによって）難易度に差がある」とする回答も一定数存在する。学生の意見は多様であり、実用的または専門に関連する実践的内容や、TOEICなどの試験対策、会話を中心とする外国人とのコミュニケーション能力などを求めている。一つのクラスの中で異なる内容やレベルを期待している学生が混在していると全員を満足させることはできない。教養科目においても難易度の相違についての意見や選択科目の種類を増やしてほしいとの要望がみられることから、教養教育全般について目的や習熟度に応じた対応の必要性が高まっていると思われる。

13-11 FD (Faculty Development) の観点から

本年度のラーニングライフのアンケート結果を踏まえ、FDの観点から望まれることとして、以下の諸点が指摘できる。

第一に、学部学科間でみられるそれぞれの所属学生の違いをとらえた上で、授業内容を再考し、授業方法の改善につなげていくこと。問4の回答結果は、徳島大学の学生が、主に医院・病院・薬局等で専門職として働くことを目指す医歯薬系の学生と、主に民間企業・行政機関・教育機関等で働くことを目指すか、あるいは目標がまだ明確に定まっていない総合科学部・工学部・理工学部・生物資源産業学部の学生という二つのタイプに大別されることを端的に示したものである（厳密を期せば、各学科によって将来の方向性は同一ではない）。当然ながら、彼らの将来理想とする職業の社会的需要や、就職に必要なプロセスは大きく異なる。前回のラーニングライフからも指摘されていることであるが、このように多様な将来像を持つ学生を対象に授業を行うには、同一のテーマを扱うにも、それぞれの方向性に適したアプローチが求められる。特に、複数の異なる部局出身の学生が対象となる教養教育の授業においては、たとえ基礎レベルの内容であったとしても、個々の学生の興味・関心、専門分野との関連や理想とする将来像、価値観等の傾向を踏まえた配慮が教員側に求められる。このような教員側の姿勢は、学生が期待する大学の教育（問7～9）に応える教育内容を提供できることにもつながる。教員が個々に興味・関心の異なる学生一人ひとりに向き合えるよう発言に留意していることが伝われば、徐々に学生との信頼関係も構築され、学生はもっと教員に直接質問するようになるなどにつながり、より効果的な授業が展開できるようになる。しかし、現状は、（問27）の結果からみられるように、学生は先輩や友人から助けを得ることが多く、そうでなければ自分で勉強して解決しており、オフィスアワー等を利用して教員に質問することが少ない。学科の特質と言ってしまうとそうかもしれないが、教員に質問するよりも、何もしないと回答した割合が高い学科があることも問題として受け止める必要がある。

第二に、授業時間外の学生の学修についてであるが、大学の授業に関して全学の平均は、約1時間15分となっている。これは、授業以外に自分自身のための学修として実行・計画していることがあるものが平均約3時間学修していることと比較して非常に少ない。自分自身のための学修を実行・計画していないものが45%存在していることから、全学の平均として算出しても約1時間40分となる。授業以外のことについて費やす時間が約半時間多いことが窺える。アクティブラーニング科目に関する授業時間外学修時間は、全学平均で一日当たり30分である。全くしていない割合が60%存在しているために少なくなっている。アクティブラーニング科目では、反転授業型の授業を展開し、授業時間外の学修を行うことが期待されているが、まだ、反転授業との効果的な一体化が進んでいない状況が推測される。

一方で、学修のためにインターネットを1日何時間くらい使用しているかの間に対して、全く使用していないものが12%あったが、全学で平均すると約1時間使用している結果になった。これは、学生が学修していると感じている時間の多くがインターネットを利用している時間になっていることが窺える。また、53%の学生が図書館を利用していないと答えており、54%の学生が、もっと読書したいが、時間がないと答えている。読書の必要性を感じていない学生も10%存在している。授業時間外の学修として、何もしていないものが13%存在し、学生は教員からの課題・宿題が出されている科目についてのみ予習、復習を行っていると答えた割合が49%あり、受動的に授業時間外の学修に取り組んでいる姿が見える。自主的に学修に取り組んでいるものは34%となっている。授業時間外、学生は一体何に時間を割いているのか詳しく調べる必要がある。また、受動的であれ、学生は教員からの課題には取り組んでいる姿が窺えるので、学生に課題を効果的に与える方法についての全学的なFDが必要であろう。

第三に、本学においては、マイクロからミドルのレベルにかけたFD活動を最近実施している。個々の授業改善のために教員の教育資源を豊かにし、その教育力を高めるためのマイクロレベルのFDに対する要請が引き続き存在しているが、学部や学科のカリキュラム、また履修システムのレベル（ミドルレベル）のFD活動として、カリキュラムマップの整備、科目ナンバリングシステムを最近導入し、その普及を図っている段階である。それらの最近のミドルレベルでの本学の取組について、今回のラーニングライフ・アンケートで学生側の認知度を尋ねた質問（問37、問39）について

も、ここで考察しておくことが必要であろう。

問 37 については、学内のウェブサイトで全学の学科・コース・専攻のカリキュラムマップを公開しているが、「知っており、見たことがある」(17%)、「知っているが見たことがない」(15%)、「知らない」(67%)であった。知らないと答えた割合が大きいことが目につくが、新入学生と留年生を含む上級学生とに分けて、その割合と比較してみると「知っており、見たことがある」、「知っているが見たことがない」と答えた新入学生の割合が期待値よりも有意に高くなっている。

問 38 については、授業のシラバス検索の際、それぞれの授業科目についてその科目ナンバリングが教務事務システムで表示されるようになってきているが、「知っており、見たことがある」(6%)、「知っているが見たことがない」(12%)、「知らない」(80%)であった。カリキュラムマップの認知度よりも低く、今後その活用法について学生に分かりやすく周知していく必要がある。この項目も、新入学生と上級生に分けて整理すると、新入学生の方が、有意に認知度が高かった。現状では、教務事務システムを使ってシラバス検索を行うときに、個別の科目シラバスを表示したときだけ、その科目ナンバリングを見ることができるようになっている。シラバス検索の様々な段階で、その科目ナンバリングを表示することができるように、ウェブ表示の多様化が進められることがその認知度アップにもつながると考えられる

現在、カリキュラムマップと科目ナンバリングは別々のウェブページで管理されて公開されている。今後、カリキュラムマップ上にそれぞれの科目ナンバリングを併記し、学生が両方の機能を結びつけ、容易に理解できるようにその活用を推進していくことが求められている。

以上、FD の観点から今後に望まれることを述べたが、いずれにおいても、教員が学生と向き合い、彼らにとって最適な教育を提供するには何が求められるのかを真剣に考え実践することで多くの課題は克服できると思われる。そのためにどのような理念を持って学生と向き合えばいいのか、どのような態度で授業改善に取り組むことが望まれているのかが、改めて一人ひとりの教員に問われている。大学が提供する組織的なFDだけでなく、個人として絶えず授業改善につながる道を模索する態度とその労苦を厭わない真摯な省察と実践が教員に求められている。授業評価のアンケートが役だっていないとの学生側の批判も少なくない中、本アンケートの質問項目に関する精査も含め、今回のラーニングライフ調査に向けて日頃から話し合いの機会を持つことが求められている。

13-12 eラーニング

本学において、ICT を活用した学修が学生にどの程度定着しているのか、実質化しているのかといったことに関し、今回のアンケートの結果に基づき概観し、併せて今後の課題についても考える。

始めに、本学が提供する eラーニングサービスに対する利用について質問した問 72 について、利用したことがないと答えた学生は全体で 10.0%であり、ほとんど学生は何らかの eラーニングのサービスを利用していることが分かる。また、4,185 名の学生が 7,045 件の回答を寄せていることから、複数のサービスを使っていることも分かる。使っているサービスの分布については、LMS系のサービス(i-Collabo と Moodle)が多いものの、突出しているとまでは言えず、学内にいろいろなサービスが提供されている現状に対応し、いろいろに使い分けている姿が浮かび上がる。今回の調査から、本学において eラーニングのサービスは定着していると考えてよいと思われる。eラーニングの利用に関して、部局等によって多少差はあるものの、大きく異なるといったことはなく、全体的な傾向として考えることができる。

第二に、学生がどこから(どのような機器を用いて)利用するのか、物理的な学修の環境について、問 73 から見てみる。全体的には 30%程度の学生が自宅からと答えている。一方、学内(情報センター等の計算機室や研究室等を合わせると)からの利用は 50%前後となる。ICT 活用によって、いつでも、どこでもの学習環境の実現目指されるが、

この結果からも、学生はどこからでも学修に取り組むことを、受け入れていることが推察される。また、スマホからの利用に 20%程度の学生が答えており、今後、スマホからの利用の割合はますます増えることが予測される。学内に PC を持ってきて学内 WiFi からとの回答は 9%に止まっていることから、スマホは使うけれど、PC は余り使わないといった姿が透けているように思われる。学生を取り巻く個人用情報端末の環境が大きく変化しつつある姿だと言える。そうした変化の中で、大学生に求められる情報リテラシーが適切に習得されるかどうか、今後注視続ける必要がある。

第三に e ラーニングの活用の様子と効果について考える。問 75 のどのような目的で e ラーニングを用いたかを質問した結果は、回答は各項目にちらばっている。このことから、いろいろな学修活動に e ラーニングが用いられたことが分かる。授業の予習のためとの答えも 18%あり、何らかの授業の事前の活動に e ラーニングが用いられていることが分かる。今後、反転授業のような対面と e ラーニングを組み合わせた、新しい形の授業が普及する兆しと見ることができるかもしれない。

また、e ラーニングに対する印象、つまり、満足度を測る項目について見てみる。平成 25 年度に行った調査とは形態が異なるため単純に比較することはできないが、参考までに前回の調査では、e ラーニングを増やして欲しいかという問いには、肯定、否定、分からないが、ほぼ三分割されていた。今回は、問 75 の e ラーニングのサービスを使い続けたいか、問 76 の e ラーニングは学修に役に立つと思うかという問いに対して、肯定的な答えがもっとも多かった。問 76 では肯定的な答えが過半数を超えている。学生は本学の提供する e ラーニングのサービスに対し、一定の評価を与えていることが分かる。多くの学生は、e ラーニングを使う中で、何からの学修効果を感じる局面があったものと思われる。

第 4 に、現在四国の国立五大学でおこなっている、オンライン学修科目の提供がどの程度学生に認知されているのかを問うたところ、学生に充分浸透していないことが明らかになった。問 78 で知っていたと答えた学生は 26%であった。部局等によって半数を超えた学生が知っていると答えることもあり、学内において全体的な告知が充分ではなく、教員の個別の活動等に依存していることが分かった。問 79 ではオンライン学修科目の有用性を問うたが、そもそもオンライン学修科目の存在を知らない学生が多数を占める中では、肯定的な意見を得ることは難しいと言える（どちらとも言えないが 54%）。米国を中心に始まった MOOC のようなオンライン学修は、グローバルに広がりつつあり。日本においても、授業形態の多様化は必然的な流れと言える。その中で、本学においても、新しい授業形態の一つとしてのオンライン学修科目の普及に取り組む必要があると言える。

今回の調査から、本学の ICT を活用した学修の実態は、概ね伸張していることが明らかになったと思われる。本学の学生は、日常のさまざまな学修活動に e ラーニングを用いている。確かに、学生が ICT を用いた学修を普通と捉えるようになったのは、大学の努力以外に学生を取り巻く情報通信環境の変化も一翼を担っていることは否定できない。しかしながら、学修への ICT 活用の流れは、着実に進んでいると考える。e ラーニングの活用は、今後もますます活発になり、大学は学修環境の整備に努めなければならない。

普及という点では効果を認めることはできるものの、学修の質という点では、必ずしも充分とは言えないことが分かる。多くの学生は日常的に e ラーニングを利用しているものの、利用時間は一週間に 1 時間程度に止まっている。また、有用性について明確な実感を持ってない（どちらとも言えないと答える）学生が一定数存在する。さらに、問 79 の自由記述には「e-learning サービス、オンライン学修項目に関する情報不足」「周知」「存在を全く知らなかったのでもっと通知して欲しい」「もっと広める方法は無いだろうか。」といった回答が挙がっている。このようなことから、e ラーニングを用いて学修質を高めるためには課題が残っていることが分かる。今後、アクティブラーニング等の新しい授業の導入が求められている中で、新しい授業の実施においては、学修の質保証を ICT を活用しながら目指す必要があることを示唆している。

13-13 附属図書館

附属図書館の現状と課題は次のとおりである。

附属図書館の学修支援サービス（問34）では、グループ学修スペースの利用が多く、獲得したい知識・能力（問8）であるコミュニケーション能力（45%）やチームで目標を達成するマネジメント能力（20%）を身に着ける場として利用されていると思われる。eラーニング（問73）を図書館に設置しているPCから（32%）利用していることから学修スペースとして利用していることが分かる。また、授業サポートナビ（各講義の参考図書、関連情報提供サービス）（問34）が、全講義分整備されている歯学科（22%）でよく利用されていることやレポートや宿題の情報源（問26）として図書館の書籍・文献（電子版含む）（37%）が利用されていることが分かった。しかし、一方で半数の学生が、図書館の学修支援サービスを利用していないということが分かった。また、読書の習慣（問35）では、多くの学生が読書の必要性を感じているが、時間や読みたい書籍がないといった現状が分かった。

今後の課題として、グループ学修スペースの整備・機能強化を図るとともに学生のニーズに沿った資料の整備を継続して実施し、教員の協力を得て取り組んでいる学修相談や授業サポートナビの充実を図り、有効な広報を行わなければならない。大学生の読書習慣については、生自らが持つ知的好奇心を呼び起こすための多角的な読書・教養へのアプローチを、図書館が主体となって計画的に取り組むとともに、平行して教員をはじめ様々な人々との連携・協力・支援によって、学問の面白さを伝えて学生自らが発見できる機会を数多く創出することが必要である。

第14章 まとめと提言

本調査は、平成19、22、25年度に実施された過去3回の「学生の学習に関する実態調査」に引き続いて実施された第4回目のものである。今回のアンケートでは、第3期中期目標・中期計画の終了時に達成状況評価のエビデンスとなる項目を入れること、図書館とeラーニングに関する質問を正式に盛り込むこと等、質問項目を一部見直し、全87問の質問により調査を行った。アンケート回収率は69.2%で、過去3回(63.2%、63.3%、68.1%)よりもやや向上した。

1. 将来の希望について

学生の将来の希望については、医歯薬系では「専門職として医院、病院、薬局などで活躍したい」が高いが、医学部栄養/医科栄養学科と薬学部創製薬科学科は「民間企業に就職して活躍したい」を多く選択していた。一方、常三島キャンパスの学部・学科では「民間企業に就職して活躍したい」が多く、総合科学部の総合理数学科では「小学校、中学校、高校などの教育現場で活躍したい」、総合科学科では「行政機関などに勤めて公務員として活躍したい」が多かった。将来の希望が明確になった時期は、医歯薬系学科では大学入学までが多く、それ以外の学部・コースではまだ明確になっていない割合が高かった。また、大学院への進学希望は高くなく、6年間の学士課程の後に国家資格を取得する医学科および薬学科では特に低いことが明らかとなった。このように学生が希望するキャリアパスは多様であり、常三島キャンパスの学部・学科では、その希望が明確になる時期が遅いことより、キャリア教育の充実が引き続き重要であると考えられる。さらにキャリア形成における大学院進学の意義について明確化する必要があると考えられる。

2. 大学教育について

「大学における教育に対して何を期待するか」との問に対しては、「社会に出た時に役に立つ知識・技術・技能」が最も多く、大学在学中に獲得したい知識・能力ならびに獲得が期待できる知識・能力は「専門的知識」が最多であった。予測不能の未来を切り開く人材に必要な資質・能力としては、専門的知識だけではなく、基礎的・汎用的能力が必要と考えられるが、学生にはその認識が低いことが明らかとなった。卒業時点で修得しておくべき資質・能力(コンピテンシー)について学生自身が考える機会を設けることが必要と考えられる。

3. 学生自身について

「専門分野について興味・関心を持ち、意欲的に取り組んでいるか」、「一つの課題に対して他者と協力して取り組むことができるか」という問いには多くの学生が肯定的に回答しているが、「自分の考えを文書による表現や口頭での説明で相手に効果的に伝えることができるか」では肯定的回答はやや低くなり、「学修内容を振り返り、改善点の見出し向上をはかっているか」では肯定的回答は非常に少ない。初年次科目である「SIH 道場」では学士課程全体へアクティブ・ラーニングを広げていくために、これらを学習目標に挙げおり、その教育の充実を図る必要があると考えられる。また、eポートフォリオの利用については、SIH 道場の効果によって今後拡大していくことが期待される。

予習・復習については、自らが主体的に学習を行っていると考えられる学生の割合は30%~40%程度で、1日の授業外学修時間が1時間程度もしくはそれより短いと回答している学生は全体の約70%を占めており、アクティブラーニング科目に関する授業時間外の学修についても、全くしていないと答えた学生が最多であった。その一方で、授業の出席率は高く、授業内容の理解度は高いと回答している学生が多い。これらの結果は、学生の受動的受講態度を反映し、自主学習はいまだ不十分であることを示唆するものであり、また、学修振り返りを行う学生が非常に少ないことと関連していると考えられ、本質的な改善のためにはメタ学習の推進が急務と思われる。また、学生が自分の学修成

果を確認し振り返るための有効なツールである成績評価分布や GPA については、医学科や歯学科等、その確認と活用が不十分な学科がみられることから、これらを学生に周知する機会を持つことが必要である。

調べものをする時の情報源はインターネット、授業での疑問点は先輩・友人に質問することで解決していると回答した学生が多く、教員との関わりは少ない。授業のノート・資料については、自らノートを書き取り、資料と共に整理しているが、学修のまとめは作成していないと回答した学生が全体として多い。図書館の学習支援サービスの利用内容については、「グループ学修スペースの利用」は多いが、「教員・学修支援アドバイザーによる学習相談」は少ない。カリキュラムマップならびに科目ナンバリングについては、知らない学生が非常に多く、シラバスの利用も不十分な結果であった。高校での未履修科目については、大学で理解困難な科目は無い、支障を感じないので大学入学後に何もしていないと回答した学生が多い。このように、大学教育改革の様々な取組が学生に十分伝わっていない、大学生としての学びが学生に浸透していない等の現状の課題が明らかとなっており、その解決のためには、学生と教員の双方向性の関わり強化等によって、学修アドバイスや学生の振り返りの機会を設け、学修についての気づきを促すことが必要と考えられる。

4. 教養教育（全学共通教育）の授業について

受講する科目の選択基準は、全体として「好きな科目・面白そうな科目」という回答が多いが、受講目選択時の情報源は、「シラバス」「先輩」「友人」がほとんどであり、教職員からの助言は重視されていないことから、まず入学時点から学生と教員の関わりを深めることが必要と考えられる。また、教養教育(全学共通教育)科目で得られたことは、「広い教養」がどの学科も最も多いが、大学在学中に獲得したい知識・能力は「専門的知識」と回答している学生が最も多いことを考慮すると、学生の学修意欲を初年次から向上させるには、広い教養と専門性との関連性を明確化する必要があると考えられる。

5. 専門教育の授業、研究室配属（卒業研究、医学研究実習、看護研究、研究基礎ゼミ）について

専門教育科目で学べることについては、「専門的知識を身につけるのに役立つ」を選択する学生が最も多く、授業内容の難易度については、「適切である」と回答する学生が最も多い。また、実習形式の授業時間についても適切との回答が多かった。専門教育について学生は概ね満足していると考えられる結果ではあるが、それが能動的学習の修得や学修到達目標の達成に繋がっているかについて検証が必要である。

研究室配属においては、その選択の理由に「やむを得ず入った」や「どこでもよかった」を選ぶ学生は少なく、前向きな検討を通して研究室を選択している学生が多い。得られるものについては「専門的知識や技術」が多いが、学部によっては「学問・研究への興味や知的好奇心」を選択する学生も多く、本来の教育目標を達成しているといえる。教員・TAによる研究指導には概ね十分な時間が割かれているとの回答が多く、自習スペースの整備状況や研究のための設備・スペースの整備状況についても肯定的な意見が多く、指導体制や設備については、おおむね良好であると考えられる。

6. 英語学修・教育と海外留学について

英語の定期的な学習については、前回同様「いいえ」が7～8割を占めている。「徳島大学の英語教育に満足しているか」では、肯定的意見が3～4割を占め、その時間数は、5～7割が「教養教育、専門教育で行われる英語教育で十分である」と回答している。海外留学体験者の比率はいまだ低く、海外留学しない理由は、「海外留学を行いたい資金援助が十分でない」、「専門教育においては短期でも時間的に海外留学を行う余裕がない」、「全く興味がない」が目立つ。このように学生のグローバル化への関心は決して高いとは言えない状況であり、今後、海外留学生との交流を含め英語を活用したコミュニケーションの機会の増加、魅力的な海外留学プログラムの提供とその資金援助等が

必要と考えられる。

7. eラーニングについて

学生は各種 eラーニングをいろいろな場所から、その時々で活用しており、スマホ利用が一定の割合を占め、今後増えることが予想される。授業の ICT 活用も進み、反転学習での利用も始まったことが推測される結果であり、eラーニングの利用に満足し、その学習効果を肯定的に捉えている学生が 50%を越えていた。一方、オンライン学習科目の認知度はいまだ高くなく、今後、学生の理解を深める必要があることが明らかになった。

8. 授業評価アンケートについて

授業評価アンケートに対して学生はよく考えて回答しているとの回答が多く、その回答時間も十分確保されているという結果であった。また、「アンケートは学生の意見を教員に伝えるよい機会になっている」、「設問は授業改善に必要な内容であると思う」との意見が多い。しかしながら、「授業評価アンケート結果は授業改善に活用されていると思う」の問いに対しては肯定的意見は少なく、授業評価アンケート結果を授業ならびにカリキュラム改善にいかに関活用するかが急務であると考えられる。

9. 大学教育全体の満足度

学生が 0～100 点で答えた満足度については、71 点以上が約 5 割、61 点以上が約 7 割であった。これは決して低い数値ではないが、改善点も多いことを示唆する結果である。各学部・学科・専攻・コースでそれぞれの状況が異なっていると考えられることから、今回のデータを活用して満足度を規定している因子をさらに解析することが必要である。

最後に、この調査の実施及び報告書の発行に際して、ご支援、ご協力いただきました高石副学長、大学教育委員会の方々、企画、執筆、編集にご尽力いただいた「学生の学習に関する実態調査（ラーニングライフ）実施ワーキンググループ」の先生方に深く感謝いたします。また、アンケートの集計、編集にご尽力いただいた学務部職員の方々、ならびにアンケートにご協力いただいた学生の職員に厚く御礼を申し上げます。今回の調査が単なる集計に留まることなく、大学教育改革の根拠データとして大学全体ならびに各学部において広く活用されることを強く期待します。

学生の学習に関する実態調査（ラーニングライフ）実施ワーキンググループ委員長
赤池 雅史